

2014. 12

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』補論 清水 有子 ... 1

〈論文〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... ニダ・T. クエバス ... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... 方 真 真 ... 33

メノアメリカ考古学における日本人研究者
..... 市 川 彰 ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
..... 嘉幡茂／村上達也／フリエタ・M.= ロペス・J.／
..... ホセ・ファン＝チャベス・V. ... 73

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦(前編)
..... 小 林 致 広 ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... マリア・デ・デウス・ペイテス・マンソ／ルシオ・デ・ソウザ ... 121

16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察
..... 立 岩 礼 子 ... 133

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか
—経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える
..... 高 橋 慶 介 ... 151

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014夏期調査」—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—
..... 辻 豊 治／南 博 史 ... 161

No.

14

〈特別寄稿〉

- 『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』補論
..... 清水有子… 1

〈論文〉

- The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... ニダ・T. クエバス… 11

Naufragio, colonización y comercio:

- relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... 方真真… 33

メソアメリカ考古学における日本人研究者

- 市川彰… 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:

- Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
嘉幡茂／村上達也／フリエタ・M. = ロペス・J. /
..... ホセ・ファン = チャベス・V. … 73

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦（前編）

- 小林致広… 107

Anton Chino:

- A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... マリア・デ・デウス・ベイテス・マンソ／ルシオ・デ・ソウザ… 121

16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察

- 立岩礼子… 133

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか

—経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える

- 高橋慶介… 151

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014 夏期調査」—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—

- 辻豊治／南博史… 161

〈ARTÍCULO INVITADO〉

- A supplement of *Kinsei nihon to Luzon* Yuko Shimizu ... 1

〈ARTÍCULOS〉

- The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... Nida T. Cuevas ... 11
- Naufragio, colonización y comercio: relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... Chenchen Fang ... 33
- Japanese Scholars in Mesoamerican Archaeology
..... Akira Ichikawa ... 51
- Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
Shigeru Kabata / Tatsuya Murakami /
..... Julieta M. López J. / José Juan Chávez V. ... 73
- Los desafíos de la justicia alternativa por la CRAC-PC de La Costa-Montaña de Guerrero,
México (Primera parte)
..... Munehiro Kobayashi ... 107
- Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... Maria de Deus Beites Manso / Lúcio de Sousa ... 121
- El Realejo y sus condiciones como el puerto próspero durante el siglo XVI
..... Reiko Tateiwa ... 133

〈NOTA Y COMENTARIOS〉

- Facing the contingency of life in the overflow of drugs:
Rethinking the legalization of drugs and economic growth in Brazil
..... Keisuke Takahashi ... 151

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN〉

- Informe sobre la investigación académica de Nicaragua [Investigación de verano, 2014]
—para estudios del área cultural del Mar Mediterráneo Americano—
..... Toyoharu Tsuji / Hiroshi Minami ... 161

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』補論

清水 有子

キーワード

鎖国, スペイン, ルソン, 国家, 対外関係史, キリシタン

Abstract

My book *Kinsei nihon to Luzon* (Early Modern Japan and Luzon) published in 2012 discusses about the impact of the Japan-Spain relation on the course of Japanese history during 16th and 17th centuries. It focuses not on Spain itself but on Luzon, its colony, as a direct contact with Japan. Traditionally the historiography about the isolation of Japan has analyzed mainly from the point of view of the governmental institutions of Japan and Spain. Furthermore, the private initiative has been downgraded, which gives us misleading information that differs from reality. My approach based on the Japan-Luzon relation prevails that it was the Japanese who promoted such bilateral relation for commercial reasons in order to import products, and for religious reasons in order to bring missionaries; not for the Spanish as it was traditionally believed.

1. はじめに

本稿は、2012年に刊行した拙著『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』（東京堂出版）で明らかにしたことがら、鎖国研究史上においていかなる意味があったかという点を、筆者なりに再整理した補論である。ちなみに上記拙著は、16～17世紀にかけての日本とスペイン領フィリピン諸島ルソン（呂宋）との関係を取り上げ、日本の「鎖国」の形成に多大な影響を与えたという点の論証を目的としたものであった。

刊行してから現時点で2年の歳月が過ぎたが、この間に幸いにも深谷克己氏、清水光明氏に拙著に対する書評を〔深谷2013〕〔清水2013〕、小川早百合氏に新刊紹介文を執筆していただく機会に恵まれた〔小川2013〕。いずれも筆者以上に的確な表現で内容を整理し直されたうえ、各自の専門の見地にひきつけた評価点や疑問点を提示されている。多忙を極める中で、微妙に専門分野の異なる拙著に対し執筆の労を取り、貴重なご意見を与えて下さった深谷氏、清水氏、小川氏に、改めて感謝を申し上げたい。

そのうえでなお気にかかる点は、鎖国研究や対外関係史研究に従事する研究者が拙著を専門の見地でいかに位置づけているのかということである。しかしそれを知ることのできない現状にお

いては、自分自身で考えるところを誌上に残しておくことも、全く無駄ではないように思われた。刊行から2年の歳月がたち、以前より客観的に自分の研究を捉え直すことができる状況にあり、また私見を補足する好機でもあるので、刊行当時には明確に文章として表現することができなかったいくつかの論点とあわせて、ここに短文を提示することにしたい。

初めに、拙書がなぜスペイン本国ではなくルソンとの関係を取り上げたのか、またそのことは鎖国研究史上いかなる意義があると考えられるのかを述べ、続いて日本-ルソン交流史を再整理し、最後に拙著の意義について、総括を試みたい。なお客観性を期するため、次章以下の本文では研究者名については敬称略としたことをお断りしておきたい。

2. なぜルソンなのか—鎖国研究におけるスペイン理解の問題点—

日本の歴史上、スペインとの関係が最も濃密であったのは、フランシスコ・ザビエルが来日した1549年から、1640年代に鎖国が成立するまでの数十年間であったといえる。この間の日本-スペイン交流史に関する先行研究で、おそらく最も多く取り上げられているテーマは、慶長遣欧使節であろう¹⁾。

周知のように使節の一行はアメリカ大陸経由でスペイン国王とローマ教皇に謁見し、帰路にはフィリピンのルソン島に立ち寄り、7年後の元和6(1620)年に無事長崎に帰着した。このような地球を横断するスケールの大きさが、慶長遣欧使節研究に取り組む人びとを惹きつけてやまない魅力のひとつであるといえようが、関連研究の多さに関しては、これまでの鎖国研究の潮流もまた、影響しているように思われる。

鎖国研究史を大まかに整理すると、次のようになる。岩生成一は、1963年に論考「鎖国」を発表し、ヨーロッパ史料を駆使した実証研究にもとづき、鎖国とは「キリスト教を徹底的に禁圧するために採用した強力な政策であって、海外交通貿易は極端な制限と取り締りを受け、その結果おのずからわが国が国際的孤立状態に陥ったことを指している」(〔岩生1963〕59頁)と定義した。岩生は、16～17世紀の東アジア貿易について、オランダ東インド会社が覇権を確立していった過程とみなし、江戸幕府はオランダ側のそうした進出動向に結果としては対応するかたちで、国際的観点から極めて閉鎖的な国家体制を創り上げたと論じたのである。しかし、ヨーロッパ側史料を中心に引き出されたこうした評価は、ヨーロッパ人の目から見て「閉鎖的」と言い得るものであり、「国際的」という表現が用いられつつも、岩生の論述展開において東アジアの人々の存在は、希薄と言わざるを得なかった。

この点は、数年後に朝尾直弘が批判するところとなる。周知のように朝尾は、「ヨーロッパ-日本」の単一・直線的な関係ではなく、日本が位置し歴史的に大きな影響力を受けてきた東アジア世界を媒介として、鎖国制の形成もまた検討しなければならないと指摘した〔朝尾1970〕。

朝尾の問題提起は、中国、韓国の経済発展をうけ東アジア諸国・周辺諸地域との関係構築が課題となりつつあった同時代の日本社会の関心に応えるものであり、多くの研究者の心を捉えた。鎖国研究は転換期を迎え、以降は日本と中国、朝鮮、琉球、アイヌとの関係史をテーマにした研究が、質量ともに充実していくこととなる。

こうした新たな研究潮流の集大成的な成果として、荒野泰典は1988年刊行の『近世日本と東アジア』で岩生説を正面から否定し、近世日本の国家体制として「鎖国」に代わる「海禁」・「華夷秩序」

を対抗理論として提示するにいたり、理論上東アジアにおけるヨーロッパ諸国の影響力は認められないとした〔荒野 1988〕²⁾。

さて上記の研究状況において、研究者のスペイン理解は長らく、1970年代頃までの段階にとどまることとなった。すなわち岩生成一が実証した、江戸幕府は鎖国を形成する早い段階で1624年にスペインと断交したが、その理由は、スペイン領フィリピン・ルソン島から決死の覚悟で多くの宣教師が日本に渡航したことが幕府の禁教政策に抵触したためであり、東アジア貿易の覇権を狙うオランダ人の告訴—スペインは宣教で諸外国を征服侵略した国家である—も大きく影響したためであるとの理解が、長い間定説の位置を占めることとなったのである。

この過程で形成された日本史研究者のスペイン理解は、次の3点の特徴を持っていると考えられる。

第1に、岩生説に反映されている国家の枠組み、国家間の外交関係を中心とする史観の影響を受けている。明治期に近代国家としての歩みを始めた日本政府は、それに資する海外交流の遺物に関心を持ち、明治初年の慶長遣欧使節関係の遺品調査に着手し、明治42(1909)年には東京帝国大学史料編纂掛が慶長遣欧使節関係史料(『大日本史料第12編之12』)を刊行したが〔濱田 2010〕、そのような時代背景、史料環境の影響下にあった岩生ら研究者の関心もまた自ずと、スペイン本国と直接交渉を行う使節の実態解明に向けられることになった。

慶長遣欧使節に先行した天正遣欧使節についても、昭和17(1942)年刊行の幸田成友の著書『日欧交通史』に、「明治6年岩倉大使の一行が伊太利のベニスで、300年前の使節一行から同市に宛てた日本文の文書を見られ、爾来東西の学者の新しい研究が行はれ、近年は何人と雖も事実の大意を心得て居るやうになりました」〔幸田 1942〕97頁とあり、やはり明治期に盛んに研究が行われた様子がかがえる。幸田自身が著書の中で、両使節に関してそれぞれ一章を割いているように、遣欧使節は日欧交渉史上の重要トピックであり、明治期以降も、研究書の中で大きな位置を占め続けた。そこに見られる国家中心の視点、史観は、岩生の活躍した時代には批判の対象ではなく、スペイン交流に関してもごく自然に、国家の枠組みでとらえられ、現代にいたるまで継承されている。

第2は、国家の枠組みを継承するために、宣教征服論、すなわちスペイン国家には日本を植民地化する目的があり、日本への宣教は征服手段の一環であったという説が広範に受け容れられている。同説に関しては現に南米での植民の事例があり、江戸時代の日本の人びとがそれを認識していたということも説得力を与えているが、イエズス会士の日本軍事征服計画の存在を実証した高瀬弘一郎の研究〔高瀬 1977〕が決定的な影響力を与えているといえよう。例えば近年も高瀬説を援用して、豊臣政権による朝鮮侵略の原因となったこと等が主張されている〔平川 2010〕〔深谷 2012〕。

第3として、スペインとポルトガルとの国家的競合・対抗関係が強調されている。日本イエズス会は巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの方針により、日本宣教を独占する教皇勅書を獲得し、そうした状況を打破しようとする後発のスペイン系托鉢修道会との間で激しい論争を展開したが、このことが日本の統治者に悪印象を与え、鎖国政策にも影響を及ぼしたと〔加藤 1981〕は指摘している。加藤説は、ポルトガルの国家事業の一環としての宣教の位置付けを明らかにした〔高瀬 1977〕に依拠しており、そうした意味においても岩生に続く高瀬の実証的研究は、現在まで強い説得力を与えているといえようが、両者の共通点としてはほかに、国家間外交への高

い関心があげられるのである。

このようにスペインは国家としてとらえられ、スペイン外交も国家間外交として論じられてきた。しかしながら、日本の対外交は国家による外交のほかにも、[田中 1975] の先駆的研究に見られるように、中世以来東アジア海域上で展開した、民衆を含めた多様で私的な交流を指摘し得るのであり、16～17世紀のスペイン・日本交流史に関しても、以下にあげる理由により、後者の視点は不可欠である。

第1に、スペインのアジア外交は本国ではなく、フィリピンに存在した植民地政府のルソン総督府が直接の窓口となっていた。ルソン-スペイン間の通信は、年一度の航海便が基本であり、往復に5年を要した便もあった。こうした通信状況のもとでルソン総督は必然的に戦争、外交の大権を本国国王から委任されていたのであり、総督のスペイン国王宛年度報告書も、基本的には国王の事後承諾を求める形式となっている。このようにルソン総督府は対日政策の実質的な決定権を有しており、従来のように、遣欧使節にスポットをあててスペイン国王の対日政策を分析するだけでは、交渉の全体像を見失う問題が生じる。

上記した第2の宣教征服論に関しても、そうした現場の交流の見落としの中で、日本史研究者の間で定着した学説であり、問題がある。確かにルソン総督自身が日本征服論に言及した事例は存在するのであるが、総督府の対日政策の基本線として維持されたのかという点については、これまで不明であった。したがって検討すべきは、アジアにおけるスペイン外交の窓口を担ったルソン総督の対日方針の全容であり、一部の宣教師や一時の総督の方針ではないはずである³⁾。

上記第3の、イベリア両国間の対抗関係に関して言えば、ポルトガルとスペインは1529年のサラゴサ条約でモルッカ諸島の問題に一応の決着をつけた後、決定的な対立抗争を引き起こしていない。東アジアにおける両国の関係は、先に到達したほうが領有権、貿易権を占有するというルールのもとで、小競り合いはあっても基本的には戦争にまではいたらない「共生関係」であったと筆者は考えている(拙著第1章)。例えばポルトガルはゴア、マラッカ、マカオ、長崎に、スペインはルソン、セブ、台湾のキールンに拠点をおき、あるいは実効支配したが、相互に権益を侵犯することのない「棲み分け」の関係を貫いている。1545年、モルッカ諸島でスペインのヴィリャロボス艦隊が現地イスラーム政権との協力関係よりも、ポルトガル勢力に投降することを選択し、後者との徹底抗戦を回避したのも、そのためであろう。このように現場の状況を検討すると、学説との「ずれ」が看取される。

つまり、従来の伝統的な国家中心の見方は部分的であるうえに上述した問題点があり、日本・スペイン関係を捉えきれていないと考えられる。とすれば、イベリア勢力への対抗的措置として形成の過程が説明されている日本の「鎖国」に関しても、再考の必要があるのではないか。そうした疑問のうちに筆者が考えたことは、従来の国家の枠組みを中心とする研究視角から一度離れて、日本とスペイン勢力が日常で交差した現場の視点から両者の関係を今一度捉え直す必要がある、ということであった。その現場が、ルソンなのである。

3. 日本-ルソン交流の特徴

それでは、実際の交流の現場ではいかなる様相が見られ、展開したのか。本章ではこの点を拙著の第4章と5章および近年の議論を踏まえて、再整理しておこう。

まずルソン総督サンティアゴ・デ・ヴェラの書状ほかを見ると、スペイン人の間にはデマルカシオンの理念を尊重し、ポルトガル勢力圏内の日本へは渡航しない方針があったことがわかる。その一方では、スペインの派遣艦隊がルソン島を征服する 1571 年以前から、日本の民間商船がルソンに渡航していた。1580 年代に渡航船はさらに増加するが、これはルソンに集積する国際商品を購入するためであったと考えられる。

近年、中島楽章は「1570 年システム」として、1570 年前後、東～東南アジアの海域で貿易秩序の変化があり、交易活動は国際化し、一段と活発化したと指摘している [中島 2013]。中国明朝が求心力を低下させ、興隆する私貿易活動に対して従来の厳格な海禁政策を維持しえなくなり、より柔軟な外交貿易体制へと切り替えたことが背景にある。そうした再秩序化の過程で、ポルトガル、スペイン勢力が貿易圏に参入し、ルソン—メキシコ間のガレオン貿易を通して、地球規模の経済活動が展開する。ペルー産などのアメリカ銀の 1、2 割はルソンを経由し、その大半は中国大陸が吸収した [岸本 1998] ことに示されているように、海禁政策の緩和以降、中国商人が大挙して渡航したのは、銀が集積するルソンであった。

銀を求める中国商人がルソンへもたらした商品はモルガの著書『フィリピン諸島誌』に見られるように多種にわたるが、生糸、絹布類が中心であった [Morga 1909]。これらは日本で需要の高い商品であり、日本人商人や海賊がルソンに向かう主要な動機となった。彼ら日本人は、中国向け輸出品として銀の板を持参したようである。スペイン人向け商品としては、主に食糧（小麦や豚肉など）や武器を製造するための鉛、鉄があり、帰り荷には、上記の中国商品のほか、スペイン産の葡萄酒や、ルソン産の鹿革（武器、武具などの軍需用品や草足袋などの製品用）などがあった [Morga 1909] [岡田 1983] [ヒル 2000]⁴⁾。このような商品リストを一覧しても、ルソンはフィリピン原産品のほか中国、メキシコ、スペイン産商品が集積する、国際交易港として機能したことがわかる。

日本から東南アジアのなかで最も近距離にあるという条件も手伝い、ルソンへ渡航する日本商船は 1580 年代に入って増加した。領主権力を背景とする公貿易船の往来は、九州地方の大名、松浦鎮信と大村純忠の使節派遣を端緒としており、1584 年以降にそれぞれ貿易船に使者を乗せてルソン総督との通信を求めた。両氏ともに在ルソンのフランシスコ会士の派遣を依頼したが、これは当該時期のイエズス会準管区長ガスパル・コエリュと、松浦氏と接触した同会士らの要望に応じたものであろう。宣教師を領内に招くことで、ルソンとの恒常的な貿易関係を構築しようとしたと考えられる。こうした九州の領主層からの働きかけは、後年の島津氏にも見ることができる [拙論 2012]。

豊臣秀吉政権は、1592 年の朝鮮侵攻開始と同時に、キリシタン商人の原田孫七郎（洗礼名ガスパル）をルソンに派遣し、総督に服属を要求している。周知のように東アジア貿易は中国皇帝が中華（華夷）思想に基づき周辺諸国の王を国王に任命し、冊封する政治体制と結合しており、君臣関係の設定を前提としていた [西嶋 1985]。秀吉の尊大な書状からは、武威を背景に自己を中心とする華夷意識のもとに貿易関係をルソン総督と取り結ぼうとしたことがうかがえる。一方ルソン総督は返礼使節としてドミニコ会士のファン・コボを派遣し、服属要求への返答は避け、友好親善を取り結ぶ意志を表明した。しかしコボがルソンに帰還する途中で死亡すると、以降は貿易商人の原田喜右衛門が、秀吉の再度の服属要求を揉み消す情報操作を行って友好関係を継続させている。

この間の1593年、秀吉は高額で取引されるルソン壺の独占輸入を目的として、ルソンへ渡航する日本商船に許可証 *licencia* を携行させる制度を創設した。このときフランシスコ会士（ペドロ・バプティスタ）が発給する紹介状を渡航許可証として認めたが、これは日本人海賊が横行したために、キリシタン商人をルソンで優遇したことが背景にあったと考えられる。秀吉は伴天連追放令を1587年に発令し、ポルトガル貿易継続のためイエズス会士の日本残留を黙認せざるを得なかったが、ルソン貿易に関してもやむなく宣教師を重用したことがわかる。

続く徳川家康の統治期間には、朱印船貿易制度が布かれて、ルソン貿易は引き続き政権の管理下に置かれている。禁教政策についてもほぼ秀吉政権の基調を継承しており、対外的には禁教を表明している。その一方で国内にいる宣教師を優遇したため、日本のキリスト教界は最盛期を迎え〔五野井1992〕、1612年代の信徒数は60万人に達していたと言われる〔Schütte1968〕。宣教師の優遇は言うまでもなく、南蛮貿易の継続のためである。例えば家康はメキシコ貿易を計画し、慶長17（1612）年に伊達正宗が派遣する慶長遣欧使節を許可したが、そうした貿易拡張の志向と商教未分離の状況が、日本のキリスト教勢の興隆につながったといえよう。

以上の日本-ルソン交流初期の特徴をまとめると、①スペイン人側ではなく、国際商品や宣教師を求める日本人の積極的な働きかけで成立した、②活発な民間交流があり、次いで公貿易が展開した、③そのことが日本国内のキリスト教伸展を後押しした、の3点となる。

このように日本-スペイン間交流の「現場」に着目しその展開をおさえると、これまでのような、スペイン国家が日本の軍事征服を意図したために積極的に日本に進出したという解釈や、日本への密入国を試みた宣教師側の一途な信仰熱を鎖国政策の原因としてクローズアップする説は、実態に照らして違和感を覚えざるを得ない。実態としては、キリシタン信仰を主体的に受容した民間の日本人側の動向が重要である。拙著で述べた通り、彼ら日本人キリシタンはこののちルソンの宣教拠点化を支えるなど、江戸幕府が鎖国政策で対応せざるを得ないほどの、極めて重要な意味を持ってくるからである。

4. おわりに

最後に拙著の対外関係史上の意義を、以下2点にまとめておこう。

第1に、国家の枠組みへの視点を解除したことで見えてくる、日本-スペイン交流の実態に注視し、交流の歴史的過程を明らかにしたことにある。従来は、外交使節が持参した国書の文面から宣教や貿易をめぐる国王や将軍の政策意図を明らかにすることなどに研究者の関心が向けられていたと言えるが、そうした視角のみでは、なぜ両者の関係が始まり変化し終ったのかという歴史的理解に到達することは、困難であった。

第2に、第1の成果を踏まえて、鎖国の形成過程における対抗軸は「日本-スペイン」ではなく、「江戸幕府-日本のキリシタン民衆」であったと指摘した。ルソン総督府の報告書を検討し、江戸幕府の禁教令に抵抗してルソンを往来した日本のキリシタン民衆がいたこと、彼らを含む交流の状況に対応した国家の政策の積み重ねが、日本の場合は「鎖国」という国家体制を創出したのではないかと述べた。換言すれば、江戸幕府がキリスト教を禁止して鎖国政策を打ち出したのは、スペイン国家の日本征服志向などに対抗したからではなく、自国の民衆がキリスト教を受容し、禁教令に敢然と抵抗したことへの対応であった。

以上を踏まえてさらに述べるならば、キリスト教は16世紀の地球的世界の形成〔増田1984〕〔山口1993〕によってはじめて日本にもたらされ、人びとに、それまでに経験したことのない視圏や思想の広がりを経験させるものであったが、そうした外部からの影響を遮断して、江戸幕府が自らの求心力を維持しようとした結果、作り上げられたのが鎖国という国家体制であったと筆者は考えている〔清水2014②〕。幕府の懸案材料は、海外というよりも、国内に存在したのである。

[付記] 本稿は、2014年2月26日、京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所の主催による第13回ラテンアメリカ研究講座国際シンポジウム「大洋が結ぶ世界（16～17世紀）～ラテンアメリカから東アジアへ～」における基調講演の一部を文章化したものである。

注

- 1) 昨年2013年は使節支倉常長ら一行を乗せた船が慶長18（1613）年に仙台を出航してから400年目にあたり、各地で様々な記念シンポジウムが開催された。本稿もその恩恵の一部を受けている。
- 2) 荒野の論点を筆者なりにまとめれば、次のようになる。岩生の「鎖国＝国際的孤立」とする理解は、実態と乖離している点に問題がある。幕府は外交窓口として「四つの口」を開き、中国、朝鮮、オランダ、アイヌ、琉球との関係を維持したからである。国民の海外渡航を禁止した点は、中国や朝鮮が公的な貿易の秩序を維持するために、人民の勝手な海外渡航を禁止した「海禁」政策と同じであり、外交関係について、自己に都合のよい華夷的な編成（華夷秩序）をした点も共通している。したがって「鎖国」とは、東アジア諸国の慣習的、伝統的な政策理念を継承した、国家による外交の独占・管理政策といえる。
 荒野は以上の結論と「鎖国」の言説自体が抱える負の遺産を考慮すると、歴史用語としての使用をやめ、「海禁」に統一すべきだと主張したため、大きな反響を呼ぶこととなった。16～19世紀の日本の国家体制は、「鎖国」かそれとも「海禁」と呼ぶべきかで議論となり、現在では「海禁」を使用しないまでも、「鎖国」のようにカギ括弧を付すことが研究書ではいわば常態となっている。つまり、荒野説の登場によって研究者の視圏は広がり、岩生説は相対化されたといえるが、しかし見方を変えれば、1970年のターニング・ポイントから対抗理論が出た現今もなお岩生説は生き続け、継承されているのである。それはやはり、岩生が実証した「鎖国」の形成過程に説得力があり、たとえ同時代の使用例がなく、言説に負の過去があったとしても、極限まで対外関係を縮小制限した実態を表現した「鎖国」に、歴史用語としての適性を感じ取る研究者が多いからではないのだろうか。
- 3) 筆者は最近、イエズス会の軍事征服計画説に対して、同会は日本宣教方針として宣教征服論とは原理的に矛盾する適応主義を採用しており、一部の宣教師の計画が全体としてどれほどの威圧感を東アジアや日本の統治者に与えたのか疑問があると述べた〔清水2014①〕。
- 4) 〔岡田1983〕によれば、17世紀初頭のルソン島では、日本人向け商品の鹿革とスペイン人の鹿肉需要のため、年間6～8万頭の鹿を狩猟したという。

参考文献

荒野泰典

1988 『近世日本と東アジア』, 東京大学出版会。

岩生成一

1963 「鎖国」, 『岩波講座日本歴史 10 近世 2』, 岩波書店, pp. 57 - 100.

朝尾直弘

1970 「鎖国制の成立」, 『講座日本史』 4, 東京大学出版会, pp. 59 - 94.

岡田章雄

1983 『岡田章雄著作集Ⅲ 日欧交渉と南蛮貿易』, 思文閣出版。

小川早百合

2013 「<新刊紹介>清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』, 『キリスト教史学』, 67, pp. 203 - 205.

加藤榮一

1981 「統一権力形成期における国際的環境」, 同・山田忠雄編『講座日本近世史 2 鎖国』, pp. 1 - 43.

岸本美緒

1998 『東アジアの「近世」』, 山川出版社。

幸田成友

1942 『日欧通交史』, 岩波書店。

五野井隆史

1992 『徳川初期キリシタン史研究 補訂版』, 吉川弘文館。

清水光明

2013 「<書評>清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』, 『メトロポリタン史学』, 9, pp. 165 - 175.

清水有子

2012 『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』, 東京堂出版。

2012 「島津義弘の東南アジア貿易」, 『日本歴史』 775, pp. 94 - 102.

2014 ① 「イベリア・インパクト論再考—イエズス会の軍事的性格をめぐる—」, 『歴史評論』, 773, pp. 78 - 97.

2014 ② 「近世日本のキリシタン禁制—地球の世界と国家・民衆—」, 『歴史学研究増刊号』, 924, pp. 65 - 76.

高瀬弘一郎

1977 『キリシタン時代の研究』, 岩波書店。

中島楽章

2013 「序論—「交易と紛争の時代」の東アジア海域—」, 同編『南蛮・紅毛・唐人—一六・一七世紀の東アジア海域』, 思文閣出版, pp. 3-33.

西嶋定生

1985 『日本歴史の国際環境』, 東京大学出版会。

濱田直嗣

2010 「国宝『慶長遣欧使節関係資料』伝来の経緯」, 『仙台市史 特別編8 慶長遣欧使節』, 仙台市, pp. 497-506.

平川新

2010 「前近代の外交と国家—国家の役割を考える」, 近世史サマーフォーラム 2009 実行委員会『近世史サマーフォーラム 2009 の記録 帝国の技法—個から迫る歴史世界—』, pp. 1-29.

ヒル, フアン

2000 『イダルゴとサムライ—16・17世紀のイスパニアと日本』, 平山篤子訳, 法政大学出版局。

深谷克己

2012 『東アジア法文明圏の中の日本史』, 岩波書店。

2013 「〈書評〉清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』」, 『歴史学研究』, 905, pp. 37-41.

増田義郎

1984 『大航海時代』, 講談社。

山口啓二

1993 『鎖国と開国』, 岩波書店。

De Morga, Antonio

1909 *Sucesos de las islas Filipinas*, nueva edición por W. E. Retana, Madrid.

J. Fr. Schütte

1968 *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650*, Institutum Historicum Soc. Jesu, Roma.

〈論 文〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance

Nida T. Cuevas

キーワード

Manila Galleon, Hizen ware, Shipwreck, Maritime trade, Material analysis, Spanish colony, tradeware ceramics

要 旨

16世紀のフィリピンの歴史はスペイン人の植民者によって基本的に形づくられた。スペイン人による支配の拡大は、社会のあらゆる分野に影響を与え、マニラのガレオン船や中国船による交易は経済的変質をもたらした。17世紀におけるフィリピンの経済的繁栄は、東南アジアの物資の集散地としてのマニラの実現によるものであった。

フィリピンの歴史時代の遺跡から出土する遺物の多くは交易によって輸入された陶磁器である。それらの中で磁器については中国磁器として認識されていたが、近年の研究では、日本の肥前磁器も含まれており、マニラ・アカプルコ貿易においても重要な役割を担っていたことが明らかになっている。肥前磁器は、マニラのイントラムロスをはじめとした都市遺跡から生活用品として出土する一方、セブ島のボルホーンなど墓地の副葬品として出土する例も見られる。

今後、フィリピンへの流入経路や手段など、記録の不在から解明すべき課題が残されている。

Introduction

The Philippines have been characterized by active maritime trade relations with the Asian and Southeast Asian countries as early as the 10th century A.D (Fox 1979). This trade relation may have been brought about by the country's geographical location suitable for the trading route of seafarers following the discovery of trade wind that brings commerce towards the American continent (Figure 1). The Philippines is strategically positioned facing China and relatively close to Japan (Goddio 1997:40). In the early 16th century or even before the advent of Spanish colonialism both China and Japan were key players in this maritime trade and have been enjoying their long commercial history with the coastal settlements in the Philippines (Goddio1997:40). This Sino-Japanese-Filipino trade relation may have been seen and capitalized by the Spanish colonist in establishing the trans-Pacific maritime trade that link China and Nueva España (Reed 1978:27).

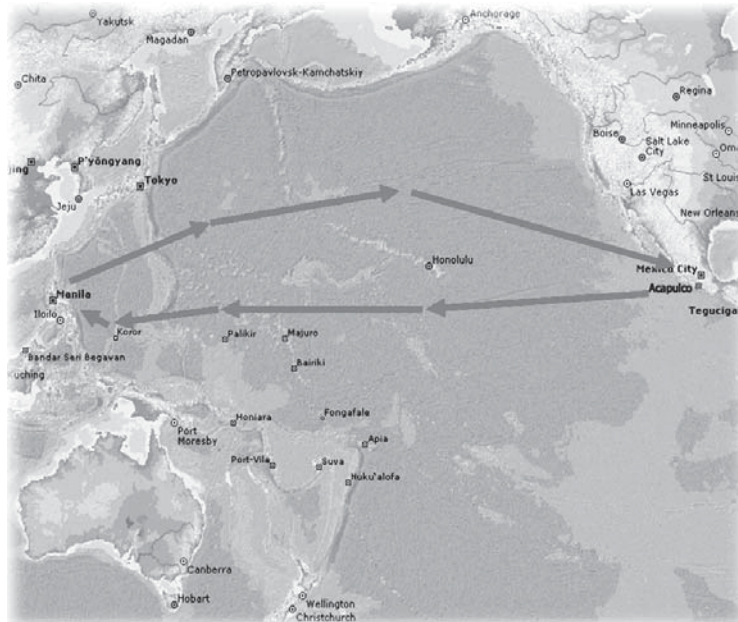


Figure 1. Trading routes (Loviny 1996:71).

The turn of the 17th century marked the height of the Manila galleon maritime exchange. Establishing the Manila galleon may imply the birth of world trade. Major trade goods loaded in the galleons included porcelain that was notably in demand in Asian and Southeast Asian regions after imported products such as silk and spices in Southeast Asian markets (Tatel 2002). These have been made available for transshipment to Hispanic American market. Most of these trade commodities came from China, Japon (Japan), Maluko (Moluccas), Malaca (Malacca), Camboja (Cambodia) and Borneo (Tatel 2002) aboard their vessels .

The influx of these trade items including the people coming in the Philippines has leave footprints in many areas in the island. Archaeological evidences through the discovery of shipwrecks, trade goods, fortification and settlements may attest its historical role in maritime commerce. Primary trading ports in the Philippines were identified located in areas such as Jolo (Abubakar 1978:2168), Butuan, Cebu (Nishimura 2014:275; Junker 2000:109), Manila and Palawan (Junker 2000) which oftentimes yielded Chinese tradeware ceramics.

The wide distribution of high quality Chinese porcelain in foreign markets including the Philippines may have implied high demand of porcelain importation. Historical issues on the domestic conflict in China over dynastic succession (Nogami 2006) had been

intensively discussed by many scholars. In the 17th century, China closed its door to foreign traders which resulted to an increasing demand of Chinese porcelain including Japan. In order to fill-in the demands of foreign market Hizen porcelain was produced to supplement the shortage of Chinese wares. Importation of Hizen porcelain to other areas in Southeast Asia has been archaeologically confirmed found in Malaysia, Indonesia, Thailand and Philippines which may have been brought by Chinese junk and VOC (Nogami 2006).

The 17th century maritime trade network in Asia and Southeast Asia including Philippines has been intensively studied by Nogami in 2004 that traces presence of Hizen porcelain (Nogami 2006). There are material evidences that show involvement of Japanese goods in the galleon trade but however, there is no confirmation on the direct relationship between the Manila galleon and the Japanese traders. This paper will attempt to reinvestigate those archaeological evidences that would provide information of involvement of Japan in the trading network in the 17th century. This will also look in to the spatial distribution of the Hizen porcelain discovered in the archaeological sites in the Philippines.

Nogami's preliminary result on the analysis of the tradeware ceramics from the Collection Holdings of the Archaeology Division of the National Museum in the Philippines was utilized in order to locate areas identified with presence of Hizen porcelain. Nogami's analysis involved sorting and identification of the Japanese porcelain in selected underwater and terrestrial sites in the Philippines (Nogami 2006). From the data gathered, questions is being raised on how diffuse is the presence of Hizen ware in other parts of the country? Are Hizen porcelain intended for Philippine market? How do early Filipinos value Hizen porcelain as part of their daily life? This however, will generate information that may infer the trading patterns and behavior of traders in the islands. Determining its spatial distribution would help provide a comprehensive artifact database of Hizen ware in the region.

This will also review all available historical documents that convey the existence of Hizen ware in the Philippines. This historical information will provide added information on the maritime trading network and relationship of the Japanese traders and Spanish colonist in the 17th century.

Discourse on the Manila Galleon Trade

The late 16th century marked the opening of Manila to the International maritime trading network brought by the Manila Galleon that linked the East and West. This was made possible through the discovery on the famous route conducted by Felipe de Salcedo

(grandson of Miguel Lopez de Legaspi) through a current that moved toward the northeast of the Philippines and would be sailing south toward the coast of the America (Desroches et al. 1991:40).

The Philippines geographical location relatively fronting China and situated close to Japan (Desroches et al. 1991:40) (see Fig. 1) has been one of the favorable location of the colonizer in which to have a commercial intercourse between the Philippines and Mexico (Alip 1940:183). There were two known trading ship routes discussed by Quirino (1977:933) the ship going east or known as the *nao de China* and west known as *nao de Acapulco*. In 1575, Manila was formally ruled by the Spanish government and established a regular trade via the “Manila galleons” or *naos de la China* (Desroches et al. 1991:40). The Manila galleon was regulated by Spanish administrators in Mexico and controlled by Manila merchants (Hedinger 1977:982). Manila became a vast warehouse for rare China goods which were re-exported on Spanish galleons. Historical account mentioned that Chinese and Japanese junks began trading with this new power. As narrated by Reed (1978:32) that:

*There is little doubt that the Spaniards soon convinced the Chinese and other interested Asian merchants of their ability to hold the Philippines, to sail the westerlies between Japan and North America on a regular basis, and to market the costly merchandise from China, India, and Southeast Asia in Nueva España. Even before the dawn of the seventeenth century, the renown of the **naos de Manila** as the richest of Spanish treasure ships had spread far and wide, thereby testifying to the improved quality of goods being transported to Acapulco. Indeed it was a deserved reputation, for within their holds the galleons carried expensive jewelries, Persian rugs, scarce spices, lustrous porcelain, rare woods, precious stones, ivory bric-a-brac, a variety of valuable cloths, and most importantly, great qualities of the finest silks. As a result of this early and rapid expansion of international trade, only three decades after its foundation Hispanic Manila had begun to rival the famed Portuguese city of Malacca as the foremost colonial emporium in Southeast Asia.*

Establishing the galleon trade was corollary to the development of the real *situado* (Quirino 1977:936) or subsidy from Mexico (Alip 1940:183) to the Philippines. The *situado* was first made up of the returns from *almojarifazgo* or customs tax collected at Acapulco. During this period, tributes and taxes were insufficiently raised to meet the expenses of the insular officials in the Philippines. The galleon trade may have served as the most important aid and prompt solution for the ailing Philippine royal treasury (Quirino 1977:936). The economic life of the colony depended almost exclusively on trade with the *naos de la China* or *Manila galleon* (Desroches et al. 1991:40). This galleon trade oftentimes encountered hardships or difficulties in their voyage that caused irregularities in their arrival with the

situado from Mexico. As cited by Quirino (1977:963) that:

Much later, when the galleon trade could not meet the amount either because the ships could not make the voyage because of typhoons, shipwrecks, or capture by the English – the Mexican treasury had to draw from its own funds to help the Philippines balance its budget.

Historical reports mentioned that importation of goods through the Manila galleon had created controversy between the merchants of Manila and the merchants of Cadiz and Seville (in Spain).

The merchants of Spain protested against the importation of Chinese silk and other Oriental stuffs into Mexico on the ground that their products were underselling the Spanish goods there and consequently would drain the silver of Spain. They urged therefore, the prohibition of the importation of whatever products of the East that might compete with those of Spain, Peru and Mexico (Alip 1940:180).

It was also recorded that dispute on unfair allocation of subsidy or *situado* among Manila officials existed. In the late 17th century, the Manila to Acapulco trade maintained a maximum limit with a value to 250,000 pesos, and from Acapulco to Manila twice as much (Alip 1940:180). Later, it was reduced to 100,000 pesos subsidy in the mid-18th century. This reduction made the Manila officials complained to the crown of unfair subsidy that caused hardship in insular administration. The insular officials requested for an increase of their *situado* as the government expenses continuously increased. In the same period, a parallel demand was made by the merchants on the expansion of the volume of the Manila-Acapulco trade.

The movement of galleon trade has been restricted through the promulgation of laws that strictly limit the volume of cargoes entering into the trans-Pacific exchange, and to guarantee Spanish Manileños the greatest share of its rich proceeds (Reed 1978:33).

Bigger vessels were constructed or refitted as in the Galleon San Diego in 1600 (Dizon 1993; 2012) and more merchandise was sent to Acapulco and more silver dollars were shipped to Manila (Quirino 1977:936) in response to the request of the Manila officials. In 1802, the Manila-Acapulco trade had slowed down in which the galleons returned to Manila with unsold cargoes.

For two hundred and fifty years (1565 to 1813), the galleon trade had attracted hundreds of independent merchants that conducted intense commercial activity in the Philippines.

It was loaded with various trade goods coming from diverse places including Japan. Residue of the Manila galleon trade is best shown through the discovery of the San Diego shipwreck located off the Coast of Fortune Island in Batangas Province, south of Manila, Philippines (Fig. 2 and Fig. 3). A more detailed description on how this shipwreck was discovered and how trade goods were diversely loaded is thoroughly discussed in the book of the Treasures of San Diego (Goddio 1997).

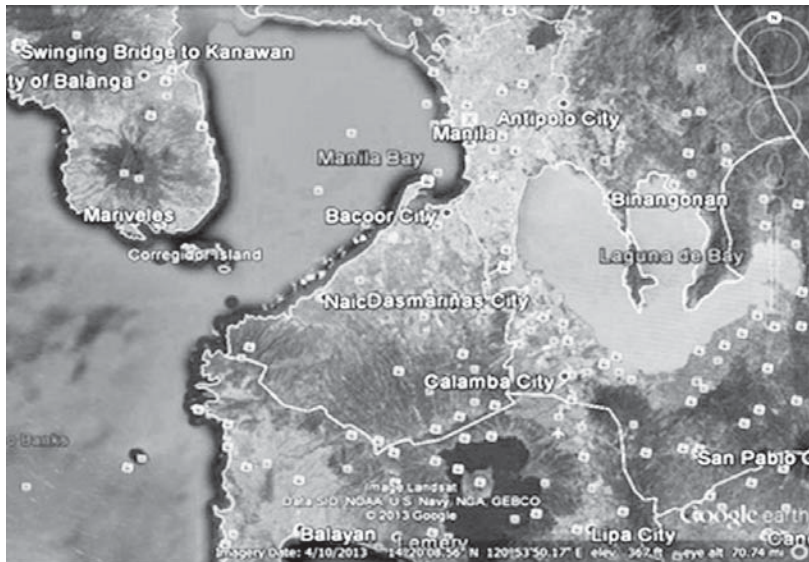


Figure 2. Map of Fortune Island, Nasugbu, Batangas (photo taken from Google earth).



Figure 3. Photograph of the wooden planks of the San Diego wreck.

The Historical Milieu of the Japanese in the Philippines: Their settlement and activities

Early historical writings mentioned the movement of Japanese outposts in Korea in the 15th century and were repatriated in 1512 (Delacour 1997:214). “Some of the Japanese emigrated south (Fig. 4) and some were attracted by the profits of trade with the Portuguese, who had been solidly established in Macao since 1557 and reached Japan in 1543” (Delacour 1997:214). The presence of Japanese traders in Luzon prior to the establishment of the Manila galleon trade in the 16th century have been substantiated with the sighting of Japanese fortified settlements near the mouth of Cagayan River (present-day Aparri) by the *wako* expedition (Buccaneer merchants) and in Pangasinan known to be the “port of Japan” was deemed to be trading communities before the end of the 16th century (Saniel 1977:912). Later, they were eradicated by Spaniards during the establishment of Manila as trading center and the seat of Spanish government.

According to Delacour (1997:216) “some of the Japanese expelled from Cagayan by the Spanish had moved to Manila. In 1593 the Governor of Manila received a letter which stated in no uncertain terms that Japan wished to include the Philippines among its vassal states.”



Figure 4. Map of Southeast Asia showing movement of Japanese traders in the 17th century after the prohibition of Catholicism in Japan as issued by the Tokugawa shogunate (Goddio 2002).

The distrustful behavior of the Spaniards towards the Asian traders was not a deterrent for foreign merchants to cease trading in the Philippines. The unrestricted trading of Manila galleon may have attracted more foreign merchants to settle in the Philippines where they could conduct intense commercial dealings. Included were several thousand of Japanese merchants that settled in Manila. As narrated by Legaspi to the King of Spain (Reed 1978: 27-32) that;

Farther north than our settlement (on Cebu)....are some large islands, called Luzon and Vindoro (Mindoro), where the Chinese and Japanese came every year to trade. They bring silks, woolens, bells, porcelains, perfumes, iron, tin, colored cloth, and other small wares, and in return they take away gold and wax. The people of these two islands Moros (Muslims), and having bought what the Chinese and Japanese bring....

The Japanese populations situated in the suburbs of the Walled City of Manila had expanded and prosper in almost two decades (1604-1623). The areas outside Intramuros have been divided by Morga according to ethnic affiliation in 1595. The areas in Dilao situated South of Pasig River and San Miguel have been assigned to the Japanese and the Chinese occupied the Parian area. Meanwhile, the Bagumbayan and Cavite were settled by mixed races such as the Japanese, Chinese and the natives (Saniel 1977). In 1660, Dilao was extended to include San Anton as settlement for Japanese castaways. San Anton was the place that corresponded of what are now the areas of Manila City Hall, the Philippine Normal University and the National Museum. In 1614, the settlement in San Miguel was established to accommodate Japanese Christians expelled from Japan. This was the year that the *Tokugawa shogun* had issued a law that overthrow Christians from Japan. The Japanese settlement in Dilao was later moved to Paco in the late 18th century, before the British occupation in Manila.

The Japanese were the main suppliers of wheat flour that facilitated in the demand for large quantity of biscuits, soya bean, bean paste, ham, iron, raw cotton, textile, armour, cases, munitions, and stone ink palettes (Saniel 1977). They were not only traders in Manila but some of the Japanese were employed as servants, laborers or soldiers by Spaniards when needed (Saniel 1977).

Morga's account on the prosper of Hispano-Japanese commerce in the beginning of the 17th century stated that;

merchantmen come every year from the part of Nangasaque (Nagasaki) in Japan at the end of October with the north winds and at the end of March. They enter and anchor at Manila...The bulk of their cargo is excellent wheat-flour for the provisioning of Manila,

and highly prized salt meats. They also bring some fine woven silk goods of mixed colors; beautiful and finely decorated screens done in oil and quilt; all kinds of cutlery, many suits of armor, spears, catans (sabers) and other weapons, all finely wrought; writing cases, boxes and small cases of wood, japanned (lacquered) and curiously marked; other pretty gewgaws; excellent fresh pears, barrels and casks of good salt tunny; cages of sweet voice larks called Fimbaros and other trifles..... (Reed 1978:27-32).

An active trading relation between Philippines and Japan had been recorded in the middle of 16th to late 17th centuries (Fig. 5). There was even an increase of trading voyage by the Japanese merchants in Manila during this period as they discovered the production of *tibor* jars in Luzon which became the choice of the shogun (Hedinger 1997:986). The Japanese merchants in exchange of their traded goods took deerskin, honey, wax, Brazil wood and indigo, and cotton goods from the Ilocos. They traded with their boats that even reached the Pacific coast of America and even penetrated the Indian subcontinent (Rodriguez 1998:194). Morga's account on the Japanese merchants in the 17th century stated that:

....These vessels return to Japan at the season of the vendavals (southwest monsoon) during the month of June and July. They carry from Manila their purchases, which are composed of raw Chinese silk, gold, deerskin, and brazilwood for their dyes. They take honey, manufactured wax, palm and Castilian wine, civet cats, large tibors (jars) in which to store their tea, glass, cloth and other curiosities from España..... (Reed 1978:27-32).



Figure 5. Photo of a Japanese trader in Manila (Picture taken from Saniel 1977:915).

Archaeological Evidences of Hizen porcelain in the Philippines

The presence of Japanese in the Philippines from the 16th - 18th centuries did not leave any historical footprints or record about the Hizen porcelain as one of the cargo in the Manila galleon or has been traded only for local consumption. As discussed by Nogami (2006:2) that there was no archaeological evidence that Hizen ware was exported to the Philippines, but these were found in Vietnam, Thailand, Cambodia, Malaysia and Indonesia. These findings have shown that Hizen porcelain had been valued by Southeast Asian consumers as well.

The production of the Japanese porcelain in Arita in the early 17th century had been an offshoot from the insufficient supply of Chinese porcelain in the markets caused by the economic condition that occurred in China in the second half of the 17th century or during the Qing dynasty. It was also this period that Arita porcelain were produced for the first time in Japan. In the middle of the 17th century exportation of Arita porcelain had started (Nogami 2006). The design and form was copied from the Chinese porcelain as highly demanded by foreign markets.

The exportation of Hizen porcelain to Southeast Asia, Mexico and Europe have been carried out by the Chinese junks and VOC (*Vereenigde Oostindische Compagnie*) or *Dutch East India Company* ships from the port of Nagasaki, Japan (Nogami 2006:2).

In the Philippines, sherds of Hizen porcelains have been found in the areas of Manila and Cebu known to be of historical and archaeological significance. At present, both areas are highly urbanized and were systematically excavated by the National Museum.

The Intramuros, Manila

Intramuros or the Walled City of Manila is a triangular wedge of land that curved outward and surrounded by a moat (Fig. 7). It is geographically located between Pasig River on the north and Manila Bay on the west with an area that measures about two and a half miles in circumference. This had been the place favored by Legaspi for the location of the colonial capital of the Philippines or the Spanish quarter of Intramuros in the 16th century. During this period, the area was confronted with natural and cultural threats such as fires, wars and earthquakes but still bears the imprint of the Spanish colonial design (Reed 1978:43). From the buildings made of wooden palisade, wooden floors, trunks of palm trees and heavy upright hardwood timber of port settlements prior to 1571, the reconstruction of Manila in stone has been preferred by the European colonist in building a permanent fortification for the colonial city. This has been supported with the discovery of quarries of

volcanic tuff and limestone in the nearby areas of Manila, aided with the used of roof tiles and bricks.

Several sites in Intramuros have been excavated that yielded archaeological materials dated from the 15th century to the Historical period (American and WWII). Huge amount of tradeware ceramics were uncovered. In 2004, Nogami (2006) found several pieces of Hizen porcelain from the sites in Ayuntamiento, Plaza San Luis, and Beaterio de la Compañía de Jesus in Intramuros (see Fig. 6).

The *Beaterio de la Compañía de Jesus site* has been the domicile of the Religious of the Virgin Mary established in the late 17th century. It was located along the Sta. Lucia corner Victoria Street, between Bastion de San Diego and the Cuartel de la Artilleria in Intramuros. “Prior to the establishment of the religious order (Beaterio), the property was owned by a wealthy Spanish citizen” (ACECI 2002). The 2002 excavation revealed tradeware ceramics identified belonging to the Chinese of the 17th-18th centuries.

The re-examination of the tradeware ceramics from the sites mentioned earlier yielded Hizen ware sherds mostly comprised of underglaze blue-and-white dish and cup vessels with flower and animal design (Nogami 2006). Nogami further described the production of the Hizen ware sherds found in Intramuros mostly of “craak style” produced in 1660 to 1690 in Arita, Japan.



Figure 6. Photo showing the walls and streets of Intramuros. Black circles indicate sites mentioned with presence of Hizen artifacts.

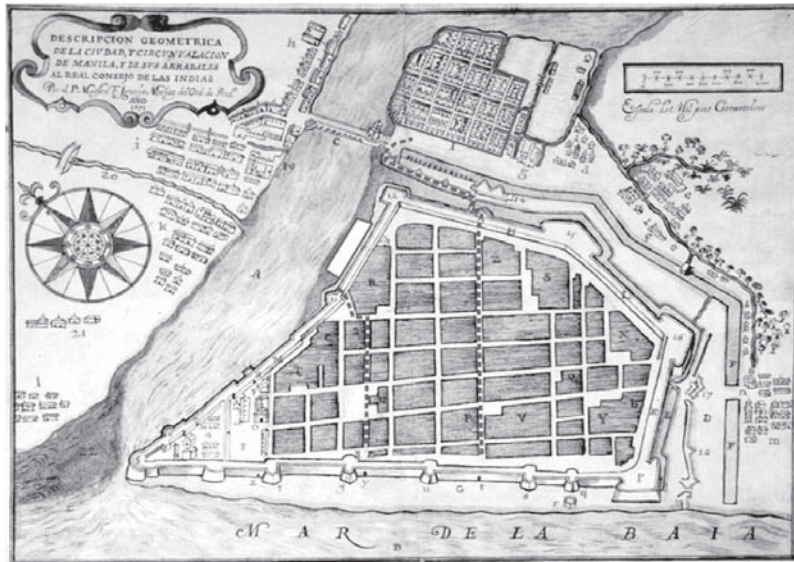


Figure 7. Map of Manila showing the area the Parian and Intramuros sites in 1672.

More sites in Intramuros had been exposed that yielded tradeware ceramics that need sorting and further analysis.

The Mehan Garden, Manila

The site is located outside the walls of Intramuros. It is an area that measures approximately 3,770 square meters. It is bounded to the north by Besa Street, to the south by Hospital Road, to the east by Arroceros Street and to the west by P.Burgos St. (Cuevas 2000:71). At present, Mehan Garden houses the Mehan Circle, Mehan City Library, the Universidad de Manila (formerly City College Manila) and the Bonifacio Shrine (Fig. 8).

Mehan Garden used to be one of the sites of the Chinese Parian as a 'result of a place restriction on Chinese residences in 1581' (Conrad 1977:875). Parian was a Chinese residential quarters and marketplace established in the immediate outskirts of Spanish settlements in Intramuros (Cuevas 2000:71). They provided services and goods from China, Japan, India and Europe which were primarily for the Spanish colony in Intramuros.

Archaeological excavation in this site revealed materials such as tradeware ceramics, local earthenware sherds, Chinese coins, bricks, clay crucibles, animal bones, beads, ivory fan, modified bone implement and others. Preliminary analysis of porcelain sherds belonged mostly to the Chinese and European wares. These were dated from about the late 17th century to about the middle of the 19th century (Cuevas et al. 2000:77).

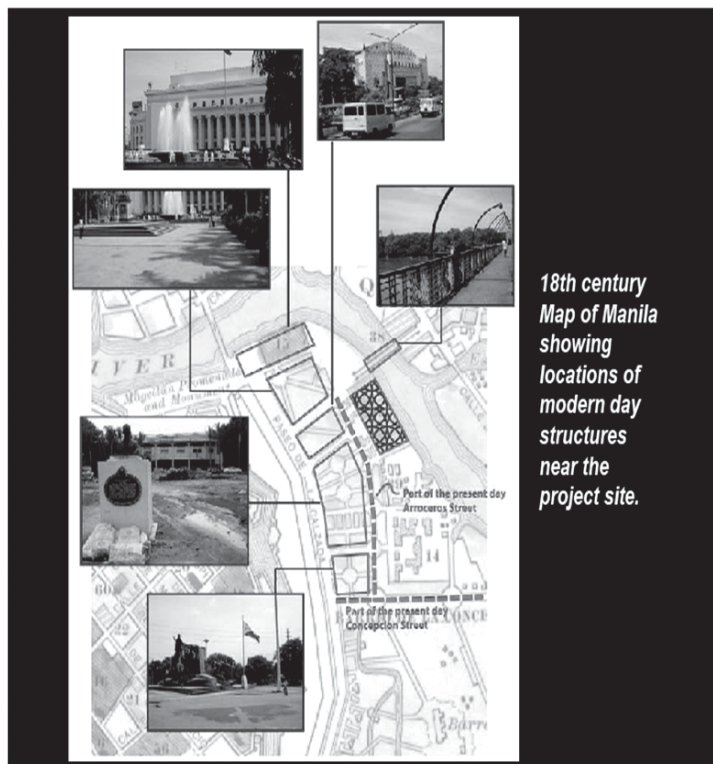


Figure 8. The present day Mehan Garden.

The Hizen ware identified by Nogami was morphologically described as fragments of blue and white dishes with insect and flower motif. The sherds were produced in 1660-1680 in Hizen (Nogami 2006).

On the other hand, the Island of Cebu, located in the Visayas region of central Philippines is known for its historical importance during the 16th-18th centuries. The island is sheltered from typhoon and monsoon weather and geographically situated in the coastal terrain with evidence for regional trade (Peterson 2005:128).

Evidence of Hizen ware was also reported found in the island of Cebu.

Boljoon site, Cebu

The town of Boljoon is located southeastern coast of Cebu Island in the Visayas, Central Philippines (Bersales and de Leon 2011:186). It is approximately 100 kilometers south of Cebu City characterized with narrow coastal strips and bordered by high mountains (Fig. 9). The place was known for its cotton industry that produced very good textiles, grew



Figure 9. Map of Cebu Island showing the town of Boljoon.

forest timber particularly the *Sibucao* tree species that produced sap for ink and grew rice, corn, coffee and tobacco in the late 16th century CE. Boljoon was established in 1599 by the Augustinian as one of eight mission stations or *visitas* under the Sialo (Carcar) parish (Bersales and de Leon 2011:186; De Leon et al. 2009; De la Torre 2007).

Archaeological excavations conducted in the grounds of the Patrocinio de Sta. Maria Parish Church in the small town of Boljoon (Bersales and de Leon 2011:186) had yielded material evidences of a 17th century burial ground. The burials were associated with ceramic and earthenware vessels, iron tools and metal ornaments. The ceramics from this site included four intact pieces identified manufactured from Chinese and Japanese kilns (Bersales and de Leon 2011:205). The Chinese blue-and-white porcelain dish was dated to about the second half of the 17th century and Japanese blue and white small double-gourd bottle (Fig. 10) belonging to the Arita kiln, Hizen area was dated to ca. 1650-1670's. A Japanese overglazed enamel large dish was manufactured in Yoshida kiln located at Hizen area was dated to ca. 1650-1670's (Fig. 11) as well as the overglazed enamel bottle in Arita kiln, Hizen area to about ca. 1650-1670's (Fig. 12) (Bersales and de Leon 2011:186; De Leon et al. 2009).

The excavation at the Boljoon site resulted to the recovery of 53 burials in which four samples taken from skeletal remains were subjected to AMS analyses giving dates of 421 BP \pm 40 years; 401 BP \pm 40 years, 359 BP \pm 40 yeas, and 331 BP \pm 40 years (Bersales and de Leon 2011:186).

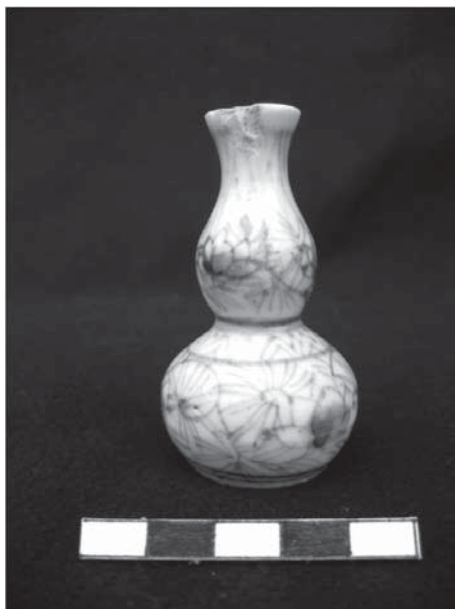


Figure 10. Japanese blue-and-white small double-gourd bottle. ca. 1650-1670 (Bersales and de Leon 2011)

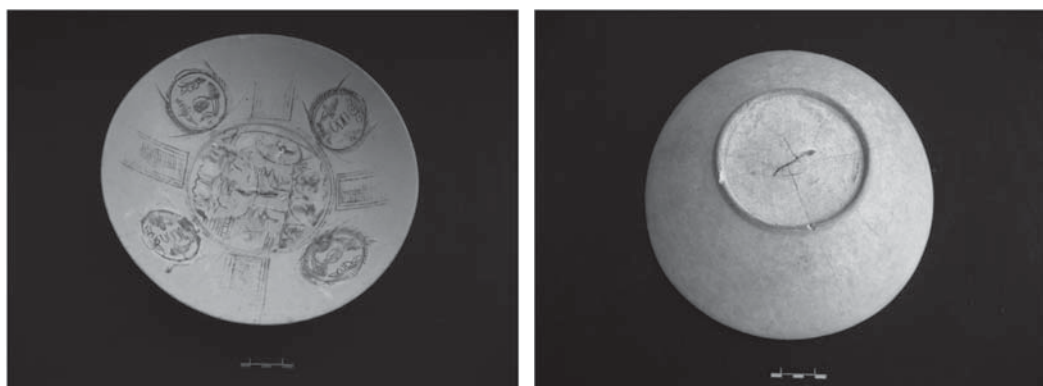


Figure 11. Japanese overglazed enamel large dish from Yoshida kiln. ca. 1650-1670 (Bersales and de Leon 2011)

Plaza Independencia Site, Cebu City

The present day Plaza Independencia is located at the center of Cebu City, in the Visayas, Central Philippines (Fig. 13). It is surrounded by famous historical landmarks such as the Cebu Metropolitan Cathedral and Patria de Cebu on the northwestern side; Sto. Niño de Cebu and Magellan's Cross on the southwestern part; adjacent to the Plaza on the east side is Fort San Pedro and further eastward the Cebu Port Area (Cuevas and Bautista 2009:18).

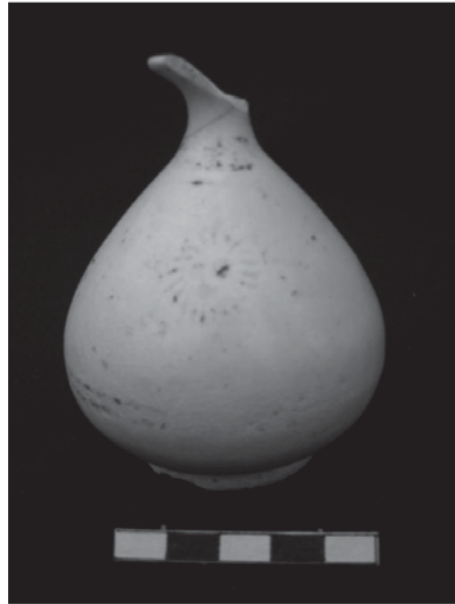


Figure 12. Japanese overglazed enamel bottle from Yoshida kiln. ca. 1650-1670 (Bersales and de Leon 2011).

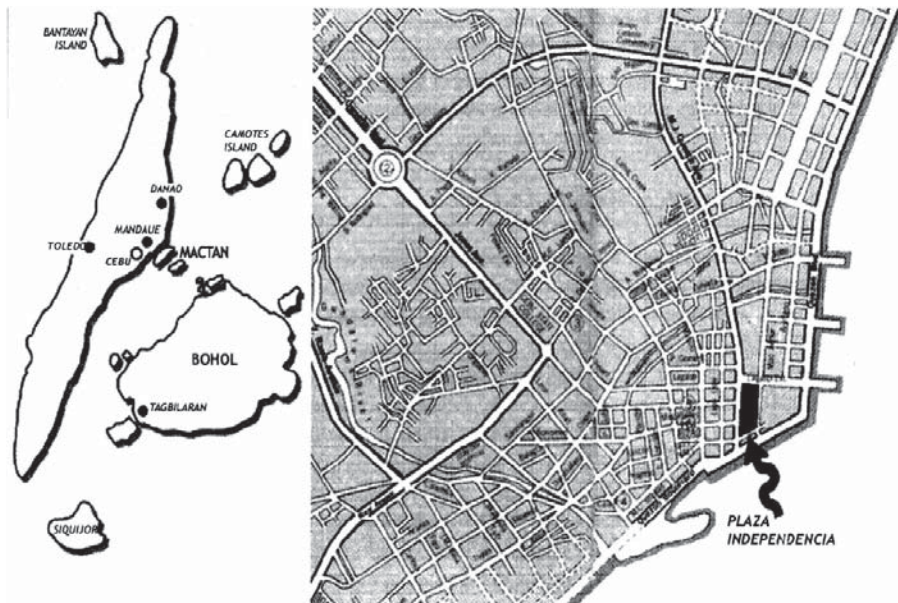


Figure 13. Map of Cebu showing the Plaza Independencia site.

Plaza Independencia is rectangular in shape with total land area of about 17,600 square meters (Nishimura 1992:177).

Historical accounts reveal that Plaza Independencia was continuously used as burial ground from the late 16th to the 19th centuries A.D. (Cuevas and Bautista 2009:18). This has been confirmed from the extensive archaeological excavation carried out in the area that yielded skeletal remains with associated grave goods ranging from blue and white porcelain identified coming from Japan, China, Thailand and Vietnam; green-glazed celadons from Longquan, China and Si Satchanalai in Thailand; gold death masks; iron implements; local earthenware vessels; glass bottles, animal remains, shell and modified shell bracelets etc.

Discussion

The history of the Philippines in the 16th century is basically shaped by the Spanish colonialist. The expansion of the Spanish colonialism in the country had impacted so much on the social, political, and religious structure of the colonized society. And that, Manila galleon or *naos de China*, and the Chinese junk may have contributed to the economic transformation of the country. An example of an archaeological investigation in the Philippines that distinctly describes the remnants of the Manila-Acapulco trade and “demonstrates the primacy of tradeware ceramics in the external trade during the Spanish colonialism is the 17th century San Diego galleon shipwreck” (Tatel 2002). The San Diego is a trading galleon that harbors at the port of Cavite awaiting for the proper season to return to Acapulco (Goddio 1997:49). It carries almost thirty four thousand trade objects (Ronquillo 1993:18) that included stoneware jars, blue-and-white porcelain, gold objects, earthenware vessels, Japanese sword, cannons and cannon balls, silver and gold coins, silver ware, and more (Goddio 1997). The tradeware ceramics were considered very important item in the history of maritime trade along the silk and spices’ (Tri 2010:49). An analysis done by de la Torre and Crick (1997:252) on the terra cotta pieces from the San Diego wrecked stated that the “introduction of these materials reveals the cultural impact of a conquering or dominant political power on the work of local craftsmen.”

An intense commercial trading that occurred in the Philippines resulted to the tremendous influx of mass-produced Chinese export porcelains and the competing Siamese and Annamese export wares that increased dramatically (Junker 2000:16). Aside from the export wares coming from other Southeast Asian region, luxury goods from Japan were also exported to the country. The Japanese has been known to be another trade competitor in the 16th century (Goddio 1997:28). This trading relationship with the Chinese, Japanese and Filipino network had been taken advantage by the Spanish colonizers in the emergence of the Manila galleon in 1571 (Reed 1978). Further, this trading relationship had transformed Manila into entrepot or trade center that linked China and Nueva España (Reed 1978; Dizon and Ronquillo 2010).

At the turn of 17th century, the Manila Galleon trade had grown and stabilized the Philippine economy with unrestricted commerce. A parallel event happened in China in 1643 of which the Ming dynasty totally collapsed (Medley 1976) had affected the Asian and the Southeast Asian markets. The high demand of Chinese porcelain by foreign markets in the second half or late 16th and throughout the 17th centuries may have set off the production of Hizen porcelain from Nagasaki through the Chinese junk and Dutch vessel (VOC). The analysis of tradeware ceramics from various archaeological sites in the Philippines had verified presence of Hizen ware. Nogami's result on his preliminary investigation in 2004 established the presence of Hizen ware in few areas in the Philippines. In his study, Nogami (2006) had deduced that these materials were carried by the Chinese junk ship in the 17th century. While, the notion of the VOC vessel carrying the Hizen ware to the port of Manila is unacceptable because of the Dutch hostile relationship with the Spaniards (Nogami 2006).

Likewise, it can also be inferred that Hizen porcelain may have been brought to the Philippines through "private trade and smuggling" (Goddio 2002:50). This uncontrolled or unmitigated trading activity is oftentimes not documented which probably explain the absence of historical record. Goddio (2002:50) mentioned private trade and smuggling started with the tributary trade system that would benefit the envoys and the ruler. Oftentimes, this tributary system coincided with bad management style of the tribute missions in both the seaports and during trip would result to internal conflict. Goddio (2002) further explained "all classes of people became involved in this lucrative and illegal trade and smuggling of banned products."

There has been no mention in any historical documents that Hizen porcelain was loaded in the Chinese junk or in the galleon vessel or was traded only for Manila consumption. Though there are accounts that mentioned the increasing number of Japanese ships coming in to Manila in the late 15th century until in 1630's solely for trade (Hedinger 1977:988). They brought goods either for local consumption (wheat flour, salted meat, fish, fruits) or for transshipment to Acapulco (silk textiles, cutlery, steel arms, writing desks, fancifully wrought chests and cases and all sorts of attractive knick knacks) (Rodriguez 1998:200). During this period, Japan has been buying porcelain from China for their consumption. This was prior to the discovery of the source of white clay in Izumiyama site in Arita in the early 17th century.

In the middle of the 17th century, the Tokugawa Shogunate had strictly implemented a maritime policy prohibiting foreign traders to enter Japan and preventing Japanese to leave the country. This policy has put Japan into complete isolation from foreign traders. However, a provision or a window that allows only the Chinese and Dutch merchants to

transact trade inside Japan was enjoyed by these two maritime traders. This window of maritime policy bestowed a chance of exporting the Hizen porcelain to other parts of the world. This may support Nogami's findings that Chinese traders have been carrying the Hizen porcelain from Nagasaki to Manila.

To summarize the result on the preliminary tradeware analysis carried on the sites at the Mehan Garden and Intramuros in Manila, it is strongly suggestive of a habitation site. The discovery of Hizen porcelain in these sites may have proved that these were intentionally brought for local consumption and were used as utilitarian vessels. Corollary to this, porcelain materials excavated in Intramuros have shown high quality of porcelain compared to porcelain recovered outside the walls of Intramuros like the Mehan Garden site which have shown an inferior quality. This may also further prove that Intramuros area was occupied or settled by the elite Spanish community.

The recovery of three (3) intact vessels from Boljoon and fragments of Hizen porcelain at Plaza Independencia sites in the island of Cebu distinctly shows a belief system of grave offering to the deceased person. The Hizen porcelain wares in both sites were associated with burials which have been used as grave goods. This tradition of "burying the deceased person's possession with the body" (Barretto 2003:70) is a continuing practice from Neolithic period until present with ancient belief on "life after death" or the soul's journey to the afterlife" (Carr 1995:118). This belief system of 'afterlife' has been archaeologically observed during the excavations in Plaza Independencia and Boljoon sites.

Although, the information gathered from both archaeological and historical research on Hizen porcelain is not straightforward more data can still be obtained through intensive ceramic analysis in other archaeologically worked sites in the Philippines. The morphological characteristic, i.e. design element and form of the Hizen porcelain is basically a copy or reproduction of the Chinese ware. This however may explain the absence of historical footprint of the Hizen porcelain in the context of site formation in the Philippine and as trade cargo in the Manila galleon which maybe because of the mixing up and (mis)identification of the object as Chinese porcelain. This will also require a specialist or potter to identify its differences.

References

Abubakar, Asiri Jr.

1978 "Pioneer Superport." *Filipino Heritage. The Making of a Nation: The Period of Armed Struggle (1896-1900)*. Volume 8, pp. 2168-2169. Lahing Pilipino Publishing Inc.

Alip, E.M.

1940 *Philippine History: Political, Social, Economic*. Manila, Philippines. Imprenta de Manuel Zamora. R.P. Garcia Publishing Co.

Barretto, Grace Lualhati D.

2003 "Of earthenware, ancestors, gods and the living," in *Pang-alay Ritual Pottery of Ancient Philippines*. Edited by C. Valdes, pp. 70-74. Makati: Ayala Foundation, Inc. and Oriental Ceramic Society of the Philippines.

Bersales, Jose Eleazar and Alexandra de Leon.

2011 "The Archaeology of an Augustinian Frontier Mission: A Report on the Fifth Phase of Excavations at the Boljoon Parish Church, Cebu". *Philippine Quarterly of Culture and Society*. Vol. 39 (3/4), pp. 185-213. University of San Carlos Press. Cebu City, Philippines.

Carr, Christopher.

1995 "Mortuary Practices: Their Social, Philosophical-Religious, Circumstantial, and Physical Determinants." *Journal of Archaeological Method and Theory*. Vol. 2, No.2.

Cuevas, Nida and Reynaldo Bautista.

2009 "Urban Development and Archaeology: The Case of the Plaza Independencia Site." In the *Proceedings of the Society of Philippine Archaeologists*. Volume 7, pp. 17-36. Katipunan Arkeologist ng Pilipinas Inc. Manila, Philippines.

Cuevas, Nida, Sheldon Clyde Jago-on and Joy Belmonte.

2000 "The Mehan Garden Archaeology Project: A Preliminary Report". *National Museum Papers*. Vol. 10 No. 2, pp. 69-90. National Museum of the Philippines, Manila. Philippines.

De la Torre, Amalia and Monique Crick.

1997 "Terra Cotta pieces." In the edition of Jean-Paul Desroches, Gabriel Casal and Franck Goddio, *Treasures of the San Diego*. Elf Foundation, Paris.

De Leon, Alexandra, Jose Eleazar Bersales, Jose Santiago and Dante Posadas.

2009 "The Archaeological Excavation of the Boljoon Parish Church, Cebu (Phase 5)." Manuscript. National Museum, Manila. Philippines.

Desroches, Jean-Paul, Gabriel Casal and Franck Goddio.

1997 *Treasures of the San Diego*. Elf Foundation. Paris, France.

Dizon, Eusebio Z.

1993 "War at Sea: Piecing together the San Diego puzzle." In *Saga of the San Diego (AD. 1600)*. Concerned Citizen of the National Museum Inc. Vera Reyes Inc. Philippines pp. 45-50.

2012 "Building of the Galleons." In Edgardo J. Angara and Sonia Pinto-Ner (editors). *The Manila Galleons Traversing the Pacific*. Rural Empowerment Assistance and Development (READ) Foundation Inc. Cubao, Quezon City.

Dizon, Eusebio and Wilfredo P. Ronquillo.

2010 "Maritime and Underwater Archaeology in the Philippines." In *A Passage to Asia. 25th centuries of exchange between Asia and Europe*. Jan Van Alphen et al. BOZAR, Centro for Fine Arts. Brussels.

Fox, Robert.

1979 "Chinese Pottery in the Philippines." *Readings in the Philippine Pre-History*.

Goddio, Franck.

1997 "The Beginning of an Adventure." In the edition of Jean-Paul Desroches, Gabriel Casal and Franck Goddio, *Treasures of the San Diego*. Elf Foundation, Paris.

2002 *Lost At Sea: The strange route of the Lena Shoal junk*. Periplus, London.

Hedinger, King H.

1977 "The Rising Sun in the Land of Sunsets." *The Filipino Heritage: The Making of a Nation: The Spanish Colonial Period (16th Century) The Day of the Conquistador*. Lahing Pilipino Publishing Inc. Pp. 981-988.

Junker, Laura Lee.

2000 *Raiding, Traiding and Feasting: The Political Economy of Philippine Chiefdoms*. Ateneo de Manila University Press. Quezon City, Philippines.

Loviny, Christophe.

1996 *The Pearl Road: The Tales of Treasure Ships*. Asiatype, Inc. and Christophe Loviny. Makati City, Philippines.

Medley, Margaret.

1976 *The Chinese Potter: A Practical History of Chinese Ceramics*. Phaidon Press Limited. Oxford.

Myrick, Conrad.

1977 "Pulse of the Walled City." *The Filipino Heritage: The Making of a Nation: The Spanish Colonial Period (16th Century) The Day of the Conquistador*. Lahing Pilipino Publishing Inc. Pp. 875-881.

Nogami, Takenori

2006 "Hizen Ware and its Transport around the South China Sea – Relation to the Manila Galleon Trade." A paper presented to the 18th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association. Manila, Philippines.

Nishimura, Masao.

2014 "Transformation of Cultural Landscape of Complex Societies in Southeast Asia: A Case Study of Central Settlement, Philippines." *Human Relations and Social Developments: Anthropological Thoughts on Social Dynamics*. Edited by Masao Nishimura a Festschrift Issue of Prof. Yasushi Kikuchi. Pp. 275-308. New Day Publisher, Quezon City.

1992 "The Role of Long Distance Trade in the Development of Complex Societies." Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Michigan, Ann Arbor.

Peterson, John A.

2005 "Two Shoreline Terraces and Their Possible Implications for Coastal Adaptation in the Late Iron Age of Cebu, Philippines." *Philippine Quarterly of Culture and Society*. Volume 33, pp. 127-154. University of San Carlos, Cebu City, Philippines.

Quiason, Serafin.

1958 "The Japanese Colony in Davao, 1904-1941." Reprint from the *Philippine Social Sciences and Humanities Review*. Vol. XXIII, Nos. 2-4. Manila.

Quirino, Carlos.

1977 "The Mexican Connection: The Cultural Cargo of the Manila-Acapulco Galleons." *The Filipino Heritage: The Making of a Nation: The Spanish Colonial Period (16th Century) The Day of the Conquistador*. Lahing Pilipino Publishing Inc. Pp. 933-937.

Reed, Robert R.

1978 *Colonial Manila: The Context of Urbanism and Process of Morphogenesis*. University of California Press. Berkeley.

Rodriguez, Felice N.

1988 "The British Interlude". *Kasaysayan: The Story of the Filipino People*. Vol. 3, pp. 194-200.

Ronquillo, Wilfredo P.

1993 "The Archaeology of the San Diego: A Summary of Activities from 1991-1993." *Saga of the San Diego (A.D. 1600)*. Concerned Citizens for the National Museum, Inc. Vera-Reyes Inc. Philippines. Pp. 13-20.

Saniel, Josefa.

1977 "The Chrysanthemum Colony: The Japanese Colony Like to Live by our Good Harbors." *The Filipino Heritage: The Making of a Nation: The Spanish Colonial Period (16th Century) The Day of the Conquistador*. Lahing Pilipino Publishing Inc. Pp. 912-915.

Tatel, Carlos Jr.

2002 "Patterns of External Exchange in Porta Vaga: Morphometric Analysis of Excavated Tradeware Ceramics at Porta Vaga Site, Cavite City." Unpublished Master Thesis. Archaeological Studies Program, University of the Philippines, Diliman, Quezon City.

Tri, Bui Minh.

2010 "Vietnamese Ceramics in the Asia Maritime Trade during the Seventeenth Century." In the Proceedings of the International Symposium on Exchange of Material Culture over the Southeast Asia: Contacts between Europe and Southeast Asia in the Sixteenth to Eighteenth Centuries. *Field Archaeology of Taiwan*. Vol. 13 (1/2), pp. 49-69.

〈論 文〉

Naufragio, colonización y comercio: relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII

Chenchen Fang

キーワード

naufragio, colonización española, comercio, Filipinas, Taiwán

要 旨

16世紀及び17世紀のフィリピンと台湾の関係は、以下の3つの時期に区分することができる。1) スペイン人が漂流して台湾に到着し、台湾占領を試みた16世紀末から1626年まで、2) スペイン人が北部を占領し、台湾とフィリピンの貿易をおこなった1626年から1642年まで、3) 1662年（鄭成功が台湾からオランダ人を追放した年）から、マニラと台南の貿易が復活した1683年（鄭成功の孫が満州で清の台湾征伐に敗れた年）まで。

この3つの時期については、中国語の資料よりスペイン語の資料がはるかに多く存在する。本研究に使用した資料は、台湾北部におけるスペイン側の資料 *Spaniards in Taiwan*, マニラ出納帳簿、台湾からマニラに入った船舶の入港記録であり、そのほとんどはスペインのインディアス総文書館に所蔵されている。

INTRODUCCIÓN

Tras la ocupación de Cebú por la expedición de Miguel López de Legazpi, en 1565, se empezó la colonización española en Filipinas. El mismo año, Fray Agustino Andrés de Urdaneta descubrió la ruta viable y segura desde las Filipinas a la Nueva España (México), y esta ruta fue reconocida inmediatamente por la importancia para el comercio entre Asia y América. Al mismo tiempo los galeones llevaron gentes y productos viajando con frecuencia entre Acapulco y Manila. Pero las relaciones entre los españoles y Taiwán se producen después de la conquista de Manila en 1571.

Taiwán, situado al norte de Luzón, a lo largo de la historia no sólo fue un punto importante en la ruta marítima de Asia oriental, sino también un lugar por donde pasaban tifones. En los tiempos de navegación a vela, la ida y vuelta de los barcos hacia Lequío (islas Ryukyu 琉球) y Japón solía pasar por el norte de Taiwán, y hacia Luzón por el sur de Taiwán. La prohibición del comercio marítimo en China y el aislamiento nacional en Japón durante los siglos XVI y XVII hicieron que la posición geográfica de Taiwán fuera importante, tanto para los japoneses como para los españoles y holandeses. En 1624, los holandeses ocuparon Tainán (sur de Taiwán) y atacaron a los navíos chinos que iban a

Manila. Amenazados por los holandeses, los españoles llegaron al norte de Taiwán (1626), donde fundaron San Salvador y una nueva ruta hacia Manila. Sin embargo, la colonia española del norte de Taiwán duró sólo dieciséis años. En 1642 los españoles fueron expulsados por los holandeses.

Después de que los españoles se retirasen del norte de Taiwán, las relaciones entre Filipinas y Taiwán se cortaron oficialmente, entre ellas sólo se mantuvieron pocos contactos. Pero pronto, el cambio de la situación política en el sudeste de la costa china, sobre todo la lucha entre los manchúes y Koxinga, obligó a Koxinga a entrar en Taiwán y expulsar a los holandeses en 1662. Otra vez los barcos de Taiwán entraron a Manila a comerciar y esta situación duró hasta 1683, año en que el nieto de Koxinga cayó en manos de los manchúes.

La información previa a las relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII se conserva en su mayoría escrita en español. Podemos encontrar estas fuentes españolas en el Archivo General de Indias de Sevilla y los Archivos Dominicos, entre otros. Al principio, los historiadores investigaron este tema a través de *The Philippine Islands, 1493-1803*. En 2001 y 2002, José Eugenio Borao coordinó la recopilación de todas las fuentes españolas de Taiwán y publicó dos volúmenes titulados *Spaniards in Taiwan*. En los últimos diez años, los investigadores en Taiwán han usado este libro para estudiar distintos temas de este período, tanto la gobernación y evangelización por los españoles, como los temas de comercio, aborígenes y mapas de esta época.

En verano de 2002 encontré en el Archivo General de Indias los registros de navíos de China, Macao, Taiwán y otros lugares de Asia hacia Filipinas (AGI, Filipinas, 64, 2 vols.). Los registros de navíos que iban a comerciar de Taiwán a Manila estaban relacionados con la familia Koxinga. En 2006 publiqué el análisis y la traducción de estos documentos de navíos que vinieron de Taiwán a Manila (Fang 2006). Después analicé los navíos de China y Macao a Filipinas. Mediante esta investigación descubrí que las cifras de navíos que procedían de China, Macao y Taiwán a Manila en el libro de Pierre Chaunu no coincidían con las cifras de los registros que investigué (Fang 2012). El hecho de que las dos cifras no coincidieran me ha motivado a partir de 2011 a estudiar los legajos de Contaduría que usó Pierre Chaunu en su libro. Aparte de los navíos que venían de China, Macao, Taiwán, etc., en la Contaduría encontré otros documentos relacionados con el norte de Taiwán. De esta parte de documentos ya hice un pequeño análisis en 2013 (Fang 2013)¹.

Los registros de navíos en el legajo “Filipinas, 64” fueron escritos por escribanos públicos, a diferencia de las cuentas de Contaduría que hicieron el contador, tesorero y factor-veedor. De las cuentas de Contaduría sabemos que las personas que desempeñaban estos oficios anteriores en la Real Hacienda comprobaban los datos con los libros generales y manual del escribano público². Pero hay que mencionar que en el legajo “Filipinas, 64” había muchas más informaciones y más detalladas de la mera declaración y tasación de los géneros de mercancías que traían los navíos. El 25 de enero de 1605, el rey dictó nuevas

instrucciones, “en las que se regulan minuciosamente las funciones del tesorero, contador y factor, los libros que deben tener cada uno, y cómo han de rendir su cuenta anual. Se les encarga también de controlar el comercio y cobrar los derechos de almojarifazgo sobre las mercancías que entraban y salían por el puerto de Manila, así como de todos los ramos llamados ‘mayores’ y ‘menores’, en atención a su volumen” (Díaz-Trechuelo 2001: 108). Según estas nuevas instrucciones, el tesorero, contador y factor cada uno tenía un libro y esto produjo que se repitieran los documentos en los legajos de la Contaduría.

En realidad, después del año 2002 la búsqueda de nuevas fuentes españolas relacionadas con el norte de Taiwán se quedó parada: por un lado pocos investigadores atendieron este ámbito; por otro lado, muchos pensaron que ya no era posible encontrar fuentes de este período. Ahora estas nuevas fuentes relacionadas con el norte de Taiwán podrán complementar las fuentes anteriores. Así que en este artículo aparecen fuentes españolas publicadas y no publicadas. Este artículo concentrará tres asuntos: naufragio, colonización y comercio, y analizará las relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII.

ANTES DE LA TOMA DEL NORTE DE TAIWÁN POR LOS ESPAÑOLES

Antes de que los españoles colonizaran el norte de Taiwán tuvieron contacto con la isla a través de los navíos naufragados y recibieron informaciones de Taiwán mediante los sangleyes (los chinos 唐人). Al final del siglo XVI, los españoles en Manila propusieron la conquista de la Isla Hermosa, y en 1626 la llevaron a cabo y fundaron San Salvador en Keilang³⁾.

Nafragio en Taiwán

Taiwán está situado al lado del continente. Por la influencia del clima y la presión atmosférica del continente y océano, tanto el monzón como los tifones traen viento y lluvia. Por este efecto, antes de que los europeos ocuparan Taiwán, los extranjeros (incluidos los españoles) tuvieron contacto con la isla a través de los navíos naufragados. El primer documento occidental sobre naufragio en Taiwán fue un navío a cargo del capitán portugués André Feio. Este navío salió de Macao para Japón el día 6 de julio de 1582 y por causa de las tormentas arribó a la Isla Hermosa. Los sobrevivientes del navío encontraron a los indígenas. Tres misioneros supervivientes luego dejaron sus escritos: uno fue escrito en español por el jesuita español Alonso Sánchez, los otros dos documentos fueron escritos en portugués por el padre Pedro Gómez de origen español y el jesuita portugués Francisco Pírez. El 30 de septiembre ellos salieron de Taiwán y llegaron a Macao ocho días después (Borao et al. 2001: 2-11)⁴⁾.

El padre Alonso Sánchez volvió a Manila en febrero de 1583 y participó en la idea de la conquista de China en una junta de 20 de abril de 1586 de Manila. Éste fue enviado por

las autoridades de las Islas Filipinas a España y llevó este proyecto para convencer al rey Felipe II. El padre presentó sus razones al rey en diciembre de 1587, y se creó una junta especial para tratar el tema. Pero la idea se abandonó tras el fiasco de la Armada Invencible (Luciano Pereña 1954: 85-87).

Otro ejemplo de naufragio en Taiwán fue el del dominico fray Juan Cobo (嗶嘑羨)⁵. En junio de 1592, el gobernador de Filipinas Gómez Pérez Dasmariñas envió a Juan Cobo a Japón y obtuvo una audiencia con Hideyoshi (豊臣秀吉); el intérprete chino Antonio López acompañó la embajada. Antonio López era criado de Juan Sami, maestro de letras chinas, que acompañaba a Juan Cobo (Gil 2011: 253). Al final de ese año, Juan Cobo emprendió el regreso, pero le asaltó un furioso temporal y arribó a la Isla Hermosa, donde lo mataron los naturales (Borao et al. 2001: 23 y López López 1870: 316-317).

Proposición de la toma de Taiwán

Al final del siglo XVI, los españoles ya conocieron dos reinos de indígenas del norte de Taiwán, uno es Cheylam (o Keilang), otro es Tamchui (淡水), como refleja el siguiente documento: “Es Cheylam reyno junto a Japón, tienen su rey que los gobierna al qual tributan, es tierra muy abundante de azufre y pelean y pescan con fisgas”; “Tamchui es reyno de por sí confina con el de Cheylan, ... son grandes flecheros y de hordinario andan rrobando, y tienen sus guerras y por costumbre que todas las personas que uno mata les quita las caveças ...”⁶.

En 1597, Luis Pérez Dasmariñas le dirigió una carta al gobernador de Filipinas Francisco Tello de Guzmán donde hablaba de “el capitán Gregorio de Vargas me ha dicho ha visto mucho de esta isla, y también estaba los otros días aquí un sangley que daba relación de ella, que podrán informar de lo que supieren” (Borao et al. 2001: 30). De esta carta sabemos que al final del siglo XVI ya estuvo dicho capitán español visitando Taiwán y que los españoles sacaron las informaciones de Taiwán mediante los sangleyes. Esta misma carta también mencionó cómo “tratar con los sangleyes que allí estuvieron y vinieron a comerciar y a pescar” (ibíd. 2001: 30).

El 27 de junio de 1597, Hernando de los Ríos Coronal le escribió una carta al rey Felipe II: “... la Isla Hermosa ... tiene pocos puertos, pero uno, que está en la cabeza de ella, a la parte que mira al Japón, es muy acomodado y fuerte, llamado Keilang, ... es gran puerto y muy fondable, y la boca se cierra con una isla por la parte Nordeste” (ibíd. 2001: 35). En esta carta adjuntó un mapa de las islas de Luzón y Hermosa y parte de la costa de China; en la parte del norte de Taiwán indicó el puerto de Tamchui y el puerto de Keilang (figura 1). Parece que las informaciones que sacaron en este mapa tuvieron relación con el capitán Gregorio de Vargas, como dice José Eugenio Borao (ibíd. 2001: 30), o probablemente vinieron de los sangleyes.

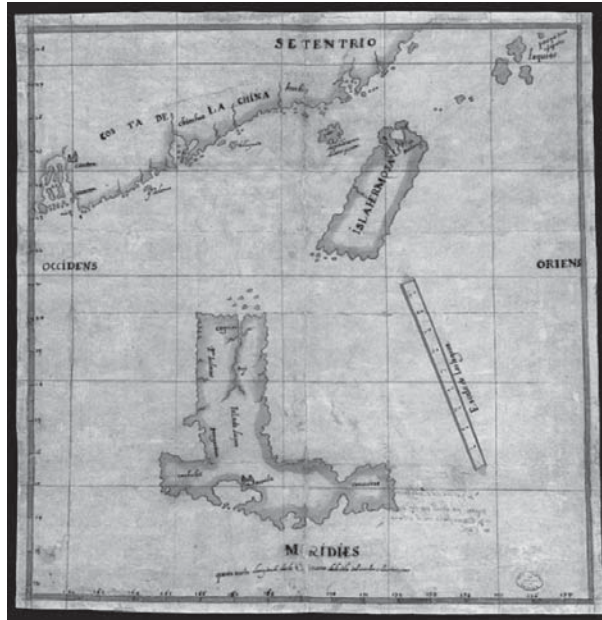


Figura 1: Mapa de las islas de Luzón y Hermosa y parte de la costa de China, Hernando de los Ríos, 1597. AGI, MP, Filipinas, 6.

En la Junta de 20 de abril de 1586 de Manila, que se mencionó más arriba, no sólo se habló de la idea de la conquista de China, sino también de la posibilidad de pacificar las islas de alrededor, incluyendo la Isla Hermosa (Blair y Robertson 1903: 186; Borao et al. 2001: 16). Unos años después (1593), Hideyoshi planteó ocupar Taiwán. Ante el temor de que la isla fuera ocupada por los japoneses, los españoles propusieron tomarla entre los años 1596 y 1597. Pronto el rey nombró a Juan de Zamudio para ocupar Taiwán. Éste salió con dos navíos, que encontraron mal tiempo y se arrimaron a los montes de Batan (Aduarte 1693: 556). Los españoles que apoyaron la toma de Taiwán consideraron que la isla podía traer muchos beneficios. En realidad, ellos tenían escasos conocimientos del norte de Taiwán, y sus deseos y opiniones fueron exagerados, así como escribió el mismo Hernando de los Ríos Coronel, el 27 de junio de 1597: “Y en esta la Isla Hermosa, en este puerto de Keilang, puede estar, cualquiera armada que V. M. enviare, segura y bastecido, por ser la tierra fértil de bastimentos de arroz y carne, y tanto pescado que cargan cada año para China doscientos navíos” (Borao et al. 2001: 36).

En fin, antes de tomar el norte de Taiwán, los españoles de Manila recibieron informaciones de dicha isla, muchas venían de los sangleyes y otras se sacaron de visitas propias. Pero estos conocimientos de Taiwán eran limitados e irreales.

LA COLONIZACIÓN ESPAÑOLA EN TAIWÁN (1626-1642)

En 1626 los españoles ocuparon el norte de Taiwán y fundaron las fortalezas. La colonización española duró hasta 1642 cuando fueron expulsados por los holandeses. Durante la época de colonización española, el gobierno de Manila envió gentes y necesidades para socorrer al norte de Taiwán, y deseó abrir el comercio entre ambas partes.

La fundación de las fortalezas

En mayo de 1626, los españoles llegaron al puerto de Keilang y tomaron posesión de la zona norte de la Isla Hermosa. Este mismo año, fundaron la fortaleza de San Salvador y “un baluarte más en la cima de un cerro de trescientos o más pies de alto, que hace inexpugnable el sitio” (ibíd. 2001: 72). Este baluarte se llamaba “San Millán”. En el mapa que dibujó Pedro de Vera en 1626 se ven estos dos fuertes. La fortaleza de San Salvador estaba situada en el sudoeste de la isla Heping Dao, que era un punto importante para controlar la entrada y salida de los navíos (figura 2). Pero en ese momento, la fortaleza de San Salvador no fue un presidio fuerte.



Figura 2: Descripción del puerto de los españoles en Ysla Hermosa, Pedro de Vera, 1626. AGI, MP, Filipinas, 216.

Entre 1626 y 1629, los españoles construyeron la fortaleza y tres presidios auxiliares para defender San Salvador. El alarife Miguel Ramírez y el ingeniero y trazador Nicolás Bolen estuvieron a cargo de la construcción de la fortaleza. Miguel Ramírez tuvo cuatrocientos pesos como salario anual; Nicolás Bolen, doscientos cincuenta pesos de salario anual, mientras que cuando era artillero cobraba doscientos⁷⁾. Los sangleyes ofrecían material de construcción, como cal, así como una importante cantidad de mano de obra: canteros, tejeros, aserradores y carpinteros. En el período de la construcción de las fortalezas encontramos sangleyes canteros como Joan Chinbue, Tionghuya, Cauco (九哥)⁸⁾, Suysuan, Bihuy, Chichican, Tionghing que fueron enviados a servir en San Salvador⁹⁾. También los sangleyes tejeros como Huygou o Sico (四哥) fueron enviados a San Salvador, así como sangleyes aserradores, Pete, Quinion y Sete¹⁰⁾. Todos ellos sirvieron en las obras reales de las fortalezas de San Salvador, de conformidad con el asiento que hicieron a razón de real y medio o un real cada día, además de la ración de una cantidad de arroz al mes (cuadro 1).

CUADRO 1
Los salarios de sangleyes

<i>profesión</i>	<i>salario</i>	<i>razón de arroz</i>
cantero	1 real y ½ cada día =5 pesos y 5 tomines cada mes	20 gantas de arroz limpio cada mes
aserrador	1 real y ½ cada día	arroz
	1 real cada día	
tejero	1 real y ½ cada día	arroz
carpintero	5 pesos y 4 tomines cada mes	15 gantas de arroz limpio
piloto	3 pesos y 4 tomines cada mes	
marinero	2 pesos y 4 tomines al mes	

Fuente: AGI, Contaduría, 1211, ff. 141r, 147r-147v, 244v-245r, 404r-404v, 502r, 663v-664r; AGI, Contaduría, 1212, ff. 131r, 202v-204r, 205v-206r; AGI, Contaduría, 1213, ff. 130r, 201v-203r, 204v-205r ; AGI, Contaduría, 1217, ff. 496v, 1089v.

Los indios filipinos sirvieron cargando materiales como vemos en las fuentes: “A quinze yndios de rrepartimento de la provincia de Cagayán, ... hubieron de auer por su salario de trescientos y veinte y siete días corridos desde quatro de mayo de mill y seiscientos y veinte y seis hasta diez y seis de marco de mill y seiscientos y veinte y siete que sirvieron cargando materiales en las fuerças de San Salvador de Ysla Hermosa”¹¹⁾. También dice Jacinto Esquivel: “la obra de piedra para lo cual son mucho más aptos los sangleyes dichos que los indios” (Borao et al. 2001: 174).

En 1629, San Salvador ya es una fortaleza cuadrada, construida en piedra, y en 1631 Keilang tiene 4 presidios: San Salvador, la Retirada (llamado San Antón), San Millán y San

Luis. A partir de 1637, Sebastián Hurtado de Corcuera, gobernador de las Filipinas, retiró una parte de cañones y soldados a Manila y conservó dos presidios; los otros dos presidios fueron abandonados. En 1641 y 1642, a resultas de los ataques de los holandeses al norte de Taiwán, otra vez se establecieron 4 presidios, pero poco después los españoles fueron expulsados. En el mapa que dibujó el holandés Simon Keerdekoek en 1654 se ven estos 4 presidios. Luego, San Salvador fue destruido, y hasta mediados del siglo XIX se vieron las ruinas de San Salvador.

El desarrollo de las rutas

Antes de que llegaran los españoles al norte de Taiwán ya habían ido a comerciar los sangleyes. En el libro *Ming Shi Gao* (明史稿), que fue escrito por Wang Hong-xu en 1723, hablaba de la ruta entre Keilang, Tamchui y Fuzhou (福州): “de Keilang y Tamchui al puerto de Fuzhou, esta ruta con viento a favor tardó cinco geng (更)” (Wang 1964: 94). Un día equivalía 10 geng, es decir del norte de Taiwán a Fuzhou se tardó medio día. Después de tomar el norte de Taiwán, los españoles desearon que la ruta del norte de Taiwán a Fuzhou pudiera atraer más comerciantes chinos al norte de Taiwán. Además, ellos contactaron con los funcionarios de Fuzhou mediante diversas vías, así como escribió en un documento del legajo de Contaduría: “Al padre fray Bartolomé Martínez, provincial de la horden de Santo Domingo, cient pessos que por decreto del dicho señor gouernador se le libraron y dieron a quenta de quatro mill pessos que por Junta de haçienda, se acordó, se embiassen de pressente al virrey de la provyncia de Ocheo en el Reyno de China para que con más facilidad concediera lizencia para que vinieron desde el dicho Reyno a Ysla Hermosa con los peltrechos y bastimentos necessarias para las dichas fuerças y para esta campo”¹²⁾. Ocheo es Fuzhou, está escrito con pronunciación de lengua de Fujian. Este presente fue llevado primeramente a Keilang a través del navío Rosario, el cabo de la fuerza de San Salvador, Antonio Carreño de Valdés, lo lleva posteriormente a China acompañado por fray Bartolomé Martínez por saber muy bien la lengua china (Borao et al. 2001: 135-136). Aunque el gobierno de Manila intentó negociar con el virrey de Fuzhou para que permitiera a los barcos ir al norte de Taiwán, el resultado fue que no vinieron tantos barcos chinos como los españoles esperaban.

A partir del 1626 el gobierno de Manila envió barcos a socorrer la Isla Hermosa. Estos barcos pasaban por el oeste de Luzón y llegaban a Cagayán, y de ahí por el este de Taiwán, siguiendo la corriente del Kuroshio, finalmente atracaban en San Salvador. Sabemos que los barcos que acudieron a socorrer al norte de Taiwán eran galeones y galeras españolas. En los barcos españoles también fueron sangleyes marineros y pilotos a Taiwán, como los pilotos Onço, Cuytay, Sanco (三哥) y Chico (七哥)¹³⁾. Los legajos de la Contaduría nos informan de que los champanes sangleyes y barcos portugueses también acudieron a socorrer al norte de Taiwán, así como los champanes chinos de Pintay y Rufu, y un navío portugués llamado Nuestra Señora de Atocha¹⁴⁾. Además, en la Contaduría se describen

los nombres, salarios y oficios de gentes que fueron a socorrer al norte de Taiwán. Como podemos ver en cuadro 1, el sangley piloto cobró a razón de tres pesos y cuatro tomines al mes, y el marinero, dos pesos y cuatro tomines al mes¹⁵⁾. Por ello, sabemos que los pilotos y marineros cobraban mucho menos que los demás oficios. Además, si comparamos los sueldos de la tripulación de distintas etnias, se ve una gran diferencia entre ellos. Los pilotos españoles cobran 600 pesos al año, los acompañados de piloto, 300 pesos, y los marineros, 150 pesos al año¹⁶⁾. Pero dichos sangleyes cobran una miseria, los pilotos, tres pesos y cuatro tomines al mes, es decir, 42 pesos al año, y los marineros, dos pesos y cuatro tomines al mes, es decir, 30 pesos al año, aunque tenían más experiencia de navegar que otras etnias, como los filipinos y malabares grumetes, que cobraban 4 pesos al mes¹⁷⁾, es decir, 48 pesos al año.

En el camino de ida y vuelta de Manila a San Salvador hubo algunos barcos varados en Macao por causa de los temporales. En la época de la unión de España y Portugal (1580-1640) hubo barcos españoles que estuvieron a punto de naufragar, pero que finalmente lograron arribar a Macao, como se observa en los siguientes ejemplos: “A Francisco de Renteria, escrivano que fue del galeón, capitana Real que el año passado de mill y seisçientos y veinte y siete salió de socorro para las fuerças de Ysla Hermossa, y arribó y después fue a las yslas de Macan en guardia de las galeotas de los portugueses por el riesgo que tenían de los olandeses¹⁸⁾”, “el galeón Nuestra Señora de la Peña de França que salió de armada para Ysla Hermossa el año de mill y seisçientos y veinte y siete, y por haver arribado fue a Macan en guardia de las galeotas que vinieron a esta ciudad el dicho año¹⁹⁾”, “... Antonio Carreño de Baldéz ... alquiló vna cassa en la çiudad de Macan adonde se metieron todos los generos de ropa, jarra, belamen y demás cosas de la nao Sanctíssima Trinidad que salió de las fuerças de San Salvador de Ysla Hermossa el año passado de mill y seisçientos y treinta para venir a esta çiudad de Manila, y por malos temporales arivó a la dicha ciudad²⁰⁾”.

Los navíos que salían a socorrer a Taiwán llevaban españoles, filipinos, sangleyes, así como mestizos, gente de Malabar y también posiblemente cafres, aunque tenemos pocas informaciones sobre estas tres últimas etnias. Aparecen en los documentos el soldado mestizo Gregorio Martín y el sangley mestizo Pablo Pacheco, intérprete de la lengua china que sirvió en el presidio de la Isla Hermosa²¹⁾. Sólo encontramos a uno de Malabar, el grumete llamado Francisco Martín, que en el año 1626 con otros tres grumetes fueron de socorro a la Isla Hermosa en la nao Santísima Trinidad. Francisco Martín sirvió “ocho meses y diez y ocho días, y a la dicha rraçon montan los dichos treinta y quatro pesos tres tomines y dos granos²²⁾”, que se desquentan catorçe pesos, los doçe que reçivió por fatoria en dicho día dos de septiembre del dicho año de mill y sesicientos y veinte y seis, y los dos que le dió el dicho maestre en el viaje y quedan otros veinte pesos tres tomines y dos granos²³⁾. Los cafres, una etnia procedente de la costa sudoriental de África, fueron esclavos vendidos como género. Es frecuente ver a esclavos comprados para tripulación de

galeras²⁴⁾, y es posible que trabajaran en los barcos que iban a Taiwán, como menciona el siguiente documento: “A Diego Díaz, portugués, ... se le libraron por el valor de un esclavo llamado Francisco, cafre que en diez de junio de mill y seiscientos y veinte y siete prestó a su Magestad para serbiçio de sus Reales galeras al remo por tiempo de quatro meses con calidad que si en ellos muriesse se le pagarían de la Real caja los dichos çinquenta pesos, el qual se entregó el dicho día a Gaspar Tomas, cómitre de la galera patrona nombrada San Phelippe que fue el dicho año con la armada que sacó el señor gouernador Don Juan Niño de Tauora para las fuerças de Ysla Hermossa, y haçiendo el dicho biaje se ahogó en el cabo del Bojeador en tres de octubre de mill y seiscientos y veinte y siete que se perdió allí la dicha galera”²⁵⁾.

La situación comercial entre ambas partes

Al principio de la ocupación española en el norte de Taiwán, la situación comercial entre Keilang y China no era fácil. A partir de 1628 se desarrolló el comercio con Keilang. Los barcos españoles volvían a Manila o Cavite con géneros chinos y pagaban los derechos, que variaban según los diferentes compradores. En marzo de 1628, el navío Rosario volvió a Manila con mercancías. Este navío salió otra vez para Keilang y volvió con numerosos géneros (Borao et al. 2001: 135-136), y el gobierno de Manila pensó que por fin arrancaba el negocio con la Isla Hermosa (ibíd. 2001: 126). Por las mercancías que trajo el navío Nuestra Señora del Rosario se pagaron “los derechos de almozarifazgo a seis por çiento de quatro mill seiscientos y noventa pesos que montó el valor de la seda”²⁶⁾. El mismo barco volvió a Manila con géneros en 1629 y en el mismo año el navío Santa Cruz llevó mercaderías de la Isla Hermosa a Manila²⁷⁾. En 1630, hubo tres navíos: Nuestra Señora de Atocha, Santísima Trinidad y Nuestra Señora de la Limpia Concepción que volvieron cargados de géneros a Manila²⁸⁾. Pero esta situación duró pocos años y las cantidades de mercancías fueron inferiores a lo que esperaban los españoles. Como dice Jacinto Esquivel en una carta de 1632, los barcos de Manila no llevaron más que arroz a la Isla Hermosa en “aquel negro socorro de mayo” (año sin determinar), y esto hizo que los comerciantes chinos tuvieran que malvender sus mercancías, lo que creó falta de interés en ellos y desacreditó al puerto de Keilang (ibíd. 2001: 176).

A partir de 1630, en Manila aparecen champanes chinos a cargo de Hincob (一哥), Chintog, Chinton, Quinhuan, Gohon, Chinuy, Alonso Bentiong, etc. que transportan géneros de la Isla Hermosa²⁹⁾. Sin embargo, los géneros no eran abundantes. Los sangleyes pagaban un 6 por 100 de almojarifazgo; en cambio, los españoles pagaban un 6 por 100 de almojarifazgo y un 8 por 100 de fletes de las mercancías. Como las mercancías de los navíos pertenecían a vecinos de Manila y los navíos eran de su Majestad, el gobierno de Manila pagaba los gastos de reparación cuando se estropeaban los navíos. Según los registros de mercancías que transportaban los navíos españoles y champanes chinos, parece que al principio iba bien transportar géneros desde San Salvador hasta Manila, pero

esta situación duró muy poco. Finalmente, los españoles no consideraron San Salvador como un lugar donde complementar las mercancías chinas que llegaban a Manila.

LA SITUACIÓN DESPUÉS DE KOXINGA (1662-1683)

En 1642, debido a que los holandeses ocuparon el norte de Taiwán, las relaciones entre Filipinas y Taiwán se paralizan. Veinte años después (1662), los holandeses fueron expulsados por Koxinga. A partir de este año, se fueron recuperando poco a poco las relaciones entre ambas partes. Pero esta situación duró hasta que los manchúes entraron en Taiwán en 1683.

Los registros de navíos

Antes de hablar de las relaciones entre Filipinas y Taiwán durante el dominio de la familia Koxinga, hay que mencionar que los títulos de las portadas en el legajo “Filipinas, 64” no coinciden con los testimonios de los registros de navíos de dicho legajo. En realidad, los registros del primer volumen del legajo “Filipinas, 64” no sólo recogen los años de 1657 hasta el 1684, sino que también están incluidos los años 1685 y 1686. Asimismo, encontramos los registros del segundo volumen desde 1684 hasta 1687 (figura 3).

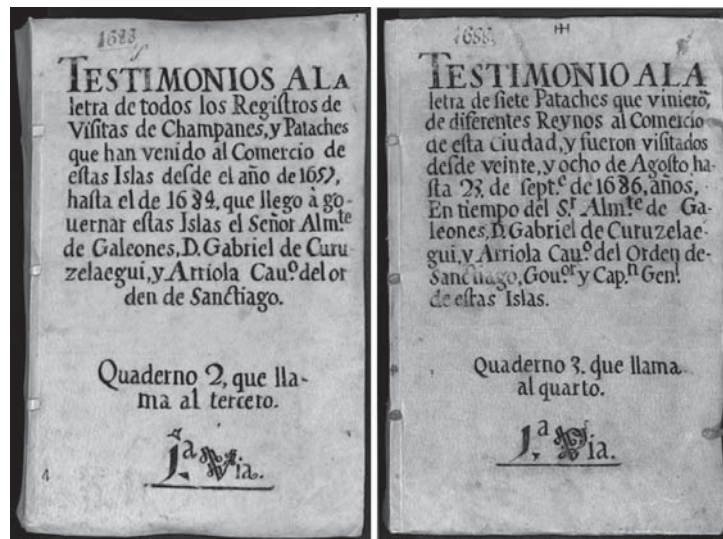


Figura 3: Las portadas del legajo “Filipinas, 64”.

A la izquierda: el título de Filipinas, 64, vol. 1; a la derecha: el título de Filipinas, 64, vol. 2.

De los registros de navíos que procedían de Taiwán a Manila, podemos analizar las relaciones comerciales entre ambas partes durante el dominio de la familia Koxinga³⁰. Antes de que Koxinga expulsara de Taiwán a los holandeses, los españoles les prohibieron a éstos que fueran a Filipinas. Al llegar el año 1662, Koxinga expulsó de Taiwán a los

holandeses e intentó conquistar Luzón. Además, como los españoles maltrataban a los comerciantes chinos en Manila, Koxinga prohibió que sus navíos comerciaron con Filipinas. De modo que antes de 1662, no fueron navíos de Taiwán a Manila (gráfico 1).

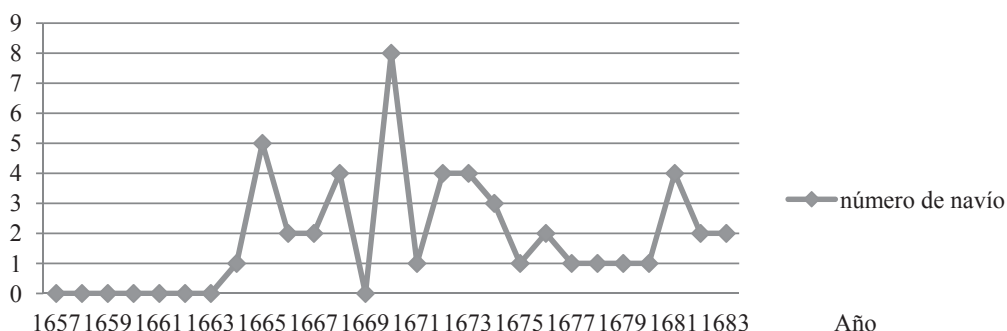
A partir del 1664, el hijo de Koxinga se retiró de China a Taiwán y empezó a recuperar el comercio con Manila, y en el período principal de su reinado el comercio fue superior al del período posterior. En 1666, los españoles intentaron recuperar las relaciones con Taiwán. Este mismo año, el hijo de Koxinga ocupó Amoy (Xiamen) de nuevo, y el comercio con China aumentó. Esto influyó en el comercio con Manila. En 1670, el hijo de Koxinga intentó fomentar el comercio con otros países (Chang 1995: 50), así que este mismo año aumentó rápidamente el comercio con Manila. Pero al año siguiente, el hijo de Koxinga amenazó con conquistar Filipinas (Borao et al. 2002: 654, 658-660), el comercio entre ambas partes encontró dificultades. Desde 1674, el hijo de Koxinga fue a China a guerrear con los manchúes, hasta 1680 cuando volvió derrotado a Taiwán. Durante este período el comercio entre Taiwán y Filipinas declinó. Al llegar el año 1683, el nieto de Koxinga cayó en manos de los manchúes y el comercio entre Taiwán y Filipinas se quedó parado. El gráfico 1 muestra de forma evidente los años de la relación comercial entre ambas partes.

Las mercancías que entraron de Taiwan a Manila

Los géneros que llevaban de Taiwán a Manila eran mantas (telas de algodón)³¹⁾, lienzos, hierros, sedas crudas, sayasayas³²⁾, hilos de chinchorro, hilos de acarreto³³⁾, trigos, cerámicas y porcelanas (como carahayes³⁴⁾, platos, escudillas, tazas), papeles, tabacos, payos (parasoles)³⁵⁾, etc. La mayor parte de estos géneros procedían de China y de Japón, y luego los transportaron de Taiwán a Manila. Así encontramos mantas, hierros, trigos, platos y escudillas de Japón, y otras mercancías de China, como mantas, lienzos, trigos, cerámicas, porcelanas, tabacos, papeles, etc. Los platos y escudillas de Japón serían porcelanas de Hizen.

GRÁFICO 1

Los navíos chinos que venían de Taiwán a Manila (1657-1683)



Fuente: AGI, Filipinas, 64, vol.1 & vol.2.

Además, lo más voluminoso de estos géneros eran las mantas (sobre todo mantas de Japón y mantas de Anhay³⁶⁾) y lienzos. A partir de 1681, el género llevado de Taiwán a Manila cambió bastante, porque disminuyó su cantidad aunque aumentó la diversidad de géneros.

CONCLUSIONES

Taiwán está situado en un punto importante de la ruta marítima de Asia oriental. Antes de que los españoles ocuparan el norte de Taiwán, la ruta entre Fuzhou (sudeste de China) y el norte de Taiwán ya estaba activa. Los barcos chinos y japoneses iban al norte de Taiwán, por donde también pasaron los navíos naufragados europeos. Desde finales del siglo XVI hasta principios del siglo XVII, tanto los japoneses como holandeses y españoles intentaron tomar Taiwán.

En 1624 los holandeses se trasladaron a Tainán y atacaron los navíos chinos hacia Manila. Por los intereses comerciales de Manila, dos años después, los españoles llegaron al norte de Taiwán y fundaron San Salvador. Los españoles no sólo esperaban que el norte de Taiwán pudiera ser una línea de fuego para luchar contra los holandeses y el establecimiento de un trampolín para predicar el Evangelio en China, sino también un lugar para atraer a los comerciantes chinos con el fin de asegurar los intereses comerciales en Filipinas. Pero, poco tiempo después de la colonización, los españoles perdieron esta esperanza. Además, muchos españoles enfermaron por no estar acostumbrados al clima del norte de Taiwán. La colonia española duró hasta 1642, en que cayó derrotada por los holandeses.

Durante la colonización española, por la falta de bastimentos tanto los barcos españoles como los chinos y portugueses se llevó ayuda de Manila al norte de Taiwán. Macao fue un puerto que recogía navíos españoles naufragados en el camino de ida y vuelta de Manila a San Salvador. En este período, las personas enviadas al norte de Taiwán eran diversas, encontramos españoles, filipinos, sangleyes, mestizos, malabares y posiblemente cafres. Según el título, asiento y etnia, cada persona recibió un salario distinto. Los sangleyes desempeñan un papel muy importante entre Manila y San Salvador. Muchos pilotos y marineros sangleyes trabajaron en los barcos que les enviaron al norte de Taiwán. También muchos sangleyes, como canteros, aserradores, tejeros y carpinteros, fueron enviados para construir el fuerte de San Salvador y los otros presidios.

Después de que Koxinga expulsara de Taiwán a los holandeses (1662), el hijo de Koxinga recuperó el comercio entre Manila y Taiwán. En 1670, el comercio entre ambos lugares tuvo mayor auge. El año 1681 fue un año decisivo porque disminuyó la cantidad del comercio aunque aumentó la diversidad de géneros. El comercio entre ambas partes fue cada vez más difícil debido a la tensión entre la familia Koxinga y los manchúes. Esta situación se mantuvo hasta 1683 en que el nieto de Koxinga cayó en manos de los

manchúes y el comercio se quedó parado.

Notas

- 1) El análisis de estos documentos se podrá ver en “Colonias españolas en Asia en el siglo XVII: relaciones entre Manila y San Salvador (norte de Taiwán)”. Dicho artículo ya ha sido aceptado y se va a publicar en *Filipinas y el Pacífico: nuevas miradas, nuevas reflexiones*.
- 2) AGI, Contaduría, 1211, ff. 586r, 718v; AGI, Contaduría, 1212, ff. 50r, 65v, 266r; AGI, Contaduría, 1213, ff. 49r, 64v, 264r.
- 3) Keilang (雞籠) está situado al norte de Taiwán. Es el antiguo nombre de Keelung (基隆).
- 4) Encontramos cinco autores que hablan de este tema. Cuatro de ellos analizan el lugar donde naufragó este navío, así como J. E. Borao y Kaim Ang (翁佳音) consideraron que este navío fue naufragado en el norte de Taiwán; pero en opinión de Chou Wanyao (周婉嫻) fue en el centro de Taiwán; y Chiu Hsin-Hui (邱馨慧), en el suroeste de Taiwán. En el libro de Lúcio de Sousa también se habló de este navío naufragado y explicó la historia de los sobrevivientes después de regresar a Macao (Sousa 2010: 49-62).
- 5) Después de llegar a Filipinas en 1588, Juan Cobo hizo la predicación con los sangleyes de Parián. Él tradujo del chino al castellano un libro que publicó en 1592: *Beng Sim Po Can* (明心寶鑑). Asimismo, escribió en chino y publicó en 1593 otra obra importante: *Apología de la verdadera religión* (辯證教真傳實錄).
- 6) Cada una de estas descripciones de los indígenas del norte de Taiwán está acompañada de una ilustración (Manila MS, ff. 170, 178). Dicho documento viene de “Manila MS” o llamado “Boxer Codex”, que está conservada en The Lilly Library of Indiana University. C. R. Boxer (1904-2000) consideró que este manuscrito data del año 1590 aproximadamente (Boxer 1950).
- 7) AGI, Contaduría, 1211, f. 603r; y J. E. Borao et al., *Spaniards in Taiwan*, vol. I, pp. 126-127.
- 8) Algunos nombres chinos que aparecen en el texto terminan en “gou/guan 官 / 觀” o “co 哥”. La mayoría de ellos proceden de Fujian. Según *Xiamen Zhi* a los que tienen buena apariencia se les llama gou 官 / 觀. A partir de la dinastía Ming, en cada provincia se distinguen diferentes categorías, y “gou/guan 官 / 觀” y “co 哥” son algunas de ellas. Véase la página 325 de *Xiamen Zhi* 廈門志, escrito por Chou Kai y las páginas 3, 32, 44 de *Kuangtung Shihsan Hang Kao* 廣東十三行考, escrito por Liang Chia-pin.
- 9) AGI, Contaduría, 1211, ff. 147r-147v, 404r-404v, 860v; AGI, Contaduría, 1212, ff. 202v-204r; AGI, Contaduría, 1213, ff. 201v-203r.
- 10) AGI, Contaduría, 1211, ff. 244v-245r, 405r, 663v-664r, 861r.
- 11) AGI, Contaduría, 1211, f. 753r.
- 12) AGI, Contaduría, 1211, f. 524v.
- 13) AGI, Contaduría, 1211, ff. 141r-142r, 502r-503r, 884v.
- 14) AGI, Contaduría, 1211, ff. 566v-567r; AGI, Contaduría, 1213, ff. 836v-837r, 941v; AGI, Contaduría, 1214, ff. 194v-195r, 299v; AGI, Contaduría, 1216, ff. 109v, 114v-115r, 671v.
- 15) AGI, Contaduría, 1211, f. 141r.
- 16) AGI, Contaduría, 1211, ff. 174v-176v.
- 17) AGI, Contaduría, 1211, ff. 173r-174r, 630r; AGI, Contaduría, 1212, ff. 432v-433r.

- 18) AGI, Contaduría, 1211, f. 411r.
- 19) AGI, Contaduría, 1212, f. 20r; AGI, Contaduría, 1213, f. 19r.
- 20) AGI, Contaduría, 1212, ff. 258r-258v; AGI, Contaduría, 1213, ff. 256r-256v.
- 21) AGI, Contaduría, 1218, ff. 409v, 714v-715r.
- 22) 1 peso equivalía a 8 reales de plata, y también a 8 tomines. 1 tomín equivalía a 12 granos.
- 23) AGI, Contaduría, 1211, ff. 173r-173v.
- 24) AGI, Contaduría, 1211, ff. 804v-805r.
- 25) AGI, Contaduría, 1213, ff. 120r-120v.
- 26) AGI, Contaduría, 1211, f. 351v.
- 27) AGI, Contaduría, 1211, f. 586r; AGI, Contaduría, 1212, ff. 45v-46r.
- 28) AGI, Contaduría, 1212, ff. 43r-43v, 49r, 50r; AGI, Contaduría, 1213, ff. 42r-42v, 48r-48v. 49r.
- 29) AGI, Contaduría, 1212, ff. 49v, 295r, 344r, 348v; AGI, Contaduría, 1213, ff. 48v, 352r, 401r, 405v; AGI, Contaduría, 1217, ff. 150v-151r, 743v-744r; AGI, Contaduría, 1219, ff. 71v, 553v.
- 30) El análisis de estos registros de navíos los podemos ver en *El junco comercial entre Taiwán y Manila (1664-1684)* 明末清初臺灣與馬尼拉的帆船貿易 (1664-1684).
- 31) En la Biblioteca de la Universidad de Barcelona se conserva un manuscrito del año 1620, que se tituló *Arte de la lengua Chiō-chiu*. En este manuscrito se explica que “mantas” en carácter chino es “布”, es decir, telas de algodón (Mançano 1620: 23, 25, 27, 30).
- 32) Sayasaya fue el nombre en español de una especie de seda china (Blair y Robertson 1906: 267).
- 33) Gracias al registro de un navío chino que entró en Manila el 29 de mayo de 1686, sabemos la función del hilo de acarreto. Según este registro, las mercancías que llevó dicho navío, incluidas “çiento y treinta y çinco redes de pescar de hilo de acarreto” (AGI, Filipinas, 64, vol.1, ff. 479r-481r).
- 34) Según las descripciones de los registros de navíos que venían de China a Manila, los carahayes tenían formas pequeñas, medianas y grandes. Los pequeños eran carahayes de mano chicos o a modo de escudillas o a manera de tachos, los pequeños y medianos eran de una asa, y los grandes con dos asas y de trapiche. Además, aparecen los carahayes pequeños manuales, grandes de China y de Canton medianos (AGI, Filipinas, 64, vol.1, ff. 446v-447v, 456v-458r, 470v-472v, 474v-476v, 479r-481r, 483r-484v, 488r-489v, 535r-534r, 540v; AGI, Filipinas, 64, vol.2, ff. 122r-123v, 230v-233r, 235r-236v, 238v-240v, 241r-242v, 243v-245r, 581r-583v). De modo que sabemos que los carahayes pequeños y medianos serían teteras, los carahayes grandes serían un tipo de tinaja china.
- 35) En la Biblioteca Nacional de Madrid se conserva un mapa del año 1734 que se tituló *Carta Hydrographica y Chorographica de las Yslas Filipinas Dedicada al Rey Nuestro Señor por el Mariscal de Campo D. Fernando Valdés Tamón Cavallero del Orden de Santiago Governador y Capitan General de dichas Yslas*. Este mapa fue realizado por el padre Pedro Murillo Velarde y fue delineado por el indio Nicolás de la Cruz Bagay. A ambos lados del mapa hay ocho grabados que representan las etnias y costumbres de los habitantes de estas islas y cuatro con representaciones cartográficas de ciudades o islas. En el primer grabado del lado derecho hay tres escenas con diferentes personajes, uno de ellos es “español con payo alto”, según la imagen podemos saber que “payo” se refiere a un “parasol”.
- 36) Anhay está situada al sur de Fujian. Está escrita con pronunciación de lengua de Fujian y se escribe con los caracteres chinos “安海”.

Fuentes Documentales

Archivo General de Indias (AGI), Sevilla
Contaduría, legajos 1211-1219.
Filipinas, legajo 64.

Bibliografía

Aduarte, Diego

1693 *Tomo primero de la historia de la provincia del Santo Rosario en Filipinas, Iapon y China, de la sagrada orden de Predicadores*, D. Gascon, Zaragoza.

Blair, E. H. y J. A. Robertson

1903 *The Philippine Islands, 1493-1803*, vol. 6, A. H. Clark, Cleveland, Ohio.

1906 *The Philippine Islands, 1493-1803*, vol. 44, A. H. Clark, Cleveland, Ohio.

Borao, J. E., C. Gómez, A.M. Zanduetta y P. Heyns

2001 *Spaniards in Taiwan*, vol. I, SMC Publishing Inc, Taipei.

2002 *Spaniards in Taiwan*, vol. II, SMC Publishing Inc, Taipei.

Boxer, C. R.

1950 "A Late Sixteenth Century Manila MS.", *The Journal of the Royal Asiatic Society (New Series)*, 82 (1/2), pp. 37-49.

Chang, Hsiu-Jung

1995 *The English Factory in Taiwan, 1670-1685*, National Taiwan University, Taipei.

Chou, Kai

1961 *Xiamen Zhi* 廈門志, Bank of Taiwan, Taipei (en chino).

Díaz-Trechuelo, Lourdes

2001 *Filipinas. La gran desconocida*, Ediciones Universidad de Navarra, Pamplona.

Fang, Chenchen

2006 *El junco comercial entre Taiwán y Manila (1664-1684)* 明末清初臺灣與馬尼拉的帆船貿易 (1664-1684), Daw Shiang, Taipei (en chino).

2012 *El comercio entre los sangleyes y Luzón (1657-1687): análisis, traducción y anotación de las fuentes* 華人與呂宋貿易 (1657-1687) : 史料分析與譯註, National Tsing Hua University Press, Hsinchu (en chino).

2013 "Colonias españolas en Asia en el siglo XVII: relaciones entre Manila y San Salvador (norte de Taiwán)", *El Pacífico, 1513-2013. De la Mar del Sur a la construcción de un nuevo escenario oceánico: Congreso Internacional*, Sevilla, 23-27 de septiembre de 2013.

Fang, Chenchen y Shu-ru Fang

2006 *Las fuentes comerciales entre Taiwán y España (1664-1684)* 臺灣西班牙貿易史料 (1664-1684), Daw Shiang, Taipei (en chino y español).

Gil, Juan

2011 *La India y el Lejano Oriente en la Sevilla del Siglo de Oro*, Ayuntamiento de Sevilla, Instituto de la Cultura y la Artes de Sevilla, Sevilla.

Liang, Chia-pin

1960 *Kuangtung Shihsan Hang Kao* 廣東十三行考, Tunghai University Press, Taichung (en chino).

López López, Ángel

1870 *Historia de los PP. Dominicos en las Islas Filipinas y en sus misiones del Japon, China, Tung-kin y Formosa [Texto impreso]: que comprende los sucesos principales de la historia general de este archipiélago, desde el descubrimiento y conquista de estas islas por las flotas españolas, hasta el año de 1840*, tomo. I, Imp. y estereotipia de M. Rivadeneyra, Madrid.

Luciano Pereña, Vicente

1954 "Proyecto de Conquista de China por Felipe II," *Cuadernos de Historia Diplomática*, N° 1, Zaragoza, pp. 79-88.

Mançano, Melchior de

1620 *Arte de la lengua chiō-chiu*, sin lugar de publicación, está conservado en la Biblioteca de la Universidad de Barcelona.

Sousa, Lúcio de

2010 *The Early European Presence in China, Japan, the Philippines and Southeast Asia (1555-1590) – the Life of Bartolomeu Landeiro*, Macao Foundation, Macao.

Wang, Hong-xu

1964 *Ming Shi Gao* (明史稿), rollo 302, en *Liuqiu yu Keilang Shan* (流求與雞籠山), Bank of Taiwan, Taipei (en chino).

〈論文〉

メソアメリカ考古学における日本人研究者

市川 彰

キーワード

メソアメリカ, 考古学, 日本人研究者, 文献, 動向分析

Abstract

In this paper I will review comprehensively the history of Japanese scholars in Mesoamerican archaeology, reflecting on its future. Based on the overview of the history of Japanese scholars in Mesoamerican archaeology and a trend analysis on the quantity of research papers written by them, I am able to mention the following characteristics: (1) Japanese scholars have participated or directed archaeological investigation in Mesoamerica since the 1970's. (2) Many Japanese scholars have currently carried out their own archaeological projects in various sites of Mesoamerican civilizations on a variety of research topics. Some of these studies are highly valued in the academic world. (3) The above mentioned characteristics are not well known in Japanese society.

By reflecting on these issues, I have two important suggestions: we need to reinforce our network between Japanese scholars and we have to carry out more outreach activities towards the Japanese society.

はじめに

本稿は、2014年11月24日に京都外国語大学で開催された国際シンポジウム『メソアメリカ考古学研究とその展望～次世代を担う日本人研究者たち』（以下、京外大シンポ）で口頭発表した内容と拙稿（市川2012a）を土台とし、加筆修正のうえ、作成したものである。

近年、日本人研究者が古代メソアメリカ文明の栄えた地で考古学調査をする件数が増加している。京外大シンポが若手・中堅研究者を中心に多様なテーマのもとで開催されたことは、日本人によるメソアメリカ考古学研究の裾野が確実に広がっていることに他ならない。しかし一方で、研究者が増加し、学会のさまざまな試みがあるものの、日本では学術的にも社会的にも古代メソアメリカ文明についてあまり良く知られていないのが現状といえよう。この点については、先駆的功績を評価しつつ、国内において次世代を担う研究者育成や古代メソアメリカ文明に関する正確な情報を発信していく役目のあるわれわれは十分に認識しておく必要がある。

以下、本稿では日本国内の状況に焦点をあて、メソアメリカ考古学をとりまく現状と課題について述べる。

1. 本稿の目的

本稿の目的は2つある。第一に、これまでの日本人研究者によるメソアメリカ考古学研究を網羅的に紹介し、日本人が執筆した文献の動向分析を通じて、研究の動向とその現在地を把握することである。そして、第二に、研究の現在地を確認したうえで、日本におけるメソアメリカ考古学の今後の課題を明確にすることである。

これまでも学史の整理がなかったわけではない。たとえば、日本考古学協会が発行している『日本考古学年報』では研究動向が多数の論文や著書とともに数年ごとに紹介され (e.g. 青山 2009), その他にも代表的な個別事例の紹介や自伝的著書もある (e.g. Aoyama 2002; 桜井 2004; 杉山 2012)。しかしながら近年本格的に独自の発掘調査を実施している若手・中堅研究者らの動向に限って言えば、未だ邦文では積極的に紹介されていない。そこで、本稿では、最近の動向も含め可能な限り広くメソアメリカ考古学における日本人研究者の活動を渉猟する。くわえて定量的な文献の動向分析をおこない、現在に至るまでの学史を整理し、研究の流れを次世代に繋げていくための今後の課題について考えてみたい。

2. メソアメリカ考古学史における日本人研究者

本節では、これまで日本人が過去に主体となり実施した、あるいは現在進行形の調査研究を紹介し、メソアメリカ考古学における日本人研究者の動向について概述する (図 1)。



図 1 日本人研究者が調査対象としている主な地域や遺跡

「メソアメリカ」とは、メキシコ北部から、ベリーズ、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグアとコスタリカの一部の領域をさすが、以下では北から南に順にこれまでの動向について概述する。なお、本稿で登場する人物名については敬称略とさせていただきます。はじめに断っておきたい。また、引用文献については邦文文献を中心に比較的入手が容易なものをあげている点もはじめに明示しておく。

2-1. メキシコ

(1) メキシコ西部

ハリスコ州、ナヤリト州、コリマ州、ミチョアカン州などが位置するメキシコ西部地方は、先古典期には円形ピラミッドや堅坑墓で有名なテウチトラン (Teuchitlán) 伝統が栄え、後古典期にはタラスコ王国 (Tarasco) などが興隆した地域である。また、メソアメリカでは冶金技術が発達した数少ない地域でもあり、南米アンデス地域との関連が指摘されている地域である。

このメキシコ西部では大井邦明が1978～1979年にティンガニオ (Tinganio) 遺跡の調査に関わっている (大井 1985a, 2007)。調査では、テオティワカン様式のタルー・タブレロ (Talud-Tablero) 建造物をはじめ、球技場、50体もの人骨が納められた地下式墓などが発見されている。

近年では吉田晃章 (東海大学) が、埋葬文化に着目し中米メソアメリカ文明と南米アンデス文明の文明間の交流について研究をおこなっている (吉田 2014)。

(2) メキシコ中央高原

メキシコ中央高原における考古学研究はテオティワカンやテンプロ・マヨールの調査研究がよく知られている。このメキシコ中央高原では、日本人研究者が本格的に渡墨するようになった1960年代後半以降から現在に至るまで、さまざまな調査研究に日本人が主体的に関わっている。

まず、杉浦洋 (メキシコ国立自治大学 Universidad Nacional Autónoma de México = 以下 UNAM) は、1960年代後半からメキシコ州トルーカ盆地の調査などを継続している。当該地域の古典期終末期の諸問題や生業論をはじめとして多数の論文や著書などがある (e.g. Sugiura 2005, 2009; Sugiura et al. 1998)。

大井は1970年代前半にメキシコ州に所在するテオテナンゴ (Teotenango) 遺跡の発掘調査に主体的にかかわり、文献学や民族学などを取り入れ、当該地域の新たな歴史の再構築に尽力した (大井 1985a, 1985b)。また重要なことは、大井はメキシコ考古学の巨星ロマン・ピニャ・チャン (Román Piña Chan) に師事し、発掘調査だけではなく、遺跡の修復や保存活動、成果を地域に還元することを重視するメキシコ考古学の理念を紹介している点であろう (e.g. 大井 2006)。

杉山三郎 (愛知県立大学) は、世界的に有名なテオティワカン遺跡の調査に1980年代から従事し、羽毛の生えた蛇神殿、月のピラミッド、太陽のピラミッドといったように重要な公共建造物の調査を実施し、テオティワカン国家の宗教や世界観、政治形態、都市計画に関する顕著な成果を挙げている (e.g. 杉山 2001; Sugiyama 2005)。さらに、アステカの都であったテンプロ・マヨール遺跡の調査にも関わっている (杉山 2007)。アステカについては井関睦美 (明治大学) も図像や遺物分析をおこなっている (e.g. 井関 2011)。

2000年代にはいり、日本人研究者によるメキシコ中央高原の考古学研究は若手研究者の台頭が目立つ。嘉幡茂は、調査研究が一極集中するテオティワカンからやや距離を置きながら、その周

縁に位置する社会の研究や、歴史性すなわち通時的視点から初期国家の形成過程の理解に資する研究をおこなっている (e.g. 嘉幡 2008, 2013; 嘉幡他 2014)。現在、嘉幡はラス・アメリカス・プエブラ大学 (Universidad de Las Américas Puebla) に所属し、とくにテオティワカン国家に先行する大センターであったプエブラ州のトラランカレカ (Tlalancaleca) 遺跡で考古学プロジェクトを遂行している。

村上達也は、テオティワカンにおける公共建造物の建築活動とそれに関わる権力の多次元性に着目した研究、理化学分析から漆喰の技術変化と社会動態に関する研究などをおこなっている (e.g. Murakami 2010; Murakami et al. 2012)。現在はアメリカのトゥレーン (Tulane) 大学に所属し、先の嘉幡らとともにトラランカレカ遺跡の調査を実施している。

福原弘識 (埼玉大学ほか) は、嘉幡らとともにトラランカレカ考古学プロジェクトに関わっている他、テオティワカン遺跡ラ・ベンティージャ (La Ventilla) 地区などのアパートメント式複合同士の相互関係に関する調査研究を実施している (e.g. 福原 2012)。

杉山奈和は、杉山三郎とともにテオティワカン研究に従事しており、主に動物考古学的手法を用いてテオティワカン国家の儀礼活動に関する研究などをおこなっている (e.g. Sugiyama et al. 2013)。

(3) チアパス州

メキシコのチアパス州には、高地にはパレンケ (Palenque)、ボナンパック (Bonampak)、ヤシュチラン (Yaxchilán) などの古典期マヤを代表する遺跡、沿岸部にはメソアメリカ最古段階の公共建造物がみつかったパソ・デ・ラ・アマダ (Paso de La Amada) などがあり、古くから現在まで学史上重要な調査研究がおこなわれている地域である。

このチアパス州では、国立人類学歴史学研究所 (Instituto Nacional de Antropología e Historia = 以下 INAH) のチアパス・センターに所属する金子明が調査研究に取り組んでいる。金子は壁画やリントルで有名なヤシュチラン、巨石を使った建造物のあるイグレシア・ビエハ (Iglesia Vieja) の調査および建造物の保存修復活動などに従事している (e.g. 金子 2001; Kaneko 2003, 2011)。

(4) メキシコ湾岸

メキシコ湾岸はオルメカ文化揺籃の地であり、現在のベラクルス州やタバスコ州にサン・ロレンソ (San Lorenzo) やラ・ベнта (La Venta) などが所在している。また、ベラクルス州北部には特異な建造物群や多数の球技場を有するエル・タヒン (El Tajín) などがある。このメキシコ湾岸を主たるフィールドとする日本人研究者には、古手川博一と黒崎充がいる。

古手川は、オルメカ文化研究を専門とし (e.g. 古手川 2005, 2007)、ベラクルス州立大学で教鞭をとる傍ら、考古学実習も兼ねてエステロ・ラボン遺跡 (Estero Rabón) でオルメカ人の生業復元を目的として調査研究をおこなっている。

黒崎は、ユーゴ (Yugo)、アチャ (Hacha)、パルマ (Palma) といった球技と関連する遺物の調査研究を長年おこなっている (黒崎 2003)。現在は、UNAM のアニック・ダニールズ (Annick Daneels) が指揮するベラクルス州中部のラ・ホヤ (La Joya) の発掘調査で出土した大量の埋納土器や土偶資料を用いて、当該地域の古典期後期文化に関する研究をおこなっている (黒崎

2012)。

(5) カンペチェ州, キンタナ・ロー州, ユカタン州

メキシコのカンペチェ州 (Campeche), キンタナ・ロー州 (Quintana Roo), ユカタン州 (Yucatán) はマヤ文明研究におけるメインフィールドでもあるが, 日本人研究者の進出は意外に少ない。そのなかでアリゾナ大学の塚本憲一郎は, グアテマラ国境に近いカンペチェ州に位置するエル・パルマル (El Palmar) の調査に従事し, 碑文の階段を発見するなど活躍している (e.g. Tsukamoto and López 2011)。その他, 建造物群とりわけ広場とそこでおこなわれる儀礼活動に着目し, さまざま集団の社会関係について論じている (Tsukamoto 2014)。

その他, 東海大学の横山玲子らが資源と環境の利用からマヤ文明の動態をみることを目的としてカンペチェ州南部地域の遺跡踏査をおこなっている (横山他 2011)。

(6) バハ・カリフォルニア

バハ・カリフォルニア州 (Baja California) はメソアメリカという文化史的領域には属していない。しかし, この地域では, 藤田はるみ (INAH 南バハ・カリフォルニア・センター) が, 古期や石期といった古い時期に相当する貝塚や洞窟遺跡の調査研究に従事している (e.g. Fujita and Melgar 2014)。先古典期以降 (前 1800 年～) の研究が主体をなすなかで, 藤田の調査は出色といえる。

2-2. ベリーズ

カラコル (Caracol) をはじめ学史的にも極めて重要な遺跡の調査研究が展開されてきたベリーズ考古学の状況は, 日本ではあまり知られていない。こうしたなかベリーズで調査研究を実施している日本人研究者には石原玲子や村田悟がいる。

石原は古代マヤ人の洞窟利用に関する論考を多数発表している (e.g. 石原 2002)。村田はベリーズのカリブ海沿岸における古典期後期の製塩活動や土器製作址に関する調査研究をおこなっている (Murata 2011)。現在はベリーズ川中下流域の考古学プロジェクトに関わっており, マヤ地域では少ない庶民の生活や生業研究に資する調査を実施している。

2-3. グアテマラ

グアテマラのペテン地域 (Petén) にはティカル (Tikal) をはじめとして数多くのマヤ遺跡があり, 同国南部の高地から太平洋岸にかけてはカミナルフユ (Kaminaljuyu) やタカリク・アバフ (Takalik Abaj) といった学史上著名な遺跡がある。このグアテマラ考古学史における日本人研究者による調査の嚆矢としては 1990 年に開始された猪俣健によるアグアテカ (Aguateca) の調査と 1991 年に開始された大井を調査団長とするカミナルフユの調査があげられる。

猪俣は, 1990 年から 1993 年にかけてアグアテカで考古学調査を実施しているが, 1996 年から 2005 年にかけて青山和夫 (茨城大学) らとともに国際的かつ学際的調査団を本格的に組織し, 古典期末期の崩壊過程, 王や貴族の男女の日常生活, 政治経済組織の解明に取り組み, 重要な論考を多数発表している (e.g. 青山 2003; Inomata 2001; Inomata and Houston 2001)。現在, 猪俣は青山らとともにセイバル (Ceibal) 遺跡で学際的調査を 2005 年から継続している。そのセイバルでは, マヤ文明の起源や都市の長期にわたる盛衰過程に関する重要な調査研究が展開されている

(e.g. 青山他 2014a, 2014b; Inomata et al. 2013)。

首都グアテマラ・シティにあるカミナルフユ遺跡の調査は、たばこと塩の博物館を主体とするJT中南米学術調査プロジェクトの一環で1991～1994年におこなわれた。グアテマラにおいて初めての日本人を主体とした組織的調査である。この調査によってカミナルフユ史の再構築が試みられた(e.g. 大井編 1994)。この調査団を率いた大井、伊藤伸幸、柴田潮音らはその後エルサルバドルのチャルチュアパ遺跡に調査対象を移し、調査を継続した。

中村誠一(金沢大学)は、ペテン地域のティカル遺跡においてプロジェクトを実施している。「北のアクロポリス」の考古学調査だけではなく、JICA(国際協力機構)などの支援を受けて文化遺産の保護や活用に関わる人材育成をも視野にいれたプロジェクトである(e.g. 中村編 2013)。ペテン地域では中村の他、白鳥祐子がペテン地域北部のタヤサル(Tayasal)遺跡など後古典期に属する土器や交易に関する調査研究をおこなっている(Shiratori et al. 2011)。

前掲の石原は、現在、グアテマラのキचे県(Quiché)などで先住民社会における教育に関する調査や実践的活動を展開している(e.g. Ishihara 2013)。

2-4. ホンジュラス

ホンジュラスにはマヤ地域を代表するコパン(Copán)やキリグア(Quirigua)が所在する。いわゆる地理的文化的にメソアメリカの周縁地域と位置づけられているが、周縁という特性を活かした新たな視点に基づく調査研究が展開されている地域でもある。

ホンジュラス西部のラ・エントラダ地域(La Entrada)は日本人が初めて大々的かつ組織的に考古学調査を実施した地域である。この調査は国際協力機構青年海外協力隊事業(以下、協力隊事業)の一環で実施されたものである。この協力隊事業は1983年に開始され、1984年から本格的に調査がはじまった。第1・2フェーズをあわせると1993年まで継続され、前掲の中村、猪俣、青山をはじめ、佐藤悦夫(富山国際大学)、寺崎秀一郎(早稲田大学)、長谷川悦夫(埼玉大学ほか)など現在活躍している多数の日本人メソアメリカ考古学研究者が輩出された。彼らによって実施されたラ・エントラダ考古学プロジェクトでは、綿密な踏査に基づく遺跡登録やエル・プエンテ(El Puente)の発掘調査および修復保存活動が組織的におこなわれ、学術的にも社会的にも現地社会に大きな貢献を果たした(e.g. 猪俣・青山 1996; 中村 2007; Aoyama 1999; Schortman and Nakamura 1991)。

その後も日本人によるラ・エントラダ地域やコパン谷での調査は継続され、大きな成果が得られている。例えば、中村はコパン遺跡の発掘調査や保存修復活動に長年従事し、2000年にコパンの中心部からやや離れた地点で10J-45王墓を発見するに至っている(e.g. 中村 2007)。またこの一連のコパン考古学プロジェクトに関わった鈴木真太郎(UNAM)は形質人類学的手法および安定同位体分析を用いて研究を継続している(Price et al. 2014; Suzuki et al. 2013)。寺崎はエル・プエンテの考古学調査を継続し、マヤ南東地域の都市の成立とその展開などに関する論考を発表している(e.g. 寺崎 1998)。なお、佐藤悦夫は現在テオティワカンの土器分析にも従事している(e.g. 佐藤 2009)。

またコパン谷やラ・エントラダ地域以外では、伊藤(名古屋大学)がロス・ナランホス(Los Naranjos)の調査を実施し、建築の諸特徴から政治史について論じている(e.g. 伊藤 2008)

2-5. エルサルバドル

エルサルバドルはメソアメリカ南東部を代表するチャルチュアパ (Chalchuapa) や保存状態の良好な集落社ホヤ・デ・セレン (Joya de Cerén) が所在する。エルサルバドルにおける日本人研究者による考古学調査の嚆矢は、1995年に開始された京都外国語大学調査団によるチャルチュアパの考古学調査である。同遺跡カサ・ブランカ地区の6基の土製建造物のうち3基の発掘調査および建造物の保存・修復活動が実施された (大井編 2000)。

2000年以降、上述の京都外国語大学調査団に主体的に関わった伊藤や柴田らを中心にエルサルバドル考古学プロジェクトがはじまり、チャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区4Nトレンチの調査を皮切りに、タスマル地区、エル・トラビチェ地区といったチャルチュアパ遺跡の調査研究を中心に活動を展開している (e.g. 伊藤・柴田 2007, 2013; 伊藤他 2009)。

2003年からは協力隊事業がエルサルバドルで開始される。上述したホンジュラスの場合と比較すると派遣人数としては小規模ではあるが、チャルチュアパでの活動を中心に2014年まで派遣が継続された。この協力隊事業においては発掘調査から整理作業や報告書の作成、修復保存活動、そして成果の社会還元という考古学という学問上必要な技術や知識の移転が図られた。学術的貢献としては、加藤慎也によるチャルチュアパ遺跡タスマル地区B1-2建造物の調査のほか、筆者によるチャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区における埋葬地区の発見、カサ・ブランカ地区5号建造物前の石碑祭壇複合の発見などがある (e.g. Kato et al. 2006; 市川 2012b, 2013)。村野正景 (京都文化博物館) は、エルサルバドルでの隊員経験をもとにパブリック考古学的観点から文化遺産の保護や活用に関する論考を発表している (e.g. 村野 2010, 2011)。

筆者は協力隊終了後にエルサルバドル太平洋沿岸部に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の調査を実施し、イロバング火山噴火の年代や影響、製塩活動に関する調査研究をおこなっている (e.g. 市川 2014)。2015年からはサン・アンドレス遺跡やカラ・スーシア遺跡といった複数の公共建造物群で構成される遺跡の調査を通じて、メソアメリカの周縁地域の独自性や周辺地域との地域間関係、火山噴火と人間社会の関係などについて通時的視点に基づき解明するための調査を予定している。

2-6. ニカラグア, コスタリカ

ニカラグアの太平洋岸やコスタリカ西部はメソアメリカの範疇に、それ以外の地域はメソアメリカ文明とアンデス文明に挟まれた地域、すなわち「中間領域」と呼ばれている。この地域では長谷川や南博史 (京都外国語大学) が調査をおこなっている。長谷川は、メキシコ中央高原から現在のニカラグアあたりまで南下したチョロテガや中間領域の特殊な発展過程に関する論考などがある (e.g. 長谷川 1999, 2002)。現在、より精度の高い編年構築にむけてマナグア湖周辺の堆積の良好な遺跡の調査をおこなっている。南は、考古学と博物館学を融合した地域開発の実践的活動をおこなっているが、同時にマタガルパ県ラス・ベガス遺跡で考古学調査をおこなっている (南 2013)。

2-7. 小結

以上、メソアメリカ各地域における日本人による調査研究について概述してきた。重要なことは、メソアメリカのほぼ全域をカバーできる調査研究を日本人が展開しているという点にある。

研究対象となる時期は、先古典期や古典期が主ではあるが、古期や石期、後古典期も含めほぼ全時期をカバーすることができる点も重要であろう。

この現在地に至るまでの道程は、東京大学文化人類学教室が主体となり始まり、55年以上もの歴史を有する日本アンデス調査団の経緯とは明らかに異なる。日本アンデス調査団は研究開始期から組織的であり継続的であった。一方のメソアメリカの場合には、研究を開始するきっかけとしては、少なくとも2つの道程がある。ひとつは、現地の大学や研究機関に単独で入り、個々人の興味関心の範疇において調査を開始する場合、もうひとつは協力隊事業をきっかけとして「国際協力としての考古学」からメソアメリカ考古学研究を開始する場合である。

こうした道程の結果と考えられるが、海外の研究機関に所属する研究者が比較的多く、欧米考古学や人類学を積極的に取り入れた論文も比較的多いという特徴がある。またJICAや国際交流基金などの支援をうけて文化遺産の保護と活用に関する実践的活動がおこなわれている点も特徴としてあげることができる。

3. 日本人研究者によって執筆されたメソアメリカ考古学関連文献の動向分析

ここでは、日本人研究者によって執筆された欧文および邦文のメソアメリカ考古学関連文献の動向分析をおこなう。前節までよりも定量的なデータを用いて研究動向を把握する。以下、文献数、国別、研究対象とする地域および文化別、研究テーマ別、掲載媒体の種類について時系列的にその趨勢を把握し、研究の現在地について確認する。

3-1. 資料

本分析で扱った文献は、論文検索 Web サイト (JSTOR, OPAC, CiNii, J-Global, Research Map, Academia.edu) や各教育機関 Web サイトに掲載された各研究者の業績一覧などを用いて収集した。2014年12月26日時点で、少なくとも75名が執筆しており、邦文文献494報、欧文文献283報の計777報ある。なお、複数名の日本人で執筆された文献は1報と数えている。また、調査報告書、会報記事や新聞記事は含めていない。遺漏もあると考えられるが、査読制度を有する主要な学術雑誌や高等教育機関の研究紀要を網羅し、市販の著書も可能な限り渉猟してあるので、動向分析に大きな支障はないものとする。

3-2. 分析

(1) 文献数の推移

文献数の推移の特徴としては、次の3点を指摘することができる (図2)。

第一に、1975年ごろから論文数が増加することである。これは、とりわけメキシコ中央高原において日本人が本格的に調査にかかわり、その結果として調査で得られた一次資料を用いて論文や著書が書かれたことと関連している (e.g. 大井1975)。また、著名なマヤ文明に関する欧文文献の訳書も刊行された (コウ1975)。

第二に、1985年代以降に文献数の急増がみられることである。これは、先のメキシコ中央高原での活動にくわえて、ホンジュラスにおいて協力隊事業の開始が強く関係している。このホンジュラスにおける組織的な考古学調査は、その後多数の研究者を輩出したという点で日本における

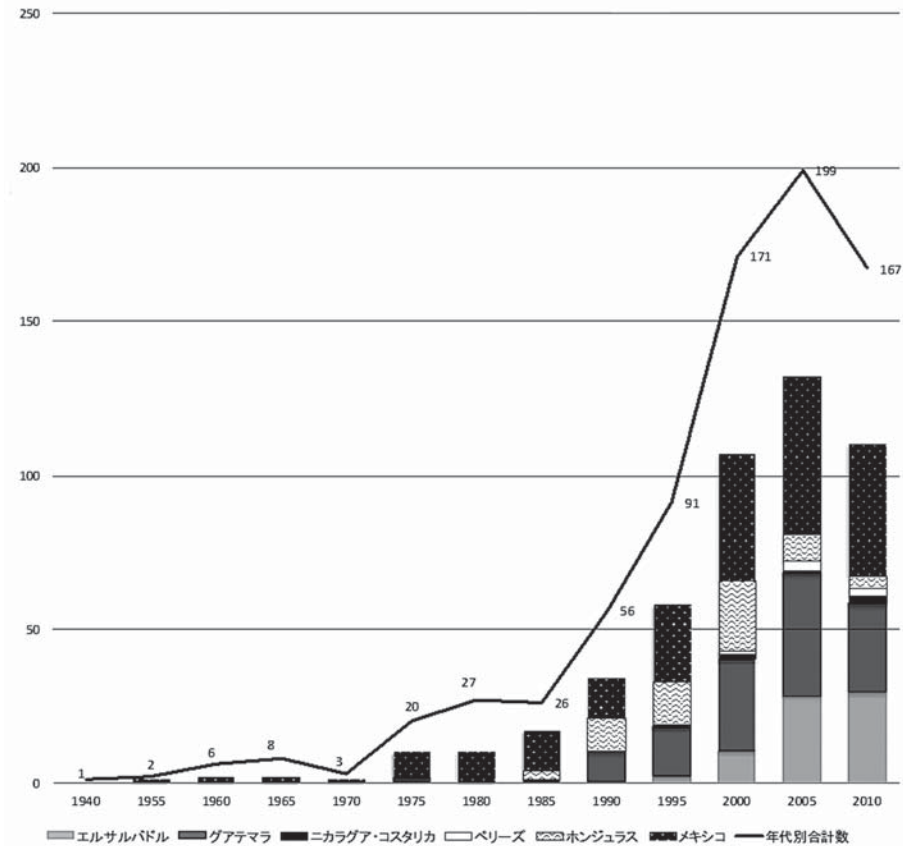


図2 論文数の総数および国別動向の推移

メソアメリカ考古学研究の転換期と位置づけられよう。

第三に、1995年以降は、さらに著しく文献数が伸びることである。この背景には「古代アメリカ学会」の設立がある。古代アメリカ学会は1996年に設立された「古代アメリカ研究会」をその前身とし、2003年に現在の名称になった。同学会は、南北アメリカ先史学・考古学ならびにその関連分野を研究する者が、活発な意見・情報の交換を通して互いの研究の深化と知見の拡大をはかり、日本における当該研究の発展に寄与することを目的としている。この古代アメリカ学会は、日本で唯一の新大陸考古学関連のテーマを扱った学会誌『古代アメリカ』を毎年1冊発行しており、日本国内のメソアメリカ考古学研究の基盤を形成することに寄与している。

(2) 国別動向の推移

国別動向の推移については、文献中で扱っている遺跡が所在する国を数値化している(図2)。1文献中で複数国を扱っている場合には個別に集計している。なお、マヤ、メソアメリカといった総説系の論考等は含めておらず、前述の文献数の合計とは必ずしも一致しない。国別動向の推移の特徴については、次の2点を指摘することができる。

第一に、研究黎明期から現在に到るまでメキシコが圧倒的に多い点である。マヤ、テオティワカン、アステカなどの諸文化が栄えた地というだけでなく、UNAMやENAH、INAHといったメソアメリカ考古学の中心機関が存在することも大きい。UNAMやENAHで学位を取得し、INAHや現地の研究機関に所属し、研究を継続している日本人研究者は、日本在住の研究者にとって現地の動向をタイムリーに把握する上でも貴重な存在である。

第二に、1990年以降にグアテマラやエルサルバドルの文献数が増加する点である。これは前掲の元ホンジュラス隊員世代である猪俣や青山らによるアグアテカ遺跡やセイバル遺跡の調査研究、大井や伊藤らによるグアテマラのカミナルフ遺跡やエルサルバドルのチャルチュエパ遺跡の調査研究、エルサルバドルへの協力隊事業の開始がその背景にある。

ベリーズ、ニカラグア、コスタリカに関する文献は上述した地域と比較すると格段に少ないが、2000年以降は微増傾向にはある。長谷川や南らが調査を継続しており、今後の調査の進展が期待される。

(3) 研究対象とする地域および文化別動向の推移

研究黎明期には新大陸やラテンアメリカ全体（分類上は「その他」に含まれている）が多い。以後テオティワカン、アステカなどに関連する諸論考がみられるものの、マヤを取り扱う研究が圧倒的に多い（図3）。また、国別動向にも反映されているようにエルサルバドルなどのメソアメリカ南東部を扱う研究も近年増加傾向にある。

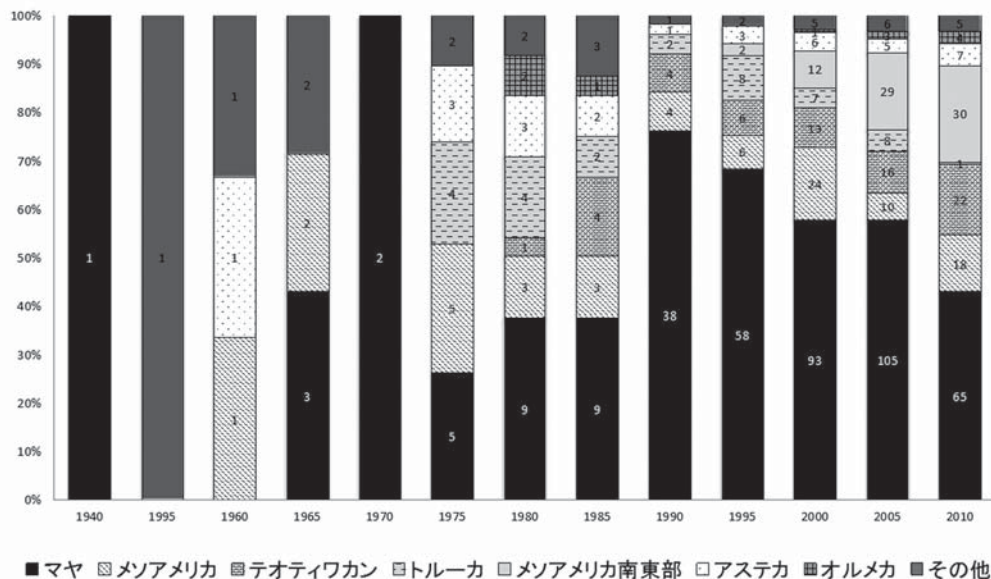


図3 研究対象とする地域および文化別動向の推移

(4) 研究テーマ別動向の推移

研究テーマは、「総説」（概説、遺跡紹介、動向等）、「調査報告」、「政治史」（権力の生成・衰退過程、戦争等）、「宗教祭祀」（儀礼や宗教の研究等）、「遺物遺構」（型式や機能の変遷等）、「技術生産」（生業、製作技法等）、「流通」（遠距離交易等）、「文字図像」（暦や図像の解釈等）、「墓制」、「自然科学・環境」（年代測定、同位体分析等）、「観光・教育」（博物館学も含む）に分類した。研究分野の推移の特徴については、次の3点を指摘することができる（図4）。

第一に、全般に総説系が多い。内容はマヤに関することが多いが、テオティワカンやアステカ、オルメカに関する情報も概説書にみられ、メソアメリカの通史は日本語でも今日までに概ね網羅できる状況にあると言える（e.g. 青山 2007, 2013; 青山・猪俣 1997; 伊藤 2011; 井上 2014; 杉山・他 2011）。この総説系は1985年以降増加傾向にあるものの全体に占める割合は20～25%ほどと変化がなく、その後は「調査報告」やその他の分野の割合が増加する。これは日本人による現地での調査事例が増加していることに他ならない。

第二に、1980年代以降に研究が多様化することである。分野としては「政治史」や「宗教祭祀」が多く、次いで「技術生産」、「遺物遺構」が多い。政治史や宗教祭祀については、マヤ王朝史の復元やその衰退や崩壊に関する研究などメソアメリカ文明を考える上で重要なトピックが研究動向に反映されているといえるだろう。技術生産や遺物遺構に関する研究では、使用痕を中心とした石器研究やセトルメント・パターン研究に関連する論考が中心である。欧米の研究者によって盛んにおこなわれている「文字図像」の研究事例は意外と少ない。「観光・教育」分野の文献の増加が2005年以降みとれる。この分野への貢献は昨今の世界の考古学界に求められつつある分野であり、そうした社会的背景が反映されているものと考えられる（e.g. 杓谷 2011; 村野 2011）。

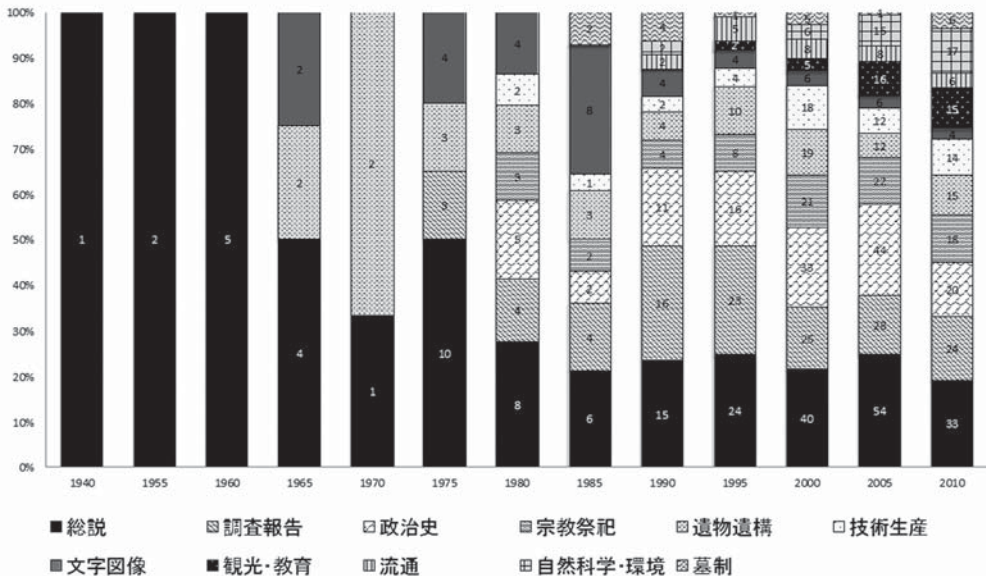


図4 研究分野別動向の推移

第三に、「自然科学・環境」分野の論考が少ないことである。ただし必ずしも自然科学的手法が調査研究に導入されていないというわけではない。むしろ実際には文献中に自然科学的手法を一部取り入れているものも多く、研究の実証性をより高いものになっている。また環境をキーワードとした文献は、2010年以降に増えているが、とくに環境変動と文明の盛衰過程に関する重要な知見を含む著書が刊行されている（e.g. 青山他 2014a, 2014b）。

3-4. 掲載媒体の種類

上述した文献の掲載媒体の種類について集計をおこなった（表1・2）。まず邦文・欧文文献ともに査読制度をもつ「学術雑誌」と「その他の媒体（紀要・論集・雑誌・著書）」という二つに区分した。「その他」には、邦文文献の場合には掲載件数の多い大学等の研究機関で発行されている「紀要」と「その他の媒体（論集・雑誌・著書など）」にわけ、欧文文献の場合には掲載件数の多い「グアテマラ考古学シンポジウム論集」と「その他の媒体（論集・雑誌・著書など）」に分けている。著書は単著だけでなく、分担執筆分なども含む。

掲載媒体の種類の特徴については、次の2点が指摘できる。

第一に、邦文文献については紀要やその他の媒体が圧倒的に多く、査読制度のある学術雑誌への掲載件数が少ないことがあげられる（表1）。新大陸考古学を主に扱う『古代アメリカ』を除けば、

表1 掲載媒体の種類（邦文）

【邦文学術雑誌】			
雑誌名	合計	論文 研究ノート	調査動向・書評 ・遺跡紹介など
古代アメリカ	48	45	3
考古学研究	14	4	10
古代文化	14	10	4
考古学ジャーナル	12	0	12
ラテンアメリカ・カリブ研究	5	4	1
古代学研究	4	2	2
第四紀研究	3	3	0
民族学研究	3	3	0
ラテンアメリカ研究年報	3	3	0
旧石器考古学	2	0	2
考古学雑誌	2	2	0
動物考古学	2	2	0
イペロアメリカ研究	2	2	0
遺跡学研究	1	1	0
貝塚	1	0	1
考古学と自然科学	1	1	0
歴史学研究	1	1	0
合計	118	83	35
【その他】			
紀要	129		
その他の媒体（論集・雑誌・著書）	247		
合計	376		
邦文雑誌合計	494		

表 2 掲載媒体の種類 (欧文)

【欧文学術雑誌】			
雑誌名	合計	論文 研究ノート	コメントなど
Latin American Antiquity	7	7	0
Current Anthropology	6	1	5
Mexicon	6	6	0
Ancient Mesoamerica	5	5	0
Antiquity	4	4	0
Estudios de Cultura Maya	3	3	0
Jrounal of Archaeological Science	3	3	0
Journal of Field Archaeology	3	3	0
Mayab	3	3	0
Advances in Archaeological Practice	1	1	0
American Anthrpologist	1	1	0
Anthropozoologica	1	1	0
Archaeological Papers of the American Anthropological Association	1	1	0
Estudios de Antropologia Biologica	1	1	0
Geoarchaeology	1	1	0
Journal de la Societe des Americanistes	1	1	0
Journal of Anthropological Archaeology	1	1	0
Science	1	1	0
World Archaeology	1	1	0
合計	50	45	5
【その他】			
グアテマラ考古学シンポジウム論集	52		
その他の媒体 (論集・雑誌・著書)	181		
合計	232		
欧文雑誌合計	284		

論文や研究ノートの学術雑誌への掲載数は概ね一桁台にとどまっている。

第二に、欧文献については人類学系の雑誌や中南米を専門とする著名な雑誌に掲載されている傾向があることである (表 2)。また、Mexicon (ドイツ)、Antiquity (イギリス)、Estudios de Cultura Maya (メキシコ)、Mayab (スペイン)、Anthropozoologica や Journal de la Société des Américanistes (フランス) といったアメリカ以外の学術雑誌にも件数は少ないものの掲載されている。毎年 7 月にグアテマラ・シティで開催されるグアテマラ考古学シンポジウムは、毎年論集が確実に出版されるために、掲載件数が多い。

3-5. 小結

上述した文献の動向分析結果に基づき、メソアメリカ考古学における日本人研究者の歩みを簡潔にまとめると、以下のようになる。

1940 年代には新大陸の古代文明の紹介がはじまり、その流れは 1960 年代まで続く。1970 年代以降、とりわけ 1980 年代後半になると日本人が現地では発掘調査に直接従事し、一次資料を用いた実証的な研究が増加する。そのため必然的に文献数が増加した。そして、2000 年代以降は、研究が多様化し、現在では幅広い地域や年代を扱えるまでに研究者の裾野が広がっている段階にきて

いる。さらに国外では著名な学術雑誌にも研究成果が掲載され、日本人の研究が世界的に認められていることがわかる。

以上のような動向を敷衍するならば、日本人によるメソアメリカ考古学研究は盛んになってきていることは疑いない。しかしながら、本稿の冒頭で述べたように日本国内において学術的にも社会的にも古代メソアメリカ文明についてはあまり良く知られていない。

その要因のひとつとして、掲載媒体の種類に関するデータのみにもとづけば、日本国内で比較的読者数の多いと思われる媒体に研究成果の掲載件数が少ない点を指摘することができる。多くの示唆に富む論考があるにもかかわらず周知されていないということは、幅広い読者を獲得できていないことに起因していると考えられる。

4. 今後の課題

以上、メソアメリカ考古学における日本人研究者の歩みを概観し、研究の現在地を確認する作業をおこなってきた。最後に、日本におけるメソアメリカ考古学の今後の課題について、自戒の念も込めて述べていきたい。これまでの研究の歩みや文献の動向分析の結果をふまえるならば、「世代間・世代内のネットワーク強化」および「成果還元」が今後の重要な課題であると筆者は考えている。

4-1. 世代間・世代内のネットワーク強化

まず、研究者の世代間・世代内のネットワーク強化は、次世代を創出していくうえで必要不可欠であると考え。個々人の活動が主体である日本人によるメソアメリカ考古学研究の現状は、「継続性」ということを考慮した場合には必ずしも盤石とはいえないからである。さらに、メソアメリカ考古学を専門とする日本人研究者が増加しているとはいえ、日本国内には学部から博士課程後期まで一貫してメソアメリカ考古学やその関連分野を学べる環境はない。これまでの研究者らは、個人の判断や裁量において留学や協力隊事業へ参加することで、現地調査を実施してきた経緯がある。こうした状況は今後も続く予想される。そこで次世代における研究の裾野を維持または拡大しようとする場合、個々人の活動が主体であっても研究者間のネットワークをこれまで以上に強化することによって、次世代がさまざまな切り口でメソアメリカ考古学にアプローチできる門戸を提供することができると考える。

この点において、日本各地でさまざまな研究会が開催されていることも見逃してはならない。古代アメリカ学会の会報34号によれば、新大陸関連の研究会などが東北、関東、関西にあわせて少なくとも8つは存在している。こうした各地で定期的に開催される研究会は、意見・情報交換のために研究者や学生が集い、交流ネットワークを構築するための貴重な場と位置づけられる。学会などの研究大会とは異なるので、興味関心のある学生は積極的にこれらの研究会に参加し、意見・情報交換をすることを勧めたい。一方で博士課程後期以上の研究者については、こうした研究会に学生や後輩などを積極的に勧誘することが求められよう。このような研究会を通じて、大学という枠組をこえて相互の交流ネットワークを構築できると私考する。

また、より専門的な集団による分野横断的な交流も重要である。たとえば、科学技術研究補助金の支援をうけた2つの新学術領域研究「環太平洋の環境文明史（2009～2014年・終了課題）」

と「古代アメリカ比較文明論（2014～2019年）」（いずれも領域代表・青山和夫）では、メソアメリカだけではなく、アンデスや日本などを専門とするさまざまな世代の研究者が、人社系・自然科学系の垣根を超えて交流する。こうした交流は現況の研究者にとっても極めて有用なものであり、新たな研究成果や視点を生み出すことに繋がっていくものと思われる。

4-2. 成果還元

成果還元については、日本国内に焦点をあてて述べるが、大きく学术界と一般社会の二つにわけて考える必要があるだろう。

学术界での成果還元は、前述したように比較的読者数の多い媒体に成果を掲載することが今後求められよう。国内の学術雑誌への投稿を考える際、テーマ設定は重要である。例えば、単に個別事例ではなく、社会の複雑化や国家形成といった、より汎用性のあるテーマ、新たな方法論や考古学・人類学の理論を導入した研究成果などが挙げられるだろう。近年は比較考古学的研究が盛んになってきている他、考古学・人類学理論を援用した論考も日本国内の学術雑誌でもみられることから、投稿の下地は整っているものと筆者は感じている。手始めに、日本で開催されている考古学系の学会や研究会で発表し、反応や意見を求めることを積極的におこなっていくことから始めてみてはいかがだろうか。

ただし、筆者は査読制度のある学術雑誌への掲載だけが解決法であると言っているのではない。たとえば、大学などの研究紀要などは近年オープンアクセス化が進んでおり、以前よりも多くの読者を獲得できる可能性を秘めており、その有効活用を模索していく必要があるだろう。また、単に論文を掲載することだけが最終目的となつてはならず、第一に堅実な調査に基づく成果を獲得することが重要である。また、当然ながら調査対象地である現地社会にも成果を還元することを怠ってはならないと考える。

一般社会へ向けた成果還元については、すでに古代アメリカ学会による重要な貢献がある。同学会の働きかけにより高校世界史教科書における新大陸の諸文明の記述が改善され、以前よりも正確な情報が提供されることとなった（e.g. 青山他 2013）。この他にも近年は、一般公開のフォーラムや公開講座が毎年催されている。定期的に開催されているものでは、「アンデス文明研究会」の定例講座が挙げられる。また、2003年には「マヤ文明展」、2007年には「インカ・マヤ・アステカ展」、2010年には「古代メキシコ・オルメカ文明展」が開催され、近年ではテレビ等で新大陸に関連する番組が放映される機会も増えた。

このような様々な努力や催し物が開かれていることに鑑みれば、国内における認知度は従来よりも高いことが予想される。しかし、依然としてあまり知られていないと感じられるのはなぜだろうか。ひとつの要因としては、催し物が大都会に集中していることで生じる、地方との情報格差が挙げられるだろう。もちろん地方でまったく関連する催し物がないわけではない。全国各地に存在する各研究者が個人レベルで市民公開講座、小中高校などの教育機関への出前講座などを地道に継続しているとも聞く。一朝一夕に解決できる問題ではないことから、組織レベル、個人レベルで意識的かつ地道に活動を展開していくことが肝要であると考えられる。

情報格差を縮小させるための手段としては、新たなメディアを用いた成果還元の方法を積極的に模索していくことを提案したい。近年は、ブログ、Facebook や Twitter といった新たなメディアを用いて考古学プロジェクトの進捗状況や写真などを掲載するといった試み、YouTube や

Ustream を使った講義や公開フォーラムは世界的に広くみられる。こうした新たなメディアの積極的な活用は、情報が国内にとどまらず、世界中どこにいてもアクセス可能であるという点で、海外在住の日本人に向けても発信が可能であるという利点がある。もちろん言語をスペイン語や英語にすれば、対象者を世界に広げることができる点でも新たなメディアの導入は有用性があるといえるだろう。

おわりに

学史の整理は、研究の現在地を確認し、研究の流れを次世代に繋げていくために必要な作業である。本稿で最後に示した今後の課題や見通しについては、決して真新しい意見とも言えないだろう。まずは筆者自身に取り組むべき課題として実践することから始めたい。当然ながら各研究者がおかれた立場や環境によって異なる意見が表出してくると思われるが、皆様のご意見・ご批判をいただければ幸いである。

筆者の能力の範疇をこえるため紹介できなかったが、メソアメリカという領域においては歴史学や言語学など隣接分野においても重要な貢献をされている日本人研究者がいることも最後に付け加えておきたい (e.g. 井上 2012; 大越 2003; 八杉 2005)。

謝辞

本稿執筆のきっかけとなった京外大シンポで口頭発表の機会をいただいた京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所、同大学国際文化資料館の関係者の方々には深謝申し上げます。文献収集については新谷葉菜、八木宏明、深谷岬の手を煩わせた。記して感謝申し上げます。なお、本稿の一部には日本学術振興会新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」研究項目 A02「メソアメリカ比較文明論」(研究代表者: 青山和夫, 研究分担者: 市川彰, 課題番号 26101003) および日本学術振興会特別研究員奨励費 (研究代表者: 市川彰, 課題番号 25・824) の助成を受けておこなった調査成果も含む。

参考文献

青山和夫

- 2003 「古典期マヤ支配層の手工業生産と日常生活－グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の石器分析を通じて－」『古代アメリカ』6号, pp.1-33。
- 2007 『古代メソアメリカ文明－マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。
- 2009 「外国考古学の動向 (アンデスとメソアメリカ)」『日本考古学年報 (2007 年度版)』60号, pp.93-101。
- 2013 『マヤ文明－密林に栄えた石器文化』岩波書店。

青山和夫・猪俣健

- 1997 『メソアメリカの考古学』同成社。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土（編）

2014a 『マヤ・アンデス・琉球 環境考古学で読み解く「敗者の文明」』朝日新聞出版。

2014b 『文明の盛衰と環境変動－マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』岩波書店。

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・井関睦美・長谷川悦夫・嘉幡茂・松本雄一

2013 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか－新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史の検証」『古代アメリカ』16号, pp.85-99。

石原玲子

2002 「土器からみた古代マヤの洞窟利用－ベリーズ, チェチュム・ハ洞窟遺跡を一例として」『古代アメリカ』10号, pp.23-48。

井関睦美

2011 「アステカ王国主都の主神殿出土遺物に関する研究動向－銅製鈴の形態変化と通時分析の可能性－」『古代アメリカ』14号, pp.67-76。

市川彰

2011 「エルサルバドル共和国チャルチュアバ遺跡」『考古学研究』58巻2号, pp.125-127。

2012a 「日本人研究者によるメソアメリカ考古学研究の動向」『古代学研究』194号, pp.24-27。

2012b 「土壙墓からみた先スペイン期の墓制と社会に関する一考察」『古代学研究』195号, pp.31-41。

2014 「エルサルバドル共和国レンパ川下流域2014年調査速報」『古代アメリカ』17号, pp.89-100。

伊藤伸幸

2008 「ロス・ナランホスからみた先スペイン期都市の政治史に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』（『史学』54号）, pp.83-104。

2011 『中米の初期文明オルメカ』同成社。

伊藤伸幸・柴田潮音

2007 「チャルチュアバ遺跡タスマル地区B1-1建造物南側より出土した供物に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』54号, pp.8-20。

2013 「中米エルサルバドル共和国, チャルチュアバ遺跡群サンアントニオ農園内で石彫が出土」『チャスキ』47号, p.17。

伊藤伸幸・柴田潮音・南博史

2009 「チャルチュアバ遺跡（エル・サルバドル共和国）の先古典期後期に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』55号, pp.55-79。

井上幸孝

2012 「アステカ社会と環境文明史－メソアメリカ自然観の理解にむけて」『第四紀研究』51巻4号, pp.223-230。

2014 『メソアメリカを知るための58章』明石書店。

猪俣健・青山和夫

- 1996 「先産業社会における空間配置と経済効率原理－古典期マヤ社会についての中心地分析－」『民族学研究』61巻3号, pp.370-392。

大井邦明

- 1975 「テオテナンゴ遺跡の調査－メキシコ考古学界の動向にふれて－」『考古学ジャーナル』114号, pp.2-7。
1985a 『ピラミッド神殿発掘記－メキシコ古代文明への誘い』朝日新聞出版。
1985b 『消された歴史を掘る－メキシコ古代史の再構成』平凡社。
1994 『カミナルフユ』たばこと塩の博物館。
2000 『チャルチュアパ』京都外国語大学。
2006 「遺跡・古環境・地域社会・博物館」『MUC 京都外大国際文化資料室紀要』2号, pp.31-46。
2007 「ティンガニオ・メキシコ西部の古典期文化」『MUC 京都外大国際文化資料室紀要』3号, pp.1-40。

大越翼

- 2003 「聖なる樹の下で－マヤの王を考える－」『古代王権の誕生 II 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』角田文衛・上田正昭監修, pp.169-205。

金子明

- 2001 「ヤシュチランにおける権力と抗争」『古代文化』53号, pp.17-32。

嘉幡茂

- 2008 「トルーカ盆地のダイナミズム－メキシコ州, サンタ・クルス・アティサパン遺跡のデータを基に」『古代アメリカ』11号, pp.1-26。古代アメリカ学会。
2013 「古代交易システムの復元に向けて:周辺から周辺へ,そして周辺から中央へ」『アイデンティティーの構築, 脱構築, そして再構築－メキシコ, テオティワカンと Cholula のモニュメント 2千年史』, 杉山三郎・嘉幡茂・谷口智子・丹羽悦子(編集), pp.139-154。愛知県立大学。

嘉幡茂, 村上達也, フリエタ・M・ロベス, ホセ・J・チャベス, 福原弘識

- 2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて－トラランカレカ考古学プロジェクト」『古代アメリカ』17号, pp.53-72。

黒崎充

- 2003 「メキシコ湾岸地方におけるユーゴについて－ベラクルス州中部地方における発掘調査資料を中心として」『山口大学考古学論集－近藤喬一先生退官記念論文集』pp.407-422。
2012 「ベラクルス州中部南域の古典期後期－ラ・ホヤ遺跡における一括資料(デポジット)」『山口大学考古学論集－中村友博先生退任記念論文集』pp.335-344。

コウ, マイケル・D (寺田和夫・加藤泰建訳)

- 1975 『マヤ』学生社。

古手川博一

- 2005 「オルメカ文化研究史における政治体制理解の再検討」『マヤとインカー 王権の成立と展開』 pp.17-28。同成社。
2007 「文明の形成と環境－オルメカの環境適応と資源利用をめぐる」『ラテンアメリカ』朝倉世界地理学講座 14, pp.37-50。朝倉書店。

桜井三枝子

- 2004 「マヤ研究史をたどる」『大阪経大論集』54 巻 5 号, pp.239-254。

佐藤悦夫

- 2009 「テオティワカン「月のピラミッド」56 層および第 1 期建造物出土のパトラチケ期の土器」『古代アメリカ』12 号, pp.105-122。

杓谷茂樹

- 2011 「マヤ・イメージの形成・消費と古代遺跡－マストゥーリズム状況下を生きるマヤ遺跡公園のイメージ戦略」『大阪経大論集』61 巻 6 号, pp.79-106。

杉山三郎

- 2001 「テオティワカンにおける権力と抗争」『古代文化』53 巻 7 号, pp.379-392。
2007 「アステカ文明 発掘された巨大彫刻－テンプロ・マジョール博物館・都市考古学プロジェクトの大発見」『ニュートン』27 巻 8 月号, pp.98-107。
2012 『ロマンに生きてもいいじゃないか－メキシコ古代文明に魅せられて－』風媒社。

杉山三郎・渡部森哉・嘉幡茂

- 2011 『古代メソアメリカ・アンデス文明への誘い』風媒社。

寺崎秀一郎

- 1998 「古典期マヤ政体の拡大：南東マヤ地域を例として」『史観』138 号, pp.66-85。

中村誠一

- 2007 『マヤ文明を掘る－コパン王国の物語』NHK ブックス。
2013 「ティカル北のアクロポリスプロジェクト報告 (1)」『文化資源学研究』13 号。金沢大学国際文化資源学研究センター。

長谷川悦夫

- 1999 「先コロンブス期のマナグア湖畔－チョロテガの移住に関する諸問題－」『古代アメリカ』2 号, pp.59-82。
2002 「伝播か在地発展か－1980 年代以降の中央アメリカ南部考古学の動向－」『古代アメリカ』5 号, pp.1-22。

福原弘識

- 2011 「テオティワカン, ラ・ベンティージャにおける遺構図のデジタル三次元地図化」『古代アメリカ』14 号, pp.57-66。

南博史

- 2013 「中間領域ニカラグアにおける考古学の現状と課題－ニカラグア・マタガルバ県ティエラ・ブランカ遺跡の予備調査を通して－」『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』9号, pp.33-45。

村野正景

- 2010 「エルサルバドル共和国における遺跡保護に関する一考察－文化遺産国際協力の向上のため」『遺跡学研究』7号, pp.221-223。
- 2011 「エルサルバドル共和国の学校教育における遺跡訪問の現状と課題－文化遺産保護と基礎教育の連携向上を目指して－」『ラテンアメリカ・カリブ研究』18号, pp.15-33。

八杉佳穂

- 2005 『マヤ文字を書いてみよう読んでみよう』白水社。

横山玲子・松本亮三・吉田晃章

- 2011 「カンペチェ州南部地域における遺跡踏査概報」『古代アメリカ』14号, pp.77-82。

吉田晃章

- 2014 「メキシコ西部サユラ盆地およびサコアルコ盆地における踏査概報（2014年度）」『古代アメリカ』17号, pp.73-88。

Aoyama, Kazuo

- 1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence from the Copan Valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Press, Philadelphia.
- 2002 “Mesoamerican Archaeology as Anthropology and History: Anthropological Archaeological Research in Mesoamerica by Japanese Scholars”. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3, pp. 31-55.

Fujita, Harumi and Emiliano Melgar

- 2014 “Hide-Working at Covacha Babisuri on Espíritu Santo Island, Baja California Sur, México”. *Journal of Island and Coastal Archaeology* 9, pp.111-129.

Inomata, Takeshi

- 2001 “The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society”. *Current Anthropology* 42 (3), pp.321-349.

Inomata, Takeshi and Stephen Houston

- 2001 *Royal Courts of the Ancient Maya*. Westview Press, Boulder.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo, Hitoshi Yonenobu

- 2013 “Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization”. *Science* 340, pp.467-471.

Ishihara-Brito, Reiko

- 2013 *Educational Access is Educational Quality: Indigenous Parents' Perceptions of Schooling in Rural Guatemala*. Prospects: Quarterly Review of Comparative Education, Springer.

Kaneko, Akira

- 2003 *Artefacto de líticos de Yaxchilán*. INAH, México.
2011 “Iglesia Vieja: Un sitio megalítico del Clásico Temprano en la Costa del Pacífico de Chipas”. En *XXVI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2010*, pp.663-680. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Kato, Shinya, Shione Shibata y Nobuyuki Ito

- 2006 “Las investigaciones arqueológicas en Tazumal, 2004-2005”. En *XIX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2005*, pp.211-222. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Murakami, Tatsuya

- 2010 *Power Relations and Urban Landscape Formation: A study of Construction Labor and Resource at Teotihuacan*. Ph.D. Dissertation presented at Arizona State University.

Murakami, Tatsuya, Gregory Hodgins and Arleyn W. Simon

- 2012 “Characterization of Lime Carbonates in Plasters from Teotihuacan, Mexico: Preliminary Results of Cathodoluminescence and Carbon Isotope Analyses”. *Journal of Archaeological Science* XXX, pp.1-11.

Murata, Satoru

- 2011 *Maya Salters, Maya Potters: The Archaeology Of Multicrafting On Non-Residential Mounds At Wits Cah Ak'Al, Belize*. Ph.D. Dissertation Boston University.

Price, Douglas, Seiichi Nakamura, Shintaro Suzuki, James H. Burton and Vela Tiesler

- 2014 “New Isotopic Data on Maya Mobility and Enclaves at Classic Copan, Honduras”. *Journal of Anthropological Archaeology* 36, pp.32-47.

Schortman, Edward and Nakamura Seiichi

- 1991 “A Crisis of Identity: Late Classic Competition and Interaction on the Southeast Maya Periphery”. *Latin American Antiquity* 2, pp.311-336.

Shiratori Yuko, Mario Zetina, Miriam Salas y Aura Soto

- 2011 “Cerámica de los Maya Izta alrededor de los lagos de Petén”. En *XXIV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, pp.858-866. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Sugiura, Yoko

2005 *Y atrás quedó la Ciudad de los Dioses: historia de los asentamientos en el Valle de Toluca*. UNAM, México.

2009 *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: la historia de Santa Cruz Atizapán*. UNAM, México.

Sugiura, Yoko, Magdalena García y Alberto Aguirre

1998 *La caza, la pesca y la recolección: etno arqueología del modo de subsistencia lacustre en las Ciénegas del Alto Lerma*. UNAM, México.

Sugiyama, Nawa, Raúl Valadez, Gilberto Pérez, Bernardo Rodríguez y Fabiola Torres

2013 "Animal Management, preparation and sacrifice: reconstructing burial 6 at the Moon Pyramid, Teotihuacan, México". *Anthropozoologica* 48 (2), pp.467-485.

Sugiyama, Saburo

2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press.

Suzuki, Shintaro, Vela Tiesler y Seiichi Nakamura

2013 "Nueva estrategia en la estimación de la edad a la muerte: Aplicación histomorfológica en la arqueología de las Tierras Bajas Mayas y un estudio de caso del sitio arqueológico de Copán, Honduras". *Estudios de Antropología Biológica* 14, pp.153-169.

Tsukamoto, Kenichiro

2014 "Multiple Identities on the Plazas: The Classic Maya Center of El Palmar". In *Mesoamerican Plazas: Areas of Community and Power*, edited by Tsukamoto, Kenichiro and Takeshi Inomata, pp.50-67. University of Arizona Press, Tuscon.

Tsukamoto, Kenichiro and Javier López

2011 "Discovery of a Hieroglyphic Stairway at El Palmar, Campeche, Mexico". *Mexicon* XXXIII, pp.60-61.

〈論文〉

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico: Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla 2012-2014

Shigeru Kabata / Tatsuya Murakami /
Julieta M. López J. / José Juan Chávez V.

キーワード

Tlalancaleca, Teotihuacan, Mesoamérica, Interacción, Transformación social

要 旨

初期国家テオティワカン、トルテカ王国、アステカ王国は、古代メソアメリカ文明圏全域に多大な影響力を与えたと解釈されている。そのため、メキシコ中央高原における考古学研究の主流は、これらの社会形成・発展・衰退史を復元し、それを軸として周辺地域の動向を考察することが一般的となっている。この研究手法は、大まかな時代変遷史を理解するのに役立つ。しかし一方で、研究の視点が中央から周辺地域へと向けられるため、後者に属する社会の歴史的役割や中央との政治的・経済的関係の変化を考察するには向かない。何故、各時代の政治・経済拠点はその地に発生し衰退したのかというテーマに対し、包括的にデータを収集し、解釈に至っていないのが現状である。筆者らは、上記の現状を修正する目的を持ち、先行研究とは異なった視点から、テオティワカンの国家形成について、先行社会であるトラランカレカ遺跡で考古学調査を率いている。本論文では、何故テオティワカンの国家形成を理解するために、この遺跡ではなく、先行社会に属するトラランカレカで調査を行っているのか、そして、2012年から2014年に行った現地調査の内容と成果について述べる。

1. Introducción: objetivos y perspectivas del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla

El Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla (PATP) tiene como objetivos principales 1) el reconstruir las relaciones de poder entre diferentes segmentos sociales en una sociedad pre-estatal; 2) entender mejor las relaciones intra- e inter-regionales y sus cambios temporales durante el Formativo Tardío y Terminal; y 3) indagar los procesos sociopolíticos que condujeron a la formación del Estado prístino de Teotihuacan en el Altiplano Central de México. El sitio arqueológico Tlalancaleca se ubica en el noroeste del Estado de Puebla (Figura 1) y fue uno de los centros prehispánicos más grandes antes del desarrollo del Estado teotihuacano. Esto lo hace un sitio ideal para examinar los temas que aborda este proyecto.

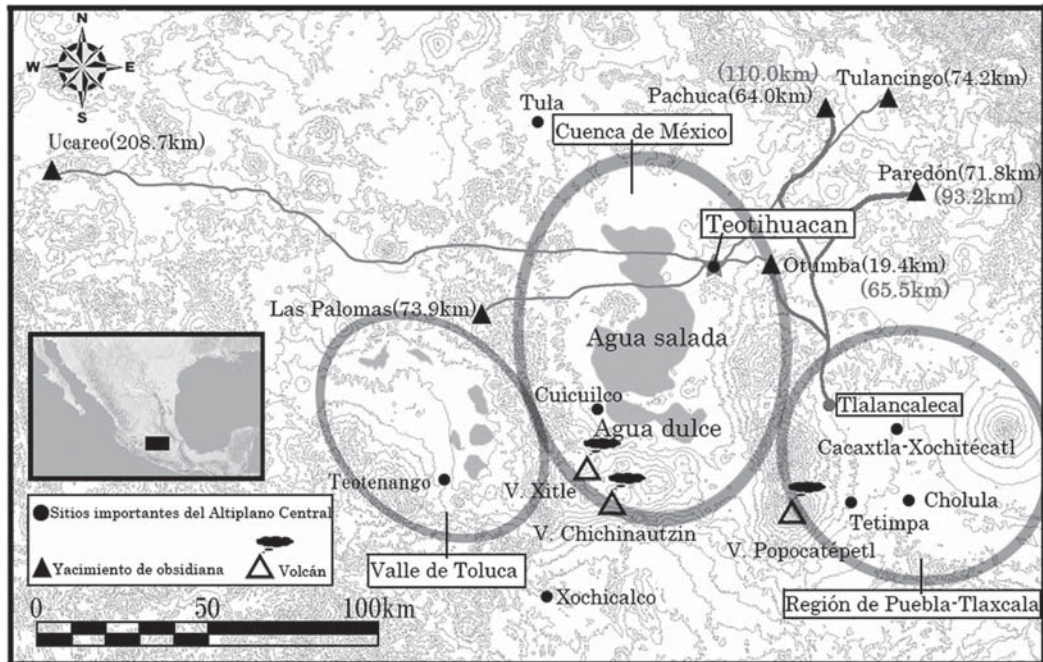


Figura 1. Ubicación de los sitios importantes del Formativo y el Clásico.

Para entender mejor los procesos de cambios sociopolíticos, es importante considerar marcos teóricos que nos permitan interpretar los datos arqueológicos. Tradicionalmente, para entender las sociedades pre-estatales los arqueólogos han aplicado el concepto de cacicazgo, el cual ha sido establecido como un tipo de organización política con base en los estudios de los cacicazgos etnográficos (e.g., Service 1975).

Sin embargo, hace tiempo que los críticos del neoevolucionismo argumentan que en las sociedades pre-estatales se observa una gran variedad de formas de organización y que es inadecuado agruparlas homogéneamente bajo el término de cacicazgo. Los cacicazgos etnográficos y las sociedades pre-estatales no son iguales. Además, aún carecemos del lenguaje, conceptos y metodología que compartimos con los estudios comparativos de las sociedades pre-estatales. Es indispensable desarrollar conceptos y metodologías que se puedan implementar por medio de los análisis de materiales arqueológicos y evitar imponer el modelo de cacicazgo a los datos.

Pensamos que uno de los principales problemas en los estudios neoevolucionistas se encuentra en la conceptualización de la complejidad social. Como varios arqueólogos lo indican, el concepto de complejidad es ambiguo, por lo que es necesario descomponerlo y estructurarlo entre las múltiples variables involucradas como son escala, diferenciación social, desigualdad y centralización (e.g., Feinman 1998; McGuire 1983; Nelson 1995; véase también Crumley 1987; A. Smith 2003; Yoffee 2005). Aunque no hay un consenso en

cuanto a la interrelación entre dichas variables, la médula de estos argumentos se centra en considerar las relaciones sociales en términos de estatus (diferenciación), riqueza (desigualdad) y en distribución del poder (centralización).

Este proyecto se enfoca específicamente en las relaciones de poder, las cuales se expresan en el acceso diferencial a varios recursos humanos y materiales, y pueden entenderse como el resultado de las negociaciones entre diferentes individuos y grupos con varias estrategias y capacidades prácticas. Conceptualmente, las relaciones de poder se han considerado como un solo eje o parámetro, pero el poder debe de conceptualizarse como multidimensional con una multiplicidad de bases (Paynter y McGuire 1991). El ejercicio de poder a través de la producción de la cultura material es multifacético, y las diferentes clases de cultura material (e.g., arquitectura y ofrendas mortuorias) no necesariamente constituyen un solo parámetro consistente. Tal concepción de poder requiere una división analítica de las bases de poder. La naturaleza de las relaciones de poder puede ser económica, política, social, o una combinación de todas ellas (Yoffee 2005).

Las relaciones de poder se forman a través del consumo asimétrico de recursos. Por lo tanto, dichas relaciones pueden estudiarse arqueológicamente para así evaluar la distribución diferencial de los recursos. Los recursos se definen como cualquier cosa que pueda servir como una fuente de poder en las interacciones sociales e incluyen los recursos humanos (e.g., trabajo y conocimiento) y los recursos materiales (Sewell 1992: 9; véase Giddens 1979).

Este proyecto se enfoca en el tamaño, la cantidad de trabajo invertido, y los tipos de materiales empleados en la construcción de las residencias y estructuras cívico-ceremoniales, así como en los objetos de uso cotidiano, la fauna y flora que se consumieron, y los objetos rituales consumidos incluyendo los destinados para ceremonias y ritos funerarios. Además, se examina el acceso diferencial a estos recursos en múltiples escalas: entre los residentes de la zona central, entre ellos y los que habitan en las áreas circundantes, y finalmente, entre Tlalancaleca y otras aldeas y centros contemporáneos de la región como Xochitécatl (Serra Puche 1998; Serra Puche et al. 2001), La Laguna (Carballo 2009), y Tetimpa (Plunket y Uruñuela 1998, 2005). La comparación de dichas escalas nos permitirá profundizar el entendimiento acerca del complejo paisaje social de poder en la región de Puebla-Tlaxcala durante el Formativo Tardío y Terminal.

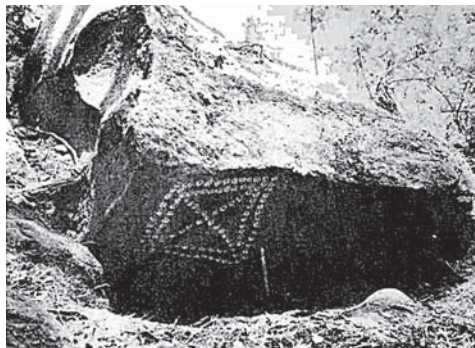
Por otro lado, las transformaciones socio-políticas ocurridas en la fase transicional entre el Período Formativo y el Clásico dieron como consecuencia que varias regiones del Altiplano Central de México estuvieran bajo el control político y/o económico del Estado teotihuacano (e.g., Hirth 1980; Hirth y Angulo 1981; Mastache et al. 2002; Sugiura 2005). Más allá del México central, Teotihuacan interactuaba activamente con el norte y el oeste de México, las tierras bajas del Golfo, la costa del Pacífico de Oaxaca y Guatemala, y la zona Maya.



Foto 1. Talud-descanso-tablero de la Pirámide Escaleras con Alfardas (tomada del noreste).



Foto 2 (izquierda). Bracero de Huehuetotl (exhibido en el Museo Comunitario de San Matías Tlalancaleca).



Elemento 9



Elemento 10

Foto 3. Petroglifos (Elementos 9 y 10) posiblemente relacionados con el control del tiempo (fotos extraídas de García Cook 1973).

Sin embargo, estas esferas de interacción no fueron creadas a partir del vacío, sino que dependían de las relaciones interregionales antes de la aparición del Estado teotihuacano. Por lo tanto, es fundamental examinar la naturaleza y el alcance de las interacciones interregionales antes de la formación del Estado teotihuacano.

Investigaciones precedentes han mostrado que Teotihuacan heredó una serie de rasgos culturales desde la región de Puebla-Tlaxcala, incluyendo estilos arquitectónicos

(talud-tablero -Foto 1- y balaustradas), algunos aspectos de la planificación de la ciudad, iconografía -"Tláloc" y Huehuetéotl (Foto 2) -, otros tipos de cultura material, por ejemplo la cerámica Anaranjado Delgado (Plunket y Uruñuela 2005, 2012) y conceptos fundamentales en las culturas posteriores -sistema de numeración (Foto 3) y la dualidad entre la vida y la muerte (Foto 4) -. Esto significa que la formación y desarrollo del Estado teotihuacano fue uno de los acontecimientos provocados en el eje histórico.

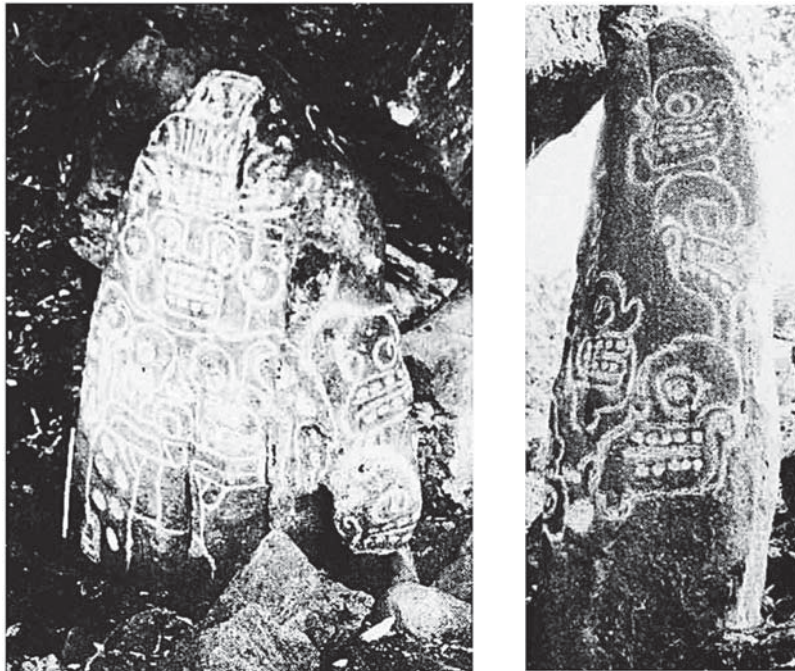


Foto 4. Monolito en donde se representan la vida y la muerte (Elemento 7: fotos extraídas de García Cook 1973).

Por consecuencia, necesitamos indagarlos desde las perspectivas de la continuidad histórica -diacrónica- y considerar la dinámica de regiones circunvecinas -sincrónica-. Para poder discutir sobre dichos temas, empezamos un proyecto arqueológico en el sitio de Tlalancaleca, Puebla a partir del año 2012.

Pensamos que es indispensable, en primera instancia, realizar el levantamiento topográfico del sitio de Tlalancaleca y llevar a cabo una recolección de materiales arqueológicos en superficie con la finalidad de identificar las áreas residenciales y otras zonas asociadas al centro político-religioso. Gracias al Proyecto Arqueológico Puebla-Tlaxcala dirigido por García Cook (e.g., 1973, 1981, 1984), contamos con un plano general preliminar del sitio y la ubicación de los montículos mayores. En el presente proyecto de investigación, y de acuerdo con los objetivos planteados anteriormente, proponemos

actualizar el mapa generado por García Cook y producir un nuevo mapa tridimensional con más detalles para localizar las zonas donde se puedan programar excavaciones extensivas e intensivas en los años subsecuentes (Figura 2).

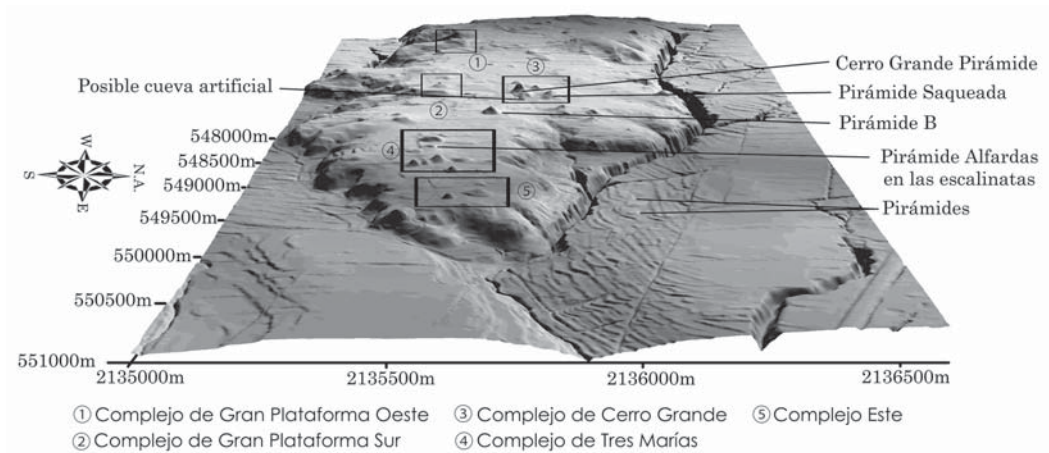


Figura 2. Mapa isométrico del sitio de Tlalancaleca.

2. Antecedentes

García Cook (1981; García Cook y Trejo 1977) ha proporcionado un panorama amplio de los cambios en los patrones de asentamiento durante la época prehispánica en la región de Puebla-Tlaxcala. De acuerdo con su cronología, el sitio de Tlalancaleca fue fundado durante la fase Texoloc (800-400 a.C.) y se desarrolló como un centro principal hasta su abandono al final de la fase Tezoquipan (400 a.C.-100 d.C.). Durante esta última fase, hubo dos esferas de cerámica en la región de Puebla-Tlaxcala: la "proto-teotihuacana" y la de Tezoquipan. La primera corresponde a las cerámicas de Tezoyuca-Patlachique-Tzacualli temprano en el Valle de México, y hay 32 sitios identificados. La mayoría de los sitios se ubican en el área norte marginal de esta región. Estos sitios son relativamente pequeños y probablemente fueron fundados por inmigrantes ya que no hay ocupación en la fase anterior. Es interesante notar que hay dos sitios fortificados con cerámicas proto-teotihuacanas dentro del área de Tezoquipan. Al sur del área norte de la esfera proto-teotihuacana, se han identificado 400 sitios con cerámicas de Tezoquipan, entre los cuales 18 fueron sitios grandes. Tlalancaleca fue uno de estos sitios grandes y es posible que hubiera sido el centro más grande en la región, de acuerdo con el análisis de patrón de asentamiento (Castanzo 2002).

El área de la esfera de Tezoquipan no fue homogénea y demuestra una diversidad cultural con distintos grados de influencia externa, incluyendo el Occidente de México, la costa de Golfo, el Valle de Tehuacan y Oaxaca, y el Valle de México (García Cook 1981). Por ejemplo, las excavaciones en Gualupita las Dalias, centro contemporáneo

con Tlalancaleca, revelaron que tuvo una estrecha relación con el Occidente de México; esta característica no fue observada en Tlalancaleca a pesar de haber tan sólo 10 km de distancia entre estos dos sitios (García Cook y Rodríguez 1975). Además de las relaciones con otras regiones, también se observa una diversidad arquitectónica. Por ejemplo, aunque su distribución espacial no está clara, unos sitios como Tlalancaleca y Tetimpa (Plunket y Uruñuela 1998) compartieron el estilo talud-tablero, mientras que en otros como Xochitécatl, Totimehuacan y La Laguna (Carballo 2009) está ausente. La naturaleza de las relaciones entre los centros dentro de la esfera de Tezoquipan no está claramente definida y se requiere más investigación para aclarar este tema (véase Carballo y Pluckhahn 2007). Considerando que hubo diferentes redes de intercambio con otras regiones y diversos estilos arquitectónicos, es posible que varios sitios hubieran competido mutuamente, como se ha reportado en varias regiones de Mesoamérica, para el Formativo Tardío y Terminal (e.g., Rosenswig 2000).

Hay poca investigación sobre las relaciones de poder a nivel de los centros urbanos. Las excavaciones en La Laguna realizadas por Carballo (2009) han proporcionado datos interesantes en cuanto a la arquitectura y objetos de uso cotidiano en las residencias de las élites y la gente común. Carballo observa una marcada diferencia en el tamaño y la calidad de la residencia pero, en el acceso a los objetos de uso cotidiano no hubo mucha diferencia. Asimismo, en La Laguna se puede aplicar el modelo dicotómico entre las élites y la gente común donde existe una zona central bien definida con estructuras monumentales. Esto no parece haber sucedido en Tlalancaleca, pues hay un gran número de complejos monumentales y no sabemos si estos fueron contemporáneos y formaron un centro urbano planificado, o si representan un crecimiento desde el centro, o aun si hubo múltiples centros. Por esta razón, resulta de suma importancia realizar los trabajos de mapeo y fechamiento de los diferentes complejos arquitectónicos de Tlalancaleca para obtener información crucial que permita entender mejor su organización sociopolítica.

Hacia el final de la fase Tezoquipan, la mayoría de los centros de poder regionales fueron abandonados, excepto los que se ubicaron dentro del Corredor Teotihuacano. Su abandono se ha atribuido a la expansión del Estado teotihuacano (Carballo 2009; García Cook 1981), pero también es probable que catástrofes naturales, y los subsecuentes desordenes sociales derivados de estos eventos, hubieran tenido una fuerte injerencia en el abandono eventual de los asentamientos de la región. Los estudios recientes sobre las erupciones volcánicas acaecidas en el Altiplano Central indican que durante la primera mitad del primer siglo d.C. ocurrió una fuerte erupción del volcán Popocatepetl la cual probablemente generó un despoblamiento de la región oeste del valle de Puebla-Tlaxcala y el sur de la Cuenca de México (Plunket y Uruñuela 2005: 99-100). Con base en la presencia continua de talud-tablero y el complejo de tres templos, Plunket y Uruñuela (1998, 2005) sugieren una conexión estrecha entre Tetimpa y Teotihuacan. La misma idea podría aplicarse a Tlalancaleca, donde se encuentran varios rasgos culturales asociados a

Teotihuacan, incluyendo el talud-tablero, el uso de estuco, cajones de adobes, imágenes del dios tormenta y los marcadores (García Cook 1981, 1984; Murakami 2007). Asimismo, es posible que el movimiento de un gran número de gente posterior a la erupción de Popocatepetl causara un desorden social en los centros principales, resultando en su abandono y emigración de la población, incluyendo las élites, hacia otros lugares como Teotihuacan o Cholula (Murakami 2007). Es importante notar que el uso de talud-tablero y estuco fue discontinuado en el área de la esfera de Tezoquipan después del desarrollo del Estado teotihuacano (García Cook 1981; García Cook y Trejo 1977). Esta discontinuidad cultural podría atribuirse al desplazamiento de los grupos élites. Por lo tanto, pensamos que es necesario reconsiderar los procesos del rápido incremento y nucleación de la población en Teotihuacan durante la fase Tzacualli (1-150 d.C.; Millon 1981) con base en los datos de la región de Puebla-Tlaxcala.

En cuanto a los centros de la esfera proto-teotihuacana, hay una variedad en el proceso de difusión de la cerámica teotihuacana, sobre todo, la de la fase Tzacualli. Con base en los datos del patrón de asentamiento, Hirth (1978) indica que dos centros con la cerámica Tzacualli en el Valle de Amatzinac en Morelos fueron independientes uno del otro y también de Teotihuacan. En contraste, en la región de Tula (Mastache et al. 2002) y en la parte norte de Puebla-Tlaxcala (García Cook y Trejo 1977), unos nuevos sitios se fundaron probablemente por los colonizadores de Teotihuacan, quienes trajeron la cerámica Tzacualli. Al mismo tiempo, hay sitios ocupados de manera ininterrumpida desde las fases anteriores (i.e. la fase Texoloc y Tezoquipan temprano) donde se encuentra la cerámica teotihuacana (García Cook y Rodríguez 1975), incluyendo Tetimpa (Plunket y Uruñuela 1998: 290). Estos sitios probablemente tuvieron contacto con Teotihuacan, y no necesariamente fueron producto de la expansión política de Teotihuacan, como sí parece haberlo sido en el caso de los sitios en Morelos. Todo esto sugiere que las relaciones entre Teotihuacan y otras regiones del Altiplano Central hacia el final de la fase Tezoquipan y durante la fase Tzacualli fueron variables. Por ende, se requiere de una reconstrucción detallada de la historia de sitio del Altiplano Central para entender mejor los procesos socio-políticos antes y durante la formación del Estado teotihuacano.

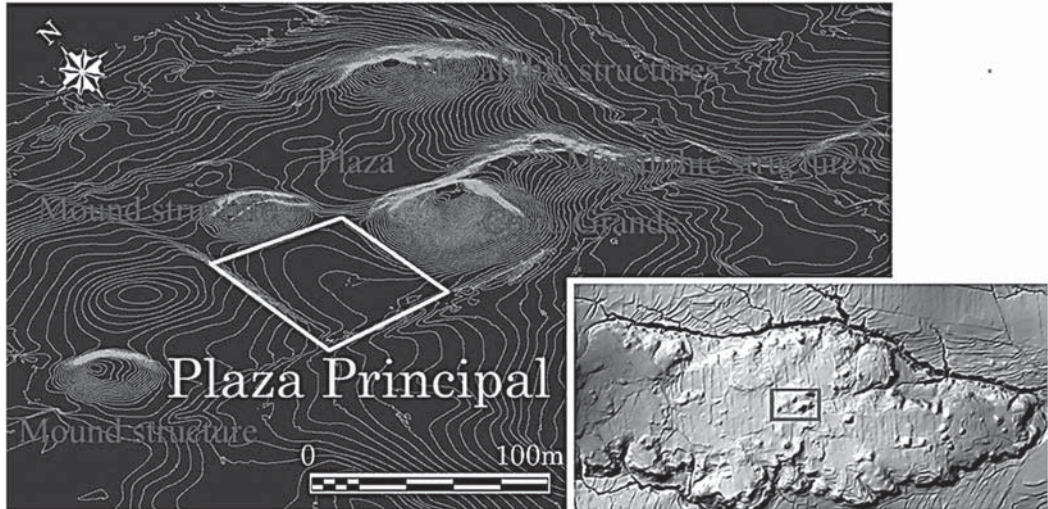


Figura 3. Ubicación de la Plaza Principal del sitio arqueológico de Tlalancaleca.

En la primera parte del artículo presentaremos los resultados preliminares de la investigación arqueológica, sobre todo las perforaciones y la excavación de pozos llevados a cabo en la Plaza Principal de Tlalancaleca así como el análisis preliminar de obsidiana procedente de las excavaciones, del año 2013 (Figura 3). A continuación, discutiremos sobre las relaciones entre Teotihuacan y Tlalancaleca y el impacto de la erupción volcánica del Popocatepetl ocurrida en el siglo I d.C.



Foto 5. Vista general del Complejo Cerro Grande y Plaza Principal (tomada desde suroeste).

3. Investigación Arqueológica en Tlalancaleca realizada en el 2012-2014

3-1. Inspección de la Estratigrafía por Perforaciones

Llevamos a cabo la inspección de la estratigrafía con perforaciones de 10 cm de diámetro en 124 puntos en el área Complejo Cerro Grande, incluida la Plaza Principal (Foto 5). Se recolectaron 595 muestras de tierra. Para cada perforación, registramos la profundidad, el color y textura de diferentes estratos, y la presencia o ausencia de artefactos (Figura 4), además tomamos muestras para el análisis geoquímico por medio del cual pretendemos identificar áreas de actividad. Es importante mencionar que la razón por la cual se realizan perforaciones en esta temporada se debe a que las perforaciones proporcionan información necesaria para entender la estratigrafía y la historia ocupacional del sitio. Este proceso también nos ayuda para seleccionar el lugar de las futuras excavaciones que de ser posibles, estamos planeando para las siguientes temporadas.

Page 3 of 5 Proyecto Arqueológico Tlalancaleca-Puebla

Soil Probe Form

Excavators: PP, JJ Date (DD/MM/YYYY): 02/08/2013

Grid: N1/S1 E1 AP #: 9

UTM E: 548540 N: 213570

Description of Area (Agricultural fields, etc.): Edge of Plaza/Plaza, bottom of Cerro Grande, side of road

Photo #: 3330-3332-JJ Final Depth & Reason to Stop: 240cm, Rock

Depth	Layer #	Texture	(Wet or Dry)
127cm	II	S.H	(Wet or Dry)
Dumb (lots)	Munsell: 10 YR 2/2	Artifact: Y/N (#) Charcoal: Y/N (#)	
	Description: Lots of Dumb from 130cm - 165, Carbon pieces, at 115cm.		
	Sample ID: <u>large piece of Dumb</u>	Aprox. Depth:	
137cm			
II			
Dumb			
150cm			
Dumb			
163cm			
Dumb			
165cm	III	Clay	(Wet or Dry)
	Munsell: 10 YR 3/4	Artifact: Y/N (#) Charcoal: Y/N (#)	
	Description: Thin layer below Dumb layer, flint?		
	Sample ID: AP9-3	Aprox. Depth: 169cm	
175cm	IV		
185cm	IV	Sandy Clay	(Wet or Dry)
	Munsell: 10 YR 2/2	Artifact: Y/N (#) Charcoal: Y/N (#)	
	Description: Leaching zone(?), Dumb, bits of ceramics		
	Sample ID: AP9-4	Aprox. Depth: 180cm	

soible → Dumb flint, large chunks

Figura 4. Ejemplo del formato para la inspección de la Estratigrafía por Perforaciones.

La última profundidad de las perforaciones varía desde 0.5 m hasta aproximadamente 10 m. Perforamos hasta chocar con algún obstáculo, ya sea roca madre o piedras. Sin embargo, hay patrones generales: las capas de tierra son escasas al oeste y al norte de la Pirámide Cerro Grande y las capas al este y al sur de la pirámide son más profundas. En estas últimas áreas, se recuperaron fragmentos cerámicos debajo de 7 m desde la superficie, lo cual nos hace suponer que la pirámide fue construida sobre un terreno naturalmente elevado.

La estratigrafía del área prospectada es relativamente homogénea. Básicamente, encontramos tres capas distintas: la capa superficial del suelo (limo de color café), limo arenoso de color café-amarillo, y arcilla arenosa de color más amarillento con algunas variaciones menores. No encontramos ningún piso estucado, pero en algunas perforaciones, se encontraron unas capas delgadas de gravillas, las cuales parecen ser de pisos originales.

Las muestras tomadas están en proceso de análisis en el Laboratorio Arqueológico de Investigaciones de la Tierra de la Universidad del Sur de Florida, por la arqueóloga Paige Phillips, estudiante de maestría en el Departamento de Antropología de la misma universidad. Ella está identificando, mediante la técnica Fluorescencia de Rayos-X Portátil (pXRF), el análisis de pH, y con ICP-MS (Espectrometría de Masas con fuente de Plasma de Acoplamiento Inductivo) la cantidad de fosfatos y otros elementos (Al, Ba, Ca, Fe, K, Mg, Na, Sr, Zn, Mn, Ti), los cuales sirven para identificar el impacto humano en los pisos (Wells 2004). En la sesión de poster a las 8:00 de la mañana del día 25, se presenta el poster titulado: "Examining Activity Organization through Geochemical Analysis at Tlalancaleca, Puebla, Mexico (800BC-AD100) ", donde se muestra la metodología de estudio y los resultados preliminares obtenidos hasta el momento.



Foto 6. Vista general de la excavación en la Plaza Principal (tomada del sur).

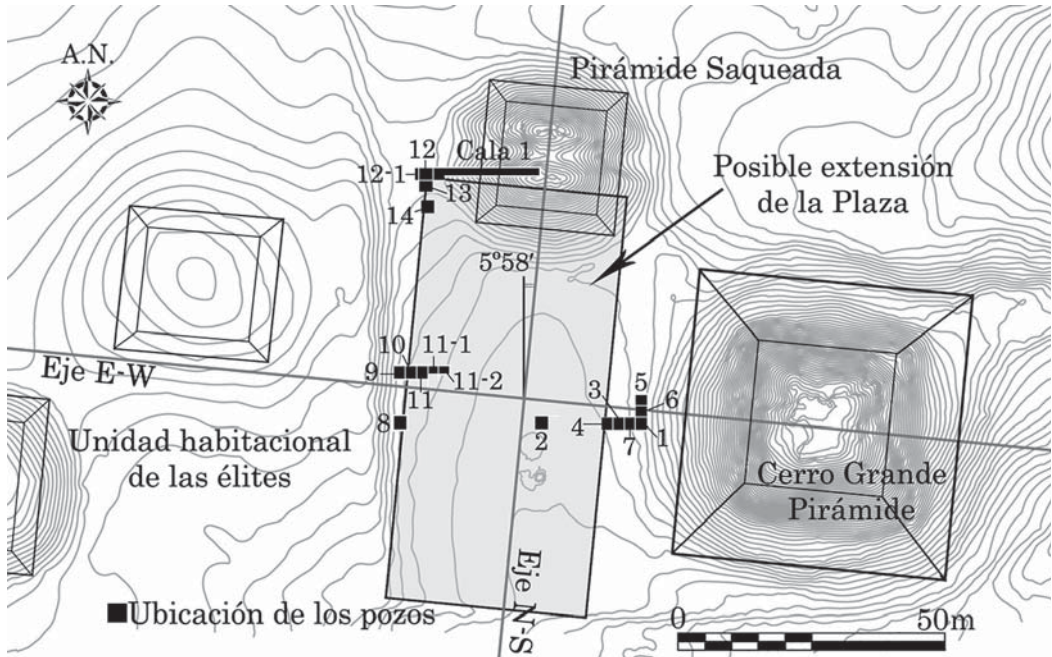


Figura 5. Ubicación de los pozos estratigráficos en la Plaza Principal.

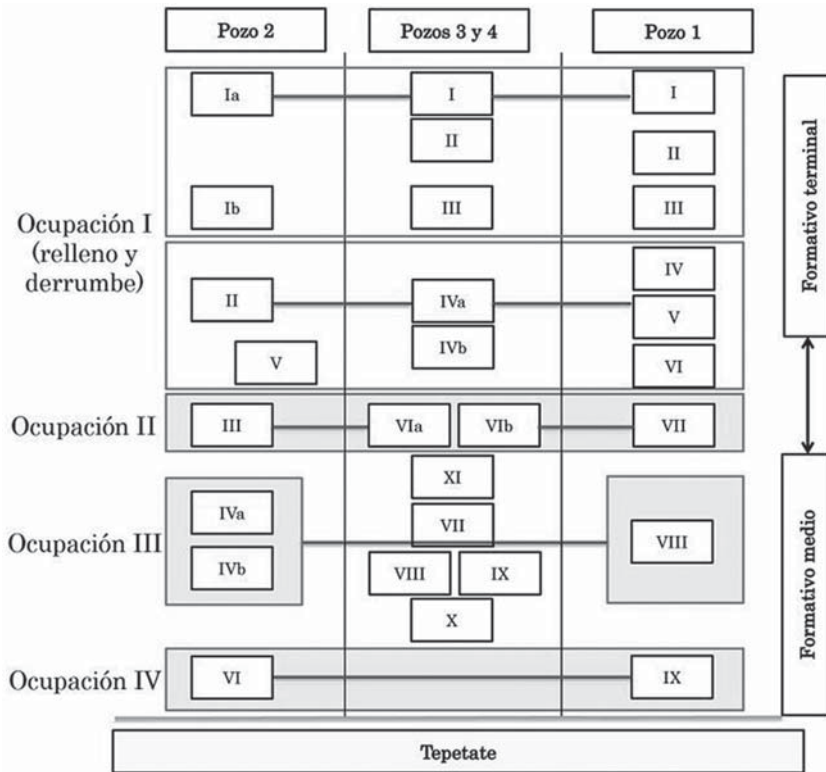


Figura 6. Matriz de las capas encontradas de los pozos 1 a 4.

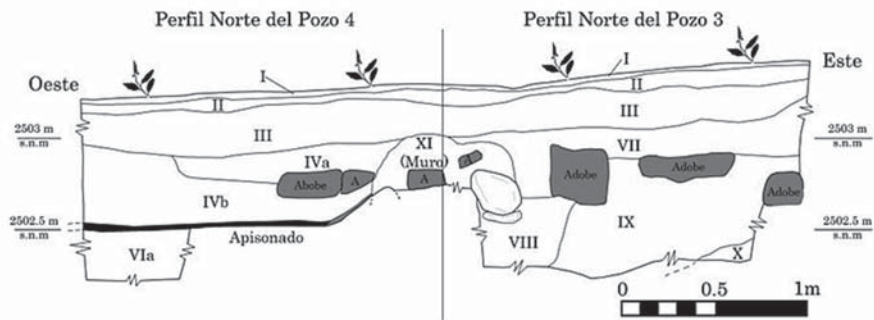
3-2. Excavación de pozos estratigráficos realizada en el 2013

Trazamos 6 pozos estratigráficos (2 x 2 m) en la Plaza Principal (Foto 6; Figura 5). Tenemos cuatro objetivos principales: el primero es entender el proceso arquitectónico de la Plaza Principal. El estudio de García Cook (1973), basado en los resultados del recorrido de superficie y los pozos estratigráficos, nos da un panorama de cómo se desarrolló este asentamiento desde la fase Tlatempa a Tezoquipan (1200 a.C.-100 d.C.). Durante el inicio de la ocupación del sitio, se concentraron las actividades humanas en la parte oriental del asentamiento, y a lo largo del tiempo se expandieron hacia la parte occidental y la parte baja ubicada en el extremo oriente del mismo. Esta interpretación coincide con nuestros resultados obtenidos en el recorrido de superficie realizado en el 2013. La razón por la cual trazamos los pozos en esta plaza es porque se reconoce que esta área, llamada Complejo Cerro Grande, es la más grande dentro del sitio y pertenece a las fases finales de la ocupación del mismo.

Aunque todavía estamos analizando los materiales cerámicos para entender el proceso arquitectónico, es importante notar por medio del estudio estratigráfico que esta área fue utilizada en 3 etapas diferentes entre el Formativo Medio al Terminal (Figuras 6 y 7). Se identificaron varios elementos arquitectónicos como muros compuestos de adobe (Foto 7), apisonados (Foto 8), y posibles sistemas de cajón (Foto 9), los cuales nos permiten indicar que cada etapa de ocupación en la Plaza Principal tenía diferentes funciones.

El segundo objetivo es recuperar materiales cerámicos. Con los materiales cerámicos pretendemos establecer una micro-cronología del sitio y entender la ocupación del mismo. A pesar de que ya se ha propuesto una cronología cerámica para la región Puebla-Tlaxcala (García y Merino 2005), consideramos necesario que se realice una modificación y afinación de la misma de acuerdo a los datos cerámicos obtenidos por investigaciones recientes en la misma área (e.g., Lesure 2007). Además, a través de la recolección de superficie realizada en la primera temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, (Kabata y Murakami 2013; informe autorizado por el Oficio 401.B (4) 19.2013/36/1386) se lograron identificar tiestos del grupo Anaranjado Delgado, que corresponderían temporalmente al Período Clásico Temprano. Debido a la presencia de este grupo cerámico, hemos notado una discrepancia sobre la ocupación del sitio, que se había propuesto abarcaba desde el Período Formativo Medio al Terminal (e.g., García 1973; Montaña 1999).

Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla
Temporada 2013



Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla
Temporada 2013

Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla
Temporada 2013

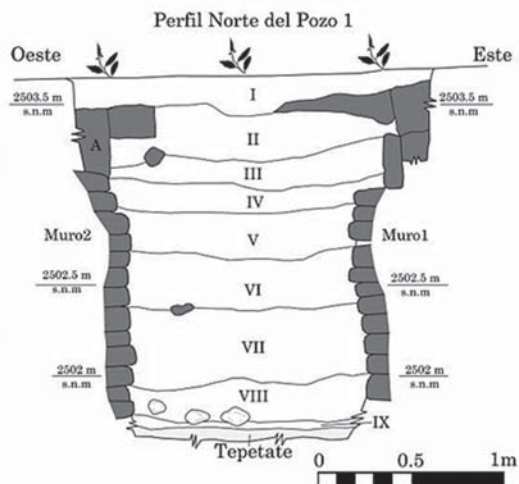
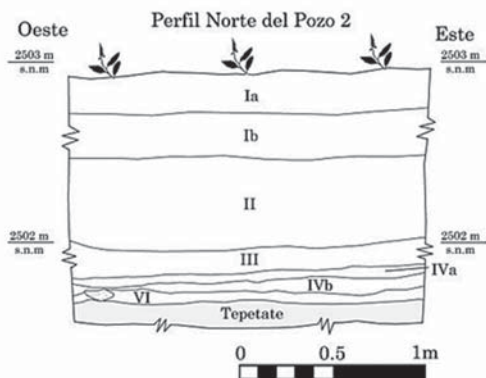


Figura 7. Los perfiles norte de los pozos 1 a 4.



Foto 7 (izquierda). Muro 2 de adobe encontrado en el Pozo 1 (tomada del este).

Foto 8 (derecha). Apisonado y el muro de adobe encontrados en el Pozo 4 (tomada del sur).



Foto 9. Posibles sistemas de cajón encontrados en los Pozos 5 y 6 (tomada del norte).

El tercer objetivo es entender la circulación de obsidiana durante el Formativo Medio y el Terminal. Como se mencionó antes, es importante considerar la dinámica de las regiones circunvecinas. A través del análisis de los materiales de obsidiana reconstruiremos diacrónicamente la esfera de abastecimiento de obsidiana del sitio de Tlalancaleca.

El cuarto objetivo es corroborar la existencia o ausencia de una capa volcánica que indique la erupción del Popocatepetl ocurrida durante el siglo 1 d.C. (Plunket y Uruñuela 2012). Es posible de identificarlo en los perfiles de los pozos que planeamos realizar. Según Serra Puche y Lazcano (2011: 61-63), la influencia de la erupción llegó al sitio de Xochitécatl, el cual fue impactado llegando al punto de ser abandonado. La distancia en línea recta entre el volcán Popocatepetl y Xochitécatl es de aprox. 38 km, mientras que la distancia entre el volcán y Tlalancaleca es de aprox. 34 km. Consideramos que no es posible reconstruir áreas impactadas por la erupción basándonos sólo en la distancia hipotética que pudiera haber cubierto la misma. Por esta razón, creemos necesario realizar pozos estratigráficos en el sitio de Tlalancaleca donde quizás se encuentre alguna evidencia que confirme o deseche este supuesto. Confirmar este asunto, junto con los análisis de la inspección de estratigrafía por perforaciones, es indispensable para entender la dinámica de la transformación social durante los periodos Formativo Terminal y Clásico Temprano.

3-3. Planificación de la Ciudad

Como se muestra en el mapa-croquis original de García Cook (1981), un número de estructuras y/o montículos están alineados a lo largo del eje EW, que es común en grandes centros Formativos del centro de México (Plunket y Uruñuela 2012). Sin embargo, de acuerdo al mapeo tridimensional realizado, parece que hay al menos 3 ejes diferentes en lugar de uno solo (Figura 8). Esto podría representar diferentes temporalidades, significados, o simplemente la topografía natural. Las estructuras principales se ubican al este, hacia la Malinche (Foto 10). Es interesante observar que no existe una organización simétrica, no hay complejos de tres templos y no hay calles claramente definidas.

A diferencia de otros centros Formativos del centro de México, los montículos y estructuras se encuentran dispersos en una vasta zona (ca. 200 ha), que es más o menos equivalente al tamaño del recinto central (desde la Pirámide de la Luna a la Ciudadela) en Teotihuacan (Figura 9).

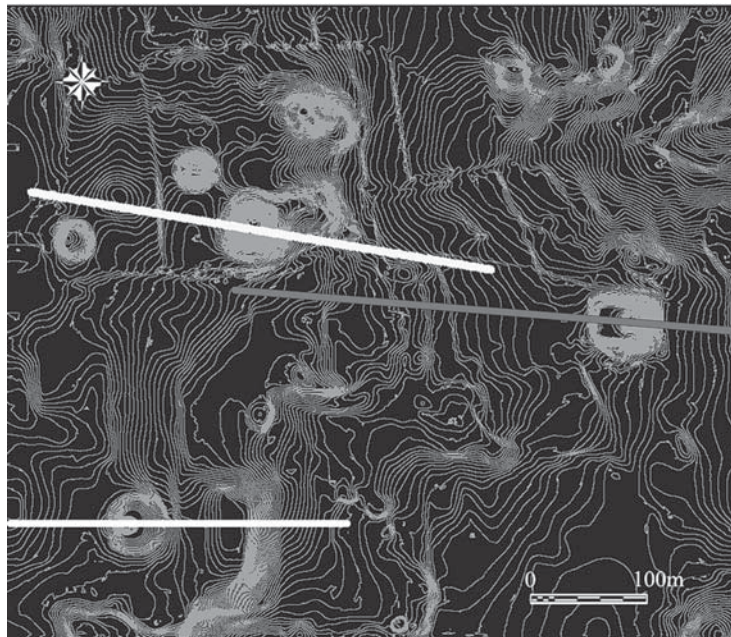


Figura 8. Ejemplos de los diferentes ejes del sitio.

Es probable que las áreas residenciales se extiendan entre las estructuras de montículos y grandes complejos arquitectónicos. La ausencia de un único “centro” refleja la organización espacial de Teotihuacan y puede dar fe de la complejidad de la organización administrativa de Tlalancaleca. Sin embargo, teniendo en cuenta la ubicación y el tamaño, creemos que un complejo arquitectónico situado en el punto medio de las tierras altas en Tlalancaleca (llamado el Complejo Cerro Grande) fue el lugar más importante para las

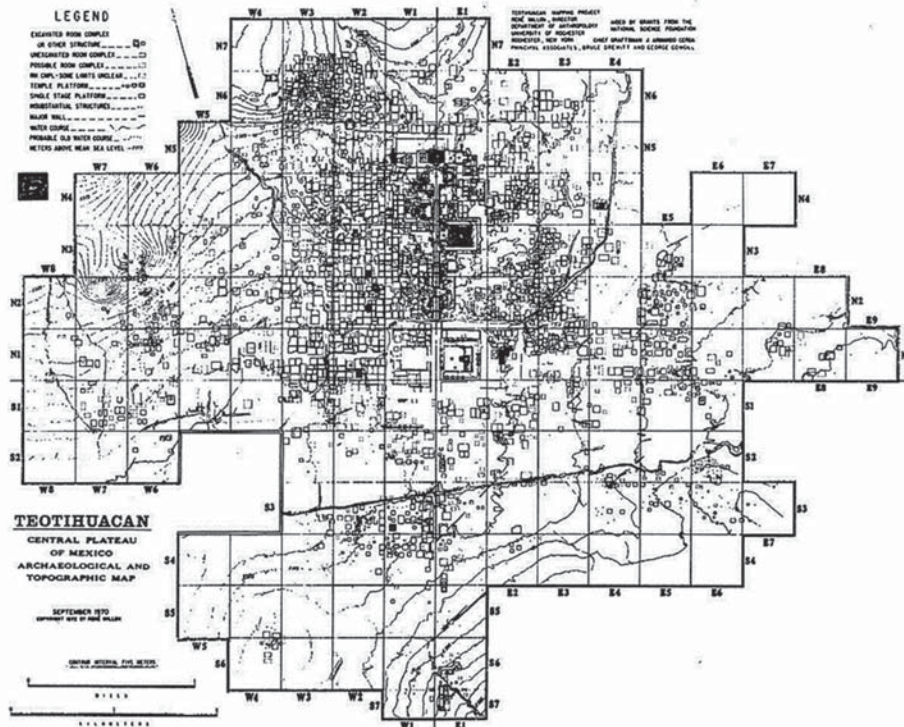


Figura 9. Mapa de la ciudad de Teotihuacan en su apogeo, con datos obtenidos del Proyecto Mapa de Teotihuacan (Millon 1973).

élites gobernantes (Foto 11; Figura 3). El complejo tiene la pirámide más alta del sitio (la “Pirámide del Cerro Grande” que mide 16 m de altura), varias estructuras de montículos y una zona residencial detrás de la pirámide. Debido a su ubicación en el límite occidental de la zona monumental y por ser la estructura de mayor altura, la pirámide parece ser la estructura más prominente en el lugar y se encuentra orientada hacia la gran zona monumental, hacia el este. Según los residentes locales, la escultura de Huehuetéotl que ahora se encuentra en el museo local fue descubierta en la parte superior de la pirámide (Foto 12).

En suma, la planificación de la ciudad de Tlalancaleca puede ser pensada como una variante de la tradición del Formativo del centro de México, en el sentido amplio de que el eje principal EW estaba probablemente asociado con los volcanes. Esta gran idea fue heredada a Teotihuacan, donde la orientación de la Calle de los Muertos se asocia con el Cerro Gordo, pero no hay elementos comunes claros entre Tlalancaleca y Teotihuacan, excepto que las estructuras monumentales se extienden a través del paisaje.



Foto 10 (izquierda). La Malinche vista desde el sitio (tomada desde el oeste).
Foto 11. Complejo Cerro Grande (tomada desde el sur).



Foto 12 (izquierda). Imagen del Dios Viejo del Fuego (74x69x43 cm) descubierto en la cima de la Pirámide del Cerro Grande, en Tlalancaleca, Puebla.
Foto 13 (derecha). Combinación de talud y muro vertical (tomada del noroeste).

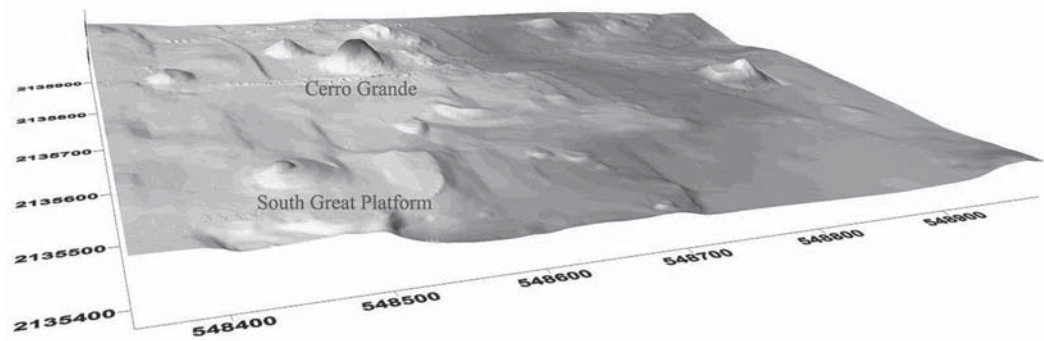


Figura 10. Mapa topográfico en 3D mostrando el Complejo de la Gran Plataforma Sur.



Foto 14. Montículo circular de la Gran Plataforma Sur (tomada del este).

3-4. Arquitectura

Mientras que García Cook (1973, 1981) ha informado de la presencia de talud-tablero, lo más probable es que no fuera un estilo arquitectónico común para Tlalancaleca, a pesar de que es difícil determinar los rasgos arquitectónicos sin excavaciones. Una de las estructuras semi-expuestas (Estructura TM-2) muestra una combinación de muros de talud y verticales, pero las paredes verticales se sientan en la cima del empotrado de los muros en talud (en lugar del saliente como tablero) (Foto 13). Una capa de argamasa se aplicó a las paredes y los pisos, similar a la aplicada en Teotihuacan, pero la presencia del enlucido de estuco en Tlalancaleca sigue siendo poco clara. Esta estructura tiene

barandillas reportadas por García Cook. También observamos escalinatas de mampostería en varias estructuras, suponemos que la mayoría de las grandes estructuras eran de mampostería. No estamos seguros sobre qué tan común fue el uso de estuco, pero sobre la superficie se recolectaron varias muestras de argamasa con una fina capa de yeso de cal.

Hay un posible montículo circular (Str. GPS-1B) en la parte superior de una gran plataforma (llamada Gran Plataforma Sur, parte de la cual es la fachada talud-tablero reportada por García Cook) (Figura 10; Foto 14). Las plataformas circulares durante el Período Formativo se han interpretado como una evidencia de la influencia del Occidente de México (el ejemplo más destacado es Cuicuilco) (Darras y Faugere 2007; Plunket y Uruñuela 2012). Los artefactos asociados al Occidente de México han sido reportado por García Cook y Rodríguez (1975: 7; véase también Darras 2006), incluyendo figurillas tipo H y vasos de estilo Chupícuaro. Posiblemente la plataforma circular pueda dar fe de la relación con el Occidente de México, aunque para determinar la forma definitiva de esta plataforma, es necesario realizar más investigaciones.



Foto 15 (izquierda). Estructura megalítica ubicada al lado este del Cerro Grande (tomada del oeste).

Foto 16 (derecha). Estructura megalítica ubicada al lado este del Cerro Grande (tomada del norte).

Uno de los hallazgos más significativos de nuestra temporada de campo 2012 fue la identificación de estructuras megalíticas (Fotos 15 y 16). Estas estructuras megalíticas son similares a los afloramientos de roca natural y no fueron registradas por García Cook, quizás por esta característica. Los trabajos de limpieza de la vegetación realizados sobre las estructuras y en los terrenos alrededor de las mismas, revelaron espacios circulares definidos dentro de estos aparentes “afloramientos naturales”. Una de estas estructuras megalíticas está unida a la parte este de la Pirámide del Cerro Grande y allí mismo se han identificado varios cantos rodados, algunos de estos se encuentran apilados encima de otras rocas (Foto 17). Suponemos que estas rocas originalmente formaban una especie de torre con espacios circulares en el interior. Hemos identificado varias estructuras

megalíticas, la mayoría de las cuales se incorporan en los complejos arquitectónicos. Además de estas estructuras megalíticas, también hemos identificado numerosas estructuras de canto rodado a pequeña escala en todo el sitio. Investigaciones adicionales podrán revelarnos las funciones a las que fueron destinados estos espacios.



Foto 17. Rocas apiladas (tomada del sur).

En suma, podemos mencionar que Tlalancaleca ha desarrollado rasgos arquitectónicos únicos con algunos puntos en común con los sitios adyacentes como Tetimpa (por ejemplo el talud-tablero). Aunque se sugirió la posibilidad de influencia desde el Occidente de México, dicha interpretación no es concluyente en este punto. Con todo, parece que Teotihuacan heredó algunos rasgos arquitectónicos selectivamente (talud-tablero, la argamasa de cal y yeso). Cabe señalar que todos estos rasgos arquitectónicos no son necesariamente contemporáneos, y es necesario afinar la cronología de las etapas constructivas de las estructuras para evaluar los cambios temporales en la arquitectura de Tlalancaleca.

3-5. Análisis de obsidiana en Tlalancaleca

Para entender diacrónicamente el abastecimiento de la obsidiana, se analizó un total de 632 materiales (1,072.01 g) recuperados de los pozos 1 a 4, de los cuales los 22 materiales no se utilizaron para este análisis debido a que éstos son de limpieza de diferentes capas. Los artefactos de obsidiana se analizaron de acuerdo con la tipología establecida por Kabata (2010: 214-226), se pesaron y se identificaron de manera macroscópica de acuerdo a

Kabata (2010: 261-269) pieza por pieza. Para determinar la temporalidad de los materiales, utilizamos los resultados del estudio estratigráfico (Figura 6), se pueden dividir en cuatro fases. Debido a que en los porcentajes entre gramo y pieza divididos por diferentes yacimientos de obsidiana no se encontró gran diferencia (Figura 11), utilizamos solamente los resultados cuantificados obtenidos de los porcentajes de pieza.

Según los análisis de elementos traza de Carballo et al. (2007), en los sitios de Tetel (700-400 a.C.) y de Las Mesitas (500-350 a.C.) ubicados en el noroeste de La Malinche, el primer proveedor fue Paredón (Tetel: 69 % y Las Mesitas: 75 %) y el segundo fue Pachuca (19 % y 25 %). Por un lado, en la región de Oaxaca durante el Formativo temprano la obsidiana de Otumba fue uno de los yacimientos importantes (Ebert et al. 2014).

En caso del sitio de Tlalancaleca, se encuentra la misma tendencia representada en los sitios de Tetel y de Las Mesitas durante toda la ocupación. Sin embargo, es curioso que un cierto porcentaje (11.8 a 16.4 %) de Otumba circulaba desde su inicio y esta cifra representa un tercer proveedor (Figura 12). Además, es importante que no se encuentre un cambio drástico en los yacimientos proveedores durante toda la ocupación. Sin embargo, hay que notar que los datos son de relleno y es necesario examinar los cambios diacrónicos con base en los datos primarios en futuras excavaciones.

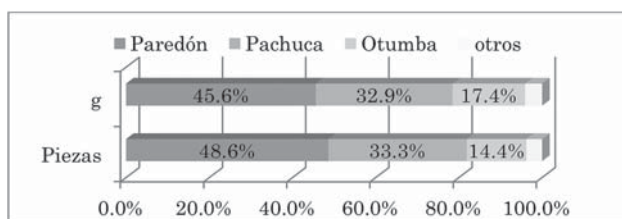
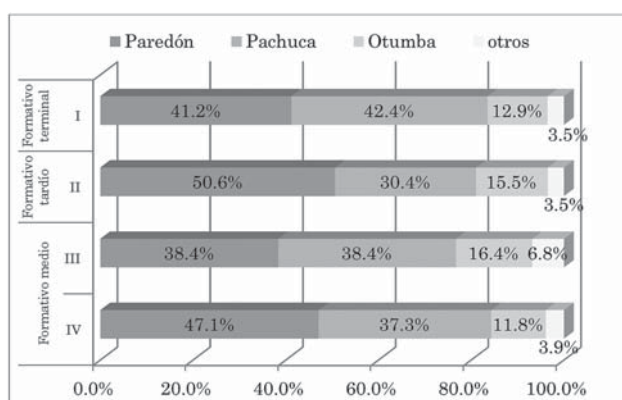


Figura 11. Distribución porcentual entre gramos y piezas de los materiales de obsidiana.



(n=610)	Paredón	Pachuca	Otumba	otros	Total
I	35	36	11	3	85
II	203	122	62	14	401
III	28	28	12	5	73
IV	24	19	6	2	51

Figura 12. Distribución porcentual entre diferentes yacimientos de obsidiana (los otros se incluyen los yacimientos de Pico de Orizaba y Ucareo).

4. Consideraciones

4-1. Teotihuacan y Tlalancaleca

En la ponencia que presentamos en el año 2013 (Kabata et al. 2013), discutimos cuales rasgos culturales se heredaron por Teotihuacan y sugerimos que Teotihuacan adoptó selectivamente algunas técnicas arquitectónicas (talud-tablero, estuco, argamasa de lodo y adobe), rasgos de la planificación urbana, representaciones materiales de ideología (templo de fuego representado por la escultura de Huehuetectl encima de la pirámide, dios de tormenta, y marcadores), y economía política (gran consumo de la obsidiana de Pachuca), junto con las relaciones interregionales con Veracruz y el Occidente de México. Los resultados de la segunda temporada (2013) confirman algunos de estos elementos, sobre todo, el sistema arquitectónico de cajones de adobe y el consumo de la obsidiana de Pachuca.

Aquí, podemos agregar algunas nuevas evidencias y observaciones. Primero, el consumo consistente de la obsidiana de Otumba contrasta con el de otros sitios contemporáneos en la región de Puebla-Tlaxcala, y esto sugiere la existencia de las esferas particulares de intercambio a Tlalancaleca, parte de las cuales fue heredada o apropiada por Teotihuacan.

Segundo, las perforaciones así como las excavaciones en el Complejo Cerro Grande no identificaron ningún piso estucado, lo cual implica que el uso de estuco no era común y fue restringido a algunas estructuras cívico-ceremoniales, aunque es posible que la tecnología de estuco fuera introducida en el último momento de Tlalancaleca. En la primera temporada, observamos numerosos pedazos de bajareque en la superficie a través del sitio, y es posible que estructuras residenciales fueran construidas con bajareque, no con argamasa y estuco. Como no hay yacimientos de piedra caliza en las áreas adyacentes, es muy importante identificar cuándo y a qué escala el estuco fue introducido y utilizado en Tlalancaleca para entender las esferas de intercambio así como las relaciones con Teotihuacan. En Teotihuacan mismo, el primer uso de estuco se ha detectado en algunas estructuras de la Pre-Ciudadela fechadas hacia alrededor de 100 a 150 d.C. (Gazzola 2009) y parece que el uso extensivo empezó en la fase Miccaotli (ca. 150-250 d.C.) (Murakami 2013).

Por último, no encontramos alguna capa de ceniza volcánica por las perforaciones ni por excavaciones en el Complejo Cerro Grande. Como mencionamos arriba, la ceniza de Popocatepetl llegó hasta Xochitcatl, y la erupción afectó a gran escala la dinámica de interacción en Puebla-Tlaxcala en la transición del Formativo al Clásico. Asimismo, es de gran importancia evaluar el posible impacto de la erupción en el área de Tlalancaleca. Así que discutiremos con más detalle en cuanto al posible impacto de la erupción, considerando algunos datos adicionales y concluimos este ensayo identificando algunas direcciones que tomaremos en las futuras investigaciones.

4-2. Posible impacto de la erupción volcánica del Popocatepetl

Un volcán es impredecible e imposible de apagar. Las erupciones provocan grandes cambios sociopolíticos en las áreas directamente afectadas, estos cambios pueden ser hambrunas, migraciones, despoblamiento y reubicación de los asentamientos. Dentro de los volcanes activos de México, se encuentra el volcán Popocatepetl cuyas coordenadas de localización son: 19.02° N, 98.62° W y abarca parte de los estados de Puebla, México y Morelos.

El volcán Popocatepetl se caracteriza por erupciones Plinianas, estas erupciones convertidas en flujos piroclásticos contienen una mezcla de gases volcánicos, rocas y cenizas calientes que se mueven a nivel del suelo con temperaturas cercanas a los 700°C. Estas erupciones también originan lahares, que se componen de una mezcla de rocas, ceniza y agua que generan lodo y acarrear materiales a su paso; cuyo poder destructivo puede ser superior a los flujos piroclásticos. Dado este panorama, la vida después de una erupción cambia drásticamente. En este sentido, el Popocatepetl experimentó una gran erupción datada entre 250 a.C. y 50 d.C., según lo revelado por recientes estudios (Siebe et al. 1996, 2004; Plunket y Uruñuela 1998, 2008). Esta erupción devastó completamente grandes áreas alrededor del volcán, incluyendo varios asentamientos fechados para el Período Formativo, por ejemplo el sitio de Tetimpa descrito por Plunket y Uruñuela (1998, 2008) y se ha propuesto también el sitio de Tlalancaleca. Los sobrevivientes en el Valle de Puebla y en la región Amecameca-Chalco situado en la parte sureste de la Cuenca de México tuvieron que emigrar a otras zonas (Siebe et al. 2004: 20-21). Sobre Tlalancaleca y el impacto sufrido por la erupción del Popocatepetl, se están realizando estudios estratigráficos en diferentes puntos del sitio para identificar evidencia de esta erupción. Resultados estratigráficos preliminares identifican rocas blancas ocasionales y degradación de las mismas en profundidades que oscilan entre 2 y 4 metros, dependiendo del área muestreada.

El impacto ambiental después de la erupción debió ser alto, repercutiendo en la salud de los pobladores, en las estrategias de subsistencia y en su psique. Se destruyó la vegetación en un radio de 30 km (Siebe et al. 1996, 2004). Los depósitos producidos por la erupción rellenaron los flujos de agua, provocando un reordenamiento del sistema hidrológico de la región. Las emanaciones del volcán se expandieron horizontalmente impidiendo el paso de los rayos solares, ocasionando una penumbra que posiblemente duró días. Estas emanaciones son altamente tóxicas, ya que contienen bióxido de carbono y azufre, dificultan la respiración y contaminan el agua y los alimentos (Siebe et al. 1996, 2004; CENAPRED 2014). Estudios recientes del CENAPRED 1) recrean el momento de la posible erupción del Popocatepetl y muestran que las áreas menos afectadas cubren un radio de dispersión variable, que depende de la velocidad y la dirección del viento. Aunque las partículas finas tardan meses en desaparecer, pudieron ocasionar un ambiente opresivo y agobiante para los sobrevivientes. Si tomamos en consideración la recreación

de CENAPRED, sólo un pequeño remanente de ceniza llegaría a Tlalancaleca, aunque el sismo producto de la erupción sí hubiera alcanzado el lugar (Figuras 13 a 15).

Cabe la posibilidad de que en el tiempo posterior a la erupción, el sitio de Tlalancaleca no fuera afectado por la penumbra y exceso de ceniza en el ambiente. Pero, es probable que cambiaran las estrategias de subsistencia debido a la afectación de las áreas circunvecinas al volcán. Debido a este catastrófico evento, quizás llegará una oleada de migrantes hacia Tlalancaleca, por consiguiente se incrementaría la población, la demanda de alimentos y de bienes de uso cotidiano. Con el transcurso del tiempo y debido al proceso deposicional de cenizas y toxinas en los afluentes cercanos, nuevamente la población migró desde Tlalancaleca hacia otros lugares. Pero, éstas son sólo hipótesis. Al respecto, el PATP pretende continuar la investigación profundizando en los siguientes puntos:

1. Identificar si existen indicios de la erupción (ceniza volcánica) en Tlalancaleca. Se continuará con las perforaciones en diferentes puntos del sitio así como en las barrancas cercanas al mismo (e.g., Barranca San Cayetano, Barranca Atetexca, Barranca Flores Azules, y Barranca El Torito).
2. Puede que este evento natural hubiera quedado registrado en los motivos plasmados en los materiales culturales, al respecto continuaremos con los análisis cerámicos y líticos y con el proceso de excavación.
3. Si es posible recuperar restos óseos humanos de las subsecuentes excavaciones, estos serán sometidos a análisis microscópicos, macroscópicos y arqueométricos, para identificar posibles migraciones.

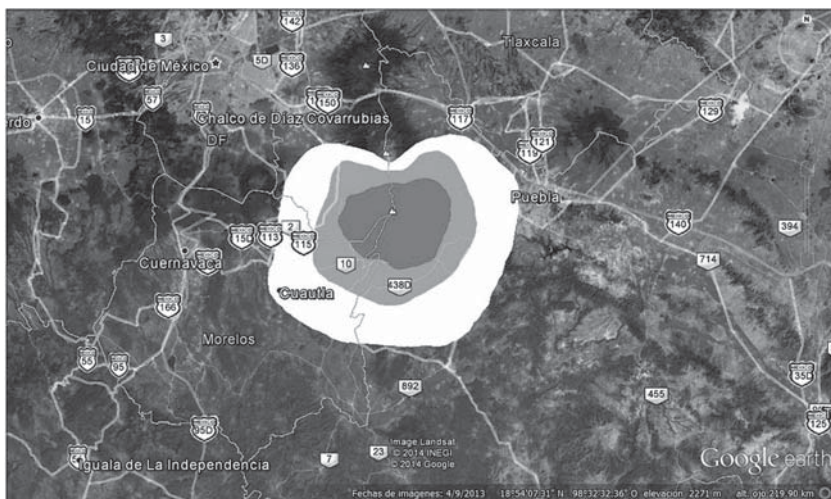


Figura 13. Área que pueden cubrir los piroclastos de la erupción del Popocatepetl (retomado de: www.atlasmacionalderiesgos.gov.mx/visualizador/volcan/, 14/05/2014).

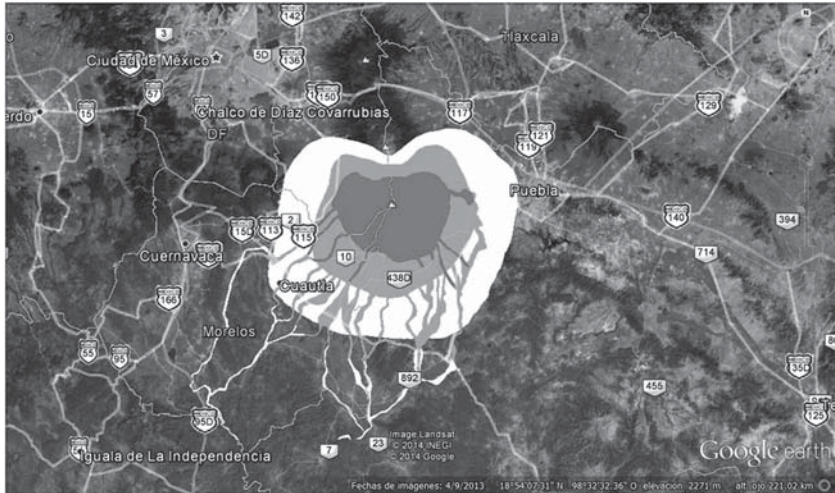


Figura 14. Área que pueden cubrir los lahares de la erupción del Popocatepetl (retomado de: www.atlasnacionalderiesgos.gov.mx/visualizador/volcan/, 14/05/2014).



Figura 15. Área que posiblemente se cubriera de ceniza por la erupción del Popocatepetl (retomado de: www.atlasnacionalderiesgos.gov.mx/visualizador/volcan/, 14/05/2014).

5. Conclusiones

En general, la evidencia arquitectónica de Tlalancaleca es consistente con la interpretación hecha por Plunket y Uruñuela (2012: 22): “los gobernantes de los grandes centros del Formativo Tardío y Terminal de Puebla-Tlaxcala estaban construyendo sus propias expresiones particulares del poder político y religioso; actuando como competidores independientes, experimentando con nuevas técnicas de construcción y la superposición de las prácticas rituales que variaban en función de sus redes de intercambio y alianzas

políticas”.

Más allá de esta descripción general, Tlalancaleca puede ser caracterizado como un nodo entre la mitad norte y la mitad sur de la región de Puebla-Tlaxcala. García Cook (1981) distingue estas dos áreas basado parcialmente en la influencia diferencial de otras regiones. La mitad norte se caracteriza por su interacción con la costa del Golfo y la fuerte influencia del Occidente de México, mientras que la mitad sur se caracteriza por sus fuertes lazos con la Cuenca de México, Morelos, Tehuacán y Oaxaca, junto con el intercambio poco común con la costa del Golfo. Una primera versión de cerámica Anaranjado Delgado fue probablemente distribuida en la mitad sur, como se observa en Tetimpa (Plunket y Uruñuela 2012: 28) y Tlapacoya (Barba 1956: 80). Este panorama general, sin embargo, necesita de algunas modificaciones basadas en una evaluación con los nuevos datos.

Parece probable que los sitios de la Cuenca de México tuvieran diversos grados de interacción con el Occidente de México y dentro de la región de Puebla-Tlaxcala, las influencias con el Occidente de México parecen estar concentradas en la parte oeste de la mitad norte, en torno a Tlalancaleca (sobre todo en Gualupita de las Dalías; Darras 2006). Carballo y Pluckhahn (2007) muestran una posible ruta de intercambio que une Cuicuilco, Tlapacoya, Tlalancaleca y Xochitécatl más o menos de forma lineal, aunque Plunket y Uruñuela (2012) sugieren una ruta adicional entre el sur de Puebla y la Cuenca de México. Si existiese una ruta a través de la Sierra Nevada, el área de Tlalancaleca habría sido una puerta de entrada hacia y desde la Cuenca. También hay que señalar que los artefactos del Occidente de México llegaron a la mitad sur de Puebla, según lo sugerido por la presencia de cerámica negra (posiblemente de Guanajuato) en Cuauhtinchan (Seiferle-Valencia 2007). En cuanto a la interacción con la costa del Golfo, hecha por García Cook (1981), puede estar en lo cierto, pero la aparición de la cultura material relacionada con la costa del Golfo es más variable. Por ejemplo, los juegos de pelota en forma de I se presentan no sólo en el sitio de La Laguna (Carballo 2009) en la mitad norte, sino también en Capulac-Concepción (García Cook 1983) que se ubica en la mitad sur. Pilas monolíticas y sarcófagos similares a los reportados en Tres Zapotes y Cerro de las Mesas se han registrado en Tlalancaleca y Totimehuacan (García Cook, 1981: 252).

La consolidación del Estado teotihuacano necesita ser entendida en el contexto de estas interacciones interregionales dinámicas. Como sugieren Plunket y Uruñuela (2012), la erupción volcánica del Popocatepetl en la mitad del siglo I después de Cristo podría haber devastado el sur de la ruta de intercambio, lo que contribuyó a la declinación de Cuicuilco y la creciente importancia de la ruta del norte (el Corredor Tlaxcala) entre la Cuenca y el este de Mesoamérica. Sin embargo, el área de Tlalancaleca no se vio afectada por la erupción volcánica y Cuicuilco debió haber tenido acceso a redes de intercambio a través de la ruta de Sierra Nevada, según lo sugerido por Carballo y Pluckhahn (2007). Por lo tanto, la interpretación de Plunket y Uruñuela tendría sentido sólo si Tlalancaleca hubiera monopolizado la ruta y estuviese compitiendo con Cuicuilco. Si es así, la erupción

del Popocatepetl habría favorecido un mayor desarrollo de Tlalancaleca, como podría haber sido el caso, y se corrobora con la presencia de la cerámica Tenanyecac.

En resumen, sugerimos la posibilidad de que Tlalancaleca persistió más tiempo de lo propuesto por García Cook (e.g., 1973) y se convirtió en un centro importante hacia el final de la fase Tezoquipan y el comienzo de la fase Tenanyecac. Tlalancaleca fungió como nodo crucial de las redes de intercambio entre la Cuenca de México y Occidente-Oriente de Mesoamérica, y entre la mitad norte y la mitad sur de la región de Puebla-Tlaxcala. Este estatus prominente habría proporcionado a las incipientes élites de Teotihuacan incentivos para imitar varios rasgos culturales de manera selectiva. Finalmente, Teotihuacan se hizo cargo de la mayoría de las redes de intercambio ya existentes, las reforzó y extendió hacia otras regiones. Esto sigue siendo una interpretación especulativa basada en evidencia limitada, pero a través de una mayor investigación en Tlalancaleca trataremos de probar estas hipótesis.

Agradecimientos

El Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla se apoya por los siguientes fondos: Grant-in-Aid for Young Scientists (A) núm. 24682005, Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas núm. 26101003, Gobierno de Japón, y Wenner-Gren Foundation, EE.UU.

Queremos expresar un enorme agradecimiento a Don Higinio Varilla (Director del Museo Comunitario de San Matías Tlalancaleca) y al Sr. Oscar Anguiano Martínez (Presidente municipal de la misma).

Notas

- 1) Con datos del Centro Nacional de Prevención de Desastres (CENAPRED), de la Secretaría de Gobernación, los Institutos de Geofísica y de Ingeniería, de la UNAM, y con la colaboración del Cascades Volcano Observatory, del U.S. Geological Survey. <http://www.atlasnacionalderiesgos.gob.mx/visualizador/volcan/>

Bibliografía

Barba, B.

1956 *Tlapacoya: un sitio preclásico de transición, Acta Antropológica, Segunda época vol. 1*, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Carballo, D. M.

2009 "Household and status in Formative central Mexico: Domestic structures, assemblages, and practices at La Laguna, Tlaxcala", *Latin American Antiquity* vol. 20, pp. 473-501.

Carballo, David Manuel, Jennifer Carballo, y Hector Neff

2007 "Formative and Classic Period Obsidian Procurement in Central Mexico: A Compositional Study Using Laser Ablation-Inductively Coupled Plasma-Mass Spectrometry", *Latin American Antiquity* vol. 18, núm. 1, pp. 27-43.

Carballo, D. M., y Pluckhahn, T.

2007 "Transportation corridors and political evolution in highland Mesoamerica: Settlement analyses incorporating GIS for northern Tlaxcala, Mexico", *Journal of Anthropological Archaeology* vol. 26, pp. 607-629.

Castanzo, Ronald A.

2002 *The Development of Socioeconomic Complexity in the Formative Period Central Puebla-Tlaxcala Basin, Mexico*, Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, Pennsylvania State University, University Park.

Crumley, Carole

1987 "A Dialectical Critique of Hierarchy", *Power Relations and State Formation*, T. C. Patterson y C.W. Gailey (ed.), pp. 155-169, American Anthropological Association, Washington, D.C.

Darras, V.

2006 "Las relaciones entre Chupícuaro y el centro de México durante el Preclásico Reciente: una crítica de las interpretaciones arqueológicas", *Journal de la Société des Américanistes* vol. 92, pp. 69-110.

Darras, V., y Faugere, B.

2007 "Chupícuaro, entre el occidente y el altiplano central", *Dinámicas culturales entre el occidente, el centro-norte y la Cuenca de México del Preclásico al Epiclásico*, Faugere, B. (ed.), pp. 51-83, El Colegio de Michoacán and Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos, México D.F.

Ebert, C.E., M. Dennison, K. G. Hirth, S. B. McClure, y D. J. Kennett

2014 "Formative Period Obsidian Exchange Along the Pacific Coast of Mesoamerica", *Archaeometry*, doi: 10.1111/arc.12095.

Feinman, Gary M.

1998 "Scale and Social Organization: Perspectives on the Archaic State" *Archaic States*, Gary M. Feinman y Joyce Marcus (ed.), pp. 95-133, School of American Research Press, Santa Fe.

García Cook, A.

1973 "Algunos descubrimientos en Tlalancaleca, Edo. de Puebla", *Comunicaciones* vol. 9, pp. 25-34.

1981 "The historical importance of Tlaxcala in the cultural development of the Central Highlands", *Handbook of Middle American Indians, Supplement 1: Archaeology*, Sabloff, J. A. (ed.), pp. 244-276, University of Texas Press, Austin.

1983 "Capulac-Concepción (P-211): un juego de pelota temprano en el altiplano central de México", *Jahrbuch für Geschichte, Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas* vol. 20, pp. 10-16.

- 1984 “Dos elementos arquitectónicos “tempranos” en Tlalancaleca, Puebla”, *Cuadernos de Arquitectura Mesoamericana* vol. 2, pp. 28-32.
- García Cook, Ángel, y Beatriz Leonor Merino Carrión
2005 “La cerámica del Formativo en Puebla-Tlaxcala”, *La Producción Alfarera en el México Antiguo I*, Beatriz Leonor Merino Carrión, y Ángel García Cook (ed.), pp. 575-685. INAH, México D.F.
- García Cook, Ángel, y Elia del Carmen Trejo
1977 “Lo teotihuacano en Tlaxcala”, *Comunicaciones* vol. 14, pp. 57-70.
- García Cook, Ángel, y F. Rodríguez
1975 “Excavaciones arqueológicas en “Gualupita las Darias,” Puebla”, *Comunicaciones* vol. 12, pp. 1-8.
- Gazzola, Julie
2009 “Características arquitectónicas de algunas construcciones de fases tempranas en Teotihuacán”, *Arqueología* vol. 42, pp. 216-233.
- Giddens, Anthony
1979 *Central Problems in Social Theory*, University of California Press, Berkeley.
- Hirth, K. G.
1978 “Teotihuacan Regional Population Administration in Eastern Morelos”, *World Archaeology* vol. 9, pp. 320-333.
1980 *Eastern Morelos and Teotihuacan: A Settlement Survey*, Publications in Anthropology núm. 25, Vanderbilt University, Nashville.
- Hirth, K. G., y Angulo, J.
1981 “Early state expansion in central Mexico: Teotihuacan in Morelos”, *Journal of Field Archaeology* vol. 8, pp. 135-150.
- Kabata, Shigeru
2010 *La dinámica regional entre el valle de Toluca y las áreas circundantes: Intercambio antes y después de la caída de Teotihuacan*, Tesis de doctorado, UNAM, México, D.F.
- Kabata, Shigeru, y Tatsuya Murakami
2013 *Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla: Informe Técnico de la Primera Temporada 2012-2013*, Consejo de Arqueología, México, D.F.
- Kabata, Shigeru, Tatsuya Murakami, Julieta López Juárez, y José Juan Chávez V.
2013 “Interregional Interaction Before the Rise of the Teotihuacan State: Preliminary Results of the Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla”, Ponencia presentada en SAA Annual Meeting, Honolulu.

Lesure, Richard G.

2007 *Tipología de cerámica y secuencia formativa: Investigaciones del Formativo en la región de Apizaco, Tlaxcala*, Consejo de Arqueología, México, D.F.

Mastache, Alba G., Robert H. Cobean, y Dan M. Healan

2002 *Ancient Tollan: Tula and the Toltec Heartland*, University Press of Colorado, Boulder.

McGuire, Randall H.

1983 "Breaking Down Cultural Complexity: Inequality and Heterogeneity", *Advances in Archaeological Method and Theory* 6, Michael B. Shiffer (ed.), pp. 91-142. Academic Press, Nueva York.

Millon, René

1973 *Urbanization at Teotihuacán, México, Vol. 1, part 1: The Teotihuacan Map: Text*, University of Texas Press, Austin.

1981 "Teotihuacan: City, State, and Civilization", *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, Vol. 1: Archaeology*, Victoria Reifler Bricker, y Jeremy A. Sabloff (ed.), pp. 198-243, University of Texas Press, Austin.

Montaño Niño, Hebert de Jesús

1999 *Tlalancaleca, Puebla: Un antecedente del apogeo cultural del Altiplano Central*, Tesis de Maestría, ENAH, México, D.F.

Murakami, Tatsuya

2007 "Inter-Valley Relations in the Formative to Classic Transition: A Preliminary Analysis of Architectural Technology at Teotihuacán", Ponencia presentada en the 72nd Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Austin.

2013 "Tecnología persistente, relaciones sociales cambiantes: Arquitectura urbana en Teotihuacán", Ponencia presentada en el XXXV Coloquio de Antropología e Historia Regionales "El Pasado tecnológico: Cambio y persistencia", El Colegio de Michoacán, Zamora.

Nelson, Ben A.

1995 "Complexity, Hierarchy, and Scale: A Controlled Comparison between Chaco Canyon, New Mexico, and La Quemada, Zacatecas", *American Antiquity* vol. 60, pp. 597-618.

Paynter, Robert, y Randall H. McGuire

1991 "The Archaeology of Inequality: Material Culture, Domination and Resistance", *The Archaeology of Inequality*, Randall H. McGuire y Robert Paynter (ed.), pp. 1-27, Basil Blackwell, Oxford.

Plunket, P., y Uruñuela, G.

1998 "Preclassic household patterns preserved under volcanic ash at Tetimpa, Puebla", *Latin American Antiquity* vol. 9, pp. 287-309.

2005 "Recent research in Puebla prehistory", *Journal of Archaeological Research* vol. 13, pp. 89-127.

- 2008 "Mountain of sustenance, mountain of destruction: The prehispanic experience with Popocatepetl Volcano", *Journal of Volcanology and Geothermal Research* vol. 170, pp. 111-120.
- 2012 "Where East Meets West: The Formative in Mexico's Central Highlands", *Journal of Archaeological Research* vol. 20, pp. 1-51.

Rosenswig, Robert M.

- 2000 "Some Political Processes of Ranked Societies", *Journal of Anthropological Archaeology* vol. 19, pp. 413-460.

Seiferle-Valencia, A.

- 2007 *Before the Eagle's Nest: The Formative Period Archaeology of Cuauhtinchan Viejo, Puebla, Mexico*, Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge.

Serra Puche, Mari Carmen

- 1998 *Xochitécatl*, Gobierno del Estado de Tlaxcala, Tlaxcala.

Serra Puche, Mari Carmen, Jesús Carlos Lazcano Arce, y Liliana Torres Sanders

- 2001 "Actividades rituales en Xochitécatl-Cacaxtla, Tlaxcala", *Arqueología* vol. 25, pp. 71-88.

Serra Puche, Mari Carmen, y Jesús Carlos Lazcano Arce

- 2011 *Vida cotidiana. Xochitécatl-Cacaxtla. Días Años Milenios*, UNAM, México, D.F.

Service, Elman R.

- 1975 *Origins of the State and Civilization*, Norton, Nueva York.

Sewell, William H., Jr.

- 1992 "A Theory of Structure: Duality, Agency, and Transformation", *The American Journal of Sociology* vol. 98, pp. 1-29.

Siebe, C., M. Abrams, J.L. Macías, y J. Obenholzner

- 1996 "Repeated Volcanic Disasters in Prehispanic Time at Popocatepetl, Central Mexico: Past Key to the Future?", *Geology* vol. 24, núm. 5, pp. 399-402.

Siebe, C., V. Rodríguez-Lara, P. Schaaf, y M. Abrams

- 2004 "Radiocarbon Ages of Holocene Pelado, Guespalapa, and Chichinautzin Scoria Cones, South of Mexico City: Implications for Archaeology and Future Hazards", *Bulletin of Volcanology* vol. 66, pp. 203-225.

Smith, Adam T.

- 2003 *The Political Landscape: Constellations of Authority in Early Complex Polities*, University of California Press, Berkeley.

Sugiura, Yoko

2005 *Y atrás Quedó la Ciudad de los Dioses. Historia de los Asentamientos en el Valle de Toluca*, UNAM, México, D.F.

Wells, E. Christian

2004 "Investigating Activity Patterns in Prehispanic Plazas: Weak Acid-Extraction ICP-AES Analysis of Anthrosols at Classic Period El Coyote, Northwestern Honduras", *Archaeometry* vol. 46, pp. 67-84.

Yoffee, Norman

2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States and Civilizations*, Cambridge University Press, Cambridge.

〈論文〉

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による 代替的司法の挑戦（前編）¹⁾

小林 致 広

キーワード

共同体警察 (policía comunitaria), 共同体権威者地域調整委員会 (coordinadora regional de autoridades comunitarias [CRAC]), 代替的司法 (justicia alternativa), 共同体領域 (territorio comunitario), 制度化 (institucionalización)

Resumen

La Policía Comunitaria de la Costa Chica y Montaña de Guerrero surgió en 1995 para asegurar a nivel regional la protección y defensa de las comunidades ante la inseguridad con respaldo de las organizaciones sociales de la región. En 1998 expande sus funciones a la impartición de justicia y reeducación mediante la Coordinadora Regional de Autoridades Indígenas Comunitarias (CRAIC) y fortalece su estructura institucional generando un Reglamento Interno para operación del Sistema de Seguridad y Justicia y Reeducción Comunitaria. En 2002 cambió el nombre de CRAIC a Coordinadora Regional de Autoridades Comunitaria (CRAC) a raíz de incorporación de varias comunidades mestizas. En 2007, la expansión del territorio comunitario se ha traído la construcción de nuevas dos sedes para equilibrar su servicio. Hasta 2010 la CRAC-PC ha podido consolidar su estructura regional y concretar su proyecto de autonomía ampliando su funciones y estructura. A partir del 2010, los dispositivos de poder del Estado han erosionado la autonomía de CRAC-PC, generando división y desencuentro entre las sedes. Hoy, la CRAC tiene doble perspectiva en juego para mantener su autonomía. a) Sostener su lucha por romper imposiciones y plantear nuevos retos. b) ejercer la reflexión sobre su propio proyecto hacia una crítica reflexiva a la institución.

はじめに

1980年代後半、中南米諸国では先住民による「アイデンティティの運動」が展開され、「先住民の台頭」として語られることもある。先住民問題は文化的多様性の認知という新自由主義的な多文化主義の枠組みで論じられ、各国で先住民に関連する憲法改正が行われ、先住民の文化的多様性の認知が憲法に明記されていく。先住民運動の主要な旗印である自治は、中央政府の脱中央集権化の一環として位置づけられ、自律・自助の規範を掲げる国家は、従来の先住民対策の資金を削減する方針を明確にしていった。世界銀行に代表される国際機関が先住民領域の創設を謳ったように、国際機関や政府はより「根源的な要求」を拒否するため、一部の要求に一定の譲歩をするようになる (Gledhill 2008: 12)。

メキシコでは、1994年のサパティスタ民族解放軍（EZLN）の武装蜂起を契機に、先住民族の権利や文化の認知や国家との関係の再検討が始まったが、2001年4月の反動的な先住民法採択により、集团的権利としての先住民自治の法的認知は実現することはなかった。元国連先住民問題特別委員スタベンハーゲンが「多くの改革、乏しい成果」と指摘するように（Stavenhagen 2006）、先住民族の文化的多様性を憲法で認知するレベルを超える大きな変化は生じていない。

改革の停滞・後退に対して、EZLNや先住民全国議会（Congreso Nacional Indígena, CNI）に結集する先住民運動や組織は、国家によって「認知された自治（autonomía de derecho）」ではなく、「事実としての自治（autonomía de hecho）」の実践を通告することになる。この通告は、文化的多様性を認知した国家が、社会的正義という視点から資源の平等な再分配を要求する自治（autonomía redistributiva）²⁾を認めないことに対する憤りの表出にほかならない。20世紀末以降、未統合のまま取り残された先住民地域の一部で、「挫折国家」が放棄した再分配調整機能を自律的に運営する「事実としての自治」が試みられるようになった。この運動が目指すのは、共同体的な自治運営を通じた「多民族・多文化国家」の構築であるといえよう。

メキシコの「事実としての先住民自治」の代表的実践例は、チアパス州東部でEZLN支持基盤の共同体が展開している運動である。サパティスタ運動が目指した自治的統治（gobierno autónomo）は、大まかには①「習わしと習慣（uso y costumbre）」に基づく司法運営＝司法、②独自予算に基づく資源自主管理＝経済・生産、③固有の価値観や文化に沿った住民参加型教育システム＝教育・文化、④少ない資源を前提とした代替的基礎医療制度の構築＝医療、⑤家父長的・男性優位主義的な政治運営に替わる男女対等の参加＝政治の5部門で展開している。

上記の5部門全般にわたって自治が試みられている事例は、メキシコではチアパス州東部のサパティスタ運動以外には存在しない。試みの多くは、経済的自立を目指す各種の協同組合運動にみられる経済・生産、「インターカルチュラル教育」にみられる教育・文化、医療サービスの未整備に対応する代替的制度を模索する医療、女性のエンパワメントやクォーター制という形での政治参加という分野に集中している。この4分野では、国家が専有してきた権能を民間セクターに委託する傾向が少なからずみられる。皮肉な言い方をすれば、先住民自治の構築を掲げる運動は、対等な資源分配体制の構築に「失敗した無能な国家」の機能を代行するアクターとして登場しているといつてよい。

一方、自治的な形で司法権限を行使している現象はなかなか観察できるものではない。PAN政権下でのメキシコの先住民司法制度に関する改革は、先住民族の司法権行使や自治権を実効的な形で承認する方向に進まず（Hernández, Sieder y Sierra 2013）、先住民司法制度の公認も新自由主義的な多文化主義の枠組みに留まるものだった（Hale 2004）。先住民族の法的多元性を認知する試みとして2002年からプエブラ北部山地の諸地区で試行されている先住民法廷（juzgados indígenas）は、先住民単一言語話者の多い地区における司法手続きにおける通訳者の確保などの経費軽減を目的としていた側面があった³⁾。

本稿では、ゲレロ州海岸山岳部⁴⁾において、司法分野での「事実としての自治」を模索してきた共同体権威者地域調整委員会・共同体警察（Coordinadora Regional de Autoridades Comunitarias-Policía Comunitaria, CRAC-PC）の展開を検証し、現在直面している課題について考察する。

主要道路での犯罪行為から住民を防衛する目的でPC創設することは、1995年10月15日、ゲ

レロ州東部山岳地域のマリナルテベック地区で開催された先住民系共同体の住民集会で決議された。その後、1998年初頭の地域総会で、「習わしと習慣」に基づく共同体的司法を実践する目的で、先住民共同体権威者地域調整委員会（Coordinadora Regional de Autoridades Indígenas Comunitarias, CRAIC）を発足させることになった。やがて、海岸地域のアソユーやマルケリア地区のメスティソ系共同体も参加し、2002年初頭に先住民という形容詞が消え、現在のCRACという名称になった。

CRAC-PC傘下の共同体は徐々に増え、共同体領域（territorio comunitario）はゲレロ州東部に位置する20近くの地区に広がった。2010年代、国家との関係をめぐり、CRAC-PCは深刻な問題に直面し、重大な岐路に立たされることになる。約20年間のCRAC-PCの活動は、①PC組織化とCRAC発足（1995～1998年）、②国家との対立緊張関係（1999～2007年）、③CRAC拡大、制度化と分裂（2008年～）の3期に区分できる。

以下、CRAC-PC組織化の過程を辿りながら⁵⁾、CRAC-PCの組織運営や代替的司法の実践に当たって直面してきた問題点を明らかにしていきたい。PC活動によって犯罪が減少した地域では、生産基盤の充実や移民という新たな社会問題にも対応する必要がでてきた。CRAC-PCは、共同体内や共同体間の紛争解決だけでなく、代替教育、共同体の保健衛生、持続可能な農業や連帯経済の模索、共同体ラジオと通信の整備、さらには多国籍企業による鉱山開発に対する反対運動、教員組織や他の民衆運動との連帯活動も展開してきた。

しかし、PCが前提とする共同体システムは多様な異質性を内包するものであり、共同体の構成員や指導者がPCに託する思いも多様である。現在、CRAC-PC内部には、培ってきた自治体制を深化させ、国家と一定の距離を置き、抵抗能力を強化しようとする自治的潮流と、共同体領域の自治を強化するために連邦・州政府との協力関係を緊密にしようとする潮流が存在している。現在、CRAC-PCが直面する危機は、「共同体的なもの」のあり方の流動性と大きく結びついている。

1. 海岸山岳地域におけるPCの組織化

PCが正式に発足したのは、マリナルテベック地区サンタクルス・デル・リンコン（Santa Cruz del Rincón、以下リンコンと略）で約400名が参加して開催された1995年10月15日の地域集会とされている。集会議事録⁶⁾によると、マリナルテベック、サンルイス・アカトラン（以下サンルイスと略）、アカテベックの3地区の28の共同体の地区委員（comisario municipal）、海岸山岳地域に組織されていた社会組織の構成員などが参加したとされる。参加共同体の多くはトラパネカ（tlapaneca, me'phaa）系で、ミステカ（mixteca, naa savi）系はサンルイス地区の4共同体だった（表1参照）。

(1) PC創設

PC創設集会を主導したのは先住民権威者審議会（Consejo de Autoridades Indígenas, CAIN）⁷⁾と、地域で1980年以降に組織された各種の社会組織⁸⁾である。CAINはトラパコ教区神父マリオ・カンボス（Mario Campos）による司牧活動の過程で結成されたものである。1992年9月にリンコン教区に赴任したカンボス神父は、教区住民の生活状況の向上を目指し、共同体権威者やカテキスタといった指導者と協議を重ねていた。パスカラ・デル・オロ（Pascala del Oro）教区の共同

表 1 PC 創設集会の参加共同体と社会組織

行政地区	現行政地区	参加共同体	当局者
Malinaltepec	Iliatenco	Arroyo S.Pedro, Cerro Cuate, Cerro Tejón, Col.Aviación Col.Sta Cruz, Cruz Verde, El Aserradero, Iliatenco, Tlahuitepec, <Cruztomahuac>	地区委員
	Malinaltepec	El Cocoyul, Potrerillo del Rincón, Rancho Viejo Tierra Colorada, Tilapa	
			Sta. Cruz El Rinón
S.Luis Acatlán	S.Luis Acatlán	Camolotillo, Horcasitas, Pascala del Oro, Potrerillo Cuapinole, Pueblo Hidalgo, Tuxtepec <Cerro Limón>, <Pajarito Grande>, <Xiuhtepec>	地区委員
		Llano Silleta, Tlaxcalixtlahuaca	地区委員
		Buenavista	地区委員, AE, CV
		Hondura Tigre	地区委員, 小学校長
	Iliatenco	S.José Vista Hermosa	地区委員, 先住民女性
Acatepec	Acatepec	Mexcalapa, Tres Cruces	地区委員
社会組織	共同体食糧調達審議会 (CAC), エヒード連合「山の光」(Luzmont), 農民地域連合 (URC), 先住民権威者審議会 (CAIN) コーヒー・トウモロコシ生産者社会連帯組合 (SSS.PCM), 先住民黒人民衆の抵抗 500 年ゲレロ審議会 (CG500ARI)		

<Xiuhtepec> は手書き記入, **Buenavista** ボールド体はミステカ系共同体,
AE: エヒード当局, CV: 監視審議会

体も加わり, 教区内 28 共同体で構成されていた CAIN も 41 共同体まで拡大し, CAIN の活動は, 社会・経済から, 文化・政治まで拡大し, 生活改善の一環として地域の安全性の確保が緊急課題として認識されていく。

1992 年以降, 海岸と山岳を結ぶ主要幹線 (マルケリアートラパ間) 一帯では, 住民に対する犯罪集団の襲撃事件が日常化し, 地域の農産物の生産・流通組織は強奪を目的とした襲撃への対応に苦慮していた。地区・州政府当局の無対応に対し, 経済組織だけでなく, 先住民黒人民衆の抵抗 500 年ゲレロ州審議会 (CG500ARI) といった政治文化組織を含め, 地域の安全性の確保に関する協議が重ねられていく。1995 年 2 月上旬, CAIN, 生産組織や社会組織のメンバーは, 地域の安全性を確保するための地域集会を開催し, さらに 6 月になると CAIN, 社会組織, 共同体の地区委員が参加した拡大地域集会がパスカラ・デル・オロで開催された。6 月 28 日のアトヤック地区アグアス・ブランカス (Aguas Blancas) で起きた州警察による農民虐殺事件⁹⁾ は, 地域の安全性の確保に関しては上級行政機関に何も期待できないことを明らかにした。

9 月 12 日のパスカラ・デル・オロでの地域集会では, 社会組織の関係者と地区委員 36 名が出席し, 地区警察の再編と共同体による自主防衛組織の構築が提起され, 上級機関に頼ることなく当事者で解決策を模索する方針が確認された。9 月 17 日のサンルイスでの地域集会では, 州機動警察の解体要求が出され, 社会組織調整委員会 (Coordinadora de Organizaciones Sociales, COS)¹⁰⁾ を立ち上げ, 共同体独自の治安・司法運営・再教育システム (Sistema de Seguridad, Impartición de Justicia y Reeducación Comunitaria) を構築する方針が採択された。9 月 24 日のトラシュカリストラワカ (Tlaxcalistlahuaca) での地域集会, 10 月 2 日のサンルイスでの「安全とサービスに関するフォーラム」を経て, 10 月 15 日, リンコンで PC 創設集会が開催されることになる¹¹⁾。

創設集会では、海岸山岳地域の住民の移動や生活が脅かされている状況に対処するため、暴力事件が頻繁に起きている主要道路の警備を目的とする PC を各共同体で組織していく方針が採択された。州政府や州政府など上級の統治機構から「非合法」とされかねない PC 組織化は、先住共同体や先住民地域の自治や自決権を定めたメキシコ憲法第 4 条、国際労働機関 169 号条約に基づく「合法的」なものであることが強調されている。

(2) PC の補助警察としての公的認可

PC 創設決議後、18 の共同体で PC が組織されていたと指摘されている（Martínez Sifuentes 2001: 42）。このことは、PC 創設決議に基づいて、直ちに PC が組織できなかった共同体もあったことを意味する。実際、アカテペック地区の 2 つの共同体は、2008 年までの CRAC-PC 傘下の PC のリストでは確認できない。一方、サンルイス地区オルカシタス（Horcacitas）やクアナカシユティトラン（Cuanacaxtitlán）のように、創設集会の前から PC が組織化されていた共同体もあった¹²⁾。乗合自動車の警護と道路の巡回を任務とする PC が携行できたのは、マチェーテ、猟銃、ライフルという程度の武器だった。当初、PC メンバーは当局から違法な武装集団とみなされないため、自前の武器登録書をつねに携帯していた。上級統治機構から「非合法」とされかねない活動への参加に躊躇があり、PC に対する共同体全体の合意形成は容易ではなかったといえよう。

1995 年 10 月、機動警察廃止、機動警察に代わる PC 設置、PC 育成と報酬提供などを要求するため、代表者は州検察当局に赴いたが、当局は無反応だった。しかし、1996 年 10 月、サンルイス地区で民主革命党（PRD）系のヘラルド・レジェス（Geraldo Reyes García, 1996 年 10 月～1999 年 9 月）が首長に就任すると、地区当局の PC への対応に変化が見られだした。地区首長は、PC を地区政府の補助組織として活用する方針を打ち出し、身分証明書発行や各種の便宜供与を図るようになった。一方、1996 年 6 月末、ゲレロ州各地で人民革命軍（EPR）が登場し、州政府の PC への対応に変化が見られだした。アグアス・ブランカス事件で引責辞任したルベン・フィゲロア（Rubén Figueroa Alcocer, 1993/4～1996/3）知事の代行になったアンヘル・アギーレ（Ángel Aguirre Rivero, 1996/4～1999/3）は、PC のある共同体で襲撃や家畜泥棒が減少していることを評価し、地域の治安確保の末端組織として PC が利用できると考えていた。

1996 年 10 月末、知事代行は州治安担当部局とともに PC 代表団と会見し、PC への武器証明書発行や武器供与、訓練を提供するという合意ができた。1996 年 11 月以降、PC の地域集会には州警察長が出席するようになった。同年末にはマルケリア地区クルス・グランデに駐留する連邦軍から簡単な軍用銃が供与され、1997 年春から、州警察、交通警察、連邦軍による PC の教育訓練やセミナーも実施されるようになった。1997 年 3 月 24 日、サンルイスを訪問した知事代行は、PC の制服 70 着を贈呈し、武器提供を申し出ている¹³⁾。

初期の PC の活動においては、共同体間相互の連携はほとんど見られなかった。地区委員の管轄下にある共同体の PC メンバー（6～12 名）は、PC 司令官の指揮のもと、単発銃、ライフル、マチェーテを手にして、乗合自動車の警護や徒歩による道路巡回を実施していた。しかし、相互の活動を調整する必要性から、1997 年 4 月の地域総会において、PC 指揮官と PC メンバー 3 名で構成される執行委員会（Comité Ejecutivo）が発足し、警護巡回の輪番の組織化や調整を担うことになった。PC が共同で行う警備活動は 1997 年 5 月から始まり、7 月の集会では、巡回ルートを設定することも確認された。1997 年後半、地区・州政府や連邦軍からの援助を受けながら、

PCはサンルイス地区とマリナルテベック地区では、地区の予防司法警察（*policía preventiva y ministerial*）として展開するようになった。PCは、守護聖人祭の警備、経済組織の運送の警備、社会組織の職員や地区首長の警護までも担うようになった。1997年8月から、PCは週間報告を地区当局、地区当局は月例報告を州の上級機関に上げる体制が確立された。

II. 共同体的治安・司法運営・再教育システムとCRAC創設

州政府など上級機関とPCの地域集会の代表者の間で「事実としての協力関係」が成立し、地域の治安と住民の安全を確保するためのPCの基盤整備は一定の前進を見た。しかし、地区の治安・司法担当部局との関係は複雑だった。1997年まで、摘発した強盗、家畜泥棒、暴行などの犯罪者は、地区の司法担当局（*Ministerio Público*）に引き渡されていた。多くの場合、正式な告発がないという理由¹⁴や賄賂まがいの保釈金で、司法手続が行われないうまま、犯罪者たちは釈放されていた。逆に、「個人の自由剥奪」と告発され、PCメンバーが拘束されることもあった。一方、少量のマリワナ携帯、家庭内暴力などの軽犯罪は取り上げられないか、保釈金を強要されていた。

(1) CRAIC創設と法人組織CRAI結成

1997年11月にサンルイス地区トゥステペック（*Tuxtepec*）で拘束されたマリワナを少量携帯した若者に対して、共同体当局とPC執行部司令官は、若者の家族も参加した共同体集会で、複数の共同体での社会奉仕を行った後で、あらためて社会復帰の可能性を検討するという措置をとった。これを契機に、拘束者を地区司法担当局への即時引き渡すという方針を見直し、拘束者への司法措置のあり方が地域集会においてを検討されるようになった（*Gasparello 2007: 102*）。

軽犯罪者の更生や社会復帰という面で、既存の司法体制による罰金・懲罰というシステムが機能不全状態であり、州や地区の警察・司法当局に何も期待できない状況に対して、共同体による独自の司法運営（*impartición de justicia*）と再教育（*reeducción*）を模索する必要性は強く認識されていた。1998年2月のポトレリージョ・コアピノーレ（*Potrerrillo Coapinole*）の地域総会で、共同体から選出された地区委員による地区権威者委員会（*Comité de Autoridades Municipales*）と地区委員委員会（*Comité de Comisarios*）を発足させることが決まった。委員会は、基盤整備・保健衛生・生産・道路など日常生活や司法の分野における地域発展を推進するため、各種の社会組織と調整する役割をもつことになった。

司法運営にあたって共同体相互の調整のために組織されたCRAICは、上記の地区委員委員会と執行委員会で構成され、前者が先住民法規に基づく司法運営、後者が治安維持・警察権執行を担うことになっていた。一般的に調整委員（*coordinador*）と呼ばれる地区委員委員会は6名で構成され、地元の地区委員との兼務や司法手続きに伴う危険性を考慮し、任期は1年とされた。CRAIC発足を契機に、サンルイス地区当局から、地区役場に近い場所に800平米の敷地が提供され、1階建てのCRAICの事務所とPC詰所が設営された¹⁵。

共同体の治安・司法運営・再教育システムは、1998年2月のCRAIC発足と同時に確立したわけではなく、徐々に整備されていった。1998年8月の地域総会で、先住民共同体の治安システム（*Sistema de Seguridad Pública Comunitaria Indígena*）に関する内規を作成する必要性が取り上げられた。翌1999年9月にイリアテンコ（*Iliatenco*）で開催された「1995 - 1999年度PC活動評

価集会」の場で、内規案が正式に提示された。その後、各共同体から選出された代表者で構成される内規検討改定委員会が2001年度から検討を重ね、トラパに本拠のある人権組織トラチノリヤンや全国先住民庁の助言に基づいて、2003年にCRAC-PC内規は正式決定されることになった¹⁶⁾。

1999年のイリアテンコでの評価集会では、PC活動に必要な財政的基盤を確立する必要性も議論された。予算財政部会では、資金を集める方策として、募金、生産プログラム実施、接収家畜の売却、サンルイスとマリナルテベック地区へ立ち入る商業用車両の料金所設置などが検討された。しかし、地区・州政府や非政府組織などからの資金調達以外に有効な方法は見つからず、公的機関からの支援受け入れ窓口として法人組織を発足させることになった。ゲレロ州山岳海岸先住民権威者地域調整委員会（Coordinadora Regional de Autoridades Indígenas de la Montaña y Costa Chica de Guerrero, A.C., CRAI）は2000年12月に法人として正式認可され、2001年から、外部からの財政的支援をもとに各種の部会活動を展開できる法人組織体制が整った¹⁷⁾。

(2) CRAC 名称変更と PC 取り込み策動

先住民共同体治安システムに関する内規策定が直ちに進展しなかった背景には、CRAIC-PCの活動を取り巻く州・地区レベルの複雑な政治状況が関係していた。1999年10月、サンルイス地区首長にはPRI派アブディアス・アセバド（Abdías Acevedo Rojas, 1999/10～2002/9）が就任した。2000年3月20日、PCはサンルイス地区のメスティソの有力牧畜業者を盗難家畜買取りの嫌疑で拘束した。一方、牧畜業者の家族や牧畜業者連合はPCの行為を「自由の剥奪」として全国人権委員会や司法担当局に告発した。一週間後、軍は巡回に出ようとしたプエブロ・イダルゴ（Pueblo Hidalgo）のPCメンバーを武装解除し、拘束された牧畜業者は10日未満で脱走し、PCも賄賂で拘束者を釈放しているという噂も流れ出した。

大統領選挙キャンペーン終了後、畜業者連合の支持を背景に、州政府は本格的にCRAIC-PC関係者に対する迫害を展開することになった。州司法警察は、2000年7月にマリオ・カンボス神父、9月にCRAIC審議官ブルーノ・プラシド（Bruno Plácido）をでっち上げの容疑で逮捕し、10月には、牧畜業者拘束の容疑でPC地域司令官アグスティン・バレラ（Agustín Barrera）も逮捕された。翌2001年2月11日には、サンルイス地区司法警察が牧畜業者拘束という越権行為で、地区委員交替式に出席した前調整委員6名のうち5名が拘束される事態が発生した。抗議に集まった約千名のPCと地区司法警察との武力衝突は、州当局の仲介で回避され、CRAIC-PCとPRI派地区政府の折衝で、拘束されていた5名は釈放された。その際、メスティソが多く居住するサンルイス地区主邑は地区司法担当局、先住民が多い周辺部はCRAICが司法運営を担当するという相互不干渉を定めた棲み分けが成立したとされる。

PCが組織された共同体のすべてが、国際労働機関169号協定で自決権・自治権を保証されている先住民共同体ではないことは明白であった。従来から、PRI派の地区首長などによって、PCにはメスティソに対する司法権限がないという言説が振りまかれていた。2010年3月のメスティソの地方ボス拘束を契機として、CRAICはメスティソ系共同体に対してもPC組織に結集するよう呼びかけていた。その結果、サンルイス地区南部に分布するメスティソ系共同体がCRAICの傘下に集まるようになった¹⁸⁾。同時に、共同体領域におけるメスティソの犯罪者への司法措置に関してもCRAIC-PCが対応できるようにする必要性も強く認識されていった。こうして2002年初頭、CRAICからCRACへの名称変更が行われることになった¹⁹⁾。先住民共同体という「民族集团的

(étnico)」な枠組みでの治安・司法運営・再教育システムから共同体という枠組みに変更された意味は、検討に値するかもしれないが、この変更の背景には州当局が展開した一連の PC 取り込み策動が潜んでいた。

2002年2月26日に開催された CRAIC 関係者との会合の場で、州政府内務局長は、CRAIC の司法運営基準を定めた内規の不備を指摘し、CRAIC が合法性を欠如しているとして、PC の武装即時解除か、地区当局管轄下の地区予防警察 (policías preventivas municipales) への統合という 2 者択一の最後通牒を突きつけた。CRAIC 執行部は傘下の共同体の意向を打診しなければ回答できないとして、協議のための猶予期間を要請した。

サンルイス、マリナルテベック、アソユー、メトラトノック²⁰⁾の4地区の協議では、①PC 消滅に賛成か? ②家族が蹂躪・殺害・暴行されるのを見たいか? ③州政府の意図する PC 地区予防警察への編成に賛成か? ④PC という民衆プロジェクト消滅を見たいか? という4項目への賛否が問われた (Rojas 2002)。協議では最後通牒拒絶が大半を占め、マルケリア、アカテベック、アユートラ、トラコアパ、アトラマハルシゴ地区の関係者からは、CRAIC-PC 参加の打診があった。一方、2000年末発足の PAN 政権の全国先住民開発委員会 (CDI) 総裁からは、CRAIC-PC 支持という確約も取り付けていた。

2002年3月21日、サンルイスで開催された第2回「共同体司法治安制度」集会には、4千人を超す先住民が参加し、口々に PC 存続を主張した。PRD 派のマリナルテベック地区首長は「先住民であれ、メスティソであれ、我々は安全を必要としている。暴力に疲れ切った人民は平和と平静を求め PC を結成した」と述べ、サンルイス地区の PRI 派首長も「地区議会は PC を認めてきた」と述べ、州政府の方針に対する不支持を表明した。

2002年10月、サンルイス地区首長にヘナロ・バスケス (Genaro Vázquez Solís) が就任したことで、2003年から2006年頃まで比較的安定した状態が続くことになる。元ゲリラ運動指導者ヘナロ・バスケスを父とする首長は、地区治安担当部長として CRAC 顧問ブルーノ・プラシドを登用し、兄シリロ・プラシドを公共事業監査室広報官に任命した。PC 活動を踏まえ、ブルーノは治安問題を管轄する総会 (Asamblea General) 創設を立案し、地区市民が自治的に運営する形に構造改革することを提案した。この提案は州当局が画策してきた PC の地区予防警察化と実質的に差がないという批判を CRAC 側から受けることになった。

州当局による PC の制度内取り込みの策動は断続的に展開していった。2004年6月、州当局は、PC の拘束者をまとめて収容する社会復帰センター施設を設置し、所長に CRAC-PC 関係者を指定し、PC に俸給を支払うという提案を行った。「再教育」が組み込まれていない提案は、当然ながら CRAC 側によって拒否された。PRD 派のカルロス・トレブランカ (Carlos Torreblanca, 2005/4 ~ 2011/3) の州知事就任以降も、同様の試みは継続している。2007年2月公布の州治安法 (Ley de Seguridad Pública de Guerrero) には初めて PC という文言が登場している。地区政府の治安サービス定めた同法 18 条は、サービス提供できない街区 (delegación) や共同体では、構成員で組織された予防共同体警察 (policía comunitaria preventiva) 創設が可能とされている (Sierra 2013: 165)。

(3) CRAC 体制の拡大と 3 管区体制

CRAC-PC の活動を知り同様の試みを展開してもらうため、2003年初頭からメトラトノッ

ク、オコアパ、トラコアパ、トラパ地区などで、先住民民族・共同体・権威者集会（Asamblea de Pueblos, Comunidades y Autoridades Indigenas）が開催されていた。集会を呼びかけたのはサンルイス地区首長ヘナロ・バスケスとシャルパトラワク（Xalpatlahuac）司教区に転任していたマリオ・カンポス神父だった。しかし、CRACの治安維持活動や司法運営を他地区に広めようとする試みは、CRAC-PC全体から支持を受けるものではなかった。CRACの顧問審議会は、創設期のPCを支えていたCOSのような社会組織が育っていない地区にCRAC-PCモデルを適用する危険性を指摘していた。

1998年から2007年までの10年間で、PCの組織された共同体がある地区は4から10に増えている。CRAC-PC管轄地域の周辺・遠隔地の共同体の住民にとって、民事・刑事面にわたる事案の相談や裁定のため、サンルイス地区主邑のCRAC-PC事務所に行くことは大きな負担であった。新規にCRAC-PC傘下に入ったメトラトノック地区の住民にとっては、マリナルテベック、メトラトノックやトラパの地区司法担当局に行くほうが、サンルイスにあるCRAC-PC事務所に出かけるより、時間的にも経済的にも便利という状況であった。また、最高意思決定機関とされる地域総会に参加しにくかったことは言うまでもない。こうしたアクセス面での不平等を解消することが焦眉の課題となっていた。

2006年11月末にオルカシタスで開催された評価委員会において、周辺地域からのアクセスを容易にするため、共同体領域を海岸・高地・ミステカという3つに区分し、新たに共同体司法治安事務所（Casas de Justicia y Seguridad Comunitaria、以下司法事務所と略）を創設する方針が提起された。また、司法運営の専門性と継続性を確立するため、従来は地区委員が兼務していた地域調整委員には司法の実務能力や経験をもち一定の役職を経験したことのある者を充当するという方針が定まった。また、司法運営の継続性を保つため、地域調整委員の任期を3年に延長し、共同体、仕事、家族から離れる3年間の奉仕に一定の報酬を支払うことも決まった。地域調整委員だけでなく、地域司令官の任期も3年とすることになった。

2007年3月、新体制における最初の地域調整委員と地域司令官が指名され²¹⁾、司法事務所が設置される場所も決まった。従来のサンルイス地区タマリンドにあった事務所は、海岸部の共同体を統括するサンルイス管区と3管区全体の司法事務所を兼ねることになった。同年6月、トラパーマルケリアを結ぶ幹線道路のトレス・マリアスにあったPC連絡事務所は閉鎖され、文書類はエスピノ・ブランコ（Espino Blanco）に設置された高地トラパネカ系共同体を統括する司法事務所に移管された。高地のミステカ系の共同体の統括事務所としては、シトラルテベック（Zitlaltepec）の司法事務所が当たることになった。

2007年10月には各管区に配当される共同体が発表された。サンルイス管区の共同体の数が23ともっとも多く、次いでエスピノ・ブランコ管区の19となっている。シトラルテベック管区には、メキシコの中で最貧地区とされるメトラトノック地区とコチャアパ・エル・グランデ地区の12の共同体が属していた。こうして、2007年11月から3管区体制が正式にスタートすることになった（表2、地図1参照）。管区の活動の調整、開発計画や地区役場からの資金の受付や分配管理のため、地域調整委員、地域司令官、法人代表、審議委員各1名で構成される地域調整委員会（Comité Coordinador）の設置も決まっていたが、現在まで機能していない。

表 2 PC 参加共同体の変遷 (1995 ~ 2008 年)

地区	2008	2007*	2003	2001		地区	2008	2007*	2003	2001	
San Luis Acatlan	<u>Buena Vista</u>	S	o	o	1	Iliatenco	<u>S. J. Vista Hermosa</u>	S	o	o	21
	<u>Camalotillo</u>	S	o	o	2		Arroyo S. Pedro	S	o	o	22
	<u>Horcasitas</u>	S	o	o	3		El Aserradero	E	o	o	23
	<u>Pajarito Grande</u>	S	o	o	4		Cruztomáhuac	E	o	o	24
	<u>Pascale del Oro</u>	E	o	o	5		Tlahuitepec	S	o	o	25
	<u>Potrerrillo Coapinole</u>	S	o	o	6		Cerro Tejón		o	o	26
	<u>Tuxtepec</u>	S	o	o	7		Loma Cuapinole			o	
	<u>Tlaxcalixtlahuaca</u>	S	o	o	8		Alchipahuac			o	
	<u>Xihuitepec</u>	S	o	o	9		Cerro Cuate			o	
	<u>Llano Silleta</u>		o	o	10		Malinaltepec	<u>El Cocoyul</u>	E	o	o
	<u>Pueblo Hidalgo</u>		o	o	11	<u>Rancho Viejo</u>		E	o	o	28
	<u>Arroyo Cumiapa</u>	S	o	o	12	<u>Potrerrillo del Rincón</u>		S	o	o	29
	<u>Coyul Chiquito</u>	S	o	o	13	<u>Sta. Cruz El Rincón</u>		S	o	o	30
	<u>Cuanacaxtitlán</u>	S	o	o	14	<u>Tilapa</u>		E	o	o	31
	<u>El Carmen</u>	S	o	o	15	<u>Tierra Colorada</u>		E	o	o	32
	<u>Miahuichán</u>	S	o	o	16	Colombia de Guadalupe		E	o	o	33
	<u>Río Iguapa</u>	S	o	o	17	Espino Blanco		E	o	o	34
	<u>Yoloxóchitl</u>	S	o	o	18	Mesón de Ixtlahuac		E	o	o	35
	<u>Arroyo Mixtecolapa</u>		o	o	19	Alacatlazala		E	o	o	36
	<u>Jolotichán</u>	S	o	o	20	Monte de Olivo	E			37	
<u>Cerro Limón</u>			o		Rancho Nuevo	E			38		
<u>Mixtecapa</u>			o	o	S. D. Vista Hermosa				39		
<u>Tierra Blanca</u>			o	o	Unión de las Peras Loma Mamey Tapayoltepec					c	
<u>Hondura Tigre</u>				b							
<u>Loma Bonita</u>			o						o		
<u>S. Luis Acatlan</u>	S						E			d	
Metlatónoc	<u>Chilixtlahuaca</u>	Z	o		42	Marquelia	<u>Caplín Chocolate</u>	S	o	o	40
	<u>Llano de las Flores I</u>	Z	o		43		<u>Zoyatlán</u>	S	o		41
	<u>Llano de las Flores II</u>	Z			44	Cochoapa	<u>Llano Perdido</u>	Z			54
	<u>S. Marcos</u>	Z	o		45		<u>Dos Ríos</u>	Z	o		55
	<u>Zitlaltepec</u>	Z	o		46		<u>S. Lucas</u>	Z			56
	<u>El Coyul</u>	Z			47	Copanatoyac	<u>Ocoapa</u>	E			57
	<u>El Zapote</u>	Z			48		<u>Oztocingo</u>		o		58
	<u>Francisco I. Madero</u>	Z			49		<u>Copanatoyac</u>				59
	<u>Lagunilla Yucutuni</u>	Z			50		<u>Tlaquetzalapa</u>				60
	<u>Llano Parota</u>			o	51		<u>Ocotequila</u>				61
	<u>Ojo de Pescado</u>			o	52	Atlamalcingo	<u>Hueheutepec</u>		o		62
	<u>Metlatónoc</u>				53		<u>S. Isidro Labrador</u>	E			63
	<u>No Savi Cani</u>			o			<u>Zilacayotitlan</u>				64
	<u>Ojo de Luna</u>			o		<u>Loma Perico</u>			o		
	<u>Plan Buenavista</u>			o		Tlapa	<u>S. Miguelito</u>	E			65
	<u>Sta. Cruz Cafetal</u>			o			Xalpatláhuac	<u>Xalpatláhuac</u>	E		
	<u>Ithia Ndichikoo</u>			o							
	<u>Lázaro Cárdenas</u>			o							

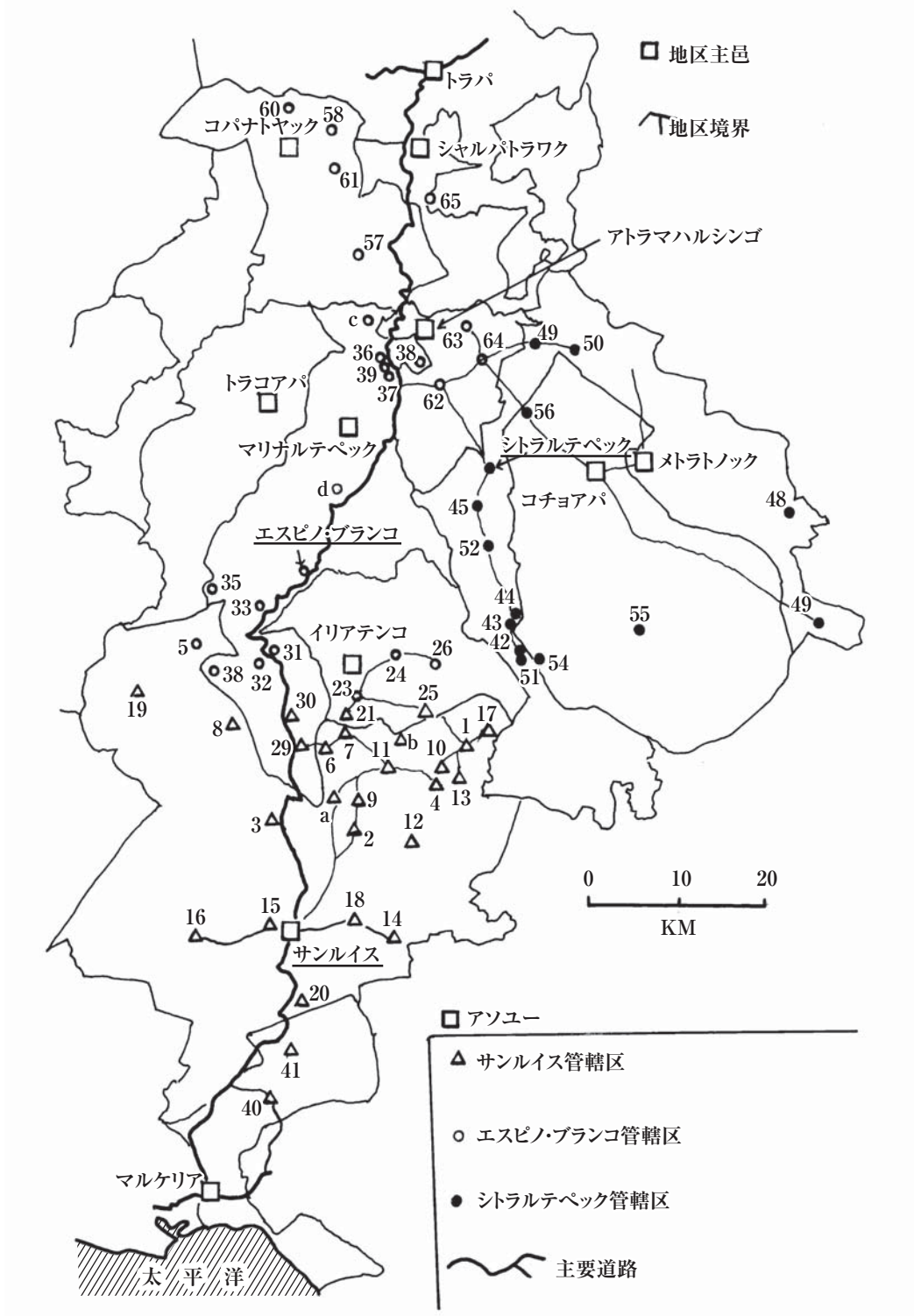
Buena Vista 下線は 1995 年 PC 創設時の参加共同体。

塗りつぶしの部分は 2008 年以前に参加の記録のあるもの。

番号は地図 1 に対応。

* S: サンルイス・アカトラン管区 E: エスピノ・ブランコ管区 Z: シトラルテベック管区

出典 : CRAC 1995; Martínez Sifuentes 2001: 35-37; Tlachinollan 2004: 113; CRAC 2007; Morales Sánchez 2009: 73-75



地図1 CRAC-PC 参加の共同体の分布（1995～2008年）
番号は表2に対応。

注

- 1) 本研究は前編と後編からなる。今号（前編）では、Ⅱ章まで掲載する。Ⅲ章以降と参考文献は、次号（後編）に掲載する。
- 2) Díaz Polanco (2004) が提起したこの概念は、サパティスタの自治教育に関する研究で援用されている (Cerdeña García 2011: 276-280)。
- 3) 2002 年以降プエブラ州北東部山地のクエツアランやウェウエトラの先住民法廷に関しては、Maldonado y Terven (2008), Chávez y Terven (2013) らの報告がある。
- 4) ゲレロ州は通常 7 地域に区分され、海岸部はアカプルコより西側のコスタグランデと東側のコスタチカに分かれる。断らないかぎり、本稿での海岸部はコスタチカを指すものである。
- 5) 以下の記述は、CRAC-PC (公式ウェブサイトとフェイスブック、広報誌)、CRAC 創設派 (公式サイトと系列広報誌 *Luciérnaga*)、山岳部人権組織トラチノリヤンや「平和のための国際サービス (SIPAZ)」の情報、ならびに Martínez Sifuentes (2001), Gasparello (2007), Reyes y Castro (2008), Morales Sánchez (2009, 2013), Sánchez Serrano (2012), Hernández Navarro (2014) らの研究に基づく。データに齟齬がある場合、妥当と思われるものを採用した。
- 6) 署名の最初の 2 枚はタイプで、28 共同体の地区委員と 6 つの社会組織の署名公印がある。3 枚目は手書きで、4 共同体の地区委員、エヒード当局者、監視委員会、小学校校長の署名公印がある。
- 7) CAIN は 1992 年 12 月創設という説があるが、マリオ・カンボス神父がインタビューで述べているように、公式には、1994 年 2 月 13 日に発足している (Sánchez Serrano 2013: 203; Márquez Zárate 2009: 145)。
- 8) 表 1 に示したように生産組織として Luzmont (1983 年創設), SSS.PCM (1989 年結成), URC (1991 年結成)、流通組織として CCA (1985 年結成) がある。
- 9) 南部山地農民組織の農民 17 名が州警察の待ち伏せ攻撃で殺害された。1996 年 3 月、知事ルベン・フィゲロアは引責辞任、アンヘル・アギーレが知事代行となった。
- 10) 当初、COI は CAIN のカンボス神父と Luzmont, CR500ARI, URC, CAC, SSS.PCM の派遣委員で構成されていたが、1996 年から各組織の PC 推進専任委員 (3 年任期) によって構成された。
- 11) 中学校から帰宅中に集団暴行のすえ殺害された少女の追悼・抗議集会であった集会には、招待された地区首長、地区警察、地区裁判所、地区検察庁などの上級機関当局の参列はなかった。
- 12) クアナカシュティトランの道路補助警察の最初の活動は、独立記念日前後のサンルイスまでの警備だった (Chávez 2014a; Peral y Ortega 2006)。同地区の地区委員は署名簿になく、地区委員の署名がない共同体も PC 創設集会に参加していた可能性がある。
- 13) 実際には旧式単発銃 18 丁だけ提供されただけで、メキシコ国籍でない Luzmont 顧問を排除せよという圧力があつたが、彼は CRAI 発足まで COI 地域調整委員を務めた (Chávez 2014b)。
- 14) 司法担当局への提出書類作成に必要なスペイン語識字能力のない人物が PC メンバーにはいた。
- 15) 事務所は通称タマリンドと呼ばれるもので、PRD 派地区当局はトラックや通信機材も提供した。
- 16) 2007 年や 2009 年にも条文付加などの修正が行われている。本稿では、内規として 2007 年の年次総会で採択されたものを参照した (Morales Sánchez 2009: 135-165)。
- 17) 法人 CRAI は、代表、事務長、会計と広報官 3 名と執行協議会で構成された。2001 年度、INI (4 万ペソ)、人権組織トラチノリヤン (4 千ペソ) のほか、サンルイスとマリナルテベック地区から月 6 万ペソと 1 万ペソの援助があつた (Gasparello 2007: 134-135)。
- 18) メスティソ系とされるサンルイス地区南部やマルケリア地区のカプリン・チョコラーテヤソヤトランといった共同体でも、先住民言語は話されていないものの、共同体集会、宗教祭礼、集団労働など「先住民的慣行」が堅持されている。

- 19) 名称変更の時期に関してはメスティソ系共同体が参加した1999年説と2011年3月説があるが、実際には2002年2月の最後通牒を契機としていた（González 2014; Chávez 2014b; Mercado 2014）。
- 20) 正副司令官と隊員4名で構成される村落警察（Policía del Pueblo）があったメトラトノック地区の10共同体は、2001年にCRAIC-PCに正式参加した。
- 21) 各管区の地域調整委員の数は当初3名だったが、3管区体制の第Ⅱ期（2010/3～2013/2）発足時はサンルイス管区4名、他2管区3名になり、現時点では各管区とも4名となっている。

〈論 文〉

Anton Chino: A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.

Maria de Deus Beites Manso / Lúcio de Sousa

キーワード

Diáspora, Escravatura, Mundo Ibérico, Feitiçaria, Cochim

要 旨

本稿では、奴隷アントン・チノの事例研究を通じて、16世紀と17世紀において奴隷制の規模拡大が見られ、アジア人のディアスポラが生じたことを証明することを目的としている。また、アントン・チノの人生を通して、一奴隷からの視点やスペイン植民地時代のアメリカ領における様々な社会的側面を浮き彫りにすることを試みる。なぜなら、アントン・チノが自由な身から奴隷への転身は、イベリア世界において非常に貴重な事例だからである。スペイン側とポルトガル側の宗教裁判におけるアントン・チノの資料を照合することで、明らかに違法な奴隷制度をめぐる、イベリア両国の司法当局と教会権力が内包する矛盾を理解する一助としたい。

I

A partir do século XVI, a chegada massiva de escravos africanos à América, moldou significativamente as sociedades em desenvolvimento¹⁾. O comércio negreiro constitui um dos elementos fundamentais para conhecer a organização colonial portuguesa e espanhola no continente Americano. Se por um lado a escravatura nas regiões atlânticas tem sido, nas últimas décadas, bastante estudada, por outro lado, quase pouco se conhece sobre casos de escravos asiáticos os quais, provenientes de espaços de colonização e circulação portuguesa, rumaram, via Pacífico, à América.

A partir da última década do séc. XX, os temas sobre a escravatura, começaram a abranger novas perspectivas de investigação, sobretudo para a América latina: o estudo da escravidão índia e a cultura escrava passaram a fazer parte da História do Brasil²⁾. As pesquisas relativas ao problema da escravatura na América, particularmente no Brasil, têm-se tornado tema crucial na História, mas o mesmo não podemos afirmar em relação a outras regiões do Império colonial europeu, particularmente o português. Neste domínio não só faltam estudos sobre a escravatura asiática³⁾ como pesquisas sobre a relação complexa e dinâmica entre escravos, senhores e outros grupos da sociedade, nos diferentes espaços do Império.

Inúmeras fontes históricas relatam a escravatura. Mas, nem sempre dispomos de conteúdos que nos permitam esboçar o destino daqueles que a História deixou de contar como um simples número, como mão-de-obra, na expressão de José Andrés-Gallego, *gente pouco importante*⁴⁾. Esta imagem estereotipada passou a dar lugar a diferentes leituras: o herói, os dissolutos, os hereges, em suma, constituiu uma parte fundamental para a construção das sociedades coloniais. Entre as fontes que nos ajudam a perceber o seu papel na História, temos os inúmeros processos da Inquisição. Também, eles foram *obscuros hereges*⁵⁾. Nas listas de bens confiscados é comum encontrarmos referências a alguns escravos. Estes também se tornaram vítimas da Inquisição, como sucedeu, por exemplo, ao escravo Sebastián de los Reys, o qual, demasiado alcoolizado, blasfemava e renegava a religião cristã e acabou preso nos cárceres mexicanos, durante três anos⁶⁾. Muitos dos escravos presos, numa tentativa de aligeirar a própria situação agem de acordo com os seus próprios interesses, tornam-se espíões e, de maneira dolosa, fazem passar informações entre os prisioneiros e respectivas famílias, quer fora, quer dentro dos cárceres. Mas, que significado tem o crime de heresia para o escravo? Terá o mesmo significado que para o homem livre a mesma heresia praticada pela classe dominante ou revestir-se-á dum conjunto de práticas e significados diferentes completamente autónomas? Como pode um escravo questionar a ortodoxia, desafiar as práticas culturais da sociedade vigente, quando, na sua maioria, são analfabetos? Que perigo apresentavam tais condutas?

De uma maneira geral tanto a feitiçaria como o pacto com o Demónio eram infrações que embaraçavam a justiça real, feriam os cânones da Igreja e podiam conduzir ao caos: “O comportamento dos feiticeiros, aos olhos dos legisladores, revelava o oposto das leis divinas e humanas, manifestando-se como o arquétipo da desordem universal, a quintessência da criminalidade sob todas as formas”⁷⁾. Tais atitudes revelam, igualmente, um processo de circularidade cultural, um caminho onde há influência recíproca entre a cultura das classes subalternas e das classes dominantes⁸⁾.

Delitos de feitiçaria, de magia negra vão surgindo em redor de importantes regiões mineiras, açucareiras e portuárias da América central. As pessoas denunciadas ou que se auto-denunciam perante as autoridades da Inquisição espanhola na América, são, na sua maioria, mulheres jovens, contrastando com um número relativamente pequeno de homens. Estas *moças*, como eram então designadas, têm algo em comum. Sejam solteiras, casadas ou viúvas, experienciam um quotidiano social extremamente moralista. Enquanto os homens desenvolvem inúmeras actividades e participam activamente na vida cívica das comunidades onde pertencem, as mulheres brancas tendem a definir-se socialmente através do matrimónio. É o estatuto do esposo que lhes confere o seu próprio estatuto. Dentro da tradição ibérica, a mulher é obrigada a seguir um comportamento sexual limitado. A mesma sociedade que condena os desvios femininos à norma estabelecida, aceita com indulgência o comportamento promíscuo dos homens, os quais mantêm inúmeras relações com indígenas fora do matrimónio (principalmente escravas)⁹⁾.

Tal como na Europa, não é, portanto, de estranhar que algumas mulheres, independentemente da condição social, procurem na magia e na feitiçaria, soluções para a sua infelicidade, como foi o caso de Mariana Vásquez, a qual seria repreendida pelo Santo Ofício, em Fevereiro de 1615, por ter colocado terra de um morto debaixo da almofada do marido, para que este não descobrisse a relação amorosa que mantinha fora do casamento. Mariana teria cozinhado para o marido um sexo de um asno e recorrida a feitiços com grãos de milho, envoltos em algodão, dentro de uma xícara com água, para prever o dia em que o esposo regressaria das suas viagens de negócios¹⁰⁾. Das 26 pessoas repreendidas nesse ano, apenas cinco são homens, sendo as restantes, mulheres¹¹⁾. Existem/aparecem também casos de escravos, os quais transferem para uma sociedade cristã, costumes das suas culturas autóctones. Um dos casos mais interessantes que ilustram a nossa ideia, é o do *negro Francisco Puntilla*, o qual, oriundo de África, era consultado pelos colonos com a finalidade de ajudar a curar doenças de pele, utilizando-se dum galinha negra, água e ervas, entre outras mezinhas. Era igualmente um extraordinário ventriloquista. Estas manifestações que escapavam ao universo católico pós-tridentino eram condenadas e punidas pela Igreja, através da intervenção directa da Inquisição, a qual procura destrinçar todas estas ocorrências nas inúmeras páginas dos processos, evitando “a encarnação diabólica da desobediência” e a personificação do “modelo supremo de subversão”¹²⁾.

II

O presente trabalho insere-se neste universo ambíguo da magia, dos feiticeiros e curandeiros. O objectivo principal é reconstruir a diáspora dum escravo originário de Cochim, na Costa do Malabar, Índia pelo mundo português e espanhol na segunda metade do século XVI.

Anton Chino, ou António Chino, é uma figura misteriosa, cujo testemunho permanece inédito nos arquivos da Inquisição Mexicana. A igreja local, perante a fama de feiticeiro, condena-o publicamente, excomungando-o e acusando-o à Inquisição¹³⁾.

António Chino nasce em Cochim, num lugar chamado Cuane, por volta do ano de 1585. Seu pai chamava-se Chene e tinha como profissão escrivão, enquanto a sua mãe, de nome Unieche, era doméstica¹⁴⁾. Como nos documentos analisados não existe qualquer referência a irmãos, deduzimos que António fosse filho único, algo bastante incomum nos núcleos familiares de Cochim, onde famílias numerosas eram sinónimo de mão-de-obra e maior riqueza. Esta informação, juntamente com a identificação da profissão do pai, também nos leva a especular que António não fosse oriundo de uma família casta inferior. Um factor que corrobora este raciocínio é o facto de António Chino ser alfabetizado, ferramenta de grande utilidade na profissão que desenvolvia: comerciante. Já adulto, casaria com uma jovem local, de nome Tirimala¹⁵⁾. O casal habitaria na região de Cochim, possivelmente na casa de seus pais, já que a mãe de António, entretanto viúva, também

vivia com eles. A morte do pai, de seu nome Chene, teria um forte impacto na sua vida, transformando-o no único chefe da família e, como tal, provedor do sustento¹⁶⁾. Como comerciante de pimenta, António viajaria por toda a Costa Malabar, entrando em contacto com o mosaico de culturas e religiões que negociavam nesta região: hindus, árabes, judeus, cristãos¹⁷⁾. Tendo completado trinta anos, um infeliz episódio iria marcar o destino de António para sempre, levando-o a viajar pelo mundo português e espanhol do século XVI. Como era costume nessa época na região de Cochim, António, mercador, juntamente com nove *chinos* dirigir-se-iam a um barco luso para vender pimenta. Depois da transacção, possivelmente por ser uma hora tardia, este grupo de comerciantes aceitaria a sugestão da tripulação portuguesa e pernoitaria na embarcação. Confiando nos lusos, apenas tarde demais compreenderiam que se travava duma armadilha, urdida eficazmente pelos portugueses para ficarem com a pimenta gratuitamente tendo reduzido estes mercadores a escravos. Aprisionados contra sua vontade e, para não deixar vestígios da ocorrência, o barco *alçaria as velas* com destino a Malaca¹⁸⁾. O local onde este episódio se teria passado, permanece desconhecido, porém, é bastante provável ter sido em Cochim, já que esta região era um dos principais centros fornecedores de pimenta e por ser habitada desde o início do século XVI por uma importante comunidade europeia¹⁹⁾.

Chegados a Malaca, os comerciantes escravizados são vendidos aos habitantes da cidade. Apesar das páginas documentais não o revelarem, não é difícil imaginar os protestos dos prisioneiros, os quais vêem a sua liberdade, de um momento para o outro, coarctada e um destino sombrio à sua frente. A situação de António *Chino* é ainda mais complicada, dada a circunstância de ser o único elemento provedor de subsistência da família. Este episódio também demonstra como a escravatura era muitas vezes vivida à margem do Universo legislativo da época, desobedecendo claramente ao código de valores defendidos pela Coroa e Igreja²⁰⁾.

António Chino é comprado por *benti sinco fardados que bale cada uno sis reales*²¹⁾, ou seja, por 155 reales, a moeda então corrente na cidade. O primeiro dono seria um piloto de nome António Gomes²²⁾, que o conduziu à Igreja para ser convertido ao catolicismo e baptizado. A partir desse momento, o escravo recebe o nome do seu proprietário²³⁾, passando a ser conhecido como *Anton Chino*, ou António Chino. Em Malaca viveria cinco anos, de 1615 a 1620. Relativamente a este período, desconhecemos as tarefas que desempenhava, mas estariam provavelmente relacionadas com o comércio da pimenta. Existe uma forte possibilidade de que, devido aos conhecimentos linguísticos de António, este tivesse servido como tradutor, ou *jurubaça*, termo com que então eram designadas as pessoas que intermediavam os negócios entre europeus e comerciantes asiáticos, desde o Sudeste-Asiático, até ao Japão.

De Malaca, António Gomes viaja com este escravo para Macassar e Ilhas Molucas, vendendo-o a um outro português de nome Francisco Farinhas, pela quantia de cinquenta pesos. Este mercador teria ligações com as Filipinas, pelo que o destino seguinte de

António foi Manila. Aqui, o comerciante Francisco Farinhas vendeu-o a um calafate²⁴⁾ de nome Miguel, o qual viajava para Acapulco a bordo do famoso galeão comercial que ligava a Ásia à América espanhola²⁵⁾. Na América, António Chino é novamente vendido pelo valor de cento e cinquenta pesos a um homem de apelido Fanvexa. Sobre este último, desconhecemos o nome próprio, profissão, ou nacionalidade. De qualquer forma, existe uma elevada probabilidade de se tratar de um comerciante de escravos, já que pouco tempo depois, António é levado para a cidade de Vera Cruz, no actual México, onde é uma vez mais vendido pelo preço de duzentos e cinquenta pesos. Nesta ocasião, o capitão português chama-se Jacinto da Silva²⁶⁾, com quem viveria mais de dezasseis anos, desde 1634 até 1650, na região de Cuinacan. António, além de servir o seu amo, dedicar-se-ia à adivinhação, prevendo o futuro dos habitantes da povoação e, paralelamente, descobrindo os autores de roubos. Como recompensa, receberia algum dinheiro, prontamente gasto na compra de chocolate ou tabaco²⁷⁾. Em pouco tempo, as suas previsões correctas granjeiam-lhe a fama entre a população, e ganha a alcunha de *o sábio* ou o *sahori*²⁸⁾. Os seus patrões Jacinto Silva e a esposa Dona Gracia Robles, permitem que António exerça esta actividade, todas as sextas-feiras²⁹⁾, dia da semana em que recebia graça divina. Quem o consultava, descrevia que *Antonio Chino* afirmava ter *un Christo en el paladar*³⁰⁾, e que quando terminava as suas visões, invocava o nome da Virgem Maria e de Deus para o auxiliarem³¹⁾. Em pouco tempo, a reputação de António Chino torna-o conhecido e frequentado pela elite local *diciendo cosas futuras y por venir, mirando las rayas de las manos*³²⁾.

A fama do escravo António como feiticeiro e adivinho chega então à Inquisição do México, onde é instaurado um processo de averiguação. A primeira testemunha a depor contra ele seria Juan de Vargas, quarenta e seis anos, de profissão sapateiro³³⁾. Esta testemunha afirmaria, a 20 de Março de 1650 que, um ano antes, teria presenciado António Chino a ler as mãos de Maria Belo, filha de Juan Gomes Belo, um curtidor de peles que habitava na vila de Cuinacan. No decorrer da leitura, o escravo previra que a sua cliente iria ter muita sorte na vida, enriquecendo. Seguidamente, o próprio curtidor, cede à curiosidade e pede ao escravo para lhe ler o futuro, acertando em tudo o que previra³⁴⁾. Este episódio teria um grande impacto na família de Juan Gomes Belo já que, quando este último parte com um escravo para realizar um negócio e não regressa à hora prevista, a sua esposa Margarida de Vila Gomez, estranhando o atraso em regressar, recorre a António Chino para lhe prever o futuro. Para sua surpresa é-lhe dito que apenas o escravo que acompanhara o seu marido regressaria a casa, facto que se comprova ser verdade³⁵⁾. Ainda na casa de Margarida Vila Gomez, António pede a uma sobrinha da casa para lhe mostrar as mãos, prevendo-lhe também o futuro³⁶⁾ e revelando-lhe que seria freira³⁷⁾.

Assustada com o sucedido, Margarida Vila Gomez acusa-o de feitiçaria, ao que António contrapõe prontamente não ser feiticeiro, e que o dom de adivinhar o futuro era uma graça que lhe tinha sido concedida por Deus.

Noutra ocasião seria a vez de Jusepa de Vargas, uma jovem de 17 anos, a quem previra que casaria dentro de pouco tempo³⁸⁾. Nesta ocasião estariam presentes o sapateiro Juan de Vargas, a esposa Jerónima de Atiaga e a tia de Jusepa de Vargas, de nome Margarida de Vargas. O sapateiro, meses mais tarde, perante o Santo Ofício do México, afirmaria que tudo se trataria de um embuste do escravo António Chino, o qual não possuía quaisquer poderes divinatórios.

Quando na povoação ocorriam furtos, os lesados também recorriam a António Chino para os resolver, como aconteceria com Domingo de Cuedo, um jovem de 24 anos, que, juntamente com o irmão Alonso de Cuedo, recorrem aos seus serviços. Acompanhados pelos respectivos escravos, dois mulatos e uma mestiça, esperam por António Chino junto à ponte do rio. Interceptado, o escravo tenta adivinhar os autores e o lugar onde se esconderam os bens roubados. As previsões imprecisas, acabariam por não ajudar os irmãos e o furto permaneceria por resolver. Independentemente disso, os irmãos Cuedo e escravos ainda recorrem a António Chino para que lhes leia as mãos e preveja o futuro. Como testemunharia Domingo de Cuedo, a 20 de Março de 1650, perante o Santo Ofício, estas previsões seriam correctas³⁹⁾.

A mãe da patroa de António Chino, Dona Maria Robles também recorreria ao escravo para encontrar um bem furtado. Dona Maria de Robles era uma mulher muito rica, casada com um comerciante de prata de nome Juan Gonzalez de Cobos. Certo dia, em sua casa, daria pela falta de um prato de prata. António Chino descobriria o autor do roubo e o prato acabaria sendo recuperado⁴⁰⁾.

Contudo, as previsões do escravo também causavam inimizades, como aconteceria quando ao ler a mão de Francisco de Villa Alba, afirma que no futuro seria padre. O adolescente, de catorze anos, aturdido com aquela revelação, partilhá-la-ia com a mãe, Maria de Villa Alba, a qual, descontente, o acusa à Santa Inquisição de feitiçaria⁴¹⁾.

Outro marcante testemunho sobre António Chino é da autoria do Francisco Arlancon Arrieiro, de vinte e sete anos, o qual revela perante o Santo Ofício que o escravo dizia na povoação que tinha recebido uma graça divina para todas as sextas-feiras adivinhar os furtos ocorridos na povoação⁴²⁾. Quando solicitado noutros dias da semana, o escravo recusava-se a adivinhar, alegando que apenas à sexta-feira recebia a graça de Deus. Seria nesse dia da semana que a mãe do próprio Francisco Arlacon, Luísa de Arlacon, pediria a António para adivinhar quem lhe tinha roubado algumas coisas que faltavam na sua habitação. Este identificaria o autor dos furtos: tratava-se de uma índia, escrava da casa, previsão que se viria a confirmar⁴³⁾.

Além dos cidadãos livres da vila, também os escravos da povoação recorrem aos poderes, supostamente sobrenaturais, de António Chino. São eles quem aconselham os seus donos a recorrerem aos serviços do escravo de Cochim⁴⁴⁾. Este aspecto demonstra a importância que um simples escravo começa a deter na comunidade, algo visto com grande desconfiança pela Inquisição Mexicana. Dois anos após ter sido iniciado o processo

de investigação dos poderes de António Chino, reunidas as informações necessárias para o acusar formalmente, é imitado um mandato de captura. Como demonstra a documentação inquisitorial, o escravo é finalmente preso a 5 de Março de 1652. Os familiares do Santo Ofício da região de Cuinacan, ficavam ainda encarregados de confiscar todos os bens de António, inclusive a cama e roupa, assim como adquirir duzentos ducados para os gastos da Inquisição⁴⁵⁾.

A 9 de Março de 1652 chega uma carta ao Santo Ofício da autoria de frei Lourenço de Figueiroa, o qual informa a Inquisição que o escravo António Chino tinha sido preso e que Dona Gracia Robles e o filho António de Silva iriam enviar cinquenta pesos para os gastos da Inquisição. Paralelamente, a mesma missiva, informa as autoridades eclesiásticas que o escravo não possuía quaisquer bens, nem cama em que dormir⁴⁶⁾. O motivo desta confiscação de bens estava relacionado com informações que o Santo Ofício obtivera das suas testemunhas de que António Chino recebia dinheiro pelos seus serviços. Sendo uma pessoa muito solicitada, a Inquisição pensou que este teria muitos bens na sua posse, algo que não se viria a confirmar.

Enviado para os cárceres secretos da Cidade do México, António apresenta-se perante a Inquisição a 9 de Março de 1652⁴⁷⁾, onde revela a sua genealogia e como se tornara escravo. No seu *discurso de vida* percebemos como fora raptado e reduzido à escravatura, e a ilegalidade da captura, é assunto sobre o qual os inquisidores não manifestam qualquer opinião. Em rigor, António seria um homem livre, porém a ausência de direitos quando se é escravo e o desconhecimento do contexto social colonial quando se é estrangeiro, impedem semelhante tentativa. Para a sua liberdade era necessária a ajuda dos documentos oficiais e a vontade da Igreja.

António Chino no decurso do interrogatório e como tentativa de se ilibar das acusações confessa espontaneamente que, antes de ter sido convertido ao Cristianismo, enganava as pessoas acertando algumas vezes e falhando outras, mas desde que se convertera ao catolicismo romano, nunca mais realizara tal tarefa⁴⁸⁾. No decorrer da confissão, António Chino admite não possuir dons divinatórios já que a sua “arte” era fruto de um estratagemas no qual tinham participado várias pessoas. É neste momento do interrogatório que o escravo de Cochim revela que, sempre que os seus serviços eram solicitados pela elite local, alguns colaboradores seus, conhecendo os autores dos furtos informavam-no e este fornecia então a informação aos lesados. Os ajudantes eram tecedores mulatos, negros e mestiços, ou seja, escravos⁴⁹⁾. Como recompensa o dinheiro que ganhava, servia para comprar chocolate e tabaco, o qual era repartido pelos ajudantes⁵⁰⁾. Após revelar esta informação aos Inquisidores, António relata pormenorizadamente como enganara cada uma das pessoas que tinham testemunhado contra si. É então possível identificar quais os escravos do povoado que participavam neste embuste, informando António sobre o que tinha acontecido nas suas casas assim como os autores dos roubos.

Na tentativa de ilibar António das acusações, o seu advogado salientou perante o

Tribunal do Santo Ofício que António “*es incapaz e esta poco instruido en las cosas de nuestra Santa Fee, por ser nuebamente conbertido a ella porque deciende de gentiles, que ni ello ni este confessante saben las delicadezas de los articulos de la fee, y por estas razones se ade tener misericordia de el*”⁵¹⁾. Todavia, o estatuto de recém-convertido não o ilibou da prisão e de lhe serem aplicados publicamente duzentos açoites pelas ruas de Haxcalaque, nos mesmos lugares que costumava frequentar antes de ser preso⁵²⁾.

Após o castigo aplicado a António Chino, mais nenhum documento atesta a sua presença no Novo Mundo. Não sabemos se teria regressado ao anterior ofício, ou como teria reagido a comunidade local a todo este processo. Independente do desfecho que teriam os últimos anos de vida de António, a sua condição de escravo permaneceria imutável e os seus embustes mágicos, inclinam-nos a acreditar que tenham contribuído para um desenlace trágico.

III

Mais do que casos isolados, estes processos, são consequência da acção de doutrinação, dentro do contexto dos impérios ibéricos: “A conceitualização da luta entre o caminho verdadeiro e os falsos caminhos para a salvação e o desejo da Igreja de salvar as almas com o batismo davam sustentação ao impulso missionário e serviam de justificativa para o avanço imperial de Portugal e Castela”⁵³⁾. À semelhança do que acontecia na Europa, no século XVI, alguns movimentos religiosos – falamos das Ordens religiosas em geral -, pretendiam assumir-se como instrumentos de integração social. Este século, também representou o domínio da religião católica sobre a heterodoxia, o paganismo e o Islão⁵⁴⁾.

A Europa do séc. XVI e XVII vivia mergulhada entre a religião e o ocultismo, assunto que era visto pelos teólogos como superstição, inimigos da ortodoxia e provas da acção do demónio. Estamos, portanto, num cruzamento entre o cristianismo e um mundo que incluía a magia, a bruxaria, a demonologia, no seu quotidiano. O universo mágico saiu das fronteiras da Europa e aí cruzou-se com outras práticas, desenvolvendo-se um processo de fusão e recombinação cultural, um “processo multidirecional de absorção, adaptação e incorporação”⁵⁵⁾. Repara-se que neste processo eram os donos do escravo que o incentivavam/permitiam a prática da feitiçaria e muitos colonos brancos recorriam aos seus serviços.

A coabitação entre escravos e senhores estabeleceu uma estreita rede de relações entre os dois mundos. Muitos dos escravos convertidos tornam-se mediadores culturais, intermediários entre as duas culturas, entre os dois mundos diferentes e, por vezes, para sobreviverem apropriam-se e recriam algumas experiências culturais⁵⁶⁾. Convém igualmente salientar que a adaptação dos escravos à sociedade colonial exigia-lhes uma determinada conduta. Por isso, para a Igreja, investigar os valores apropriados por estes

grupos marginais na sequência da conversão era uma tarefa importante. Era uma forma de impedir que os *valores cristãos* fossem adulterados. Os escravos podiam ser perigosos para o funcionamento dessa sociedade colonial, pelo que tinham de ser vigiados e punidos. Paralelamente, para além da fé, também adoptavam uma gama de superstições que abrangiam experiências que iam desde a quiromancia e a alquimia até à adivinhação, a astrologia, mas também práticas definidas como magia, bruxaria e feitiçaria⁵⁷⁾. À medida que as sociedades se cruzam fora da Europa, este tipo de crimes brotam com maior facilidade, por se tratarem de regiões afastadas e onde o controlo moral e religioso é mais difícil. Para coarctar este problema, os tribunais hispânicos, a partir de 1520, alargariam a perseguição a um maior conjunto de crimes, da bigamia à blasfémia, da transmissão sexual às preposições heréticas⁵⁸⁾.

O percurso de António Chino é um bom exemplo do que acabamos de escrever e transpõe o universo da colonização atlântica. Incentiva-nos a olhar duma maneira mais abrangente a questão da colonização ibérica na época moderna. Assim, não se pode pensar, apenas, na prática de um comércio negreiro nem na redução do índio à escravatura. Também, no Oriente o processo criou raízes. Esta fonte histórica revela-se fundamental para esclarecer alguns assuntos “menos oficiais” dos Impérios Ibérico, a existência do *Império Sombra*, isto é, a colonização feita à revelia da coroa, urdida pelas vontades de particulares ou de agentes régios que por aí circulavam, por sua livre iniciativa⁵⁹⁾.

António Chino encontrou no uso da feitiçaria/adivinhação uma estratégia para a sobrevivência e para a inserção na sociedade colonial. Enquanto os escravos que trabalhavam nas minas tinham uma existência limitada a meses ou, com alguma sorte, a poucos anos; os escravos que serviam a elite europeia na constelação de pequenas povoações coloniais mexicanas, procuravam manipular a estrutura social e moral onde estavam inseridos e viverem mais anos⁶⁰⁾. Este explorou habilmente todos estes matizes e, através dum subterfúgio, consegue ser respeitado e admirado na comunidade onde vive. Graças ao seu carácter e conhecimento da psicologia humana, António Chino logrará escapar ao inferno dos trabalhos forçados, demonstrando habilidades e capacidades extraordinárias. A autoridade religiosa que adquire é uma ameaça para a hegemonia da Igreja local e culminará na sua prisão, julgamento e pena de duzentos açoites. Assumindo os delitos cometidos, explora a sua debilidade como *cristão recentemente convertido*, procurando assim reduzir a pena. Contudo, a Inquisição do México, procura fazer de António um exemplo vivo para a comunidade, destruindo as crenças paralelas que se desenvolvem em torno do catolicismo com a sua punição pública.

Notas

- 1) Para uma melhor análise sobre o papel dos escravos no Brasil colonial, consultar: Stuart Schwartz,

- Segredos Internos. Engenhos e escravos na sociedade colonial*, S. Paulo, Companhia das Letras, 2005.
- 2) Stuart Schwart, *Escravos, roceiros e rebeldes*, S. Paulo, EDUSC, 2001, p.56.
 - 3) Ao contrário do que muitas das vezes se faz crer, a escravatura, não foi apenas, africana.
 - 4) José Andrés-Gallego, *História da Gente Pouco Importante*, Lisboa, Editorial Estampa, 1993.
 - 5) Carlo Ginzburg, *O queijo e os vermes. O cotidiano e as ideias de um Moleiro Perseguido pela Inquisição*, S. Paulo, Companhia das Letras, 2004.
Este submundo dos calabouços, fértil em estratégias e jogos de poder, apresenta-nos, por vezes, *personagens picarescos*, cujas histórias permanecem ocultas nos inúmeros processos que enchem as prateleiras das antigas prisões do antigo *Palacio Negro de Lecumberri* (1900-1976), actualmente convertido em *Archivo General de la Nación* (desde 1982).
 - 6) Solange Alberro, *Inquisición y sociedad en México 1571-1700*, México, Fondo de Cultura Económica, 2004 (1988), p.462.
 - 7) Giraldo Pieroni, *Os Excluídos do Reino*, Brasília, UnB, 2000, p.165.
 - 8) Carlo Ginzburg, *O queijo e os vermes. O cotidiano e as ideias de um Moleiro Perseguido pela Inquisição*, p.25.
 - 9) Sobre as relações amorosas na colónia, consultar: Mary Del Priore, *História do Amor no Brasil*, S. Paulo, Editora Contexto, 2005, pp.11-118.
 - 10) AGN, volume 305, exp.11.
 - 11) *Ibid.*, exp.11.
 - 12) Giraldo Pieroni, *Os Excluídos do Reino*, p.165.
 - 13) AGN, Inquisición, vol.456, expediente 2, fol. 71v.
 - 14) *Ibid.*, fol. 70f.
 - 15) *Ibid.*, fol. 70f.
 - 16) *Ibid.*, fol. 70f.
 - 17) Donald F. Lach and Edwin J. Van Kley, *Asia in the Making of Europe, Volume III: A Century of Advance. Book I: Trade, Missions, Literature*, London, University Of Chicago Press, 1998.
Shihan de S. Jayasuriya, *The African Diaspora in Asian Trade Routes and Cultural Memories*, Edwin Mellen Press, 2010.
 - 18) AGN, Inquisición, vol.456, expediente 2, fol. 70v.
 - 19) Liam Matthew Brockey (editor), *Portuguese Colonial Cities in the Early Modern World*, Farnham, Burlington, Ashgate, 2008.
José Alberto Rodrigues da Silva Tavim, *Judeus e cristãos-novos de Cochim : História e memória (1500-1662)*, Braga, Ed. APPACDM, 2004.
 - 20) Ronaldo Vainfas, *Ideologia & escravidão : os letrados e a sociedade escravista no Brasil Colonial*, Petrópolis, Vozes, 1986.
 - 21) AGN, Inquisición, vol.456, expediente 2, fol. 71f.
 - 22) *Ibid.*, fol. 70v.
 - 23) *Ibid.*, fol. 71f.
 - 24) Pessoa que trabalhava nos navios, utilizando estopa alcatroada para vedar as juntas dos navios, das aduelas, tampos de pipa, etc.
 - 25) O galeão de Manila.
Frederic P Miller, Agnes F Vandome, John McBrewster, *Manila Galleon*, VDM Publishing House Ltd., 2010.

- John Robert Fisher, *The Economic Aspects of Spanish Imperialism in America: 1492-1810*, Liverpool, Liverpool Univ. Press, 1997, pp.65-71.
- 26) AGN, Inquisición, vol.456, expediente 2, fol. 71f.
 - 27) *Ibid.*, fol. 71f.
 - 28) *Ibid.*, fol. 56f.
 - 29) *Ibid.*, fol. 71f.
 - 30) *Ibid.*, fol. 64v.
 - 31) *Ibid.*, fol. 64v.
 - 32) *Ibid.*, fol. 56f.
 - 33) *Ibid.*, fol. 60v.
 - 34) *Ibid.*, fol. 60v.-61f.
 - 35) Testemunho de Margarida de Villa Gomez, de 26 de Março de 1650. *Ibid*, fol. 64f.
 - 36) *Ibid.*, fol. 64f.
 - 37) *Ibid.*, fol. 65f.
 - 38) Testemunho de Juan de Vargas, de 20 de Março de 1650, 60v. *Ibid.*, 60v.
 - 39) *Ibid.*, fol. 61v.
 - 40) *Ibid.*, fol. 61v
 - 41) *Ibid.*, fol. 63f.
 - 42) *Ibid.*, fol. 64v.
 - 43) *Ibid.*, fol. 64v
 - 44) *Ibid.*, fol. 61f, 61v.
 - 45) *Ibid.*, fol. 66.
 - 46) *Ibid.*, fol. 68f.
 - 47) *Ibid.*, fol. 70f.
 - 48) *Ibid.*, fol. 71f.
 - 49) *Ibid.*, fol. 72v.
 - 50) *Ibid.*, fol. 71v.
 - 51) *Ibid.*, fol. 85v.
 - 52) *Ibid.*, fol. 85f.
 - 53) Stuart Schwartz, *Cada um na sua lei. Tolerância religiosa e salvação no mundo atlântico ibérico*, S. Paulo, Companhia das Letras, 2009, p.163.
 - 54) Giovanna Fiuma, “António Etíope, o Mouro: O Escravinho Santo e o Preto Eremita”, *Afro-Ásia*, Salvador, CEAO, Universidade Federal da Bahia, nº 40, 2011, p.69.
 - 55) Stuart Schwartz, *Cada um na sua lei. Tolerância religiosa e salvação no mundo atlântico ibérico*, pp.259, 261. Para uma análise sobre a circularidade e mestiçagens culturais ler: Carlo Ginzburgo, *História noturna: decifrando o sabá*, São Paulo, Companhia das Letras, 1991; Ronaldo Vainfas, *A heresia dos índios, catolicismo e rebeldia no Brasil colonial*, São Paulo, Companhia das Letras, 1995. Serge Gruzinski. “Las repercusiones de la conquista: la experiencia novo hispana”, in Carmen Bernand (org.). Descubrimiento, conquista y colonización de América a quinientos años. Mexico: Fondo de Cultura Económica, 1994. pp.148-171.
 - 56) Giovanna Fiuma fala-nos do caso dos renegados. Mas, o mesmo, em nossa opinião, se pode aplicar à conversão de qualquer Homem. Ler pp.70-71.
 - 57) Stuart Schwartz, *Cada um na sua lei. Tolerância religiosa e salvação no mundo atlântico ibérico*, p.

152.

- 58) Os quatro Tribunais portugueses perseguiram os mesmos delitos que os espanhóis, mas mantiveram um enfoque muito atento no criptojudaísmo - Stuart Schwartz, *Cada um na sua lei. Tolerância religiosa e salvação no mundo atlântico ibérico*, pp.150 e 157.
- 59) George Bryan Souza, *The Survival of Empire: Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea 1630-1754*, Cambridge, Cambridge University Press, 2004(1986).
Francisco Bethencourt; Diogo Ramada Curto, *Portuguese Oceanic Expansion : 1400-1800*, Cambridge, Cambridge Univ. Press, 2007.
- 60) Solange Alberro, *Inquisición y sociedad en México 1571-1700*, México, Fondo de Cultura Económica, 2004 (1988), pp.453-485.

〈論文〉 16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察¹⁾

立 岩 礼 子

キーワード

Nicaragua, El Realejo, el puerto de El Realejo, astillero, política naval española

Resumen

El presente trabajo es un análisis sobre el puerto de El Realejo en la costa nicaragüense del Pacífico durante la época colonial, ocupándose también de la revisión historiográfica. A pesar de la poca atención que han puesto los historiadores en el desarrollo de dicho puerto, El Realejo tuvo su apogeo durante el siglo XVI no sólo gracias al comercio de esclavos y de cacao sino también, gracias a la construcción de navíos, pues la región reunía las condiciones necesarias para construir barcos: madera fuerte y resistente para edificar el cuerpo de la nave, ganado y pino para obtener grasa tanto del origen animal y vegetal para barnizar la madera, mano de obra indígena con la experiencia laboral en la industria textil para elaborar telas de las velas. El hecho de que salían de este puerto los barcos con destino a Manila y a Perú demuestra que fue uno de los centros astilleros más importantes de la Nueva España ya que fue un puerto seguro y protegido por localizarse en el interior de la costa, hasta que lo descubrieron los piratas y comenzaron a atacarlo hacia fines del siglo XVI.

はじめに

1519年にバスコ・ヌーニェス・デ・バルボアがパナマ地峡を抜けて「南の海 Mar de Sur」、つまり太平洋を発見すると、スペイン人の次なる関心は、この太平洋に航路を開き、商業価値が高かった香料が自生するモルッカ諸島を擁するアジアを征服することに向けられた²⁾。そこで、未知なる大海原を探索する船を建造し、造船業を支えるインフラ整備が必要となった。まだメキシコもペルーも征服がされていなかった当時、ニカラグアからコスタリカにかけての太平洋沿岸が、スペイン人の拠点プエルトリコと太平洋の中間に位置することから、この一帯が16世紀を通じて造船の拠点となった。

そこで本稿では、ヌエバ・エスパーニャ領太平洋岸における造船の拠点としてニカラグアに注目し、植民地時代に当該地域において造船拠点が成立した条件について考察を試みる。とりわけ、ニカラグア太平洋沿岸において主要な拠点となったと言われるエルレアレホ (El Realejo) を中心に分析を進める。まず、当該テーマに関する史料および先行研究について整理し、次に、造船業が成立する条件について概観し、その例としてエルレアレホについて考察を加える。

1. 研究概要及び資料について

まず、ニカラグアを中心とした中米地域について、スペイン人入植以前あるいは入植時に、造船に適した環境があったのかどうかを検証する必要がある。造船には船の材料となる材木はもちろん、大勢の入植者が動員されたと考えられ、従って、自然環境や先住民の様子を把握することはその第一歩であろう。その意味で、王立記録者ゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエドが執筆した *Historia general y natural de las Indias* の第4巻第3部が貴重な情報を提供している。彼は1514年に初代ニカラグア総督となるペドロ・アリアス・ダビラとともにアメリカ大陸に渡って、1年半過ごした。その後1520年に再訪している。さらには1526年から1530年まで太平洋岸を視察し、1528年にニカラグアのニカラオ族と接触している。

修道士たちによる記録も貴重である。1528年、メルセ会士フランシスコ・デ・ボバディーリャは、アリアス・ダビラに同行し、ニカラグア太平洋側に位置するレオンを訪れ、先住民の様子を伝えている。しかし、レオン=ポルティエリャ³⁾によれば、デ・ボバディーリャが総督を喜ばそうとニカラオ族の風習を歪めて伝えた痕跡が否めないことを指摘している⁴⁾。また、ディエゴ・デ・ドゥランも *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme* にてニカラグアについて記録している。同様に、フランシスコ会修道士モトリニアもニカラグアについて言及している。

一方、征服者たちも太平洋沿岸の探索を試み、記録を残している。とくにヌエバ・エスパーニャからはエルナン・コルテスが太平洋の探索に熱心で、アステカ帝国首都テノチティトラン陥落後、早々に中米へ探検隊を派遣し、ホンジュラスに到達している。ニカラグアを征服したのはヒル・ゴンサレス・ダビラであった。1524年のことである。ゴンサレス・ダビラも征服の様子を国王に報告している。

スペイン植民地時代の海運政策に関しては、Magdalena de Pazzis Pi Corrales, “La marina de los Austrias: aproximación historiográfica y perspectiva investigadora”, *Cuadernos monográficos del Instituto de Historia y Cultura Naval*, No. 56, Madrid, 2008 において、カトリック両王時代からの一次資料及び21世紀初頭までの先行研究が整理してある。近年 Ivan Valdez-Bubnov が *Poder naval y modernización del estado: política de construcción naval española (siglos XVI-XVIII)* (México, UNAM, 2011) を発表し、スペイン中世末期を含め16世紀から18世紀までのスペインにおける造船と海運政策について、とりわけフェリペ5世のもとに行われたブルボン改革について詳細に論じている。この海運政策の見直しに伴い、18世紀の研究に集中している傾向は否めないが、スペイン無敵艦隊を軸にスペイン王室の海運政策に関する研究は蓄積があり、スペイン領アメリカにおいてはカリブの要塞の建造や防衛、17世紀のバルロベント艦隊の編成、大西洋貿易における輸送船舶の安全と技術的な改善と向上に関する研究は存在する。造船については Carlos Martínez Shaw 及び Marina Alfonso Mola による “Los astilleros de la América colonial”, *Historia general de América Latina*, Vol. 3, Tomo 1, UNESCO, 1999, pp. 279-304 に詳しい。また、太平洋発見500年の記念の年を迎え、近年、ガレオン貿易についての研究に関心が集まり、東アジアにおける取引において通貨としての役割を担ったポトシ銀の流出をはじめ、広く研究されるようになってきている。しかしながら、中米についての研究は、造船に限らず、植民地時代全般について、18世紀ブルボン改革以降のハバナ港を中心とする研究に比べれば、まだ研究の余地は残されていると言って差し支えないだろう。

ニカラグアの植民地史研究は量的に多くはないが、一定の資料に裏打ちされた成果が発表されている。中米全体を網羅的に研究したものは、人口学から植民地社会にアプローチした研究として MacLeod (2007) があり、カカオやコチニールなど農業を中心として植民地社会が分析されている。マナグアにあるイエズス会が設立したセントロアメリカナ大学 (Universidad Centroamericana) の中米及びニカラグア歴史研究所 (Instituto de Historia de Nicaragua y Centroamérica) は *Revista de Historia* を発行している。第1号には前述のゴンサレス・ダビラやアンドレス・ニーニョによる探検についての論文が掲載されている。また、2006年には歴史文書を抜粋してニカラグアの歴史をたどった歴史参考書 *Nicaragua en los documentos* が発行されている。ニカラグアに関する文書を逆にたどることができる。ニカラグアの歴史家 Jaime Incer が執筆した *Nicaragua: viajes, rutas y encuentros, 1502-1838* (1989) は、ニカラグアの植民地時代を理解する基礎的な文献である。エルアレホの港及び造船所については、David R. Radell 及び James Parsons の共著論文 “Realejo: A Forgotten Colonial Port and Shipbuilding Center in Nicaragua” (1971) が貴重である。スペインのサラマンカ大学には、コスタリカ出身の研究者を中心とした中米の歴史研究チームがたちあがっており、その成果にも注目する必要がある⁵⁾。

スペインのインディアス総文書館所蔵のニカラグアに関する文書は、16世紀が中心である。その内容は、勅令、任命書、教会関係、市参事会議員職の売買、故人の遺産目録など多岐にわたっている。行政上、ニカラグアはヌエバ・エスパーニャ副王領グアテマラ総督領であったため、基本的にはグアテマラ・アウディエンシア管轄だが、関連文書はパナマやフィリピンのアウディエンシアに及んでいる。16世紀にニカラグアが一定の重要性を占めた一端をうかがわせている。残念ながら、この膨大な資料を駆使した研究はこれからである。

当該地域についての情報は、イギリスやオランダの私掠船の動向やスペイン王室による独占貿易に反した不法貿易の実態に関する報告書からも抽出することができる。この点においては、南米とくにベネズエラ史に精通したスペイン人研究者 Manuel Lucena Salmoral の *Piratas, corsarios, bucaneros y filibusteros* が入門書として好著であり、研究概要及び参考文献一覧も大いに参考になる。

2. 太平洋沿岸における造船の始まり

2.1 カルロス1世による造船許可

バスコ・ヌーニェス・デ・バルボアの「南の海」発見のニュースは、多くの征服者の目を太平洋に向かわせた。1535年スペイン国王カルロス1世は、太平洋側の港を拠点にするスペイン人入植者に対し、太平洋探索のための造船の許可と権限を与えた。船の種類や数に制限を設けないとはしているものの、国王は太平洋における海賊の駆逐を目指し、小型船を希望した⁶⁾。さらに特筆すべきは、副王や総督に対し、この造船事業を阻止することなく支援し、航海の安全と太平洋の防衛に便宜を図るように命じた⁷⁾。

この王室の政策に即座に反応したのがエルナン・コルテスである。彼は、カルロス1世からセブ島付近で消息を断った国王の使者の救出を命じられたのであった。そのため、船を造り、アジアへ向かったメキシコ征服が終わると、まもなく中米遠征を決行し、大西洋と太平洋をつなぐパナマへの接近を図るアジアの香辛料貿易に関心を寄せた⁸⁾。アジアの品々をペルーに売り、ペルー

の金や銀を手に入れ、ペルーとメキシコの貿易を立ち上げる構想をあたためていた⁹⁾。しかし、彼は裁判のためスペインへ帰国し、プロジェクトを実現することは叶わず、1547年に没する。

その後、1565年に太平洋航路が開通して、マニラとアカプルコを結ぶガレオン貿易が始まる。1631年までは、ペルーもマニラと貿易を行っていたため、当然、中米もこの貿易の恩恵を受けようとした。1576年頃、ニカラグアの財務担当官ベネガス・デ・ロス・リオスは、アカプルコの代わりに、ニカラグアのエルレアレホを東アジアとの貿易の拠点することを国王に対し進言している¹⁰⁾。ガレオン貿易に使われた船の多くは主としてフィリピンで建造されていたため、アカプルコにはガレオン船の修理ができる施設が整えられていたにせよ、大規模な造船場が併設されていたわけではなかった。少なくともイタリア人ジェメリ・カレリが、アジアへの表玄関とは考えられないくらいみすぼらしい漁村であると言っている¹¹⁾。従って、造船所を擁するエルレアレホがアカプルコに対抗し得る港として候補となったようである。しかしながら、この提案は検討されなかった。

歴代のヌエバ・エスパーニャ副王は、経費削減のため、フィリピンで船を造らせ、その船をマニラの貿易商に売り、アカプルコでの入港税で港の維持費を賄うことを検討するほどであった。当時、アカプルコは年一回来航するガレオン船に対して、80人以上の奴隷がおり、軍人、鍛冶屋、船大工、索具職人などに給料を支払わなければならなかったからである¹²⁾。また、港に保管してある武器、網、ロウソク、錨、小船などを保管する倉庫の維持費も必要であったからである。しかし、実際には、マニラでは船の買い上げの見通しは明るくなかった。そもそも船が造れない上、マニラの貿易商が資金難であれば船は出航せず、まだマニラとペルーでの貿易が成立していた時期であればペルーへ向かう可能性もあったからである。

しかし、中米の造船所の需要はあった。グアテマラのソンソナテ、ニカラグアからコスタリカにかけては、ニコヤ、エルレアレホ、コシグイナが主要な拠点となった。しかしながら、規模はなかなか把握できていない。現在のところわかっていることは、注文に応じて造船する程度の規模であったことである。造船所自体が定位置を持たず、周辺に移動することも多く、「旧造船所」「新造船所」として記録されている¹³⁾。一方、ペルーでは、首都をクスコからリマへ移し、リマから近い太平洋沿岸のカリャオに造船所を伴う港を作った。ペルー副王領では、太平洋沿岸部では、18世紀までに、エクアドルのグアヤキルが中米の造船所の環境や条件を凌ぐようになっていたようである。グアヤキルはとくにカカオの輸出で18世紀に繁栄を極め、優秀な船大工を育成していた¹⁴⁾。

2. 2 造船拠点成立の条件

2. 2. 1 木材

船の材料は木材である。杉、オーク、ネムノキ、クスノキ、マングローブ、月桂樹などの熱帯の常緑高木が使われる¹⁵⁾。組み立てにあたっては釘が必要で、停泊には錨が不可欠である。アメリカ大陸における鉄の産出地はエルサルバドル北部のマタパン (Matapán) であった。しかし、生産が始まったのは1712年であり、それまではスペインからの輸入に頼らざるをえなかった。輸入品は高額であったため、錆びたままでも使われることも多かった¹⁶⁾。艀装品の中でもロープはマストを固定したり、帆や錨の上げ下ろしなどに欠かせない。当初ニカラグアのエルレアレホとチナンテゴは、アメリカ大陸における艀装品供給の最大地であった。1560年にはその地位をグア

ヤキル近くのブナ島に譲ることになった。その後、供給地はチリ、そして18世紀にはユカタン半島に移っていく。アメリカ大陸でチリのみで麻 (cañamo) が生産されたため、ほかの地域ではサイザル麻 (henequén / sisal)、ピタ麻 (cabuya / pita) が代用された¹⁷⁾。獣脂もスペインからの輸入に頼ったが、17世紀初頭からはニカラグアとホンジュラスの松の森から採れるようになり、17世紀半ばには太平洋岸の供給源となった。その後、グアヤキルやピウラに移ることになる¹⁸⁾。帆はニカラグアのほか、ペルーのチャチャポヤとカハマルカの綿布で作られた。長い布を帆に縫って製作された。また、舵、錨の上げ下ろしに使う揚錨機、船内の水を汲み出すポンプ、滑車なども製造する必要もあった。

2. 2. 2 労働力

造船に必要な労働力は先住民に頼った。ニカラグアへ最初に遠征したのは、ヒル・ゴンザレスとアンドレス・ニーニョ、ペドロ・アリアス・ダビラ率いる一団であり、その後、バスコ・ヌーニェス・デ・バルボアが中心となって植民活動を行った。ニカラグア太平洋岸地域からコスタリカのニコヤ半島にかけて住んでいた人々は、現在のニカラグアのレオン、グラナダ、コスタリカのニコヤを拠点に、テンピスケ川で金、塩などを採り、舟を操り、ほかの地域と交易を行っていたと考えられている¹⁹⁾。そこへ、900年頃にオトマンゲ語系を話すメソアメリカ起源のチョロテガ族が侵入する。チョロテガ族は現在のエルサルバドルのフォンセカ湾沿いにも確認されており、ニカラグア太平洋沿岸部を中心に、コスタリカのニコヤ半島にまで広がった。彼らは、ニコヤ半島にいた住民たちをチラ島に追いやった。次に、このチョロテガ族の地に侵入したのがニカラオ族であった。ニカラオ族はナワ語系で、テオティワカン崩壊後メキシコの Cholula 盆地を出発し、1200年頃にチョロテガ族と戦って、現在のニカラグアからコスタリカにかけて定住した。リバス地峡を中心に、太平洋とニカラグア湖のあいだに広がった²⁰⁾。チョロテガ族に南北をはさまれ、南東はチブチャ族と接していた。最後に到来した人々はオトマンゲ語に近い言語を話したマリビオ族あるいはスプチアバ族で、チョロテガ族やニカラオ族に比べて少数ではあったが、マリビオ山系からテリカ、ケツアルグアケー帯を中心に、東はポソルテガやチチガルパ、西はタマリンド川、南は太平洋岸まで広がっていた可能性が指摘されている。このほか、太平洋岸にはマタガルバ族やナワ族も移動してきている。テオティワカンの崩壊とトルテカ族の出現とその後の衰退によって、こうした民族の移動が促されたと考えられている²¹⁾。それぞれ先住者の土地を軍事力によって組織的に支配したというより、先住者の領地に攻め入っても飛び石的に占領したような格好である。

チョロテガ族とニカラオ族は自然の恩恵を受けて暮らしていたようである。トウモロコシ、豆類、綿花、トウガラシ、タバコ、エネケンを栽培し、鹿、イノシシ、ピューマ、バク、キツネ、ウサギ、鳥などを獲っていた。一帯にはサポジラ (zapote)²²⁾、ナンス (nance)²³⁾、チコマメイ (mamey)、グアカル (guacal)²⁴⁾、びわ (nispero)、カカオなどがあり、木の実の採取も盛んであった。松 (ocote) も生えていた。トウモロコシやミツバチの巣から蠟をとったり、養蜂も行われ、薬草の利用も盛んであった。なかでも、ヤアト (yaat) と呼ばれる薬草は、アンデスにおけるココと同様に疲労回復の効能があり、彼らの長距離移動には不可欠なものであったと考えられている²⁵⁾。海岸近くに住んだチョロテガ族は海水から塩を作ったり、真珠を獲ったりもしていた²⁶⁾。

マタガルバ族は、現在のチョンタレス (Chontales)、ボアコ (Boaco)、マタガルパ (Matagalpa)、

ヒノテガ (Jinotega) の各県のほか、ヌエバ・セゴビア Nueva Segovia 南西部のエステリ (Estelí) とホンジュラスとの国境沿いまでに広がって住んでいた。彼らの勢力はパナマのダリエン山脈からレオン・ビエホ (León Viejo) を含むマナグア湖の北東部から太平洋岸沿岸部に及んでいたと考えている研究者もいる²⁷⁾。マタガルパ族は、トウモロコシや豆のほか、キャッサバ、カカオ、タバコ、バナナを栽培した。綿糸を生産し、松脂で火を灯し、海水から塩をつくり、金や銀の細工技術も有していたとされる。このマタガルパ族が有した松、松から採取する「ティレ (tile)」と呼ばれた黒い粉末、塩は、チョロテガ族やニカラオ族の需要があったとされる²⁸⁾。ティレは入れ墨やボディペインティングに使ったようである。

それぞれの民族の言語や習慣は残っているため、複数の民族が境界を接しながらも、共存してきたと考えられている。スペイン人が入植してきた当時、王立記録者フェルナンデス・オビエドによれば、ニカラグアには2,000人ほどが往来する市が開かれ、カカオが通貨の代わりであった²⁹⁾。ニコヤ半島の市場では、ヤシの葉でつくった籠、ハンモック、布、綿糸、履き物 (アルパルガタ)、トウモロコシ、豆などのほか、チラ島で作製される黒い焼き物をはじめ、塩や真珠も市場に並べられていた³⁰⁾。コスタリカ人歴史研究者 Eugenia Ibarra R. は、ニカラグアに形成されていたカシケを頂点とする社会が他の民族を統一しようとしていた時期ではないかとしている³¹⁾。少なくとも、大規模な定期市が開催できる社会が成立していたことは、人や物品が往来するインフラが整っており、経済活動が統括されていたことを伝えている。技術力を有した先住民の一定数を確保できたのであれば、性能のよい船を造る素地があったことが考えられる。

2. 2. 3 造船技術

当時、ニカラグアのエルレアレホで作られた船は、航海用の大型帆船であった (表1参照)。征服の活動の指揮をとった征服者たち自身が船乗りの技能を備えていたことを考えれば、彼ら自身が専門家であったとはいえ、職人集団が存在していたはずである。例えば、メキシコを征服したコルテスは、キューバ島では総督ベラスコの目を盗んで密かに船を調達してメキシコへ出帆し、征服したメキシコ市に造船所を建設し、先住民との海上戦にも備えるなど、造船の専門集団の存在をうかがわせる。また、彼は、オアハカの大洋沿岸のウアトルコで船を造り、カリフォルニア半島の探索を行ったり、フィリピンへ使者を送ったりして、長旅に耐えうる船を造ることもできた。コルテスには十分な造船の知識があり、おそらくは優秀な船大工を擁していたと推察される。

しかし、当時、船大工の育成機関はなかった。したがって、現場で訓練されていったことになる。いわゆる造船責任者 (maestro mayor de fábrica) を頂点に、浜辺で船体を建造する職人 (carpintero de ribera)、楨皮職人 (calafate)³²⁾、鍛冶職人、錠前職人、鋳物職人、帆職人、木彫職人、左官などが造船に関わる必要があった。18世紀のハバナでは、港や造船所を管理する役人も含め、1,000人規模の人々が従事しており、その他の拠点では100人前後であった³³⁾。

フィリピンでは、マニラ湾の入り口の北側に造船所が設けられ、中国人やフィリピン人が働いた。東南アジアにおいて船は重要な移動手段であり、熟練工も調達できたようにも推察されるが、実際には、船の建造や修理の専門家が不足がちであった。マニラ総督の再三にわたる要求の末、17世紀半ばによくメキシコから1人専門家が派遣され、大歓迎を受けている³⁴⁾。

1587年、メキシコのアウトディエンシア判事ディエゴ・ガルシア・デ・パラシオ (? - 1595) が

表1 16-17世紀にエルレアレホで建造された船舶のリスト

建造年	場所	建造数	船の種類	船の大きさ	船の名称	所有者名	行き先	備考
1534		複数				ペドロ・デ・アルバラード	ベルー	
1583	ニカラグア (詳細不明)	1隻				ペドロ・アリアス・ダビラ (初代ニカラグア総督)	太平洋探検	
		1隻建造中					太平洋探検	
1585	エル・レアレホ			700トン	サンタ・アナ号			イギリス人探検者(私掠団船長)トーマス・アムステルダムに掌握され、積み荷を略され、燃やされた。
1586	エル・レアレホ	1隻	ガレオン船		サン・マルティン号		アカプルコ経由でメニラ	
1599	ニコヤ/ナンダユール	1隻	軍艦			スペイン国王(フェリペII世)		
		1隻	中型交易船			ペドロ・デ・アルビデ (インディアス貿易船の船長)		ハマニューダで真珠を採取
		1隻	中型交易船			ジョアン国王 (スペイン国王フェリペII世)		
1682	エル・レアレホ		フリゲート艦 3本マストの船		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ソレダ・ア・ヒノエバ号	フランシスコ・サラサール		
1686	グアスカパン(グアチマラ)		船		サン・クリスト・デ・レオン号	フランシスコ・サラサール		1746年時点でも使用されていた。
1688	グラナダ (ニカラグア)		ランチャ		サンタ・イネス号	フランシスコ・デ・アギーレ		
1690	エル・レアレホ		ガレ-船 ガレ-船		ヘス・ナサレノ号 サン・ドミンゴ号	セバステイアン・ディアス		
			3本マストの船		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ソレダ	王立海軍		
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・カンテリヤ号	グレゴリオ・ペレド	ベルー	
			フリゲート艦		サン・フェルナンド号	ジョセップ・モレル	ベルー	
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デル・カルメン号	ロドリゴ・カラニヤス	ベルー	
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・エストレーリヤ号	アントニオ・セリテノ	ベルー	
			フリゲート艦		サン・ヘロニモ号	フランシスコ・アルティエタ	ベルー	
			フリゲート艦		サン・フアン号	ルーク・ラ・ラベ	ベルー	
			フリゲート艦		サンタ・クルス号	フアン・ロドリガス	ベルー	
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ビクトリア号	セバステイアン・メンドサ	ベルー	
			フリゲート艦		サン・フアン・デ・デイオス号	フランシスコ・リオ	ベルー	
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・コンセプシオン号	フランシスコ・ラルテイガ	ベルー	
			フリゲート艦		サン・クリスト・デ・アニマス号	名前不明 苗字アラウホ	ベルー	
			フリゲート艦		スエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ソレダ号	フランシスコ・サラス	ベルー	
			フリゲート艦		サン・フランシスコ号	王立海軍	ベルー	
1691	エル・レアレホ		ガレ-船					
			3本マストの船	沿岸航行用				
1692	エル・レアレホ		3本マストの船 3本マストの船 3本マストの船	550-600トン 550-600トン 550-600トン	ヘスラス号 マリア号 ホセ号	トマス・ディアス・メリヤド	パナマとの交易	王立海軍に売却
1693	アレクアキン		3本マストの船		名称なし	ペドロ・デ・トーレス		砲台40付き
1695	エル・レアレホ		フリゲート艦			ペドロ・ルセナ	ベルー	
1696	エル・レアレホ		大型帆船			ブラス・カバリエロ	ニカラグアの大工團カス・デ・カレリャノ	
1700	エル・レアレホ		3本マストの船	沿岸航行用	名称なし	ジョセップ・モレル	ベルーとの交易	

* この表はLeon Sanceiz (2009) Anexo2にまとめられたものに、筆者が加筆したものである。

「メキシコの経度に合わせた船舶の使用，建造，運営に関する海運指示書 *Instrucción náutica, para el buen uso y regimiento de las naos, su traça, y su gobierno conforme a la altura de México*」を刊行する。これが造船について記した世界初の書とも言われるものである。この指示書によれば、ペルー、ニカラグア、グアテマラにて太平洋を横断する船を造るにあたって、大西洋を横断する船に比べて、船体が深く、船尾が細く、船首に向かって伸びるような構造で、向かい風に強く建造すべきとしている³⁵⁾。

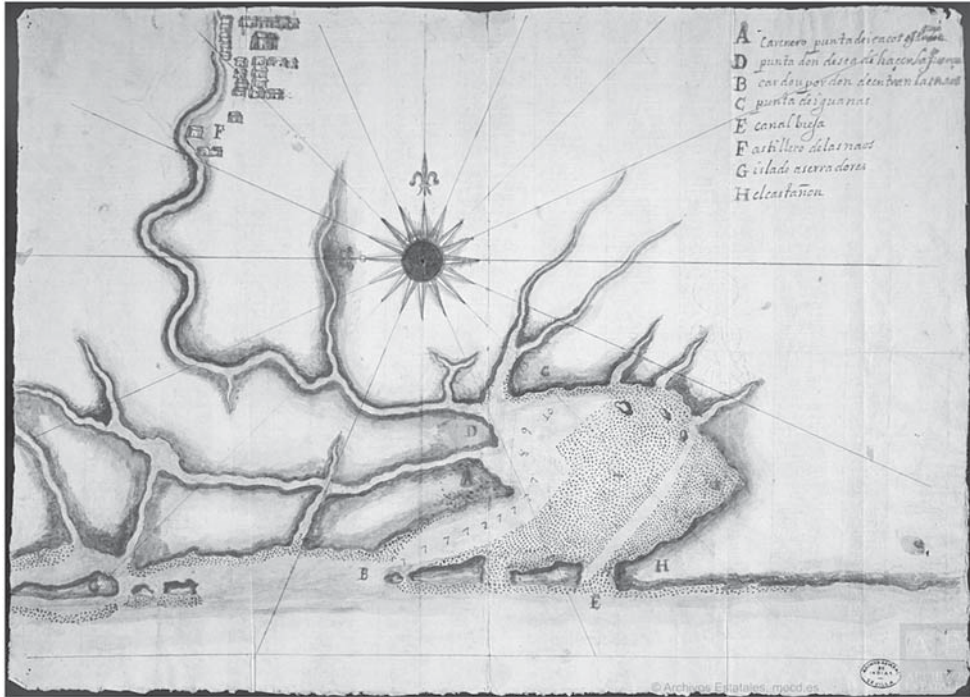
3. エルレアレホ

エルレアレホは1522年にアンドレス・ニーニョがすでに探索していた。スペイン人がニカラグアに足を踏み入れた当時、ニカラグアの人口は80万人から100万人と推定されている³⁶⁾。チョロテガ族、ニカラオ族、マタガルパ族がちょうど拮抗する地域の中間にあったと考えられる。この地に本格的にスペイン人が入植したのは1532年で、港として機能するのは1533年である。10年もの時間を費やしたのは、湾の強い風を制御する術を得てからだとされる³⁷⁾。16世紀後半には、王室の命令でフィリピンへ向かうガレオン船を建造していた³⁸⁾。

造船は港が整備される以前から行われていた。1529年3月25日付けで、ペドロ・アリアス・ダピラはスペイン国王に対し、「ここニカラグアには南の海を探索する環境はととのっており、島もいくつかあることはわかっており、陛下がこの件で何をすべきかお命じ下されば、到着して木材を切り出し、鉄や麻布を集め、探索に必要な船を造るためにその他必要なものを揃えております」と書状を出している³⁹⁾。彼が正式にニカラグア総督に任命されるのは、その年の6月17日付けである⁴⁰⁾。従って、ペドロ・アリアスは造船に着手し、ちょうど8ヶ月後の11月25日付けで、すでに1艘完成しており、クリスマスまでに2艘完成させる予定で造船を可能な限り急がせると報告している⁴¹⁾。

エルレアレホは、太平洋から25マイルほど内陸に入ったところに建設された（地図1参照）。ハバナに比べて、エルレアレホの場合は、太平洋から奥まった場所に建設されたため、安全な港として、16世紀から17世紀にかけて多く利用された。その需要から規模拡大の必要性が生じたと推測され、旧造船所と新造船所があったことがわかっている。規模拡張が可能だったのも、その場所が安全であったからだ⁴²⁾。17世紀後半には4つほど造船台があり、倉庫等も備えていたらしい⁴³⁾。ただし、常に陸で作業をしたわけではなく、海で船を浮かべての作業をしていた⁴⁴⁾。修理の際には、船を陸にあげて横に倒して作業を行う必要があった。しかも、両側面の修理をする広いスペースが必要であった。砂で船内が汚れず、風で船首が折れない場所であることも重要であった。もちろん、夜に焼き討ちにあわないよう安全も確保する必要もあった⁴⁵⁾。

当初は、サトウキビの茎や葉で造ったあばら屋が並んでいた程度であったが、貿易と造船に従事するスペイン人が30人住んでいた⁴⁶⁾。17世紀初頭、エルレアレホには100人ほどのスペイン人が定住するようになっていた⁴⁷⁾。エルレアレホの繁榮とともに、周辺を中心都市レオンとグラナダもその恩恵を受けた。当時はグアテマラの港ソンソナテ（トリニダ村）からニカラグアに入るルートしかなかったが、レオンにもスペイン人が50人、先住民が5,500人、グラナダにはスペイン人が200人、先住民が7,000人住むようになった⁴⁸⁾。石材がなかったため、住居は干しレンガや土壁であった⁴⁹⁾。温暖な気候でスペイン人の定住を促した。降水量が高く、河川も発達し



地図 1 AGI, MP Guatemala, 6. El puerto de El Realejo, 1673.

- A: イカコス岬先端部 B: 船舶の出入りするカルドン C: イグアナ岬先端部
D: 防衛基地 E: 旧運河 F: 造船所 G: 木材伐採担当者たちの島 H: カスタニョン岬

ており、湖の魚はスペイン人のタンパク源となった⁵⁰⁾。また、スペイン人は狩猟としてワニ狩りを楽しんだ⁵¹⁾。先住民はトウモロコシ、カカオ、綿花の栽培に従事していた⁵²⁾。

レオンは行政の中心であり、王室財務局 (Caja Real) も置かれていた。1537 年には大聖堂が建設され、メルセ修道院が布教にあっていた。グアテマラのドミニコ会からニカラグアを視察に来たアントニオ・デ・レメサル (1560-1619) は、レオンには 6 人の修道士が派遣されており、先住民の言語をよく理解し、グラナダにも同じ数ほどの修道士がいて、先住民たちに対して熱心に指導していたと記している⁵³⁾。また、修道士たちはミサなどもよく執り行っているが、あまりの暑さに、時間が守られておらず、ほかの修道院で行えることができないとも記している⁵⁴⁾。

エルレアレホには教会が 1 つとフランシスコ会、メルセス会、イエズス会の修道院のほか、施療院が 1 つと教会堂がいくつかあった⁵⁵⁾。海が近いので魚が豊富にとれたが、牛、豚、鶏などの家畜もよく育ち、製糖場も操業していた⁵⁶⁾。中米一帯にはアニル、コチニール、タバコ、トウモロコシ、ピタ麻、ブラジルスオウ、皮革、鶏を供給する一方、スペインからワインやオリーブなどを購入した⁵⁷⁾。

造船作業は、温暖な気候のもと、良質な木材を用いて行われた⁵⁸⁾。ここでは、フナクイムシに強い材質の木材が使われていた⁵⁹⁾。カルメル会修道士のバスケス・デ・エスピノーサ⁶⁰⁾ は、エルレアレホには頑丈で良質な木材があり⁶¹⁾、ペルーからの注文を受けて年間数多くの船を造り、年中作業していると書き残している⁶²⁾。もちろん、ここは修理工場としても機能した。エルレア

レホは木材のほか、獣脂の調達も十分であった。木材や船体に塗るタール獣脂は豊富な家畜から作ることができたが、とくに松脂はペルーで高額で売れ、船板の隙間を埋めたり、ワイン樽作りにも使われた⁶³⁾。

労働力には、先住民のほかに黒人あるいはムラタも投入された。エルレアレホでは、獣脂は山で作られ、黒人の人夫によって港に運ばれ、それを1人のスペイン人が監督していた⁶⁴⁾。18世紀にこの港に到着した技師リス・ディエス・ナバロは、造船所や修理工場の人夫は気だてがよく、腕もよく、あちこちから板をかき集めてきては獣脂や布くずを使って溝を目立たなくする術を有していると驚きを隠せないでいた⁶⁵⁾。エルレアレホで造られる船については、スペインのビスカヤで造られたものより頑丈で、家畜90頭を積むことができたということである⁶⁶⁾。

エルレアレホは太平洋側で最も安全な港と目されて⁶⁷⁾、ヌエバ・エスパーニャ、グアテマラ、パナマなどから船が着き、鶏、トウモロコシ、蜂蜜を買いにきた⁶⁸⁾。エルレアレホからはペルーに向けて、家畜やタール獣脂のほか、蜂蜜、金を洗う桶、綿の帆布を運んだ⁶⁹⁾。また、先住民を小型船に乗せて、パナマやペルーへ奴隷としても売っていた⁷⁰⁾。奴隷船の所有者としては、ニカラグアの征服者であるエルナンド・デ・ソトやフェルナンド・ボンセ・デ・レオンがおり、征服当時から先住民の売買が行われていたことが判明している⁷¹⁾。パナマへは年に6回、ペルーへは年に2回、合計20隻ほどの奴隷船が定期的に運行していた⁷²⁾。しかし、1530年8月2日付け及び1531年1月25日付けの勅令により王室から禁止令が発せられ⁷³⁾、次第に衰退した。代わって、カカオ貿易が繁栄することになる⁷⁴⁾。

しかし、次第に私掠船の標的になった。1578年9月、イギリスのドレイク率いる私掠船はマゼラン海峡を渡って太平洋へ出ると、スペイン商船を襲撃して、少なくとも金の延べ棒800本と銀の延べ棒3,000本を略奪し、1579年4月にメキシコの太平洋沿岸のウアトゥルコ港に到着している。以来、スペイン領の海岸線では、大西洋でも太平洋でも、イギリスやオランダの海軍や私掠船が暗躍することになる。度重なる私掠船の攻撃により、エルレアレホ港が放棄された時期もあった。1637年、トーマス・ゲイジは帰国のため港へ行き、その防備が甘いことを指摘していることから⁷⁵⁾、砦が築かれていたことがわかる。

しかし、イギリスやオランダは、スペイン側の統治が手薄な中米ニカラグアを拠点に、大西洋から太平洋に抜けるルートを次第に確立していったのである。1つは、セゴビア川をグラシアス・ア・ディオス岬からアマパーラ湾へ到達するルートであり、もう1つは、デスグアルデーロ港を渡ってエルレアレホに出るルートであった⁷⁶⁾。エルレアレホは、エルビエホ火山が目印となり、襲撃に遭うようになった。活火山のため、噴煙も目印になった⁷⁷⁾。18世紀には、エルレアレホの優位性は失われることになった。カリフォルニア湾岸沿いの私掠船に対処するために、はるか北に位置するサン・ブラス（現在のメキシコ合衆国ナヤリット州）にて造船が行われるようになったからである。

結びにかえて

スペイン領アメリカにおいて造船の拠点は複数あり、時代とともに移動している。その中で、大西洋貿易の玄関港として植民地時代を通じて独占的地位を保ったのが、キューバ島のハバナ港であった。ハバナには王立造船所（Real Arsenal de Habana）が設立され、商船のみならず、戦争

用の船舶も造られた。18 世紀にはイギリスでも導入していない動力を使った機械による造船が行われ、世界トップの造船技術を誇っていたと言われている。複数の造船台と進水台が設けられ、航海用の艀装品や帆を造ったり、収納したりするスペースもあった⁷⁸⁾。

このハバナ港に向き合うメキシコ湾沿岸には、ヌエバ・エスパーニャの玄関口であるベラクルス港があった。ベラクルスから海岸線を東へ進み、コアツアコアルコス川を渡ると、ラス・サリーナス港があり、そこでも造船が行われていた。当時、ベラクルス港からラス・サリーナス港まで約 20 日を要した。このラス・サリーナス港は、ベラクルス港の代替港として活用されていたようである⁷⁹⁾。また、ユカタン半島のカンペチェにおいても造船が行われていた。ラス・サリーナス港の造船所もカンペチェ港の造船所も小規模であったと言われているが、その規模の詳細については調査を進める必要がある。いずれにしても、ヌエバ・エスパーニャにおいては、メキシコ湾を囲んで造船の拠点が確保され、大西洋貿易を支えていた。

一方、太平洋沿岸においては、植民地時代を通じて、王立造船所が建設されるほどの拠点は存在しなかった。その主な理由は、大西洋貿易に比べ、太平洋貿易がもたらす利益が小さかったことが挙げられる。しかし、少なくとも 16 世紀においては、王室が征服者たちの意欲を後押しすることで、太平洋沿岸における造船を奨励したと考えるべきであろう。

スペイン人が造船に適した場所としてコスタリカからニカラグアにかけて、ニコヤ、エルレアレホ、コシグイナを選んだ理由について考えてみたい。そのためには、スペイン人が造船に選んだ地域はどのような場所であったのかを把握しておく必要がある。拠点となった地点が歴史的にどのような地域で、そこで人々がどのような生活を営んでいたのかということを知ることで、スペイン人の入植と造船業の立ち上げについて理解を深めたい。

注

- 1) 本研究は、平成 26 年度日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金による「ニカラグアの考古学及び文献学資料評価と発展への応用－アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ－」の研究分担者として援助を受けたものである。
- 2) スペインによるモルッカ諸島（または香料諸島、スパイス諸島）の征服については、生田滋『大航海時代とモルッカ諸島－ポルトガル、スペイン、テルナテ王国と丁字貿易』（中公新書、1998 年）に概説がある。
- 3) 一方、文化人類学の分野では、テオティワカン崩壊を契機に、メソアメリカの人々が南下してきたと考えられており、碩学ミゲル・レオン・ポルティエリャによるニカラグアの先住民の文化をメソアメリカの文化を比較することが行われてきた。
- 4) León-Portilla, p. 22.
- 5) <http://campus.usal.es/~indusal/www/?q=node/31>（2014 年 9 月 21 日閲覧）
- 6) *Recopilación de leyes de los reinos de las Indias*, Tomo. 4, Libro IX, Título XXXIV, Ley i.
- 7) *Ibid.*
- 8) コルテスはセブ島の王に書簡を送っている。AGI, Patronato, 43, N. 2, R. 5 参照。
- 9) Martínez, IV, pp. 132-133.
- 10) MacLeod, p. 165.
- 11) “En cuanto a la ciudad de Acapulco, me parece que debería dársele el nombre de humilde aldea de

pescadores, mejor que el engañoso de primer mercado del mar del Sur y escala de la China, pues que sus casas son bajas y viles y hechas de madera, barro y paja.” Gemeli Careri, p.8.

- 12) Hanke, I, p. 278.
- 13) León Sánchez, p. 58.
- 14) Laviana Cuetos, *passim*.
- 15) León Sánchez, p. 61.
- 16) León Sánchez, p. 62.
- 17) *Ibíd.*
- 18) *Ibíd.*, p. 63.
- 19) Ibarra, p. 107.
- 20) León-Portilla, p. 13.
- 21) Ibarra, p. 106.
- 22) 樹液からガムの原料 chicle が採れる。
- 23) 実から蒸留酒を作る。マヤでは神聖な木と目されていた。
- 24) メキシコ南部から中米にかけて見られる低木。実は黒く、皮は厚く、固いため器として利用される。
- 25) Ibarra, p. 107.
- 26) *Ibíd.*
- 27) *Ibíd.*
- 28) *Ibíd.*
- 29) Fernández de Oviedo (1976, p. 84)
- 30) Ibarra, p. 107.
- 31) *Ibíd.*, p. 112.
- 32) 麻くずなどをほぐし、船板の合わせ目に詰めて漏れを防ぐ作業を担う職人。
- 33) León Sánchez, pp. 60-61.
- 34) Prieto Lucena, p. 43.
- 35) León Sánchez, p. 56.
- 36) Lovell & Lutz, p. 128.
- 37) Mejía Lacayo, p. 104.
- 38) AGI, Audiencia de Panamá, 13, R. 18, N. 96, fol. 1. Carta del licenciado Cepeda, Presidente de la Audiencia de Panamá, el 14 de junio de 1579.
- 39) Esgueva Gómez, p. 34.
- 40) AGI, Patronato, 180, R. 19, Nombramiento gobernador de Nicaragua: Pedro Arias Dávila, el 1 de junio de 1527.
- 41) Esgueva Gómez, p. 35.
- 42) Incer, p. 216.
- 43) León Sánchez, p. 59.
- 44) Incer, p. 232.
- 45) León Sánchez, p. 59.
- 46) Incer, p. 215.
- 47) *Ibíd.*, p. 231.
- 48) *Ibíd.*, p. 215.
- 49) *Ibíd.*, p. 214.
- 50) *Ibíd.*

- 51) *Ibid.*
- 52) *Ibid.*
- 53) サンティアゴ・デ・カバリェロス市にはドミニコ会が布教を行った。
- 54) Remesal, p. 239.
- 55) Incer, p. 231. ただし、この情報は地図 1 では確認できない。
- 56) *Ibid.*, p. 231.
- 57) *Ibid.*, p. 232.
- 58) *Ibid.*, p. 218.
- 59) *Ibid.*
- 60) 中米を扱った著作 *Viaje y navegación del año 1622 que hizo la flota de Nueva España y Honduras* (Málaga, 1623) 及び *Compendio y descripción de las Indias Occidentales* (1629) の 2 点がある。
- 61) Esgueva Gómez, p. 36.; Incer, p. 216.
- 62) Esgueva Gómez, p. 36.
- 63) Incer, p. 234.
- 64) Esgueva Gómez, p. 36.
- 65) *Ibid.*, p. 37.
- 66) Incer, p. 216.
- 67) *Ibid.*, p. 215.
- 68) *Ibid.*, p. 216.
- 69) *Ibid.*, p. 232.
- 70) MacLeod, pp. 51-52.
- 71) *Ibid.*, p. 52.
- 72) *Ibid.*
- 73) AGI., Indiferente, 422, L. 15, fol. 9v.; Indiferente, 422, L. 15, fol. 8r-8v; Patronato, 277, N. 3, R. 3.
- 74) MacLeod, p. 81.
- 75) Gage, p. 417.
- 76) Gerhard, p. 147.
- 77) Incer, p. 338.
- 78) León Sánchez, p. 58.
- 79) García-Abásolo, pp. 73-74.

資料

Archivo General de Indias, Sevilla
 Audiencia de Panamá, 13.
 Indiferente, 422.
 MP Guatemala, 6.

刊行資料

Benavente, Toribio de

1970 *Memoriales e historia de los indios de la Nueva España*, Atlas, Madrid.

Duran, Diego de

2005 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*, 2 tomos. Biblioteca Virtual de Cervantes, Valencia.

Fernández de Oviedo, Gonzalo

1992 *Historia general y natural de las Indias*, Atlas, Madrid.

García de Palacio, Diego

2007 *Instrucción náutica para el buen uso y regimiento de las naves*, Maxtor, Valladolid.

Recopilación de leyes de los reinos de las Indias, 1681

1987 5 vols., Miguel Ángel Porrúa, México, D. F.

参考文献

Ardash Bonialian, Mariano

2012 *El Pacífico hispanoamericano. Política y comercio asiático en el Imperio Español (1680-1784)*, El Colegio de México, México.

Caballeros Juárez, José Antonio

1997 *El régimen jurídico de las armadas de la carrera de Indias, siglos XVI y XVII*, UNAM, México.

Chaunu, Pierre

1974 *Las Filipinas y el Pacífico de los Ibéricos*, Instituto Mexicano de Comercio Exterior, México, D. F.

Dolores Gómez, José

1889 *Historia de Nicaragua*, Banco de América, Managua.

Esgueva Gómez, Antonio

2006 *Nicaragua en los documentos, 1523-1857*, Tomo I, Instituto de Historia de Nicaragua y Centroamérica / Universidad Centroamericana, Managua.

<http://www.ihnca.edu.ni/files/doc/TallerHistoria10.pdf>

(2014年8月17日閲覧)

Fernández Izquierdo, Francisco

1989 “Astilleros y construcción naval en España anterior a la Ilustración”, *España y el ultramar hispánico hasta la Ilustración* (I Jornada de historia marítima), pp. 35-61, Instituto de historia y cultura naval, Madrid.

Fushimi, Takeshi

2003 “El comercio ilegal de Campeche en el siglo XVII”, *América a Debate*, julio-diciembre, núm 4, pp. 31-50, Universidad Michoacana de San Nicolás Hidalgo.

Gage, Tomas

1987 *Viajes por la Nueva España y Guatemala*, historia 16, Madrid.

García-Abásolo, Antonio F.

1982 “La expansión mexicana hacia el Pacífico: La primera colonización de Filipinas (1570-1580)”, *Historia mexicana*, 32:1 (125), jul.-sep., pp. 55-88.

Garmendia Arruebarrena, José

1984 “Catálogo de los vascos en el Archivo General de Indias, (Sevilla)”, *Boletín*, Año XL, Cuadernos 3-4, Real Sociedad Bascongada de los Amigos del País, San Sebastián.
(Bibliografíaのみオンライン上で公開 “Documentos del siglo XVI en el Archivo de Indias”, <http://www.euskomedia.org/PDFAnlt/riev/35/35323336.pdf>, 2014 年 8 月 17 日閲覧)

Gemeli Careri, Giovanni Francesco

1927 *Viaje a la Nueva España*, Sociedad de Bibliófilos Mexicanos, México.

Gerhard, Peter

1990 *Pirates of the Pacific, 1575-1742*, First Bison Book.

Hanke, Luis (ed.)

1977 *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la casa de Austria*, 7 vols., Atlas, Madrid.

Ibarra R., Eugenia

2003 “Intercambio, política y sociedad en el siglo XVI. Historia indígena de Panamá, Costa Rica y Nicaragua”, Dumbarton Oaks, Washington, D. C., Electronic Publication.
http://128.103.33.14/publications/doaks_online_publications/Ibarra.pdf
(2014 年 9 月 1 日閲覧)

Incer, Jaime

1989 *Nicaragua: Viajes, Rutas y Encuentros, 1502-1838*, Libro libre, Costa Rica.

Laviana Cuetos, María Luisa

1984 “La maestranza del astillero de Guayaquil en el siglo XVIII”, *Temas americanistas*, número 4, pp. 74-91.

León-Portilla, Miguel

1972 “Religión de los nicaraos. Análisis y comparación de tradiciones culturales nahuas”, *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol. 10, pp. 11-112, UNAM, México, D. F.

2005 *Hernán Cortés y la Mar del de Sur*, Algaba, Madrid.

León Sánchez, Jorge

2009 “Los astilleros y la industria marítima en el Pacífico americano: siglos XVI a XIX”, *Diálogos Revista electrónica de historia*, vol. 10, núm. 1, febrero-agosto, pp. 47-90, Universidad de Costa Rica, Costa Rica.

(Red de Revistas Científicas de América Latina, el Caribe, España y Portugal, <http://www.redalyc.org/pdf/439/43913137003.pdf>, 2014 年 8 月 23 日 閱 覽)

Lovell, W. George, Christopher H. Lutz

1990 “The Historical Demography of Colonial Central America”, *Year Book, Conference of Latin Americanist Geographer*, vol. 17/18, pp. 127-138, Conference of Latin Americanist Geographer.

<http://clagscholar.org/wp-content/uploads/2014/04/lovell6.pdf>
(2014 年 8 月 26 日 閱 覽)

Lucena Salmoral, Manuel

2010 *Piratas, corsarios, bucaneros y filibusteros*, Editorial Síntesis.

MacLeod, Murdo J.

2007 *Spanish Central America: A Socioeconomic History, 1520-1720*, University of Texas press, Austin.

Martínez, José Luis

1990 *Documentos cortesianos*, 4 vols., UNAM/FCE, México, D.F.

1997 *Pasajeros de Indias*, Alianza Universidad, México.

Martínez Shaw, Carlos, Alfonso Mora Marina

1999 “Los astilleros de la América colonial”, *Historia general de América Latina*, Vol. 3, Tomo 1, UNESCO, pp. 279-304.

Mejía Lacayo, José

2011 “La conquista 1522-1572 – Primera parte”, *Temas Nicaragüenses*, No. 39, Junio, pp. 93-122.

Pazzis Pi Corrales, Magdalena de

2008 “La marina de los Austrias: aproximación historiográfica y perspectiva investigadora”, *Cuadernos monográficos del Instituto de Historia y Cultura Naval*, No. 56, pp. 63-121, Instituto de Historia y Cultura Naval, Madrid.

Pérez-Mallana P. y B. Torres

1987 *La Armada del Mar del Sur*, EEHA, Sevilla.

Prieto Lucena, Ana María

1983 *Filipinas durante el gobierno de Manrique de Lara 1653-1663*, EEHA, Sevilla.

Radell, D. y J. Parsons

1986 “Realejo: A Forgotten Colonial Port and Shipbuilding Center in Nicaragua”, *HAHR*, 51, No. 2, pp. 293-312.

Remesal, Antonio de

1966 *Historia general de las Indias Occidentales y particular de la gobernación de Chiapa y Guatemala*, Vol. II, (Biblioteca de Autores Españoles, 189), Atlas, Madrid.

Spatte, Oskar Hermann Khristian

2004 *The Spanish Lake*, ANU E Press, Canberra.

Valdez-Bubnov, Ivan

2011 *Poder naval y modernización del estado: política de construcción naval española (siglos XVI-XVIII)*, UNAM, México.

立岩礼子

2004 「ガレオン貿易の重要性についての一考察—17世紀のヌエバ・エスパーニャによるフィリピン援助をめぐる—」, 『ラテンアメリカの諸相と展望』, 南山大学ラテンアメリカ研究センター編, 行路社, pp. 37-61。

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか

—— 経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える ——

高橋慶介

キーワード

ブラジル, ドラッグ, 貧困, 合法化, 偶発性

Abstract

Now Brazil has become one of the biggest drug markets in the world. Even in Bahia, the Brazilian poor state, the drug trafficking is widespread with the national economic growth. In recent years, the regulation of the drugs was revised in the way that the drug users are fined some community services in place of imprisonment. Behind this legal revision, there is a recognition that it is urgent and crucial to prevent the organized crimes. That is a common drug policy in Latin American countries. In those countries, even the legalization of the drug use has been discussed as an efficient option for revealing the distribution of drugs.

However, as some fieldworkers have revealed, the drugs are not always distributed in a single social situation. Then, whether the drug use will be legalized or not, it is essential for the new drug policy to conduct many experimental researches, questioning concretely how, through whom and with which the drugs spread in society. Such researches will lead us to reconsider the previous discourses which ascribe the overflow of the drugs exclusively to the poverty or the social inequality.

I 『シダージ・ジ・デウス』の世界がやってきた

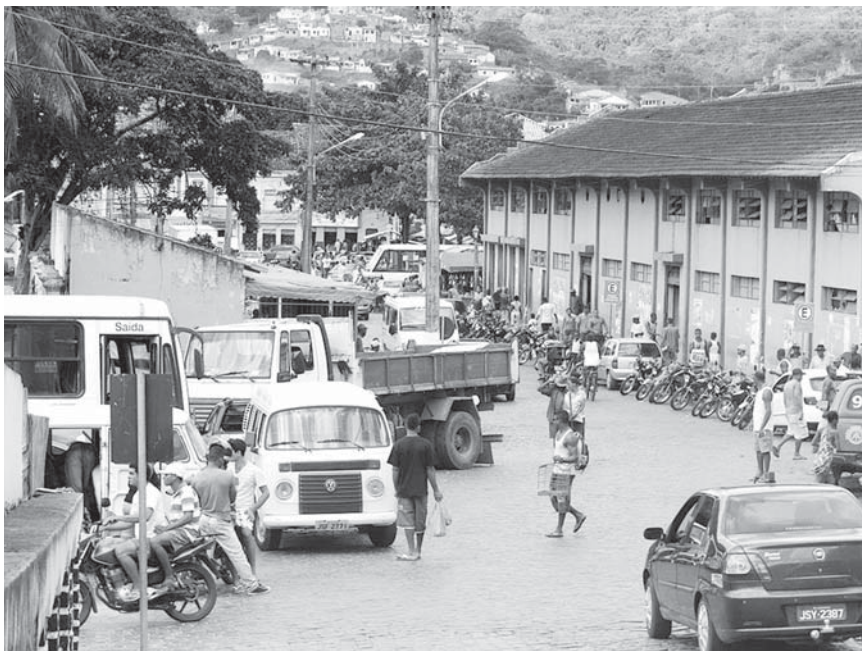
映画『シダージ・ジ・デウス（邦題：シティ・オブ・ゴッド）』（2002）は、1980年代のリオデジャネイロのスラムの日常を、ギャングの抗争での残虐さや悲惨さを軸としつつも、軽妙な音楽とユーモアを交えて描いている。数々の国際映画祭にノミネートされており、ブラジルのスラムやギャングを世界的に知らしめた作品である。

2014年2月、筆者が二年ぶりに訪れたバイア州カショエイラ市で起きた治安の変化について、インフォーマントのTは、この映画に例えて説明してくれた。バイア州は、国内でも黒人人口比率の高い州として知られ、筆者はカショエイラ市周辺でブラジルにおけるアフリカ文化の影響や人種問題についてのフィールドワークを実施してきた。以前は、夜遅くになっても、子どもたちが道端を走り回り、若者たちが階段や道路脇に腰掛けてギターを奏でながら語り合っていた。そうした光景は、街灯が増設されたにもかかわらず、ここ数年で昔話になってしまったのである。

ほら、見てみると、Tが指差した家々のドアと窓は、既に鉄格子で覆われていた。この周辺では、かつて富裕層の邸宅でしか見かけることがなかったものだ。その原因は、ドラッグの密売をめぐってギャングが形成されたことにある。

ブラジルの大都市の光景はここ10年で様変わりした。6車線の幹線道路には終日、新車の列が立ち往生している。新興住宅地には建設中の高層住宅がそびえ立っている。ショッピングセンターには最新の家電が隙間なく陳列されている。貧困地方とされてきたバイア州の田舎町でも、丘上には電気の明かりが灯り、街中にはバイクが溢れかえり、通りには模造品ではなく正規品のスニーカーを履いた通行人が行き交っている。

本論では、経済発展を続けてきた今日のブラジルで流通し、あふれるこれらのモノの中でも、ドラッグ、特にコカイン及びその合成物であるクラックの現状と、政府によるドラッグ政策の変化について報告する。今日のブラジル連邦政府は、コカインやクラックの乱用への対策を講じる上で、ドラッグ使用に対する懲罰方針を見直している。近年のラテンアメリカで活発化しているドラッグの合法化論を受けたものである。その対策の効果を判断するには時期尚早であるが、転換するドラッグ政策自体の方向性は検証可能である。そこで、ブラジルにおけるドラッグ乱用の現状、及び合法化論の争点とそれに対する反論について、筆者のフィールドワークのエピソードを交えながら報告する。その上で、新たなドラッグ政策にフィールドワークを踏まえた実証研究に連なる方向性が見られる点を指摘し、その射程を論じてみたい。



[写真1] バイクが立ち並ぶカシヨエイラ市 (2014年3月筆者撮影)

II チラピアと呼ばれる男

後にチラピアと呼ばれるようになる男は、父系親族が多く住むカショエイラ市P地区の出身である。両親を同じくする兄弟はいない。父親は、チラピアが幼い頃に家を出て、他の地区で別の家族を作って暮らしている。一方、母親は、父親と別離後も、チラピアとともにP地区に留まった。母親が雑貨店員として働いている間にチラピアの面倒を見ていたのは、父系親族であった。2004年、フィールドワークのためにP地区へとやってきた筆者と入れ替わるように、母親は恋人の住む市外に転居したが、チラピアはP地区の祖父母宅に残った。

筆者が長期のフィールドワークを実施していた頃、チラピアは10代半ばで、日中は学校に通い、日暮れになるとボールを蹴りに広場に現れる少年の一人であった。顔見知りだけの小さなコミュニティなので、強盗を働く「危険人物 (perigoso)」は少なかったが、「厚顔な (descarado)」コソ泥、つまり、「鶏泥棒 (ladrão de galinha)」はたびたび噂になった¹⁾。チラピアはどちらでもなかったが、興味本位でマリファナに手を出したとしても不思議ではなかった。マリファナの吸引は、若者にとって決して珍しい娯楽ではなかった。

2012年2月、P地区を再訪した筆者が最後にチラピアと会ったとき、少年の頃は華奢に見えた身体が二回りほど大きくなっていて、相変わらず友人たちと談笑し、サッカーにも興じる青年であった。低賃金ではあるが定期収入が得られる郊外の靴工場に勤め始めていた。タフな力仕事ではあったが、近所の友人たちと一緒に深夜勤務もこなした。P地区に恋人もおり、彼女の母親は大変チラピアのことを気にかけていた。

2013年に事件は起きた。いつものごとく友人たちと談笑する中、チラピアはその一人と口論を始めた。口論自体はよくあることだ。しかし、その日は収拾がつかなかったらしい。チラピアは一旦自宅に帰ると、警察官として働く親戚の一人が所有するリボルバーを携えて通りに戻り、口論相手に向けて発砲したのである。弾は逸れたが、チラピアはそのまま逃走してしまう。数日後、茂みに隠れていたチラピアは逮捕され、父親が雇った弁護士が仕事をするまでの数日間、拘留された。

この発砲事件がチラピアの人生の分岐点となった。その後、P地区の人々がチラピアを見かけることはなくなった。夜中、皆が寝静まった頃に、フルフェイスのヘルメットを被って足早に丘から駆け下り、別の丘へ向かう姿を見たという目撃例ぐらいである。普段はその丘の一つの茂みに潜んでいるのだろうと言われている。しかし、誰も自分の目で確かめてはいない。チラピアを知る何人がが小聲で述べるのは、2014年3月時点で、20代半ばのチラピアは、既に複数の丘を拠点とするギャングのボスとなり、警察からドラッグの密売のみならず、殺人(教唆)の疑いも持たれていることである。もし口論のときにもう少し辛抱していたならば、もし親族の一人が警察官でなかったならば、もし発砲事件後もP地区で暮らし続けるほど「厚顔な」性格であったならば。こうしたいくつもの「もし」が重なり、青年にはごくありふれたアフリカ産の淡水魚(ティラピア)に由来する呼び名が警察から与えられた。

III 経済成長とドラッグの氾濫

国連薬物犯罪事務所 (United Nations Office on Drugs and Crime) の年次報告書は、近年、ブ

ラジルのドラッグ事情について特徴的な変化を指摘している。コカインの増加である [UNODC 2011: 109; 2012: 41, 79; 2013: 2, 13]。2010年に押収された27万トン、2004年の押収量の約3倍に相当する [UNODC 2012: 41]。サンパウロ連邦大学が2013年に公表した調査によれば、今日のブラジルのコカイン消費量は、世界全体の20%を占めるに至っている [Universidade Federal de São Paulo n.d.]。

Tは、カシオエイラ市から車で20分程度のクルス・ダス・アルマス市にある小さなバルでの出来事を語ってくれた。同市には、近年開校した国立大学、ヘコンカヴォ・バイアノ連邦大学の本部があり、バルは若者たちで賑わっていた。友人たちと入店した彼は、店員にビールを頼むと次のように注文を聞き返されたという。

『『ありビール (cerveja com)』、それとも『なしビール (cerveja sem)』?』

「あり (com) かなし (sem) か」をめぐるバル店員とのやり取りは、ブラジルでは、炭酸の有無を指定するミネラル・ウォーターの注文でよく見られる。しかし、このバルでTが有無を問われたのは、ビール瓶に被せる保冷ケースの底に仕込んで渡すコカイン袋のことであったという。

コカインはアンデス地方の伝統嗜好品であるコカの葉を原料としている。同地方に国境を接するブラジルへの流入自体は今に始まった訳ではないが、多くは欧米市場に向かうものであった [Boiteux et al. 2009: 38]。今日でもブラジルはコカインのグローバルな流通の一大経由地である。とりわけ、ヨーロッパやアフリカのポルトガル語圏に流れるコカインは、その多くがブラジルを中継点としており、2009年から2011年の間にポルトガルで押収されたコカインの6割以上はブラジルを経由していた [UNODC 2013: 43-44]。

一方、国内での押収量の増加は、経済成長を続けてきたブラジルがもはやコカインの単なる経由地ではなく、巨大な消費市場に変貌した事実を示す。国連薬物犯罪事務所の報告書は、ブラジルでは若年層を中心に可処分所得が増加し、それに伴ってコカインを含むドラッグ流通量も増加してきたと指摘する [UNODC 2012: 87]。カシオエイラ市でドラッグと言えば、「マコニャ (maconha)」つまりマリファナが、「マリファナ常用者 (maconheiro)」とともに日常で耳にする言葉であった。確かに、筆者のフィールドワーク当初から既にコカインも流通していたが、マリファナに比べて高価で、簡単に入手できるものではなかった。それが今では、コカインを指す「粉 (farinha)」やクラックを指す「石 (pedra)」といった隠語が飛び交い、大麻常用者の代わりに「クラック常用者 (craqueiro)」という言葉が用いられる場面にしばしば出くわす。

カシオエイラ市の麻薬密売人たちは、乗り合いバスに小1時間ほどで到着する州第二の都市、フェイラ・ジ・サンタナ市ルートでドラッグを入手する。カシオエイラ市では廃屋、茂み、河川敷、日陰の小道などに「(入り)口」を意味する「ボカ (boca)」と呼ばれる密売所を構えて客を待つ。ボカへ向かう道には、若い少年たち、いわゆる「シス・ノヴィ (X-9)」が携帯電話を片手に見張っており、怪しい人物が通ったときは、ボカで顧客を待つ密売人たちに連絡が入る。ボカの近くには密売人がいつでも小道や崖道を逃走できるようにバイクが手配されている。見渡しの良い丘と農園に抜ける森に囲まれたカシオエイラ市は、警察や他のギャングから逃げるのに都合がよく、近隣の市に比べてボカも多い。



【写真2】カシヨエイラ市にある丘から別の丘を眺めた風景(2014年3月筆者撮影)

密売人は、ボカを中心とした縄張りを持っており、その縄張りの維持、拡大のために、ギャングを形成しやすい。カシヨエイラ市では、2011年に影響力のあるギャングのボスが逮捕されて以来、ボカを管轄するギャング間の対立が続いており、殺害されたギャングの遺体の写真が流布するという痛ましい出来事も起きている。その加害者と被害者はいずれも10代である。

IV ドラッグの克服と合法化

ブラジル連邦政府は、法務省の下に麻薬政策局 (Secretaria Nacional de Políticas sobre Drogas) を置き、ドラッグの氾濫への対策を積極的に講じている。2011年12月に開始された「クラック、克服することができる (Crack, É Possível Vencer)」キャンペーンは、コカインやクラックの常用及び売買をめぐる犯罪の減少を目的としたものである [Governo Federal do Brasil n.d.]。このキャンペーンは、「予防 (健康リスクの周知)」、「ケア (治療体制の確立)」、「取締り (ドラッグと密売の撲滅)」を柱として、教育、医療、治安に跨る包括的プログラムを策定するもので、2014年までに40億レアルの拠出を決定している。

ただし、地方政府の動きは遅く、パイア州も2013年ようやくキャンペーンに参加したばかりである。ゆえに、キャンペーンの具体化にはまだ時間がかかるだろう。2014年3月時点でカシヨエイラ市近郊に確認できるドラッグ関連の取り組みは、アルコール依存症患者の社会復帰を支援してきた民間の回復センターのみである。このように、現時点で、キャンペーンが抜本的なドラッグ対策となるか否かを判断できる段階にはない。今後、具体化されたキャンペーンは、その評価をめぐる政治的駆け引きを経ながら、効果が検証されるだろう。

一方、ブラジルにおけるドラッグ政策で注目すべきは、このキャンペーンが始まる数年前に大幅な変更が加えられたドラッグの売買に関する法的規制である。1976年の6.368号では、ドラッグの売買と使用の両方に刑期を科していた。だが、2006年の11.343号では、個人的使用として認められた場合、刑務所での服役が免除されることになり、教育プログラムへの参加や共同体奉仕活動に差し替えられた。つまり、ドラッグの使用を懲罰対象から除外したのである²⁾。現行のキャンペーンでも、ドラッグ依存に対する予防やケアが優先され、取締り分野では、ドラッグ使用者の摘発よりも、地域社会に根差した警察の組織化や関係機関の連携によるドラッグとその密売ネットワークの撲滅が強調されている。このドラッグ使用者に対する姿勢の変化は、ラテンアメリカ全体で議論が重ねられてきた新たなドラッグ政策にも共有されている。それは、組織犯罪を抑止する観点からドラッグの流通解明に力点を置き、そのためには「ドラッグの合法化」という選択肢も排除していない点である。

ラテンアメリカにおいてマリファナ使用の合法化は、古くから議論されてきたが、近年になって、大きな影響力を持ち始めている。例えば、2009年に三人の元大統領を共同代表とする「ラテンアメリカのドラッグと民主主義委員会 (The Latin American Commission on Drugs and Democracy)」から『ドラッグと民主主義：パラダイム・シフトに向けて』と題する提言書が公表された。三人とは、コロンビアのセサル・ガビリア (César Gaviria)、メキシコのエルネスト・ゼディージョ (Ernesto Zedillo)、そしてブラジルのフェルナンド・エンリケ・カルドーゾ (Fernando Henrique Cardoso) である。

同提言書には、「アメリカが採用してきた『禁止戦略』の不備とEUが従ってきた『害悪削減戦略』の利点と欠点を再検討する」とある [The Latin American Commission on Drugs and Democracy 2009: 3]。これは、とりわけアメリカが主導してきた政策で、薬物使用を禁止し、懲罰の対象とする従来の取り組みが、組織犯罪の抑止という点では十分な成果を上げてこなかった事実を受け入れて、EU諸国での取り組みを参考として革新的な代替案を模索することを意味している。具体的には、ドラッグ常用に至る患者と売買に携わる密売人とを分け、前者には懲罰ではなく回復プログラムを科す。また、ドラッグの売買をめぐる組織犯罪を抑止するためには、これまでタブー視されてきたドラッグの合法化を議論の俎上にのせて、ドラッグ売買の流通網の管理に乗り出すというものである。

合法化の検討や容認は、ブラジルが加盟する米州機構 (Organisation of American States) の中心課題でもある。2013年5月に公表されたレポートでは、アメリカ主導の下での従来のアプローチに代わって、「合法のおよび規制的代替案」を提示し、薬物の使用や売買を一律に犯罪とするよりも、合法化による入手方法や使用量の規制が、組織犯罪の抑止にはより効果的であるとしている [Organisation of American States 2013]。

こうしたドラッグ合法化の議論を受けて、ウルグアイの議会では、2013年末にマリファナの栽培と購入の合法化法案が可決され、禁止戦略を主導してきたとされたアメリカ国内でも、州レベルでは個人的な使用が合法化されるに至っている。

ただし、ブラジルでは反対論が根強く、現時点で、合法化へと国民の賛同を集約する段階には至っていない。今のところ、合法化の対象はマリファナに限定されているが、反対派が懸念するのは、このマリファナが「入門ドラッグ」となる危険性である。マリファナをめぐるのは、タバコやアルコールと比較して依存性が低く、他のドラッグよりも安全だとする主張がある。この主

張に基づき、リベラル派は、制限を最小限にすべきと、マリファナ解放を支持する。さらに、ドラッグには効能さえあるとして積極的に合法化を求める立場の人々は、乱用に気を付けて正しく使用しさえすれば、マリファナは使用者に束の間の休息を与え、その刺激は新たな創造性さえもたらすと主張する。一方、反対派は、マリファナの常用がより依存性の高く健康を害するドラッグの使用に繋がるとして、合法化を批判する。



[写真3] サンパウロ州サンパウロ市でのマリファナ合法化反対運動
(2011年12月筆者撮影)

V ドラッグをめぐる「要因」と社会環境

それでも、近年のブラジルにおけるドラッグ政策の変化は、合法化に至るか否かに限らず、ドラッグの流通に対する一般的な語り口、つまり「社会環境」言説を再考するのに十分なインパクトを持っている。というのも、組織犯罪の抑止を優先し、ドラッグの流通解明を焦点化する以上、ドラッグの流通を可能にする社会環境それ自体を問うことが前提となるからである。実際、現行キャンペーンで強調されていた関係機関の連携は、流通網の解明や解体を狙ったものである。ここでは、次のような問いと必然的に直面することになる。誰が、どのような経緯で、何を介してドラッグに誘われるのか。そのドラッグは密売者からどのように入手し、その密売者はいかにして密売を始めるのか。密売は、どのような組織化と対立を引き起こすのか。そして、密売をめぐる金銭は、誰と誰の間でどのように授受されるのか。ドラッグの流通解明には、こうした問いの中で、社会環境を具体的に解明することが必要となる。

では、そもそもこれまでドラッグをめぐる社会環境とはどのように語られてきたのだろうか。

今日、ドラッグの乱用と特定的人格や人種とを結びつける言説は、人種差別として斥けられるだろう。チラピアがギャングのボスへと駆け上がってゆく要因を求めるとすれば、彼の限りなく浅黒い肌ではなく、決して豊かではない母子家庭で育ち、思春期には母とも離別したという不遇なライフストーリーが挙げられるに違いない。ドラッグの生産、密売、消費は、このように貧困や経済格差といった社会環境と結び付けられる傾向がある。十分な収入源もなく、教育機会にも恵まれない社会環境が、ドラッグに手を染める人々（とりわけ密売人）を育てているとの説明を導きやすい。

こうしたドラッグをめぐる言説は、特定の人種とドラッグ犯罪との相関関係を想定せずに、ドラッグに携わる要因を人物本人ではなく、その人物をめぐる社会環境に求めている。ブラジルは人種差別の少ない国と言われてきたが、それでも黒人や混血に対する偏見や差別は根強い。人種差別的言説を回避する社会環境言説は、ブラジルの人種問題に対して一定の政治的効果をもたらすだろう。その一方で、社会環境言説もまたは、人種差別的言説に見られる決定論に接近する傾向がある。というのも、要因が貧困や格差という極めて限定された社会環境に収束しやすいからである。

ドラッグの流通をめぐる実証的調査は、こうした社会環境による素朴な決定論について、結果として、過度に単純化された貧困共同体像をその外部からいつまでも再生産してしまうと警笛を鳴らしてきた。リオデジャネイロ州において、ブラジルのスラム、つまり「ファヴェラ (favela)」でフィールドワークを重ねてきたアルバ・ザルアル (Alba Zaluar) も強調するように、ファヴェラでドラッグに手を染める住民は、決して多数派ではない [Gois 2004]。カシオエイラ市でも同様である。ドラッグの「関係者 (envolvido)」のネットワークは確かに広範にわたるが、たとえ貧しくともほとんどの住民は関わりを持たない。また、市内外で強盗を働くような危険な人物も、皆がドラッグの密売やギャング活動に携わる訳ではない。そうした事実を踏まえた上で、P地区近隣のギャングのボスに登りつめたのがチラピアであったことを考えると、その過程で生じたいくつもの「もし」、つまり「偶発性」を解きほぐすことなくして、ドラッグの流通の現実を解明できないはずである。

ドラッグの流通網の解明にも、こうした実証的な調査研究のような作業が求められるだろう。それは、貧困や格差といった社会環境として一括りにされがちなドラッグの生産、流通、消費の過程について、誰が、何を、どのようにという問いを発しながら、そして人生の偶発性と向き合いながら、明らかにする作業である。この作業は、解答の安易な一般化、つまり最大公約数や平均値を拒否し、迅速な対応策の捻出を不可能にする。結果的に判明するのは、ドラッグの流通の「法則なき法則」とでも呼びうるものかもしれない。

それでも、今日のブラジルにおけるドラッグの氾濫を考えるならば、こうした地道な作業が不可避免的に要請されていると筆者は考える。国連薬物犯罪事務所が指摘するように、ドラッグの流通は、貧困や格差だけでなく、今や可処分所得の向上とも結びついている。ブラジルの経済成長は、ドラッグを取り巻く社会環境自体に新局面をもたらしたのである。新たなドラッグ政策は、こうした社会環境の変化を踏まえて、ドラッグの流通をめぐる現実を問い直す必要がある。一方で、これまでの実証的調査の成果は、こうした社会環境の問い直し作業の参考となり、合法化への賛否は別として、組織犯罪抑止に貢献できるに違いない。

VI むすびにかえて

今日のブラジルにおけるドラッグの氾濫の只中に身を置くならば、人々の間で次々に起こる悲惨な事件を前にして焦燥感に苛まれるはずだ。ドラッグ氾濫に対する政府の政策や民間の取り組みについて「今後の展開が待たれる」などのコメントにとどめ、事態の経緯を見守るための時間も場所も残されてはいない。ただし、繰り返すが、実証的にドラッグの流通網を解明するという試みは、貧困や格差といった社会環境を持ち出すだけでは語れない、偶発性に満ちた人々の人生と向き合い続ける地道な作業である。

最後に、偶発性に加えて、この地道な作業から見えてくる光景を改めて想起すべきである。それは、今日のブラジルでのドラッグの氾濫がそれ単独ではなく、様々なモノがあふれる中で生起している点である。カシオエイラ市でのドラッグの流通で見たように、人々は貧困や格差といった予め用意された社会環境によってドラッグの流通の場に身を置くのではなく、むしろ銃器、携帯電話、バイク、そしてドラッグとの偶発的な出会いを通して、ドラッグ関係者の世界に誘われ、巻き込まれてゆく。ゆえに、ドラッグの流通網を解明するためには、その流通に身を置く人物がどのような経緯をもつのかという問いのみならず、ドラッグも含めたモノがどのように流通するのかをも問わなければならない。経済発展を続けてきた今日のブラジルで自由を得たのは、人間だけではないのである。

注

- 1) 近所のよその家の裏庭で放し飼いにされた鶏を盗んでは売り払ってしまうような軽微な窃盗行為に由来する。
- 2) ただし、警察の取り締まり現場において、使用者と密売人の区別は必ずしも明確ではなく、積極的な取り締まりの中で、かえって刑務所収容者が増加しているとの指摘もある [Organisation of American States 2013: 159]。

参考文献

Boiteux, Luciana, Ela Wiecko Volkmer de Castilho, Beatriz Oliveira Batista, Geraldo Luiz Mascarenhas Prado, Carlos Eduardo Adriano Japiassu

2009 *Tráfico de Drogas e Constituição*, Secretaria de Assuntos Legislativos do Ministério da Justiça, Brasília.

Duarte, Paulina do Carmo Arruda Vieira, Vladimir de Andrade Stempluk e Lúcia Pereira Barroso

2009 *Relatório Brasileiro sobre Drogas*, Secretaria Nacional de Política sobre Drogas, Brasília.

Gois, Antônio

2004 “‘Hipermasculinidade’ leva jovem ao mundo do crime”, *Folha de São Paulo* (12 de Julho), A12.

Governo Federal do Brasil

n.d. <http://www2.brasil.gov.br/crackepossivelvencer/home>

Organization of American States

2013 *The Drug Problem in the Americas: Legal and Regulatory Alternatives*, Organization of American States, Washington, D.C.

The Latin American Commission on Drugs and Democracy

2009 *Drugs and Democracy: Toward a Paradigm Shift*, s.l.: s.n.

United Nations Office on Drugs and Crime

2011 *World Drug Report 2011*, United Nations, New York.

2012 *World Drug Report 2012*, United Nations, New York.

2013 *World Drug Report 2013*, United Nations, New York.

Universidade Federal de São Paulo

n.d. <http://inpad.org.br/lenad/resultados/cocaina-e-crack/press-release/>

(ウェブサイトは全て 2014 年 9 月 20 日にアクセス確認した内容である)

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014 夏期調査」

— アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ —

辻 豊 治 / 南 博 史

はじめに

本稿は、京都ラテンアメリカ研究所（以降、IELAK と表記）の共同調査として 2014 年度から開始したニカラグアにおける学術調査（考古学と社会学）について、夏に実施した現地調査の報告を中心に、調査に至る経緯、調査の内容と成果を報告するものである。

本文は 3 章で構成されている。Ⅰ章はニカラグア学術調査に至る経緯、Ⅱ章は 2014 年夏期に実施したマタガルバ県マティグアスにおける現地社会状況およびニカラグアの開発について、Ⅲ章は同じく 2014 年夏期に実施したマティグアスにおける考古学およびそれに関連する調査の報告である¹⁾。

なお、いずれの調査も継続中であるためあくまで「2014 夏期調査」報告としたが、今回の学術調査の特徴である実践的地域研究を積み重ねていくという方法においては、毎年のそれぞれの研究の成果を明らかにしていくものである。

Ⅰ章 ニカラグア学術調査に至る経緯

1. 国際シンポジウム「ラテンアメリカ地域統合への挑戦」

京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所では、2012 年 6 月に国際シンポジウム「ラテンアメリカ地域統合への挑戦」を開催した。このために準備されたラテンアメリカ・カリブ諸国大使会議（GRULAC）による「ラテンアメリカ・カリブ海諸国共同体（CELAC）行動計画および綱要」の序文には、「ラテンアメリカ・カリブ海諸国の統合は、何世紀にもわたる支配の後、独立した国家として勃興した諸国民にとって、歴史、文化、宗教、地理、社会・政治的状况に共通性があることから、古くからの願いであった。」とある。一方、この目的を達成するためには多くの課題があり、さまざまな経緯を経て関係諸国は 2011 年「カラカス宣言」に合意し、「カラカス 2012 行動計画」が採択された。

このシンポジウムでは、こうした経緯を踏まえた上で、メキシコ、ニカラグア、キューバ、コロンビア、ベネズエラ、チリの大使と日本側研究者（IELAK からは辻豊治副所長・住田育法研究員が参加）が、各国の現状と課題、そして今後の方向性について意見を交換した²⁾。一方、日本としても経済発展の伸び代が大きい当該地域は、日本の将来にとっても大変重要であるという指摘もあった。とくに今回の研究の対象地ニカラグアを含む中米 6 カ国、カリブ海およびその周辺諸国は、環太平洋パートナーシップ地域の連携地域でもあることも注目できる。

つまり、この地域の歴史、文化、社会を対象とした研究を行うことは、当該地の文化や社会についての認知度が低い日本において大いに意味がある。加えて日本が広範な視点とテーマで各国を交えた研究活動を行うことで、一方で利害が対立しがちな当該地域諸国間において、その相互

理解と交流に貢献していかなければならないという提言があったと位置付けた。

2. 京都ラテンアメリカ研究所 (IELAK) による共同研究の開始

2013年 IELAK では、このシンポジウムからの提言、成果を踏まえてメキシコ湾～中米6カ国を含むカリブ海およびその周辺地域を総合的に研究する活動「アメリカ地中海文化研究」を開始した。その目的は、CELACの行動計画・序文にある「ラテンアメリカ・カリブ海諸国の統合は、何世紀にもわたる支配の後、独立した国家として勃興した諸国民にとって、歴史、文化、宗教、地理、社会・政治的状況(の)共通性」に基づくことを実証的に明らかにすることである。そして、その成果を当該地域の持続可能な環境と開発、社会に関するさまざまな課題の解決に向けて生かし、地域統合に向けて協働していくことを目指している。

また、カラカス宣言21条では、「諸国民の団結と多様性の賢明な調和をはかっていく。それは、この地域統合メカニズムを我々の豊かな文化的多様性の表現にふさわしい場に、中南米カリブのアンデンティティーやその共通の歴史、公正と自由を目指す」とあるように、当該地域の文化的多様性もまた明らかにしていくべきテーマである。そのためには地域に密着した実践的地域研究が必要である。いずれもそれを支える各専門の研究者、研究の支援体制や関係諸機関とのネットワークが不可欠である。

IELAKはまさにこうした研究を進める体制が整っている。たとえば京都外国語大学が協定を結んでいるラテンアメリカ地域の大学は6カ国におよぶ³⁾。また IELAK にはメキシコ名誉領事館とニカラグア名誉総領事館が置かれ⁴⁾、ラテンアメリカを専門領域とする歴史、文化、社会、経済、政治の広い範囲の研究者が所属している。

3. IELAK において共同研究を行う意義

以上を踏まえてあらためて IELAK がこの研究を進める意義は、以下のように整理できる。

- 1) 前記したように「アメリカ地中海地域」には多数の国が位置し、歴史・文化だけでなく政治・社会において多様性を保持している。つまり、ラテンアメリカ地域統合という目標、大同については共有できたとしても、ともすれば小異、利害が対立しがちな諸国間同士の関係にとらわれずに実施できるということである。
- 2) 逆に、IELAK が研究を主導することで多国間での協働研究も可能となる。つまり、広範な視点およびテーマを切り口に、各国との連携と協働による研究活動が行える。
- 3) また、日本での研究成果の還元も IELAK の重要な役割である。

シンポジウムでも指摘されていたように、日本は二つの大きな地域統合、経済・文化圏とつながりがある。一つはアジアであり、もう一つは環太平洋経済文化圏と重なり結節するラテンアメリカの地域統合である。後者の経済発展は日本にとってアジアに勝るとも劣らない重要な影響をもたらす。しかし、現状は決して当該地域の情報が十分に日本に発信されているとは言えない。

IELAK は京都外国語大学の研究機関として、研究者のみならず学生、一般への教育普及活動とその役割の一つとしている。また、京都外国語大学国際文化資料館⁵⁾でも、学生から一般を対象とした展示、教育普及活動を実施しており、両者が協働することにより、地域に対する成果の還元をさらに有効なものとする。

以上を踏まえて、2013年には共同研究「ニカラグアの考古学及び文献学資料評価と発展への応

用一アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ」を開始した。そして、2014年には日本私立学校振興・共済事業団から、これを研究題目とする平成26年度学術研究振興資金（研究代表者：南博史）による援助を受けた。これによって本稿で報告する社会学（ニカラグアの経済、政治、社会状況、マティグアス郡基礎データの整理と経済、教育、環境問題の分析）と考古学（ティエラブランカ地区ラスベガス遺跡発掘）調査と博物館活動を行った。なお、考古学調査と博物館活動については、JSPS 科研費 26570013 の助成も受けている。

注

- 1) 文責は各章の末に明記した。なお、参考文献は各章ごとにまとめた。
- 2) 2012年12月にIELAKから報告書『学校法人京都外国語大学創立65周年記念国際シンポジウム「ラテンアメリカ地域統合への挑戦」』が発行されている。<http://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kenkyu12report.pdf>
- 3) 2015年3月現在、メキシコ、グアテマラ、ニカラグア、コスタリカ、エクアドル、ペルー、ブラジルである。
- 4) いずれも本学森田嘉一理事長・総長が名誉領事を務めている。
- 5) IELAK 南博史研究員が館長を務める。

(南博史)

Ⅱ章 ニカラグア調査報告

はじめに

京都ラテンアメリカ研究所では、中米を対象とする研究プロジェクトを2013年から立ち上げ、今回、日本私立学校振興・共済事業団の援助を受けて、ニカラグア調査に着手した。調査の中心はニカラグア・マタガルバ県マティグアス郡に存在するラスベガス遺跡調査であるが、今回のプロジェクトは遺跡調査の成果を地域振興や地域開発に供して、博物館の開設や学校教育に生かしていくという目的をもっており、その一環として、地域事情の把握が不可欠であるとの観点から、ニカラグア事情およびマティグアス郡の社会、経済、教育事情の調査を筆者が担当することとなった。

調査期間は8月21日から9月5日まで、うち7日間はマティグアス郡での聞き取り調査と資料収集、8日間は首都マナグアでの聞き取り調査と文献収集に当たった。調査の方向はニカラグア全体の現状を把握したうえで、マティグアス郡の位置づけを行うもので、調査項目は、ニカラグアの経済、政治、社会状況、マティグアス郡については基礎データの整理と経済、教育、環境問題の分析である。

1. ニカラグアについて

1) ニカラグアの基本指標¹⁾

- ・面積 12万9541平方キロ（中米最大、日本の34%）
- ・人口 613万4270人（2013年）
- ・人口増加率 1.2%（2013年）
- ・首都 マナグア（人口110万人）

- ・都市人口 58.3% (2012年)
- ・人種構成 混血70%, ヨーロッパ系17%, アフリカ系9%, 先住民4%
- ・大統領 ダニエル・オルテガ・サアベドラ
(サンディニスタ民族解放戦線 FLSN, 任期 2012-17年)
- ・議会 一院制 (92議席) FLSN (63議席)
独立自由党 (27議席) 立憲自由党 (2議席)
- ・行政区分 15県 (Departamento) と2自治区 (Región Autónoma, 北部大西洋自治区・南部大西洋自治区)。県と自治区のなかに合計153の郡 (Municipio)。さらに郡内に郡庁所在地 (Cabecera Municipal 市) と村 (Comarca) があり, 最小の行政単位は村落 (Comunidad) である。

2) ニカラグアの経済指標

- ・1人当たり年間国民所得 1790ドル (2013年 世界銀行)²⁾
ラテンアメリカではハイチに次いで最悪の数字で, 辛うじて下位中所得国に分類されている。
- ・GDPに占める産業の構成比 (2013年 ニカラグア中央銀行)³⁾
一次産業 (16%) — 農業 (7%) 牧畜 (5%) 林業 (1%) 漁業 (1%)
農業では食糧作物, サトウキビ, コーヒー, タバコなど
鉱工業 (47%) — 食品加工 (11%) 石油精製 (6%) 衣料 (9%) 精糖 (4%)
乳製品 (3%) 機械・輸送機器 (3%)
サービス・商業 (36%) — サービス (25%) 商業 (11%)
- ・主要貿易品目 (2013年 ニカラグア中央銀行)⁴⁾
輸出 金 (4億3160万ドル) 牛肉 (3億8380万ドル) コーヒー (3億4950万ドル)
砂糖 乳製品 ピーナッツ エビ フリホール豆
なお, 観光収入は4億1700万ドルである。(2013年 ニカラグア観光局)
輸入 消費財 中間財 石油製品
- ・主要貿易相手国 (2013年)
輸出 米国 ベネズエラ カナダ エルサルバドル コスタリカ グアテマラ
輸入 ベネズエラ 米国 コスタリカ メキシコ グアテマラ エルサルバドル
- ・物価上昇率 5.7% (2013年)
- ・完全失業率 5.9% (2013年)
- ・経済成長率 [%]⁵⁾
2000年 [4.10] 2001年 [2.96] 2002年 [0.75] 2003年 [2.52] 2004年 [5.31]
2005年 [4.28] 2006年 [4.15] 2007年 [5.29] 2008年 [2.85] 2009年 [-2.76]
2010年 [3.30] 2011年 [5.69] 2012年 [4.95] 2013年 [4.61]
2014年 [予測値 4.00]

3) ニカラグア農業の現状⁶⁾

- ・全土 859万マンサナ (1マンサナ = 0.7ha, 1ha = 1万平方メートル)
 - ・南部大西洋自治区 194万マンサナ
 - ・北部大西洋自治区 104万マンサナ

- ・マタガルパ県 78 万マンサナ
- ・チョンタレス県 71 万マンサナ
- ・ヒノテガ県 67 万マンサナ
- ・その他の県 346 万マンサナ
- ・生産者数（2011 年） 26 万 2549 人
- ・個人・家族経営が 99.53%

5つの経営規模（単位はマンサナ）

- ①零細（0-10） 59%
- ②小規模（11-50） 26%
- ③中規模 A（51-200） 12%
- ④中規模 B（201-500） 2%
- ⑤大規模（501 以上） 1%

ニカラグア農業の特徴は、10 マンサナ以下の零細農家が約 60%、50 マンサナ以下の零細・小規模農家が 85% を占めており、土地の利用は、牧畜 65 万マンサナ（54%）に対して、農地 385 万マンサナ（45%）、農牧施設・農道 9 万マンサナ（1%）となっている。また 100 マンサナ以上を大規模農地とすると、80～90 の大規模農場がニカラグアには存在している。さらに特徴的なのは、土地の 96% が自作農地で残りの 4% が借地となっている。農業における農地規模の二極化と粗放的な牧草地の存在が農業の近代化の遅延や環境問題の遠因になっている。一般論的には、集約的な農牧業経営や適正での農地規模への転換や環境との調和などの政策が不可欠となる。

2. ニカラグア運河構想の現状⁷⁾

1) その概要

- ・全長 278 キロ（105 キロはニカラグア湖を通過）
- ・総工費 約 500 億ドル
- ・工事期間 2014 年 12 月 22 日（すでに着工）～ 2019 年 12 月
- ・所要時間 30 時間
- ・年間通行船舶 5100 隻
- ・事業主 中国企業 HKND グループ（香港・ニカラグア運河開発投資公司）→ 50 年間のコンセッション供与
- ・運河ルート プンタ・ゴルダ→トゥーレ川→ブリトー
- ・関連事業
 - 港湾建設 ブリトー港（太平洋側） プンタ・アギラ港（カリブ海側）
 - 自由貿易地域 ブリトー地区に特区を設置
 - 観光事業 太平洋側に観光エリア
 - 空港 リバス市北部 特区と直結
 - 道路 関連施設間を結ぶ
- ・建設時に 5 万人の雇用 完成後に 20 万人以上の雇用

2) その必要性

ニカラグアは一人あたり国民所得において、中米では最下位であり、ラテンアメリカ全体のなかでもボリビアやハイチとならんで最貧国となっている。特筆すべき資源がなく、主要産業である農業、牧畜に関しても著しく近代化が遅れており、観光開発も緒についたばかりである。国内の産業の遅れ、高失業率（とくに不完全就業やインフォーマル就業が6割を占める）、国民の半分が1日1ドル以下で暮らしている現状や生活インフラの遅れ、劣悪な教育環境などから、約80万人（79万1528人2012年）がコスタリカ（37万3548人2010年）、米国（34万8202人2010年）、カナダ（1万588人2010年）、エルサルバドル（2万人2008年）、パナマ（1万6141人2012年）、ホンジュラス（1万2581人2006年）、パキスタン（8955人2006年）、メキシコ、スペイン、ドイツなどに労働移住している（OIM）⁸⁾。数値はさまざまなデータから引用しているが、実態は100万規模に上がるものとみられる。ちなみに各国からのニカラグアへの送金は、2011年では、総額（9億1160万ドル）、内訳は米国（5億5290万ドル）、コスタリカ（1億9500万ドル）、ヨーロッパ（5250万ドル）、パナマ（1710万ドル）、その他（9410万ドル）である（ニカラグア中央銀行）⁹⁾。労働力の海外流出、貧困・失業の拡大、生活インフラの未整備、教育環境の悪化など、ニカラグアが抱える難題を一挙に改善する処方箋が昨年末、着手した運河建設である。

ニカラグアの経済成長率は2009年を除いて2005年以降、3～5%台で推移している。ニカラグア政府の運河建設を推進する大統領顧問のポール・オキスト氏は「経済成長率を倍増するには、運河建設しかない」¹⁰⁾と強調している。運河建設自体は香港の投資会社に建設後50年間のコンセッションが供与され、管理・保全が一任されている。運河収入はニカラグアののものにはならないが、運河関連の港湾、空港、道路建設による雇用や収益、自由貿易地域設定による貿易、商業にもとづく一大商業地域の建設やリゾート建設により、成長率の倍増を図っている。

3) その問題点

何よりも環境に対する負荷が大きき問題点となっている。運河掘削による森林伐採や河川の汚染、運河建設による南部大西洋自治区に居住する先住民生活圏への影響、運河による生態系の分断、淡水湖（ニカラグア湖）への海水流入による淡水野生生物への影響、さらに開業後の船舶による外来生物の侵入や汚水・廃油による河川・湖沼の汚染などが考えられるが、想定外の環境破壊の可能性も否定できない。

3. ニカラグア・マティグアス郡について

1) 基本指標 ¹¹⁾

- ・面積 1710 平方キロ
- ・人口 6万人 都市部（マティグアス市）14000人（23%）農村部46000人（77%）
- ・位置 首都マナグアから249キロ
- ・主産業 農業（トウモロコシ、豆、コーヒー、カカオ） 牧畜 商業
- ・マティグアスの行政

マティグアスはマタガルパ県内13郡の一つで、マティグアス市15区と26コマルカ〔村〕（コマルカのなかに88村落）からなる。ちなみに県庁所在地はマタガルパ郡マタガルパ市である。2012年の人口調査では、マタガルパ県の総人口は54万2400人である。

- ・マティグアス郡予算（2014 年度）
 - 総予算 2279 万 8798 コルドバ（約 1 億円）
 - 内訳 環境 1,191,728.75（5%）
 - 教育 1,191,728.75（5%）
 - 保健・衛生 1,191,728.75（5%）
 - 浄水・排水設備 3,000,000.00（13%）
 - 道路建設 9,298,517.60（41%）
 - その他のインフラ 6,924,494.15（30%）

2) マティグアスの教育事情

- ・小学校 148 校（マティグアス市に 8 校）小学校は 6 年制
 中学は 5 年制
 マティグアス市内に 8 校（普通校 4, 土曜学校 3, 夜間 1）
 農村部 5 校（普通校 2, 土曜学校 3, 夜間 0）
 他に 1 年制中学（郡立） 農村部 8, 都市部 4
- ・大学 2 校（マティグアス市）
 大学は 4～5 年制
 「ルベン・ダリーオ」大学
 「マルティン・ルフェオ」大学 215 名在籍 工学 教育 英語 財政・会計 看護
 各学部
- ・在籍数 [2014 年] 小学校（農村部 4979 人 都市部 2666 人）= 7646 人
 中学 2859 人
 教師の給料 6000～7000 コルドバ（26,400～30,800 円）
 最低賃金 5000 コルドバ（22,000 円）

教育における問題点として、教育インフラが圧倒的に遅れており、教師、教室、学内設備、教科書や一般図書、文具などが不足し、教育環境は劣悪である。郡内の小・中校では、パソコン導入の余裕がなく、地域外への視野が閉ざされて、教育面でも閉鎖的な環境となっている。政府からの教育支援も存在するが、郡の教育予算は限られており、郡内 161 校に対して年間約 500 万円程度であり、早急な改善は難しい現状にある。教師の給料は月最低賃金 5000 コルドバに対し、6000～7000 コルドバと低賃金で、有用な人材が集まらないのが、実情である。

- ・Paquete Escolar Solidario（貧困家族への教育支援）
- ・教育省（教師を含め 420 人を統括）が県都や郡都に代表部
- ・児童労働の存在（農場労働および市場での補助労働など）

3) 環境問題

マティグアス郡の土地所有規模は全体に中規模（200 マンサナ）以下であり、農地利用では焼畑や未開地の開拓、牧草地においても森林伐採による牧草地の拡大によりきわめて粗放的な経営形態になっており、こうした農牧業の無秩序な開発の結果、10 年前には年間 40%にまで森林伐採が進んだが、現在は規制強化によってその進行は緩和されている。木材は商業用ばかりでなく、自

家用の燃料としても利用されている。郡内で絶滅した樹木は、黒檀、ユソウボク(癒瘡木)、マカウドなど、絶滅動物した動物はシカ、ジャガー、ヤマネコ、バクなどである。

このような森林伐採の影響は、森林の保水力の低下による雨季における河川の氾濫、乾季における干ばつを招き、洪水被害や農業用水・生活水の不足など深刻な影響をもたらしている。さらに環境問題としてゴミ・トイレ問題がある。都市部を除き、ゴミ処理場が不足し、普通ゴミだけでなく、家電やプラスチックなどの不燃ゴミの河川などへの投棄は、資源の浪費ばかりでなく、環境問題・健康問題につながっている。農村部ではトイレは普及しておらず(普及率10%)、また家畜との同居が衛生環境を悪化させている。

4) マティグアス経済の現状

郡の主要産業は農牧業および商業である。商業は都市部にみられ、200軒あまりの食料雑貨店、郡営市場周辺にホテルが集中している。その他酒場、製粉業、チーズ製造、飲食店、ガソリン・スタンド、衣料販売、診療所、理髪店、塗装業などが存在する。農村部では自家消費用穀物や野菜・果物が栽培されるが、一部は市場で販売される。乳製品も重要な商品であるが、市場は県内中心である。また家畜として豚、ニワトリ、アヒル、七面鳥などが飼育されており、その一部は市場に出荷されている。またスペイン政府の援助で郡南部に汚水処理など環境に配慮した食肉加工センターが建設された。近年はカカオの有機栽培を促進している。

注

- 1) 在ニカラグア日本国大使館資料(2014年)などから作成。
- 2) <http://data.worldbank.org/indicator/NY.GNP.PCAP.CD> (2014年11月1日閲覧)
- 3) Banco Central de Nicaragua. *Nicaragua en cifras*, 2013, pp.11-14. (www.bcn.gob.ni 2014年12月20日閲覧)
- 4) *Ibid.*, p.19.
- 5) http://ecodb.net/country/NI/imf_growth.html (2014年12月16日閲覧)
- 6) *Censo nacional agropecuario* (CENAGRO) 2011, pp.4, 5.
- 7) 在ニカラグア日本国大使館『ニカラグア両太平洋間運河計画』2014年。
- 8) Heydi José González Briones (elaborador). *Perfil migratorio de Nicaragua 2012*, Managua: Organización Internacional para las Migraciones (OIM), 2013, p.38.
- 9) *Ibid.*, p.76.
- 10) ポール・オキスト博士(ニカラグア国家政策担当大統領秘書官)講演会(2014年5月15日, 東京日本プレスセンター)
- 11) *Memorias de gestión de Gobierno, Municipal de Matiguás*, Matagalpa 2005-2008 および Banco Central de Nicaragua. *op.cit.*, p.38. (www.bcn.gob.ni 2014年12月25日閲覧)

参考文献

在ニカラグア日本国大使館

2014 『ニカラグア両大洋間運河計画』

Banco Central de Nicaragua

Nicaragua en cifras

<http://www.new-ag.info/en/country/profile.php?a=2143> (2015年1月12日閲覧)

Folkman, David I.

2001 *La ruta de Nicaragua*, Fundación Vida, Managua.

Incer Barquero, Jaime

2013 *Geografía básica ilustrada de Nicaragua*. HISPAMER, Managua.

Montserrat, Roser Sola

2007 *Un siglo y medio de economía nicaraguense: las raíces del presente*. Facultad de Ciencias Económicas y Empresariales, Universidad Centroamericana, Managua.

2008 *Estructura económica de Nicaragua y su context centroamericano y mundial*. Facultad de Ciencias Económicas y Empresariales, Universidad Centroamericana, Managua.

Municipio de Matiguás

2013 *Ficha municipal, 2013*.

Organización Internacional para las Migraciones [OIM]

2013 *Perfil migratorio de Nicaragua 2013*.

Pozo Urbana, Ramiro Fernando

2014 *El gran canal interoceánico "un derecho soberano de Nicaragua"*, SENIUCSA, Managua.

Rocha, José Luisa

2010 *Expulsados de la globalización*, IHNCA-UCA, Managua.

Vargas, Oscar-Rene

2006 *Nicaragua 2015: los objetivos de desarrollo del Milenio*, Centro de Estudios de la Realidad Nacional (CEREN), Managua.

The World Bank

2013 *World Development Report*, IBRD/WB, Washington D.C.

www.pronicaragua.org

2011 *Nicaragua Investor Guideline 2011*.

※マティグアスの社会・教育事情については、

Municipalidad de Matiguás でのインタビュー（マティグアス，2014年8月26日～28日）

Sra. Gloria Ordoñez (ANIDES 代表) とのインタビュー（マタガルパ，2014年8月28日）

Sr. Teodoro Moreno Madrigal (Delegación Ministerio de Educación) とのインタビュー

（マティグアス，2014年8月29日）

※ニカラグア運河計画および一般事情については、

ポール・オキスト（ニカラグア国家政策担当大統領秘書官）講演会

（東京日本プレスセンター，2014年5月15日）

在ニカラグア日本国大使館 野口吾吾副領事 森田実希専門調査員とのインタビュー

（マナグア，2014年9月3日）

謝辞：関係各所よりそれぞれ情報を得ました。記して感謝申し上げます。

（辻豊治）

Ⅲ章 プロジェクト・マティグアス

はじめに

本章は、2014年8月21日～9月5日にニカラグア共和国マタガルパ県マティグアス郡（第1図）で実施したプロジェクト・マティグアス2014年度夏期調査の報告である。

このプロジェクト・マティグアスとは、京都外国語大学国際文化資料館とニカラグア国立自治大学（以下、UNAN）が、ニカラグアのマタガルパ県に本部をもつNGO団体ANIDES¹⁾（ニカラグア持続的発展のための協会）の協力のもと、2012年よりマタガルパ県マティグアス郡で実施し



第1図 ニカラグアとマティグアスの位置

ている考古学と博物館学を仲介者とした実践的地域研究プロジェクトである。地域に残る遺跡や記念碑などの考古遺産はじめさまざまな地域資産を発見・保存・活用し、地域社会の課題解決に向けた活動を行うことを目的としている。

このプロジェクトのスタートは、2012年3月の京都外国語大学国際文化資料館が行ったニカラグア訪問にはじまる。その後、共同研究者である UNAN のサグラリオ・バジャダレス教授からの推薦とマティグアス地域の考古学の学術的価値を明らかにし先住民の文化をテーマにした博物館づくりを計画していた ANIDES との出会いを経てこの地を調査地に定めた²⁾。

本章ではプロジェクト・マティグアスの背景や目的、その方法、過去の調査などにも触れながら、2014年度夏期調査の経過と成果をまとめる。なお、今回の調査はプロジェクト・マティグアスの現地調査として、2013年第1次調査(8-9月)、2014年第2次調査(2-3月)に続いて3回目の調査となる。

1. プロジェクト・マティグアスについて

1) プロジェクト・マティグアスの目的とその意義

2010年、UNAN によってマティグアス郡における岩刻画やマウンド、地上に散在する考古遺物、遺跡の分布調査が実施された。この結果は、マティグアス郡には先スペイン期において組織的な社会が存在したことを裏付けるものであり、考古学の学術的価値を見出す契機となった。さらに本調査がもたらす効果は、地方自治体が進める地域活性化プランに含まれる考古遺産の保護にも関わることであり、地域活性化プランそのものの促進にもつながるものであった。

したがって、この調査により得られる結果が、地域住民が自分たちの地域の歴史を再認識することに役立ち、そこから自分たちのアイデンティティの強化と自尊心を育むことができるものと期待されるのである。こうした期待と意義をもとに、プロジェクト・マティグアス活動は、以下の具体的な課題に取り組むことになった³⁾。

①この地域は古代メソアメリカ文化領域と古代アンデス文化領域に挟まれた地域であり、両文明のような明確な統治体制を持った国が生まれた様子はない。一方で両文明に特徴的な威信材である古代メソアメリカのヒスイや古代アンデスの金製品が発見されており、両文明となんらかの関係にあったこと、さらには新大陸における初期文明の起源を考えるうえでヒントが隠されているのではないかと考える。

②こうして発見された先住民文化の価値は、その地域の文化アイデンティティの強化を図る運動の基礎になり、さまざまな地域課題に対して住民が主体となった地域活動を促すことができる。

③これは考古遺産を経済価値優先の単なる観光資産としてのみ位置づける消費型⁴⁾の観光政策に対して、住民主体の持続可能(循環型⁵⁾)な観光開発への新しいアプローチの方法を促進させることができる。

④加えてプロジェクトにおいて期待される成果は、考古学および博物館学に関する新たな研究者や専門家の育成である。それらの人材は理論的な知識だけでなく、地域に密着し実践的な知識と経験に長けた人物である。

2) 調査の背景と経緯

a. 調査の体制

このプロジェクトは南博史（京都外国語大学教授，京都外国語大学国際文化資料館）を研究代表者，ニカラグア人考古学者のサグラリオ・バジャダレス（UNAN 人文社会学部歴史学科）とレオナルド・レチャド（同），ANIDES 理事長グロリア・オルドニェス氏を研究協力者として行う共同調査である。2014 年度夏期調査では，調査主任として植村まどか（京都外国語大学大学院言語文化研究科博士課程前期 2 年：調査時）と石川麻衣（京都外国語大学 4 年生：調査時），藤田みつき（同 3 年生：調査時）が参加した。

b. 調査の役割分担

2014 年度夏期調査における活動の企画・計画・実施主体は京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所および研究代表者南博史（京都ラテンアメリカ研究所研究員，国際文化資料館館長）が受けもつ。UNAN は発掘調査や測量など技術・作業面での人員協力，プロジェクト推進のためのニカラグア文化庁や関連諸機関への諸手続きを担当，ANIDES は現地情報の収集，現地自治体との連携，地元コミュニティでの活動について支援を担当する。なお，ANIDES は，発掘予定のフィンカ・ラスベガス（民有地）から採取された考古資料を地主の許可を得て保管しており，今回の調査地選定，維持に関わって直接的な役割を担っている。

3) 調査の手続きと調査の目標

2013 年 8 月にプロジェクト・マティグアスによる考古学調査を始めるについて，調査に関する許可の手続きを土地所有者—地区代表者（村長）—自治体首長—議会—文化庁の各レベルにおいて行った。いずれもが相互に関連しており，プロジェクト側の役割分担に応じて全体を見通しながら進めた。

まず，調査を開始するにあたって現地でのおもな活動は，自治体や調査対象とする農牧地の地主からの調査許可を得ることであった。私有地フィンカ・ラスベガス（ラスベガス遺跡と呼ぶ）の地主アブデル・モントヤ氏に対し，ANIDES によって保管されている遺物の表面採集が行われた地域への立ち入りを許可し，本調査に協力する旨を記した文書を作成した。さらに口頭ではあるが地区代表者へ調査の目的や方法，また許可に関する現状を説明し理解を得た。文化庁の許可の有無もさることながら，これらが事前に行われたことによりラスベガス遺跡を含む周辺の遺跡への訪問と遺物の表面採集が可能となったと考えている。

また，マティグアス郡役所では郡長ボアネルヘス・メンドサ氏ならびに副郡長グロリア・マリア・エルナンデス氏により本調査の認可を受けた。さらに郡長の要望を受け，郡議会において本調査についての概要および趣旨を説明し賛同を得た。なお，議会への説明に加えて要請のあったマティグアス郡内の地区代表への説明会は 2014 年 3 月 5 日に開催した。

こうした地元とのやりとりと並行しながら文化庁への申請を行った結果，2013 年夏期のプロジェクトを実現するにあたり必要な許可書（2013 年末まで）がニカラグア文化庁により発行された。

そして，2014 年についても以下の許可を受けている。

- ・マティグアス郡で考古学調査を実施する許可証（ニカラグア文化庁文化遺産課長ブランカ・アラウス・カスティージョ氏より，2014 年 1 月 26 日）
- ・マティグアス郡で考古学調査を実施する許可証（マティグアス郡役所副郡長グロリア・マリア・

エルナンデス氏より、2014年8月25日、2015年8月まで)

- ・考古学調査実施許可証（ラスベガス遺跡地主アデル・モントヤ氏より、2014年8月25日。2014年8・9月、2015年2・3月）
- ・採集考古遺物の移動に関する認可証（マティグアス郡役所副郡長グロリア・マリア・エルナンデス氏より、2014年9月5日）

2. ニカラグアの自然環境と考古学に関する先行研究

1) ニカラグアの自然環境

ニカラグアにおける考古学研究については、2013年に実施したプロジェクト・マティグアスの報告から一部を抜粋することにして、その前に、簡単にニカラグアの自然環境を説明しておく。

ニカラグアの国土は、第1図でもわかるようにバチ形をしており、太平洋側地域、中部山岳地域、大西洋側地域に大きく分けることができる。太平洋側地域は、中部アメリカを背骨のように北西から南東方向にのびる山並みと複数の火山、それに沿う丘陵～海岸平野である。西部はエルサルバドルのホンセカ湾でホンジュラスとそれぞれ国境を接している。つまりメキシコのチアパス州、グアテマラおよびエルサルバドル西部のいわゆるマヤ南部地域とつながる地帯であり、東部はニカラグア湖、グラン・ニコヤ地域を介してコスタリカとつながる。

国土の北西部は、中部アメリカにおいて太平洋とカリブ海の間がもっとも広く、多くは中部山岳地域の山塊が広がる。ホンジュラスから続く山地、太平洋とカリブ海に流れ出す河川によって特徴づけられる。さらに中部から南部にはマナグア湖、ニカラグア湖がある。とくにニカラグア湖は中南米地域ではチチカカ湖に次いで広く、世界で10番目に大きい淡水湖である。そして、コスタリカと国境の多くを接するサンファン川は、ニカラグア湖からカリブ海へ流れており、カリブ海と太平洋を結ぶ重要なルートであった。

大西洋側地域は、中部山岳地域を背景にそこから流れ出した多数の河川が作り出した低平な地域である。15世紀以降カリブ海側にはヨーロッパと結ぶ港が設けられたが、人口が密集する都市は多くが太平洋側に集中することになった。河川の氾濫、高温多湿という自然環境が影響したのであろう。

さて、この地域が新大陸における始原期・古期の人類移動のルートにあったことは確実である。カリブ海地域は熱帯動植物が豊かであるし、移動の道となった河川や湖には魚類が豊富にある。また、太平洋側の海岸平野は平坦で遮るものが少なく移動しやすい。したがって、この地にたどりついた先住民の一部は豊かな自然環境に適応・定住し、やがて農耕社会を形成していったものと考えられる。実際、太平洋側やカリブ海側では貝塚が発見されているが、こうした時期に関する調査が十分に行われていない⁶⁾。

2) 考古学に関する先行研究

本調査の対象としている地域に関する先行研究には UNAN サグラリオ・バジャダレス氏らによる *Inventario Nacional de Sitios Arqueológicos en Nicaragua*⁷⁾ がある。このプロジェクトでは、ランチョグランデ郡・リオブランコ郡・トゥマ・ラ・ダリア郡を除くマタガルバ県全域、ヒノテガ県ヒノテガ郡およびパンタスマ郡を調査地としている。2006年から2010年の間に全12回の踏査が実施された。各地で発見された考古遺物とともに18の遺跡の所在が報告されている。そして、

それらのうちアクセスが容易で保存状態が良好な遺跡のひとつが、プロジェクト・マティグアスによる発掘調査の対象としたフィンカ・ラスベガス（ラスベガス遺跡）であった。

このプロジェクトによって得られた土器研究の成果を報告書⁸⁾から抜粋する。

このプロジェクトでは土器の類型学に基づき、その地域が利用されていた年代を特定することに成功した。それによると紀元前 500 年から 1500 年頃にかけて人類が継続的にその土地を利用していたようである。特に古典期後期相当のセバコ郡サントイサベル遺跡とダリオシティ郡モユア遺跡の集団には、メソアメリカやホンジュラス南部の集団の影響がみられる。両遺跡からはニカラグア太平洋岸の土器片と、ホンジュラスおよびエルサルバドルのものと類似した土器片も確認されている。

具体的には、ニカラグア北部太平洋側（ソモト）のカカオリ式（300-800d.c.）、モトゥセ式条痕土器（300-800d.c.）、セゴビア橙色式土器（300～1430 年頃）。ホンジュラスのスラコ式土器（300-800d.c.）、ウルア式多彩色土器（300-800d.c.）とバビロニア式土器（550～950 年頃）が見られる。ちなみに、セゴビア橙色式土器はスラコ式土器ととらえられている。

なお、カリブ海岸地域のシェテル式線刻文様土器（2000-500a.c.）やグラン・ニコヤ地方の多彩色帯文様土器（1350-1520d.c.）も見られた。

このように当該地域からはニカラグアの太平洋からカリブ海地域、さらに国外で生産されたタイプの土器片も確認されており、ホンジュラス、エルサルバドルの各地域に属する集団の間で交流があった可能性や集団が初期から移動・定着しはじめていた可能性もある。

3. プロジェクト・マティグアス 2014 年度夏期調査

1) 調査の目標

プロジェクト・マティグアスにおける考古学調査については、以下の具体的目標を掲げている。

①マティグアス郡に見られる遺跡の目録を作成する。とくにティエラブランカ地区とキラグア地区周辺を対象とする。踏査によって確認されている両地域、とくにティエラブランカ地区の考古学的価値を明らかにし、これらを通して今につながる先住民のコミュニティとの連携をはかる。

②フィンカ・ラスベガス（ラスベガス遺跡）において測量調査を行う。確認されているマウンドなどの遺構の分布状態、遺跡の範囲を確定させる。遺構や出土遺物の分布などの分析を行うことが可能となる。およそ 20000m²であると予測される。

③遺跡の中心と思われる複数のマウンドの発掘調査を行い、マウンドの性格、時期を明らかにする。これらの調査により遺跡全体の性格、社会構造の解明を目指す。

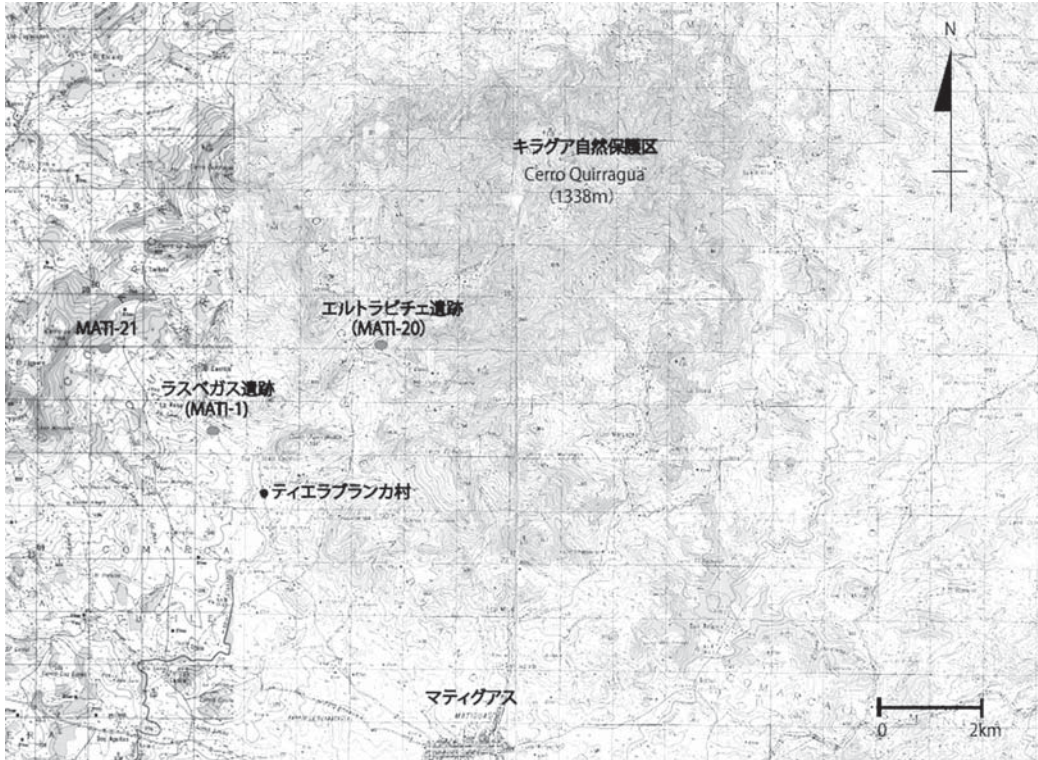
④出土遺物の研究。とくに土器の編年を明らかにして他地域との比較を可能にする。

2) 遺跡の概要

a. 概要

ラスベガス遺跡は、ティエラブランカ地区とキラグア地区の境界にあるアブデル・モントヤ氏が所有する土地に位置している。標高 338m、INETER が発行する国土地図 3054-I/PANCASAN に記載されている（第 2 図）。

現在は牧養地として利用されている平坦なこの土地は、ほぼ東西に延びる丘陵上にあつて、マティグアスの町からキラグア地区へ続く道に面している。周辺にはアカシア、レモンなどの植物



第2図 ラスベガス遺跡の位置とその周辺地形図

群が見られる。最も近い水源は、北東400mのところにあるカスティージョ川と東500mにあるクシレ川である。そして、遺跡からほぼ北方向にキラグア山塊の特徴的な岩山が一望できる（写真1）。

b. 遺跡の特徴

遺跡の東部から東北部にかけて約30のマウンド群が見られ、遺跡の中心部だったのではないかと推測される（第3図）⁹⁾。マウンドは、直径が10～20m、高さが0.5～2mを測る。

また、もっとも大きいマウンド（マウンド1）の南側にはモノリット（石柱）が2本確認された（第4図）。モノリット1は長さ4m以上、幅48cm、モノリット2は長さ2m以上と見られるがそのほとんどが土に埋まった状態である。モノリット1は成形による敲打と研磨の痕が表面全体にあり、また先端部は男根上に加工されている。モノリット2は少なくとも3つに割れている。断面が多面体であるが詳細は確認できない。

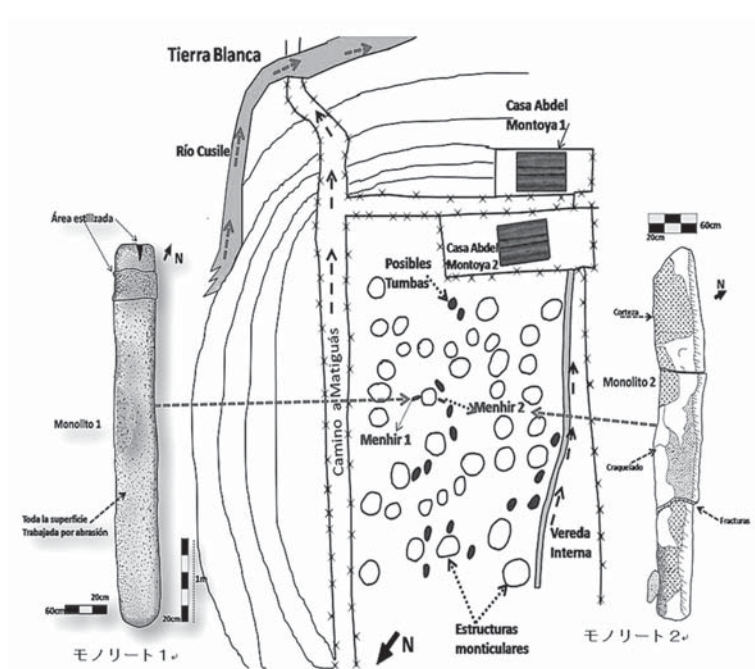
表面採集では、マウンド周辺および南側に東西に延びる溝状の凹部に土器片や石器などが集中的に収集された。おそらく近辺のマウンドから流出したものであろう。動物の顔を模した脚部分や口縁部、把手部分、文様の見られる土器片などがある。また、石器には玄武岩のマノ（磨石）、チャートなどを用いた剥片石器などがあり、この遺跡は遺物が豊富に残っていることがわかった。

c. 遺跡の範囲

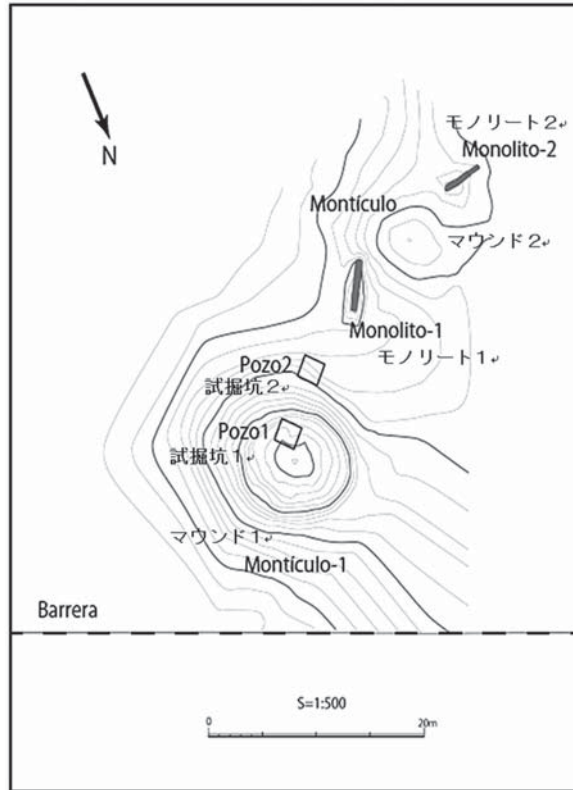
遺跡への損傷は最小限であり、全体的に遺跡の保存状態は良い。唯一見られる損傷は、小道と



写真1 ラスベガス遺跡の様子



第3図 ラスベガス遺跡平面図およびモノリット実測図



第4図 マウンド1・2および試掘坑1・2配置図

敷地の境界として建てられた柵が北東と北西のマウンド群に影響を及ぼしている点である。

3) 発掘調査の経過

発掘調査の経過を日付順にまとめておく。

2014年

8月23日(土) 京都外国語大学と協定校となったニカラグア・カトリック大学(以下, UNICA)のカウンターパートによる現地調査¹⁰⁾。ムイムイ郡でのコーヒー栽培と蜂蜜製造に関する地域支援のために現地(ムイムイビエホ村)を訪問後、マティグアスへ移動。

8月25日(月) マティグアス郡役所訪問

8月26日(火)～28日(木) ラスベガス遺跡において発掘調査第1クール

- ・測量杭の確認したところ基準杭(T1)が破損していたため、遺跡内に仮杭を設置。昨季に実測したモノリット1を基準にすることで日本にて座標変換し平面図に重ねることにする。
- ・試掘坑1, 2の設定
- ・発掘開始

8月29日(金) 室内作業

- ・出土遺物洗浄

8月30日（土）～9月1日（月） ラスベガス遺跡において発掘調査第2クール

- ・発掘調査の継続。試掘坑1では盗掘または風倒木によるものと思われる攪乱を確認したが未掘のため次期の調査にて確認する。試掘坑2では、集積石状にこぶし大の礫が散在した。マウンドの構造に関わる石材の可能性もあるが、いずれも原位置から動いていると思われる。今後、試掘坑の範囲を広げてみる必要がある。
- ・実測作業。試掘坑1、2の発掘終了時の平面図を作成。ただし、試掘坑1は略測図。
- ・埋戻し。調査面にビニールシートを貼り、その上から埋め戻す。発掘調査終了。

9月2日（火）室内作業

- ・遺物洗浄とおもな遺物の写真撮影

9月3日 住民説明会の開催、マナグアへ移動。

- ・昨期に引き続き、調査成果を報告する住民説明会を開催した。今回はおもにティエラブランカ地区とキラグア地区の住民代表約20名が参加した。
- ・マナグアへ移動

4) 発掘調査の概要と結果（写真2～5）

a. 試掘坑の設定（第4図参照）

マウンド1の頂部からモノリット1に向かって軸線を設け、頂部と裾部にそれぞれ2m四方の試掘坑を設定した。頂部が試掘坑1、裾部が試掘坑2である。これらの発掘を先行させ、ある程度土層の堆積が確認でき次第、この二つの試掘坑を繋ぐかたちでトレンチを設けることにした。これによってマウンド1の性格を確認する予定である。

また、このトレンチをモノリット1の方向へ延長することで、マウンドが構築された床面の確認とモノリットの関係を確認できる。

b. 発掘調査の実施

発掘調査は、まずそれぞれの試掘坑東側幅1mについて掘り下げを行った。

試掘坑1では、表土を除いた時点から遺物が多く出土した。ほどなく攪乱坑が確認された。このため試掘坑全体を掘り下げて様子を確認した。おそらく盗掘か風倒木によるものであろう。内部には直径20cm程度の比較的大きな礫がみられる。しかし、現状ではまだ全容はつかめずさらなる掘り下げが必要である。

試掘坑2はマウンドの裾部にあたる。表土を除いた時点で、こぶし大の礫が比較的集中して確認されたためマウンドの構造にかかわる遺構の検出を期待したが、現状では明確な配置を確認できなかった。試掘坑1と同様さらなる掘り下げが必要である。

以上のように、今回発掘調査を開始したが、いずれも表土を除いただけで終了した。これは調査期間の問題だけではなく、UNAN側と日本側がお互いに様子を見ながら調査をしていたからと思われる。今後は共同調査に慣れればしだいに調査のスピードも速くなるであろう。今回は、発掘を行うことができたということが最大の成果である。

なお、試掘坑1は略測図にて平面実測。試掘坑2は平面図化のためSITE測量と写真測量を行った。

c. 出土遺物の整理

過去2回の現地調査によって、ANIDES採集遺物と我々の踏査によって採集された遺物の水洗、

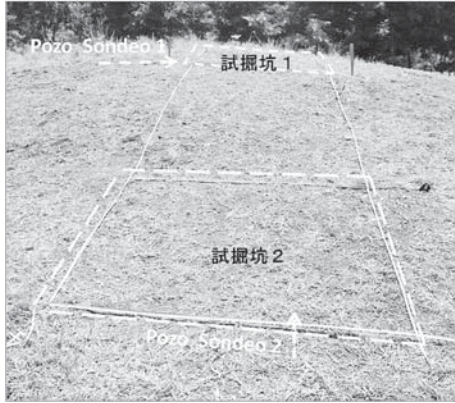


写真2 試掘坑1・2配置状況(南西より)



写真3 試掘坑1終了状況(北東より)

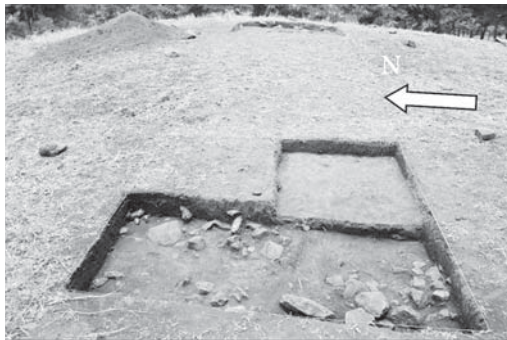


写真4 試掘坑2終了状況(南西より)



写真5 試掘坑2集石出土状態(南西より)

記番, おもな土器の実測が終わっていた。今回は, 発掘調査による出土遺物をコントロールするために以下の遺物管理方法を行うことにした。

遺物カードによる調査日ごと, 地区別, 遺物種類別の管理(通し番号)を行う。

したがって, 登録番号は, 地区名-遺物種別-通し番号-遺跡名-調査年となる。なお, ANIDESの倉庫に保管されていた遺物は「ANIDES-A○(通し番号) Las Vegas-TB-M 2013」の名で登録する。下線部のアルファベット記号は以下の遺物種別を表す。

- A: 土器
- B: 土製品
- C: 石器
- D: 石製品

従来の出土遺物の処理(洗浄と記番)は調査団が滞在しているホテルで実施してきた。今回も遺物洗浄は実施できたが, 記番については未了である。当面の基礎作業は, ニカラグア国立自治大学考古学研究室で行うこととし, 最終的な分析については別の時期に集中的に実施することを考えている。なお, 2014年夏期調査の概報をニカラグアの文化庁に提出した。

4. 調査のまとめ（写真6・7）

1) 考察

今回の調査の最大の成果は、無事に発掘調査を実施できたことである。実質はほんのわずかな発掘ではあったが、今後当地の歴史と文化を明らかにする上での大きなスタートである。

一方、レオナルド・レチャド氏から表面踏査を通して、マウンドの配置になんらかの規則性（円形と直線）があるのではないかという一つの仮説が提唱された。これは今回マウンドの近辺に集石遺構が多数確認されたこととあわせて、この遺跡の性格を明らかにするうえで重要な仮説である。この解明には発掘とあわせて、遺跡全体の測量が急務である。20000㎡にもおよぶ広大な地域の測量にはかなりの時間と人手が必要になってくる。あらためて来年以降の中長期的調査計画を考えたい。

いずれにしても、ニカラグアにおいてこのような広域の遺跡が調査されたことはなく、ラスベガス遺跡において集落構造が明らかになれば画期的な成果である。また、遺跡の集中が見られるキラグア山系西側地域の歴史的文化的価値を解明する糸口にもなる。

さらにこれに併行して遺物研究も急がれるところである。昨期の段階で、ANIDESが所有する土器片や石器のサンプル、ラスベガス遺跡での踏査で採集された遺物の洗浄、記番を行うとともに、分類・分析を行った。また一部の土器片および石器に関しては実測図を作成した。

これによれば土器には太平洋側のものとカリブ・大西洋側のものがあることが確認されている。あわせてホンジュラスからの土器の流入も認められている。すなわちキラグア山系西側が東西、南北の文化交流の中心地だったことをうかがわせる。さらに多数のマウンドと巨大なモノリートの存在から、ラスベガス遺跡はその中心にあったことは間違いなからう。土器から推定されるその年代は紀元後300年～800年、さらに15世紀初頭まで下がるものもあり、かなりの時期幅を持っている。層位的な発掘調査による土器の編年的研究を進めることで、さらに詳細な遺跡の変遷をたどることができるだろう。

もちろん、今後のプロジェクト内容に文化的遺産の保護を啓発する活動を加えるべきである。このためには地域住民や子どもたちへの教育普及活動が必要となる。今回、地元ティエラブランカ地区の小学生が団体で見学に来た。これを機会に学校との交流を続けていきたいと考えている。また、一般の方にもプロジェクトの内容を知ってもらうためのワークショップや展示も有効だろう。



写真6 ティエラブランカ村小学校生徒の遺跡見学



写真7 NGO [AIR] のメンバーを交えて

2) まとめ

今回が通算で3回目となったプロジェクト・マティグアスの現地調査において、はじめて発掘調査を実施できたことが大変意味のあることである。2012年に行った郡議会での発表では、本調査に対して協力的な意見が示され、今後は調査側と自治体そして地域住民を巻き込んだ積極的な連携のもと調査が進められることを期待したが、今のところ大変順調であると考えている。これは現地調査を実施するにあたり、調査側とコミュニティ、地方自治体とが協力して調査に取り組むことに、京都外国語大学、UNAN、ANIDESが協働してきた成果であり、こうした方法をモデルとして普及することの有効性を確認できた。

実際に2回実施した地元への報告会を通して、地域の考古学情報が届けられている。たとえば、ラスベガス遺跡よりさらにキラグア山系西側を北へ入った地域では複数のマウンドで構成される遺跡も確認された(MATI-21と登録された)。また、多数のモノリットが出土している情報もある。こうした情報は広大な地域の歴史的文化的特徴を明らかにする上では欠かすことができない。今後は発掘調査と並行して、こうした遺跡情報の収集と現地確認に努めたい。

今期の調査では、日本隊が調査をしていることを含めて遺跡に関する情報が次第に広がり、住民にも受けられ始めた。地域に残る文化的な遺産の価値を再認識し、この地域の歴史と発展を反映させることを目指すコミュニティ・ミュージアムづくりにも良いスタートになった¹⁾。調査の申請書提出についても経験値を積み、マティグアス郡での調査自体も円滑に行われた。何度も繰り返すが地域住民も引き入れた活動も行うことができた。

プロジェクト・マティグアスの第一歩は、このプロジェクトの周知に努めプロジェクトに興味を持ってもらい、郡役所や地域住民との連携を生むことにあった。今回はその基礎を引き継ぎ、実際に大きな成果を上げることができた。その意味においてプロジェクト・マティグアス2014年夏期調査は成功したといえるだろう。

注

- 1) 正式名称は *Asociación Nicaragüense para el Desarrollo Sostenible* である。
- 2) 南博史 (2013), 「中間領域ニカラグアにおける考古学の現状と課題—ニカラグア・マタガルバ県ティエラ・ブランカ遺跡の予備調査を通して—」, 『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』, 9号, 33-45頁。
- 3) 南博史, 植村まどか, サグラリオ・バジャダレス, レオナルド・レチャド (2014), 「プロジェクト・マティグアスとその成果—ニカラグア共和国マタガルバ県マティグアス郡における第1次考古学調査報告—」, 『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』, 10号, 1-21頁。この中でプロジェクトの4つの目標を掲げた。
- 4) 経済価値を優先することで遺跡やそれを取りまくさまざまな価値が一方向的に消費されること。遺跡の破壊や地域住民の急激な生活環境の変化, 共同体意識への悪影響がでるような観光政策を指す。
- 5) 地元住民自らの意思や価値観を優先する。遺跡だけでなくそれを取りまく自然, 生活文化も対象として地域を一つの博物館ととらえ持続可能な開発を行うフィールドミュージアム政策を指す。
- 6) UNAN サグラリオ・バジャダレス氏によれば, カリブ海側モンキーポイントで当該期の貝塚と

葬られた人骨が発見されている。

- 7) Balladares, S. Navarro, (2011) , *Inventario nacional de sitios arqueológicos en Nicaragua. Managua*, CADI UNAN-Managua.
- 8) レオナルド・レチャド, 植村まどか (2014), 「Ⅱ 先行研究」, 南博史編集, 「プロジェクト・マティグアスとその成果～ニカラグア共和国マタガルパ県マティグアス郡における第1次考古学調査報告～」, 『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』, 10号, 6-7頁。
- 9) Balladares, S. Navarro, *op. cit.*
- 10) UNICA コテ・クルス (Cotte Cruz) 副学長の案内による。UNICA ではムイムイ郡において医療支援などの活動を行っている。コテ・クルス副学長が京都外国語大学を表敬訪問された際にプロジェクト・マティグアスに理解を示し, 以降プロジェクトと協力関係にある。また, 総合的な地域支援プログラムが必要なこのムイムイ地域を紹介された。なお, このプロジェクトがきっかけとなって, 本学のスペイン語学科卒業生が代表を務める民間企業ケービデバイスはニカラグアの小学校への教育資材の提供プロジェクトを進めている。
- 11) マタガルパ県に隣接するトゥマ・ラ・ダリア地区で同様に考古学と博物館活動を通じた地域貢献活動を目指しているヨーロッパの NGO 「AIR」 のメンバーが調査地を見学を訪れた。今後相互交流を進めていくことになった。

参考文献

Balladares, S. y R. González

- 2006 “Historia antigua de la región del Centro-Sur de Nicaragua. Una aproximación al pasado”, *La hacienda, la mina, el río. El desarrollo histórico de los departamentos de Boaco, Chontales y Río San Juan*, Edit. Acento, UNAN-Managua, pp.31-50.

Balladares N., S. y L. Lechado

- 2005 “Una aproximación a la historia antigua de la región de Matagalpa y Jinotega”, *Región Norte Central de Nicaragua. Matagalpa y Jinotega a través de su historia*, Edit. Acento, UNAN-Managua, pp.19-31.
- 2009 “Los grupos humanos precolombinos de las regiones Norte, Centro y Pacífico de Nicaragua”, *Nuestras comunidades una mirada histórica de los pueblos indígenas del Pacífico, Centro y Norte de Nicaragua*, Edit. UNAN-Managua, pp.15-50.

Banco Central de Nicaragua

- 2004 “Monografía de Matagalpa”, *Boletín Nicaragüense de bibliografía y documentación*, N° 125, octubre-diciembre, Managua.

Balladares N., S. y Rivera Gutiérrez, Flor de María

- 2011 *Inventario nacional de sitios arqueológicos: municipios de Jinotega y Matagalpa*, CADI de la UNAN-Managua.

Espinoza, E. F. y R. L. Salgado

- 1996 *Arqueología de las Segovias: Una Secuencia Cultural Preliminar*, Dirección de Patrimonio Cultural, Instituto Nicaragüense de Cultura, Managua.

Ibarra R., Eugenia

1994 “Los Matagalpas a principios del siglo XVI. Aproximación a las relaciones interétnicas en Nicaragua (1522-1581)”, *Vínculos*, Vol.18 y 19, N° 1 y 2, Museo Nacional de Costa Rica, San José, pp.29-243.

Incer, Jaime

1985 *Toponimias indígenas de Nicaragua*, Asociación Libro Libre, San José.

2000 *Geografía dinámica de Nicaragua*, HISPAMER.

2004 *Atlas geográfico universal y de Nicaragua*, OCEANO.

Jilma, Romero, et al.

2002 *Historia de Nicaragua*, Edit. Ciencias Sociales, UNAN-Managua.

Kühl, Eddy

2002 *Matagalpa y sus gentes*.

Rivas, Ch. E.

2001 *Breves apuntes sobre la cultura Matagalpa*.

(南博史)

執筆要項

- (1) 原稿執筆に際して使用する言語は、日本語・スペイン語・ポルトガル語・英語とする。
- (2) 和文原稿においては、400字詰原稿用紙にして以下の枚数を基準とし、欧文原稿においては以下の語数を基準として執筆すること。なお、図、表、写真が含まれる場合はその基準内に収めるものとする。

和文原稿

A. 論文	50枚程度
B. 研究ノート	20枚程度
C. 調査研究報告	20枚程度
D. 研究展望・動向	10枚程度
E. 書評	8枚程度
F. その他（資料紹介など）	8枚程度

欧文原稿

A. 論文	8000語程度
B. 研究ノート	3000語程度
C. 調査研究報告	3000語程度
D. 研究展望・動向	2000語程度
E. 書評	1200語程度
F. その他（資料紹介など）	1200語程度

- (3) 寄稿者は原稿が上記区分のいずれかに属するものか、自己申告すること。
- (4) 上記種類別 A・B には横書き 400 字程度（欧文原稿の場合、200 語程度）の要旨とキーワードを 5 語程度付すこと。A については要旨も本文とともに掲載する。また採択決定後、和文原稿の場合は欧文要旨を、欧文原稿の場合は和文要旨を作成願う。
- (5) 和文原稿の場合、文中において外国の固有名詞を欧字のまま記さない。初出の外国の固有名詞は、片仮名で書き、括弧して欧字を記すことが望ましい。但し、一般的な語の場合はその限りではない。固有名詞の片仮名標記は、原則として原音に即すること。
- (6) 複数の語からなる外国の固有名詞（地名や人名など）における表記の方法、および国名の表記は執筆者に一任する。
- (7) 文中において注を付ける場合、文章の右上方に（ ）をつけた番号を記し、文末に注をまとめること。
- (8) 出典については引用箇所の終わりに（著者名、出版年、ページ数）を記し、文末に文献リストを記すこと。和文文献は 50 音順に、欧文文献はアルファベット順にまとめること。
- (9) 参考文献の表記は以下の通りである。

例) 単著本:(著者姓名)(出版年)(書名)(出版社)(出版地…但し和文文献の場合は不要)
田中高
1997 『日本紡績業の中米進出』, 古今書院。

León, Trigueros

1955 *Perfil en el aire*, Ministerio de Cultural, San Salvador.

例) 雑誌：(著者姓名) (出版年) (論文名) (雑誌名) (巻・号) (ページ数)

Lozoya, Xavier

1999 “Un paraíso de plantas medicinales”, *Arqueología Mexicana*, vol. VII, núm. 39, pp. 14 – 21.

例) 論文集：(著者姓名) (出版年) (論文名) (所収書名) (編者名) (ページ数) (出版社)
(出版地…但し和文文献の場合は不要)

Martínez Marín, Carlos

1996 “El registro de la historia”, *Temas mesoamericanos*, Sonia Lombardo y Enrique Nelda (coords.), pp. 397 – 425, INAH, México.

例) 訳書：(著者姓名) (出版年) (書名) (訳者名) (出版社) (出版地…但し和文文献の場合は不要)

ガルゼス, ジョアン E.

1979 『アジェンデと人民連合』, 後藤政子訳, 時事通信社。

例) 著者が複数の場合：2人目からは名・姓の順で表記すること。

Cabrera, Rubén, Ignacio Rodriguez, and Noel Morelos

1982 *Teotihuacan 80-82: Primeros resultados*, INAH, México.

- (10) 挿図は黒インクでトレースする。地図, 実測図などにはスケールを記す。原則として原図は B4 大を限度とし, 縮小した場合にその説明文を含め, 縦 20.5cm, 横 13.5cm 以内に収まるものとする。
- (11) 本文中初出の挿図, 表には(8)の方式に従って, 典拠を明記すること。筆者自身が作成した原図の場合, その必要はない。
- (12) 写真は鮮明なものに限る。(11)と同様に典拠を明記すること。
- (13) 和文原稿には欧文タイトルを付け, 執筆者名をローマ字で記すこと。欧文原稿には和文タイトルをつけ, 執筆者名を片仮名で表記すること。
- (14) MS-DOS テキスト形式(+改行)あるいは“WORD”ソフトで原稿を作成し, フロッピーディスクとともに打出し原稿を提出すること。
- (15) 原稿が以上の規定を満たすものであれば, Eメールによる投稿も受け付ける。但し, Eメールで投稿する場合は打出し原稿を必ず郵送すること。
- (16) 原稿申し込み期限は9月15日, 原稿提出期限は10月15日とする。
- (17) 指定された提出期限に従い, 完成原稿は下記に送付すること。なお, 完成原稿の末尾に氏名・現職名・住所・電話番号を明記すること。

送付先) 615-8558

京都市右京区西院笠目町6

京都外国語大学

京都ラテンアメリカ研究所

E-mail : ielak@kufs.ac.jp

- (18) 原稿の採否は編集委員会によって決定される。場合によって編集委員会より原稿の修正を願

うことがある。原稿は採否にかかわらず原則として返却しない。

- (19) 原稿の掲載は、当該号の投稿論文数・その他の事情により、次号に繰り越す場合がある。その場合、編集委員会は投稿者に連絡し、協議するものとする。規定に則しない長文および特殊印刷の場合は、編集委員会と執筆者による協議を行い、内容を変更することがある。
- (20) 掲載原稿のうち、(1)のA・Bについては抜刷50部と掲載誌3冊を贈呈する。50部を超える場合はその分だけ執筆者の自費負担とする。
- (21) 執筆者校正については初校のみとし、その際的大幅な加筆や内容変更は原則として認めない。
- (22) その他、必要な事項については編集委員会で決定する。

Normas de presentación de artículos para Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto

- 1) Los artículos deben tratar temas sobre Latinoamérica.
- 2) El idioma oficial en el Boletín es japonés, español, portugués e inglés.
- 3) Los artículos pueden ser trabajos de investigación (8,000 palabras aprox.), estudios preliminares (3,000 palabras aprox.), notas de investigación (3,000 palabras aprox.) o reseñas (1,200 palabras aprox.).
- 4) En caso de trabajo de investigación o estudio preliminar se adjuntarán un breve resumen del artículo de 200 palabras y 5 palabras claves.
- 5) Los trabajos deben entregarse en formato de procesadores de “archivo de texto” o *Word*, preferiblemente con su copia impresa.
- 6) La fecha límite de entrega del artículo es el último día de octubre.
- 7) El Consejo de Redacción decidirá sobre la idoneidad del artículo para ser publicado.
- 8) El trabajo impreso y su disquete entregados no serán devueltos al autor.
- 9) El autor del trabajo de investigación o estudio preliminar tiene derecho a recibir 3 ejemplares del Boletín y 50 separatas.
- 10) Los trabajos deben entregarse al Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto:
6, Kasame-cho, Saiin, Ukyo-ku,
Kyoto 615-8558, Japón
ielak@kufs.ac.jp

編集後記

本年度の『京都ラテンアメリカ研究所紀要』は、内容的にも本数的にも、バラエティに富む一冊となった。

取り上げられたテーマは多岐に渡り、その舞台となった時代も江戸から現代までと幅広かった。たとえば、16～17世紀の日本とスペイン領フィリピン諸島ルソンの関係の観点から日本の「鎖国」の形成のあり方を再考した論文があるかと思えば、同じく17世紀の初めに奴隷となった日本人アントン・チノと共に世界を渡り、彼の視点からスペイン植民地時代のアメリカ領における種々の社会的側面を考察した論文もあった。また、メソアメリカ考古学における日本人研究者の関与と貢献が明らかにされる一方で、現代のブラジルが抱える深刻な「格差」や「麻薬の密売」などの社会的問題についても議論された。

どの論文も興味深いテーマを扱っていたが、なかでも、日本人奴隷アントン・チノの波乱に満ちた人生については考えさせられることが多かった。彼の物語は、人生で立ち足はだかる予測不能な困難を乗り越えるためには、機知に富むこと、そして根気強くあることが何よりも必要だということをお我々に教えてくれる。勿論、現代に生きる我々とアントン・チノとは、その課題と挑戦の中身は同じとは言えないけれども、成功するために必要なことは基本的には変わらないのではないかと感じる。

最後にもう一つ、この場を借りて、大正、昭和、平成を生き抜いてきた人生の師から学んだ知恵について書き記しておきたい。今年も、京都外国語大学の森田総長の主催による外国人教員のための新年会に招待して頂いたが、その会場で、ブラジルポルトガル語学科名誉教授川崎桃太先生にお会いする光栄に与った。この3月、川崎先生は百歳になられるとのことで、新年会では一足早く、先生の百寿を皆で祝った。その際の先生のスピーチが忘れられない。曰く、「若さの秘訣は、知的能力を存分に使い続けること」。今現在も執筆活動を続けておられるという川崎先生の業績を拝見すれば、先生が本当にその知恵を生きておられることがわかる。京都ラテンアメリカ研究所の皆さん、我々はまだ若い！先生の素晴らしい人生と業績を鑑にして、今一度、自分たちの生き方を振り返ってみよう！私もますます、先生にならって、年齢を言い訳にせず、知的な能力を使い続けていきたいと思っている。川崎先生、ありがとう！

(カルヴァーリヨ)

執筆者一覧 (掲載順)

清水有子	(明治学院大学キリスト教研究所 客員研究員)
ニダ・T. クエバス	(フィリピン国立博物館)
方真真	(国立台北教育大学)
市川彰	(国立民族学博物館外来研究員)
嘉幡茂	(ラス・アメリカス・プエブラ大学)
村上達也	(テュレーン大学)
フリエタ・M. =ロペス・J.	(メキシコ国立自治大学修士号取得)
ホセ・フアン=チャベス・V.	(メキシコ国立人類学歴史学大学 学士課程修了)
小林致広	(京都大学)
マリア・デ・デウス・ベイテス・マンソ	(エヴォラ大学)
ルシオ・デ・ソウザ	(東京外国語大学)
立岩礼子	(京都外国語大学)
高橋慶介	(敬愛大学非常勤講師)
辻豊治	(京都外国語大学)
南博史	(京都外国語大学)

Autores (En orden de aparición)

SHIMIZU, Yuko	〈Researcher, Meijigakuin Univ. Institute for Christian Studies〉
CUEVAS, Nida T.	〈National Museum of the Philippines〉
FANG, Chenchen	〈National Taipei Univ. of Education〉
ICHIKAWA, Akira	〈Visiting Researcher, National Museum of Ethnology〉
KABATA, Shigeru	〈Univ. de las Américas-Puebla〉
MURAKAMI, Tatsuya	〈Tulane Univ.〉
LÓPEZ J., Julieta M.	〈Título de Maestría en la Univ. Nacional Autónoma de México〉
CHÁVEZ V., José Juan	〈Pasante de la Licenciatura en la Escuela Nacional de Antropología e Historia〉
KOBAYASHI, Munehiro	〈Univ. de Kyoto〉
MANSO, Maria de Deus Beites	〈Univ. de Évora〉
SOUSA, Lúcio de	〈Univ. de Estudios Extranjeros de Tokio〉
TATEIWA, Reiko	〈Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto〉
TAKAHASHI, Keisuke	〈Part-Time Lecturer of Keiai Univ.〉
TSUJI, Toyoharu	〈Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto〉
MINAMI, Hiroshi	〈Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto〉

編集委員会

編集委員

大垣 貴志郎 (所 長)

辻 豊 治 (副 所 長)

立 岩 礼 子 (主任研究員)

伊 藤 秋 仁 (研 究 員)

モイゼス・カルヴァーリョ (研 究 員)

住 田 育 法 (研 究 員)

南 博 史 (研 究 員)

編集事務局

土 井 朋

畑 恵 美 子

京都外国語大学

京都ラテンアメリカ研究所『紀要』14号

発行日 2014年12月1日
編 集 京都ラテンアメリカ研究所『紀要』編集委員会
発 行 京都外国語大学 京都ラテンアメリカ研究所
印 刷 株式会社 田中プリント

京都外国語大学 京都ラテンアメリカ研究所
615-8558 京都市右京区西院笠目町6
TEL: 075-312-3388 FAX: 075-322-6237
E-mail: ielak@kufs.ac.jp

BOLETÍN del IELAK No. 14

Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto
Instituto de Estudos Latino-Americanos de Kyoto
Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto
Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto
6, Kasame-cho, Saiin, Ukyo-ku, Kyoto 615-8558
TEL: 075-312-3388 FAX: 075-322-6237
E-mail: ielak@kufs.ac.jp

〈ARTÍCULO INVITADO〉

A supplement of *Kinsei nihon to Luzon*..... Yuko Shimizu ... 1

〈ARTÍCULOS〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... Nida T. Cuevas... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII Chenchen Fang ... 33

Japanese Scholars in Mesoamerican Archaeology Akira Ichikawa ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancateca, Puebla 2012-2014
Shigeru Kabata/Tatsuya Murakami/
..... Julieta M. López J./José Juan Chávez V. ... 73

Los desafíos de la justicia alternativa por la CRAC-PC de La Costa-Montaña de Guerrero,
México (Primera parte) Munehiro Kobayashi ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol
dos séculos XVI e XVII. Maria de Deus Beites Manso/Lúcio de Sousa ... 121

El Realejo y sus condiciones como el puerto próspero durante el siglo XVI
..... Reiko Tateiwa ... 133

〈NOTA Y COMENTARIOS〉

Facing the contingency of life in the overflow of drugs:
Rethinking the legalization of drugs and economic growth in Brazil
..... Keisuke Takahashi ... 151

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN〉

Informe sobre la investigación académica de Nicaragua [Investigación de verano, 2014]
—para estudios del área cultural del Mar Mediterráneo Americano—
..... Toyoharu Tsuji/Hiroshi Minami ... 161